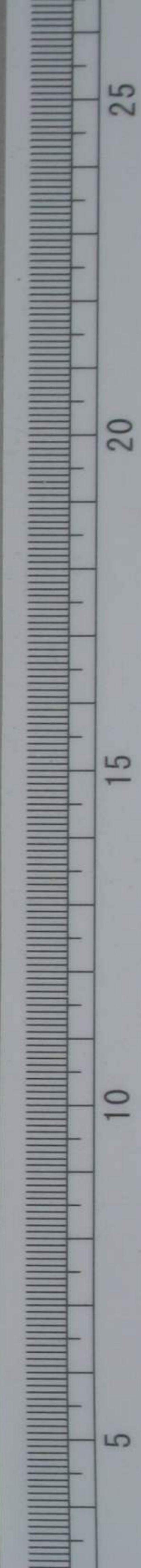


*Childhood  
Boyhood  
Youth*

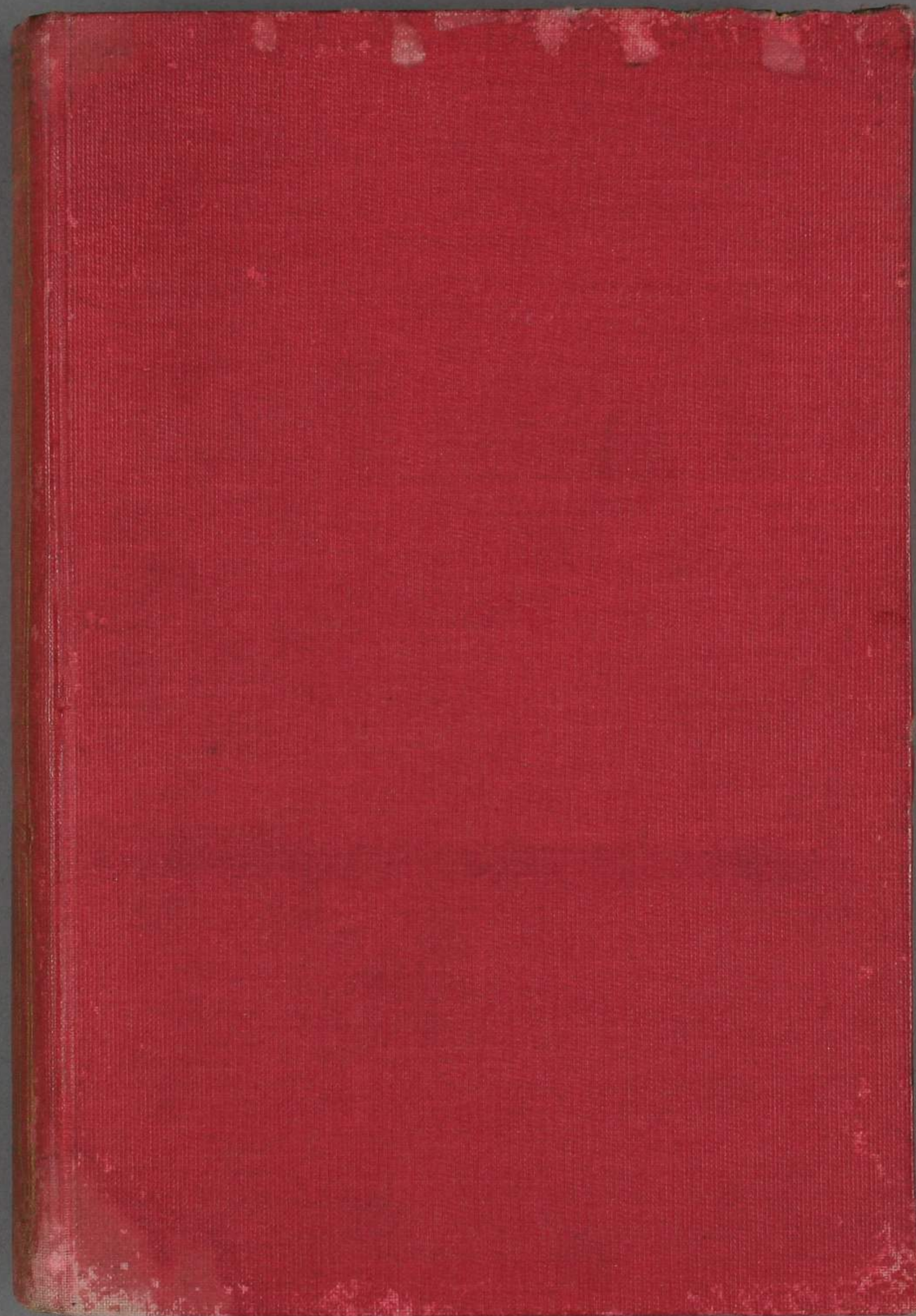




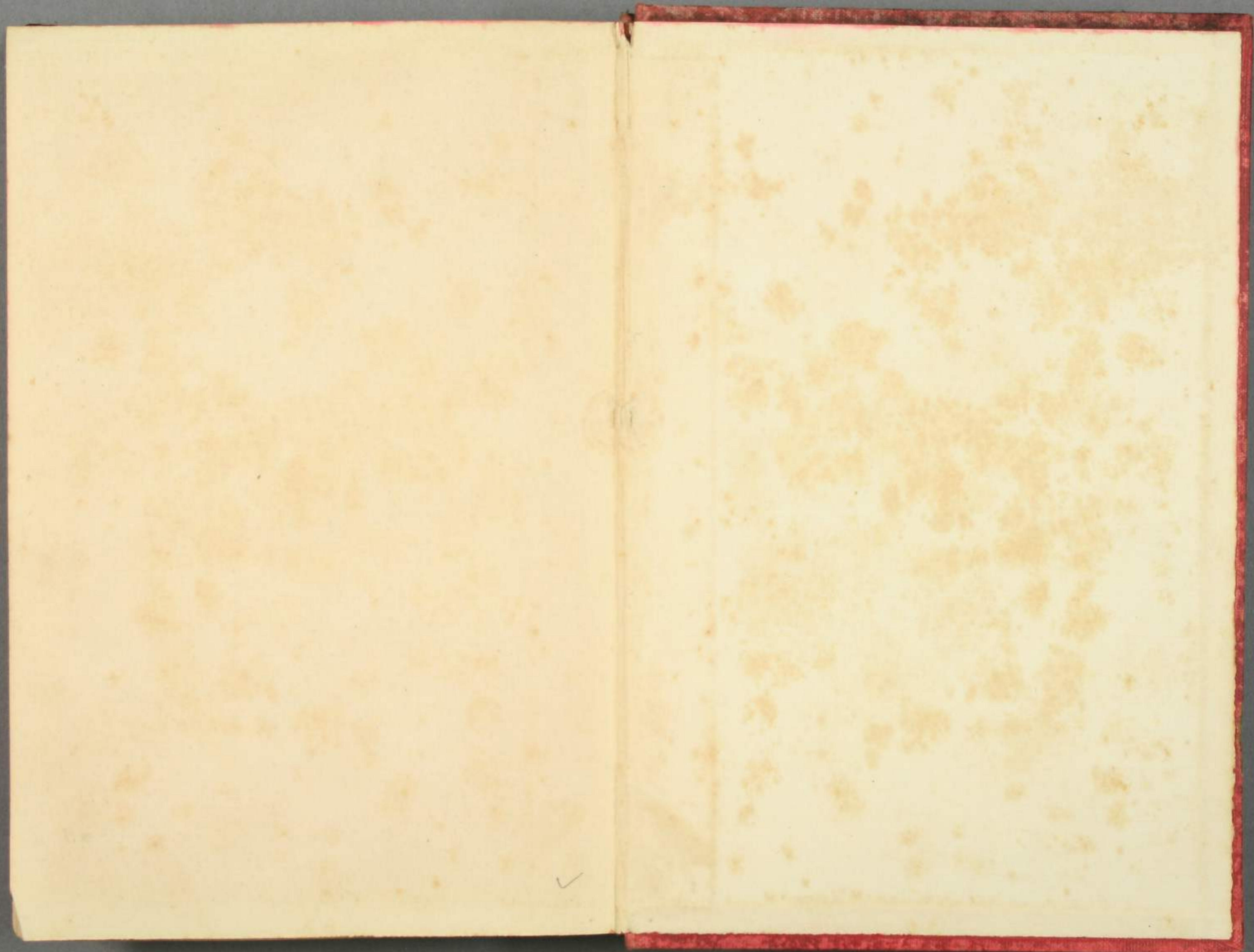
生ひ立ちの記

徳田秋江譯











トルストイ原著

生ひ立ちの記

徳田秋江譯



自序

原著者トルストイ翁は、著作によりて得べき金銭は一切之れを身に着けずと聞けど、予は此の書の翻譯によりて實に數ヶ月の露命を繋ぐことを得たり。此の點に於てト翁は先づ予が肉體上の生命の恩人也。而かも予をして若し翻譯料によりて口を糊するの窮迫なからしめば、予は單に精神上の一事業として筆を執ること、恰も原著者の場合の如くなりしならんも知るべからず。予が此の書の翻譯によりて得たる修養上の利益は豈に啻に數ヶ月の糊口の料の比にあらんや。以て自序となす。

四十一年八月下旬

秋江生



例言

一、本書翻譯の目的は主として普通の讀み物とするにあれば、止むを得ざる限り、力めて語學上の煩累を避けたり。  
一、併しながら譯者は、邦語の「言ひ表はし方」に乏しきを、其の點に豊富なる歐文調の儘を用ゐて補はんと試みたり。  
一、概して逐字譯を旨としたれども、邦人に耳遠き箇處は間々翻案又は摘譯の體をなせり。

生ひ立ちの記目次

第一篇 幼年時代

一 家庭教師カール・イワニッチ	一
二 お母さん	三
三 お父さん	一九
四 課業	三三
五 馬鹿	三〇
六 獵の準備	三六
七 獵	四〇
八 遊戯	四九
九 初戀に似たもの	五三
一〇 書齋と客間	五六



一	お父さんの人となり	六四
二	グリスカ	六九
三	ナタリヤ・サビスチナ	七五
四	離別	八三
五	幼な時	九四
六	コルナコフワ公爵夫人	一〇〇
七	イワン・イワニッチ公爵	一〇〇
八	イワン兄弟	一〇〇
九	來客	一〇五
一〇	舞踊	一四五
一一	寢床	一六五
一二	手紙	一六九
一三	田舎に何があつたか	一八〇

二四	悲	一八六
二五	悲しき最後の追憶	一九三

第二篇 少年時代

一	早速の旅立	二二一
二	雷雨	二二五
三	新見解	二三四
四	モスコイでは	二四五
五	兄	二四七
六	マスチヤ	二五四
七	發放	二五九
八	カール・イワニッチが身の上(上)	二六七
九	カール・イワニッチが身の上(中)	二七四



一〇	カール・イワニツチが身の上(下)	三〇二
一一	點	二八八
一二	小さい鍵	二九八
一三	女謀叛人	三〇三
一四	日蝕	三〇七
一五	空想	三一一
一六	よく挽け食物は出来る	三一一
一七	嫌惡	三一一
一八	女中部屋	三二七
一九	少年時代	三三九
二〇	ワロヂア	三五六
二一	カテンカとリュウボチカ	三六二
二二	お父さん	三六五

二三	お祖母さん	三七一
二四	私	三六六
二五	ワロヂア朋友	三九九
二六	議論	三六三
二七	親交の初り	三九七

—— 生ひ立ちの記目次終 ——



# 生ひ立ちの記

トルストイ著  
徳田秋江譯

## 第一編 幼年時代

### 一 家庭教師カール・イヴニイチ

千八百一一年八月十二日、私が十歳になつた年の誕生日から三日目であつた。朝の七時、カール・イヴニイチが拂塵を以つて、私の頭の眞上で蠅を打いて目を覺した。不作法にも私の直ぐ枕頭に懸けてあつた天使の像に拂塵を觸つた。死んだ蠅を私の頭の上に落した。私は被布の下から鼻を突出し、手を伸してまだ動揺て居る畫像を止め、蠅の死骸を床に投げて眠むい眼を怒らしてカール・イヴニ



イッチを視た。彼れは斑點のある、綿の入つた寛袍を着、同じ地の帯を巻きつけて、纓を結びつけた赤い頭巾を冠つて、柔い山羊の皮の靴を穿いて、何か捕つたり拂いたりしながら壁に浴いて向に追つて行く。

私は思つた。「私はまだ小供ではないか、何故彼れは私を苦めるのだらう？ 何故ワロヂアの寢臺の周囲で蠅を殺さぬのか、彼處に蠅が澤山居る。否ワロヂアは私より大きい、私は誰れよりも一番若い、それに何故彼れは私ばかり苦めるのだ。彼れは始終何ういふやうにしたら私の機嫌を傷ねることが出来るかと、其の事より他には何にも考へはないのだ。彼れは巧く私の眼を覺まさして遣つた、驚かして遣つたと十分承知して居ながら、見ぬ振をする——厭な人間！ あの寛袍、あの頭巾、あの纓——何といふいけ好ない！」

私はカール・イヴニッチの事を思つて、獨り悶々して居ると、彼れは自分の寢臺に近づいて、その上に、硝子の數珠を以つて刺繍した前被を纏ふて懸けてある

時計を一寸見て、拂塵を釘に掛け、さて上機嫌な顔をして吾々の方に向返つた。

『お起きなさい、小供たち、お起きなさい、もう時間です！ お母さんは最早客間に出ておらつしやいます！』と、親切な獨逸聲で呼び起して、私の傍に寄つて来て、足の處に腰を掛けて、ポケットから麩煙草を取出した。私は寢入つた風をして居つた。カールは先づ煙草を一撮み取り、鼻を拭き、指をパチ／＼と鳴し、さてそれから私の方に注意を向けた。笑ひ／＼踵を擦つて、『サア／＼怠惰者。』と言ふ。

私は擦られるのが恐さに静と寢臺に横はつたまゝ、返事もしないで、ますます／＼枕の下に深く頭を埋めて、力任せに足で蹴つて、笑ひたいのを種々にして我慢した。

『本當に好い人だ、本當によく私たちを可愛がつてくれる。けれども私は何ういふものか、ひどく彼れが悪く思はれた！』

私は自分でも困り、カール・イヴニッチにも困つた。私は笑ひたくなつた。



聲を出して叫びたくなつた。私の神経は轉倒して仕舞つた。

『アレ、構つちやいけない！』私は枕の下から頭を突出して、涙を流して叫んだ。カール・イヴニッチは吃驚した風で、蹶を搔くのを止めた。さうして落着き拂つて、何うかしたのか、恐ろしい夢でも見たのかと尋ねる。その深切らしい獨逸顔、私の涙に道理を付けやうと力むるその同情、それが爲にますます涙を餘計に流させられる。私は恥しくなつた。さうして、少時前には何うしてあゝカール・イヴニッチを嫌つたか、また其の寛袍や、頭巾や、纓までが、厭に思はれたか譯が分らなかつた。今はそれと反對に其様な物までが非常に愉快さうに見え出した。纓までが恰ど彼の善良の明かな證據で、やもあるやうに見えて來た。で、私は恐ろしい夢を見たので叫んで居つたのだと言つた。——私はお母さんが死んで、一同が彼女を葬らはうとして、何處かへ運んで行く處のやうに思はれた。私は實際其の夜何様な夢を見て居つたか覺えなかつたので、いゝ加減な出鱈目を工夫して言つ

た。——が、カール・イヴニッチは、私の物語に動かされて私を慰めてくれた。それがさもなく私が本當にその恐ろしい夢幻を見たかのやうに思はれた。さうして私の涙はまた別の理由で流れた。

カール・イヴニッチが出て行つて、私は寢臺の上に起上り、小さい足に靴袋を穿き始めた時に涙が漸く流れ止んだ。が、其の假作の夢の陰氣な思想は私の胸に消え去らなかつた。侍僕のニコライが入つて來た。敏捷い、小綺麗な小男で、年中眞面目で、端嚴で、謹み深くつて、カール・イヴニッチの大的親友であつた。彼れは私たちの衣服と靴とを持つて來た。ワロヂアは長靴を穿いて居たが、私はまだリボンの着いた穿き難い上靴を用ゐて居つた。私はその侍僕の前で泣くのを取ぢた。加之朝光は樂しさうに窓に射込んで居る、ワロヂアは MARIA・イワノフナ(私の姉妹の女教師)の眞似をしたり、顔を洗ひながら大きな聲で樂しさうに笑つたりして居る。生眞面目なニコライまでが、肩にタオルを掛け、片手に石鹼、片手に手盤を



持つて、微笑しながら、

「好くお洗ひなさい、ウラヂミール・ペトロフィッチさま。」と言つてゐる。私はもう面白くなつて来た。

「貴下がたは最早用意が出来ましたか。」カール・イヴニッチが教室から呼ぶ聲がした。

彼れの聲は厳しかつた。最早や私に涙を流さしたやうな親切な音聲は持つて居なかつた。教室に於けるカール・イヴニッチは全く別人であつた。彼れは家庭教師であつた。私は速かに衣服を着け、顔を洗ひ、片手に刷毛を持つて、まだ濡れた頭髪を梳きながら聲に應じて駆け込んだ。

カール・イヴニッチは鼻の尖に眼鏡をかけ、書籍を手に持つて例の戸と窓との中程に腰を掛けて居つた。戸の左手には書棚が二つ立つて居る。一つは私たち——小供ので、一つはカール・イヴニッチの所有のであつた。私たちの、中には種々

な書籍が入つて居る。——教科書もあれば、其の以外の書もある。或る書は直立し、或る書は横はつて居た。唯二冊大きな赤い装訂をした航海史 (Histoire des Voyages) が、堂々と壁に凭せ掛けてある。また長い、厚いの、大きい、小さなものや、書籍がなくなつて包ばかりのもあれば、包のない書籍もある。放課時間の前に、書庫——カール・イヴニッチは書棚を書庫と言つて居た——を形付けるやうに命令けられた時に、凡て私たちが勝手に積重ねたり、押込んだりしたものだ。彼れの私有の書籍は、私たちの、やうに澤山ではなかつたが、一層雑漠であつた。私は今でも其の中の三つを殊に好く記憶して居る——包のない、椰菜肥料施法に関する獨逸本、隅の方が一ヶ所焼けた羊皮表紙の七年戦史一卷、流動體靜力學全書、これだけである。カール・イヴニッチは多く讀書に時を費してゐた。それが爲に視力を傷つたくらゐであつた。併しながら彼れは右に挙げた三書及び北方の蜜蜂といふ書の他は決して讀まなかつた。



彼れの書棚にあつた物の中で、何よりも最も多く私をして彼れを想起さしむるものが一品ある。それは木製の脚の上に乗せた、牌紙で作つた一つの輪であつた。それが栓の作用で回轉るやうに出来てゐて、此の輪に或る紳士と假髪師との滑稽畫が押繪にしてあつた。カール・イヴニッツは糊着細工が上手であつた。彼れは眼が弱いから、明るい光線を避ける爲に自分で此の輪を工夫して作つたのであつた。私は今でも眼の前に綿の入つた寛袍を着た、赤い頭巾の下から疎い灰色の頭髮の見える彼れのひよる長い風姿を見るやうに思はれる。彼れは小さい卓の脇に坐る。さうして其の上に例の假髪師の着いた輪が載つてゐて、彼れの顔に影を射してゐる。片手に書籍を持ち、他手は椅子の腕に休めてゐる。其の傍に顔に顔料を着けた獵人を裝飾つた時計、辨慶編の手巾、圓い黒い罌煙草入れ、青い眼鏡函、皿の上の燭剪、凡て是等の物品が、威儀を正して端嚴に、銘々適當の場處に並んで居る。それを見たものは誰れでも、此の凡てが整然としたことだけで、カール・イヴ

ニイツチが良心の潔白な、精神の平靜な人だといふとを直に判断するであらう。若し階下で散々遊び飽いたあと、爪足で密と二階の教室に忍び込んで見るならば、屹度——カール先生は獨りつくねんと腕椅子に凭れ、傲然と澄し込んだ顔をして愛讀書の或物を讀んで居る。時としては書籍を讀んで居ない場合に出會す折がある。その時彼れの眼鏡は其の大きな段鼻の上に落ち掛り、青い半分瞑つた眼は、一種特別な表情をして、唇が悲しさに微笑つてゐる。室の中は静まり返つて僅かに彼れ自身の呼吸する音と、例の獵人の附いた時計のチクタクする音が聞えるばかり。

彼れは私が居るに氣が付かぬ。私はよく戸口に突立つて獨り考へる。憐な憐な老人よ。私たちは多勢で居る。私たちは戯れ且つ歡む、然るに彼れ——彼れは全く孤獨である。何人も彼れを親切に待遇はぬ。——彼れが、自分は孤兒だと言ふのは眞理だ。そして彼れの閱歷譚は恐ろしい！



私は彼れがそれをニコライに話して聞かしたのを憶えてゐる。あんな境遇であつたらば何様なに懼いだらう！ それを思ふと悲しくなつて、つい彼れの傍に寄つて、彼れの手を取つて『カール・イヴニッチさん、』と言ひたくならせられる。彼れは私にさう言つて貰ふのが氣に入つた。始終手先で私を撫で、くれた。確かに身に感觸されるのであつた。

片方の壁には地圖が掛つて居た。皆な殆ど裂けて居た。が、カール・イヴニッチが自分で巧みに繕つてゐた。第三の壁の中央に、階下に通ずる戸があつて、其の脇に二つの規則書が懸けてあつた。一つは全く千切れて居たが、それは私たちので、も一つ新しいのは彼れ自身の心得である。で、本來の規則其の物を重んずるといふよりは、寧ろ私たちを奨励する用にそれを供した、戸の向側には黒板があつて、其れに以つて行つて、我々の甚い不行状は、環印で記るし、輕るいは十の字で記るしてあつた。黒板の左手が隅になつて居て、其處に悪い事をした

時に膝を突いて据らせられた。

私はその隅を忘れることが出来ない！ 暖爐の戸、その蓋、戸を開閉する時に鳴る音、其様なことまで記憶して居る。其處の隅に膝を突くのだ。膝と背とが痛くなるまでさうして居られると、やがて『カール・イヴニッチは屹度私の事を忘れたのだ。自身はきつと靜かに、軟い腕椅子に凭れて、流動體靜力學を讀んで居るに違ひない。さうして此の私を何うしやうといふのだ！』といふやうな事を考へ出す。さうして、それとなく自分が此處に斯うして居ることを知らせうとして、例の暖爐の消火機を密と開閉したり、または壁の漆喰を摘取つたりする。が、何うかして餘り大きな塊が突然にガタ／＼と床に落ちたりなると、本當の罰よりも此度は其の吃驚の方で罪が重くなるやうなことがある。で、密とカール・イヴニッチを窺いて見る。と彼は何も氣の着かぬ風で書籍を手にして其處に靜と腰を掛けてゐる。



室の中央に襦袢の黒い掛布を掛けた卓が立つて居た。掛布の端の下から處々小刀を以つて傷けた處が見える。卓の周圍には使ひ古して光つた種々な粗末な道具が並べてある。も一つの壁には三つ小窓が明けてあつた。其處から見ると、窓の前は直ぐ道路になつてゐて、其の窪地や、小礫や、車轍の跡までが、私には長い間の懐かしい馴染であつた。道路の彼方には端巖と剪整へた菩提樹の園逕が通うて居て、其の後に粗朶垣が其處此處に見られる。園逕を透して野も見える。其の一方に打穀場があつて、他の方には森が見える。遙か向の方には小さい番小舎も見える。右手には平庭の一部が眼に入る。お晝飯前大抵大人は其處に坐つて居た。カール・イヴニイチが吾々の書取を訂正して居る間に、其方を眺めると、お母さんの黒い頭髮だの、誰れか知らんの背などが見えて、話聲や笑聲が微かに聞える。さうして自分も随意に其方に行けないのが痛くなつて、『私も今に大きくなつたら、課業は止めて、彼處に行つて私の好きな人々と始終あゝして談話して居やうか』

と思ふ。すると段々痛いのが悲みに變つて來る。で、何といふことなしに夢でも見るやうな氣になつて居ると、カール・イヴニイチが書取の誤謬をブツ／＼言ふので、ハツと我に返へる。

カール・イヴニイチは寬袍を脱いで、青い色の燕尾服に着更へ、兩方の肩に隆肉や皺を拵へたまゝ、姿見の前に立つて、頸飾を整へ、さて吾々を連れて、お母さんに朝禮を言ふために階下に降りて行く。

## 二 お 母 さん

お母さんは談話室に居て、茶を入れて居つた。片手に茶壺を持ち、片手で茶瓶の吸口を持つて居た。其の吸口から水が茶壺の頂を越して、下の盆の上に溢れて居る。お母さんは其れに熟と眼を据ゑて居たが、心にそれを見ては居なかつた。また私たちが入つて來たのをも見なかつた。



嘗て非常に愛して居た人間の容姿を想像に描出さうとすると、過去の雑多の記憶が自から綿々として浮ぶ。さうして是等の記憶を透して、涙の奥に朦朧にその容姿が認められる。是等は想像の涙である。私が其の時のまゝに、お母さんを想起して見やうとすると、常に愛と善とを表はして居つた其の蒼色した眼付、生際より少し下つた處にあつた頸の黒子、白い縫箔した襟飾、冷い軟かな手——それで屢々私を撫でた。さうして私はそれを屢々接吻した。——これだけで、其の他は何にも私の心に現はれて來ぬ。彼女の全體の形像は記憶を逸する。

褥椅子の左手に古風な大きな英國製のピアノが置いてある。其の前に顔色の黝い私の姉のリユボチカが腰を掛けて、今冷水で洗つたばかりの紅い手で、熱心にクレメンチイ(以太利の)作曲家の曲を練習して居つた。彼女は十一歳であつた。短いリネルの上被に白い笹縁の着いた長袴を穿いて居た。彼女の脇に半分體を彼方に捻向て、マリア・イワノフナが紅いリボンの着いた頭巾を冠つて青い短衣を着て、

赤い怒つた顔をして坐つて居つたが、カール・イワニッチが入つて來たので、更に六ヶ敷い面貌をした。彼女はカールを脅嚇すやうな眼付で見遣つた。で、彼の挨拶にも應へず、計算を續けて前よりは一層酷しく大きな音をさして、一、二、三、と足拍子を踏んだ。カール・イワニッチはそんな事には少しも頓着せず、自分の風習に従つて、獨逸流の禮儀でお母さんの手を接吻しに行つた。お母さんはそれで我に返つて、さも身振を以つて胸の中の苦勞を逐除けやうとでもするやうに、可愛い頭で頭振を振つて、カール・イワニッチに手を差出して、彼れがお母さんの手に接吻して居る間に、其の皺の寄つた額に接吻した。

『難有うカール・イワニッチさん。』獨逸語で話しかけた。

『小供は好く休みましたか。』

カール・イワニッチは片一方の耳が聳であつた。で、ピアノの音がして居るので何にも聞き取れなかつた。彼れは褥椅子に腰を掛け、卓に片手を置き、氣品の高



さうな微笑をして、そつと頭の上に例の頭巾を擡げて言つた。

『御免下さいませ、奥さま。』

カール・イヴニツチは禿頭に風邪を引かぬやうにとて、決して赤頭巾を脱がぬやうにして居たが、毎時談話室に入る度に、彼れは其のまゝで居ることの許可を請ふたのだ。

『え、好ござんすとも……如何でしたか、子供は皆よく休みましたか。』お母さんは彼れの傍に寄つて、聲を大きくして聞いた。

それでもまだ何にも聞えない。赤頭巾を禿頭に被せ、一段優しく微笑つた。

『ミイミヤ一寸お止め、何にも聞えないから。』

微笑つてお母さんはマリア・イワノフナに言つた。

お母さんの顔は平常美しうはあつたが、微笑ふとそれがまた言ふに言ない愛らしくなつて、お母さんの身邊の物を凡て輝かすやうに思はれた。憂苦い想をする

時など、若しお母さんのあの微笑をチラリとでも見たならば、何様なに嬉しいであらう。私には容貌の美といふものは單に微笑といふことにあるやうに思はれる。若し微笑つて面貌を變へなければ、其の面貌は普通の顔なので、また若しそれが爲に相貌を傷ねるやうならば、本來の顔が悪いのである。

お母さんは私に挨拶をしながら、兩方の手で私の頭を抱へて、少し後方に屈指、凝然と私の顔を見詰めて、

『お前は今朝泣いて居ましたか。』

私は返事をしなかつた。お母さんは私の眼を接吻して、獨逸語で尋ねた。

『何でお前はあんなに泣いて居ましたか。』

『お母さんが愉快に私たちに話す時には、何時も此の獨逸語で話した。お母さんは獨逸語は巧に出来た。』

『夢を見て泣いたのです。』と假作を言つた。私は假作を考へて思はず戰慄とし



た。

カール・イヴニッチは傍から口を添へて、私の説明を保證してくれた。が、夢に就いては何にも言はなかつた。

今日の天気は何うであらうなど、いつて——それにはミイも口を入れた——後お母さんは氣に入りの奴婢の誰れ彼れの分に、砂糖の塊を六箇盆に載せて置き、それから窓の下に据ゑた自分の縫箔臺の傍に行つた。

『さあ、お前方はお父さまの處に行つてお出で、さうして、其のお序に、打穀場におらつしやらない前に、間違ひなくお母さんの處においでなさるやうに、お父さまに、そ言つておくれ。』

音楽、計算、黝黒い顔がまた始まつた。私たちはお父さんの處に行つた。お祖父さんの時代からの料理番の名を記した室を通つて書齋に入つて行つた。

三 お父さん

お父さんは卓の傍に突立つて封金見いなものや、書類や、銀行手形の束のやうなものを指しながら、氣嫌惡さうにして、家扶のヤコフ・ミカイロフと何事か鋭く談議かてゐた。家扶は例の、戸と晴雨計との間の席に立つて、背後に手を回して頻りに指先を動かして居つた。

お父さんは氣嫌を悪くすればするほど、ますます急に指先を動かすが、口を利くのを止めると、指を動かすのも止める。ヤコフはまた話をし出すと、指が焦々して其處等中を矢鱈引掻き回す。其の舉動で私にはヤコフの腹の底の秘密が推測せられるやうに思はれた。

でも其の顔色は何時も穏かで、彼れ自身は威儀を保つ積りで居ながらも、尙ほ且つ何處までも從順の意を表はして居て、恰ど『私に間違ひはございませぬ、で



はござりますが貴下さまの御意通りに』といふ風である。

お父さんは私たちが入つて来たのを見て、氣嫌よく、

『待つて居れ、今濟むから。』

と言つて戸口の方に低頭く眞似をして、誰れか其處を閉めとくやうに合圖した。

それからお父さんとヤコフと二人で、經濟向のことを頻りに八ヶ間敷議論して居

たが、畢竟お父さんの私用費に引足ぬ處は毎時もお母さんの領地（吾々は今其處

に住んで居る）から上る收入を以つて行つて補充するのだ。此の點に於てはお父

さんとヤコフの意見は常に一致する。

お父さんは私達に會釋をして、それから最早怠けてゐるのも止めて可い時分で

ある。私達はもう幼年ではない、眞面目に勉強すべき時が来たと言ひ聞かした。

『お前たちも最早知つて居るだらうとは思ふが、私は今晚モスコウに行くが、お

前たちをも一所に連れて行く。お前たちはお祖母さんと一所に居るだらう。さう

してお母さんは姉さんたちと此處に残つて居るだらうから。よう聞きなさい、お

母さんはお前がたがね、一同と仲好くして善く勉強をして居るといふことを聞く

のが何よりの慰藉じや。』

吾々も此の五六日頻りに準備をしてゐるらしいので、何か變つたことがあるの

ではないかとは思つて居たが、始めてさうと知つて吃驚した。ワロヂアは赤くな

つて、慄聲でお母さんからの音信の事を繰返へして言つてゐた。

私は私で『それでこそ、私の夢の告知せがあつたのだ。何卒何事もありませんぬ

やうに！』と獨り想つた。

私はお母さんの事を想ふてそれは／＼悲しかつた。が、それと共に、自分等も

もう成長くなつたのだと想ふて、また何となく愉快に感じた。

『若し今晚出立のだと、吾々はきつともう日課などはなくなるのだ、それが嬉れ

しい。が、それにしてもカール・イワニイチに分れるのが何となく可哀さうだ。



カールはきつと免職せられるのだ。そうでなければ彼れに對してあんな封金の準備などする筈がない。矢張り今までの通りに、何時までも勉強して何處へも行かずお母さんとも分れず、憐なカール・イヴニッチの感情をも害しない方が好いかも知れん。彼の人は眞個に不幸な人だ！』とも考へる。  
此様な思想が頻りに私の胸裡を往來した。私は其處に突立つたまま、凝然と私の前被の黒いリボンを凝視した。

それからお父さんは晴雨計が下つたとかいふやうな普通のことにかール・イヴニッチと口を利いて、ヤコフに獵犬を何うせい斯うせいと命令して置いて、それつきり。期待でゐた効もなく獵に吾々を連れて行つて遣るからと言つて賺かしながら、サア／＼一同自分の書齋に行つた／＼と逐ひ返へした。

二階に歸途に私は平庭に駈けたした。すると愛犬のミルカが戸口の日向で瞬きしながら寝そべつて居る。

『ミロッチカ』と、私は其奴を軽く打いて、鼻の處を接吻しながら、私たちは今日餘所へ行くんだ、左様なら！ 最早お前とも會はれないよ』と犬にも離別を言つた。

私は逆上げてハラ／＼と涙を溢した。

### 四 課 業

カール・イヴニッチは甚く氣分を悪くしたらしい、其の盛額、置戸棚に上衣を投げ掛ける態度、苛々と帯を巻く手付、私たちを教へる時に會話篇に深い爪痕を付けるなど、歴々とそれが分かる。ワロヂアは毎時の通り尋常に勉強したが、私は心が轉倒して、自分から進んでは何にも出来ないくらぬであつた。私は會話篇を長時茫然として眺めたまんま、目前に差迫つた離愁のことが考へられて、涙が流れて涙が流れて本を讀むことが出来なかつた。



やがて朗讀の時間になつて、カール・イヴニッチは眼を半分閉ぢながら（それが氣嫌の好くない兆であつた）傾聴してゐた。恰ど其處の處が、一人が『何處から貴下は來ましたか』と聞くと、他人が『私は珈琲店から來ました』と答へる所であつたが、私は最早涙を堪へ切れなくなつた。咽せて應答をしやうとしても聲が出なかつた。

カール・イヴニッチは怒つて、私を自分の膝の上に抱上げて、毎時も屢くする恐い顔をして、言ふことを聞かぬ泥工の坊（さういふのが彼の口癖であつた）と言つて嚇しつけ、涙が出て口が利けないのを無理に規則だ、訛をしると言つて追つた。それでも終には自分が無理であつたと思つたものか、其のまゝニコライの室の方に行つて、後をピシヤリと閉戸めた。

其の中で話して居るのが教室から聞える。

『ニコライさん、貴下は小供たちがモスコウに行くことをお聞きか』カール・イ

ヴニッチは入りながら聞いた。

『え、聞きましたよ。』

さう言つてニコライが起ちかけたものと見えて、カール・イヴニッチは『そのまゝく！』と言つて戸を閉めた。私は例の隅から出て來て、戸口の處に行つて聽いて居た。すると、カール・イヴニッチが激して『ニコライさん、人に對して幾何善い事を仕向けたつて、幾何此方で何と思つてたつて、難有いと意はれるなんてことは有るものぢやないね』と染々と言つた。

ニコライは窓の下で靴を製へて居つたが、尤もだといふ風に首肯した。

『私は此の家にや十二年も居るが、ニコライさん、嘘ぢやない』とカール・イヴニッチは眼と飄煙草とを天井の方に向けて續けて話す、

『私が小供たちを大切にしたこと、いふものは、假令自分の本當の兒であつたとて、とても彼様なにや出來ません。まあ聞いて下さい、ワロチアが熱病を煩ら



うた時などは、私は枕頭に附いた切り九日の間といふもの微睡ともしやしなかつたよ。え、其の時分にやカール・イヴニイチやくつて私が氣に入つてたのだ。私だつても其の時分にや用があつたのだ。それが今日になつちや……今では「小供が長成くなつた。眞面目に勉強せねばならぬ」とさ。それちや、さも此處で何にも學つて居なかつたやうに聞える。え、ニコライさん、まあさうちやござんせんか。」と言つて皮肉な笑ひやうをした。

ニコライは突錐を下に置いて、兩手で絲を引出しながら「さうして、兄弟もつとまだ勉強するだかね。さうと思はれるね」と好い加減に調子を合す。

「左様さ、私には最早用はないんちや、追拂らはれるのちや。が、此家で初め何と約束して居つた？ 私を何と心得て居るのちや？ 奥様は好いお方ちや、あの方は好いお方ちや。」彼は胸に手を置いて言つた。「が、奥様は一體何ちや？ 奥様の思召は、此處の家ちや少しばかりも効力はありやせん……」

と、まだ何か言ひたげな態度をして、持つて居た皮表紙の手帖を床に擲付けた。

「誰れの仕業か私にやちやんと分つて居る。何で私に用がなくなつたか、私にや分つて居る。他の者のやうに、私が可い加減な出鱈目を言つたり、ツベコベ言つたりせんもんだから。私は昔から誰れに對つても正直一方で通して來て居る人間だ。」と高慢に言つた。「好きなやうにするが可いわ。たつた私一人の厄介者を扶持離れにしたからと言つて、何もそれだけ此の家の身代が増えもしまい。天道人を殺さず——私はまた私で勝手に麴の碎片にでも有附くちや……え、さうちやないかね、ニコライさん」

ニコライは仰いで、カール・イヴニイチが果して麴の碎片に有附くことが出来るか何うであらうかを見究めうとするやうに、彼れを見上げた。が、ニコライは何も言はなかつた。

カール・イヴニイチは長い間此様な調子で話した。さうして彼れが以前行つて



居たさる大將の家では、皆が此處の家よりも能く自分の職務を了解てくれたと言つた。(私はそれを聞いて何だか厭な氣持がした。) それからまたサキノイの事やら、兩親の事やら、シヨンハイトといふ仕立屋の朋友の事やら、それからそれへと話を續けた。

私は彼れの悲哀に同情した。さうして彼れと同じやうに私が愛して居るお父さんとカール・イヴニッチと疏通せぬことを考へて獨り胸を痛めた。私は再びもとの隅に戻つて蹲んだまんまで何うしたら二人の間を解合ふやうにすることが出来るだらうかと、それを考へ込んだ。

カール・イヴニッチは教室に歸つて来て、私を起たしめ、書取帖を用意するやうに命じた。用意が整うと、彼れは鷹揚に腕椅子に凭掛つて、底の方から發するやうな聲で、次の如く口授した。

『凡ての性情の中にて最も嫌ふべきものは、』

『書いたか』と此處で一息して、徐々に喫煙草を一撮み取出して、元氣を附直し、

後を續けた——『最も嫌ふべきものは忘恩なり』……カピタル・ワン』

私は最終の一句を書いて、後は何うかと彼れの方を見上た。

すると『ピリオッド』と言つて、嘖ひながら、書取帖を出せと合圖した。

彼れは己れの胸中の感情を表した此の格言をさも満足に堪へざるものゝ如く、色々に調子を變へて數回繰返へして朗讀した。それから吾々には歴史の日課を遣らせ、自分は窓の處に行つた。さうして前のやうにさう濫面でなくなつた。無禮を加へた奴に對して當然の復讐をしたといふやうな喜びを表はして居つた。

一時にもう十五分となつたが、それでもまだ放課にしやうとはせぬ。

段々怠屈をしてお腹が空いて来る。精一ぱい耐忍をしながら、何かお書飯の近くなつたのを知らす合圖はせぬだらうかと、私はそればかりを氣にして居た。すると、其處へ下婢が皿を洗ふ布巾を持つて遣つて來た。と、戸棚の方で鉢の鳴



る音が聞える。ミイミもリユウボチカとカテンカ（カテンカといふのはミイミの娘で、其の時十二歳であつた）とを連れて庭園から入つて来た。が、ねつから料理番のフオカが見えさうにもしない。此の男が毎時も飯の準備が出来たことを知らせて来るのだ。さうなると吾々はカール・イヴニッチには見向きもせず、書籍も何も其の儘打遣らかして置いて階下に飛んで行くのだ。

すると、足音が階段で聞えた。が、それはフオカではなかつた！ 私は胸の中でフオカの歩調を知つて居て、平常其の長靴の鳴るのを聞分けた。戸が開いた。そして全然私には見馴れぬ形體をした者がヌツと顯はれた。

五 馬 鹿

教室の中へ五十格向の、細長い、蒼白い、痘痕のある顔で、長い胡摩鹽頭髮の、疎な赤髯を生した男が入つて来た。戸口に入る時に頭ばかりではない身體まで屈

めねばならぬほど大きな背の高い體をしてゐる。土耳其服ともコサツク服ともつかぬやうな、ボロ／＼になつた衣服を着て、手に大きな棒を持つて居つた。室中に入つて来て、其の棒を以つてカ一杯床を打いて、大きな口を開けて、額に皺を寄せて、凄い不思議な笑ひ様をした。加之片眼であつたが、其のまた眼の白い瞳孔が始終突出して居るので、さもなければ却つて柔和に見える容貌を一層嫌らしく見せた。

『アア！ 見付けた！』と彼れは叫んで小股にワロチアの傍に馳寄り、其の頭を捉へて、頭頂を熟と検査し始めた。かと思ふと眞面目な表情をして其處を去り、此度は卓の傍に来て其の下を打いては其の跡に十字の記號を書く。『オーオオ、可哀さうな！ オーオオ悲しい！ 可愛い小供………が飛んで行く。』

とワロチアを惻然と見つめて涙聲で言つて、筒袖で涙を拂つた。本當に涙を落して居つた。聲は嗔れて粗野で、舉動が急躁くて武骨で、話すことが無意味で辻



襖の合はぬことであつた。(彼れは代名詞といふものを決して使はなかつた)が、其の音調にいふにいへぬ引着けるやうな處があつて、其の變つた黄色んだ顔が其の時は率直な悲しげな面相になつて、聽いて居ると、吾々までがつい引入れられて憐なやうな、恐ろしいやうな、悲しいやうな氣持になつてくる。

それは馬鹿の巡禮のグリスカといふものであつた。全體何處から來たものやら、兩親は何うしたもののやら、また何ういふ譯で其様な奇妙な語を言て居るものやら、誰れも知つて居るものはなかつた。が、唯十五の時から以來始終馬鹿で通つて、夏も冬も裸足のまんまで、諸方の寺院々々を經巡つて、誰れでも自分の思つて居ることを巧く言ひ當てたものには小さい繪像を與へ、謎見たやうな語を言つて居た。中には其語を豫言だと言つて信する者もあつたといふこと、誰れも其の他のことを知るものはなかつたこと、また時々私のお祖母さんの所にも行つたこと、さうして或人はもと富者の兒であつたのが、零落れたのだ、素性は好い馬鹿だと

言ふものもあれば、また否さうぢやない、元來土百姓で懶惰漢だと云ふものもあつた。といふことだけ私は知つて居た。

長いこと待つた擧句逐々毎時キツ／＼と時を違へぬフオカが遣つて來た。私たちは階下に飛んで行つた。先刻から啜泣をして譯の分らねことばかり喋つて居たグリスカも後を追つて棒を以つて階段を打きながら従いて來た。

お父さんとお母さんと手を取り合せて低聲で何か談話しながら談話室に入つて來た。マリアイワノフナは褥椅子の側に三角形に整然と並べてあつた腕椅子に澄込んで腰を掛けて、其の傍に掛けて居た娘たちに嚴しい重い聲で何か訓へてゐた。が、カール・イヴニイチが入つて來ると、ジロリと其方を見て直ぐ彼方に向いた。

それがさもなく『私はお前さんを見やしないよ。』と言つた風である。娘たちの眼付に、少しも早く何か非常に重大なる事件を私たちに知らせたいと待ち焦れて居るさまが見えてゐたが、いきなり私たちの傍に飛んで來ることはミイミの教訓に違



背くから出来ぬ。吾々は先づミイミの傍に行つて、「先生お早うございます」と言つて、お辭儀をせねばならぬ。さうして後始めて會話をすることを許されるのである。

ミイミといふ奴は本當に煩さい奴だつた！ 彼奴の前では何だつて話すことが出来なかつた。彼奴は何事でも皆な不可い事のやうに思つて居つた。そのみならず、始終吾々に佛蘭西語を語すやうに勸めて、假令露西亞語で話さなければならぬ時にでも、態と意地悪くそれを言ふ。飯の時などでも例へば皿の物だけを食べかけやうとすると、彼奴がきつと『麴と一所にお上んなさい』とか、『貴下其様な又の持ちやうがございますか』とか、それはく喧ましいことをいふ。ミイミが、何にも其様なことを言ふ必要はない。彼奴は娘たちを教へて居れば可いんだ。吾々にはカール・イヴニイチといふものがちやんと附いて居る。

大人が前へ食堂に入つて行く背後で、カテンカが一寸短衣の袖を捉へて私を止

めながら、お母さまに私たちをも獵に連れてつて下さるやうにお頼みして下さいなと私語いた。

『可々、そ言つて見やう。』

グリスカはもう離れた小さい卓で、恐ろしい澁面をして、皿から眼を放さないで食べて居た。さうして折々太息を吐いては、獨語のやうに、『可愛そうだ……飛んで行つた……鳩が天に飛ぶだらう……オ、慕の上には石が置いてある！』其様なことを言つて居つた。

お母さんは今朝から何だか心に屈托することがあつたやうであつたが、グリスカが遣つて来たことや、又其の言つたり、仕たりすることなどが、ますます氣になつたと見えて、御飯の間お父さんとお母さんとの間に迷信とか迷信ではないとかいふやうな談話があつた。晝飯が済際になつて、リヌウボチカとカテンカとが頻りに私たちの方に瞬したり椅子を動揺したりなどして甚く懸念な態度をして居



る。瞬は「何故早く私たちをも獵に連れて行くやうにお父さんお母さんに頼んで呉れぬか」といふ積りなのだ。私は臆でワロヂアを突いた。するとまた突き返へした。彼れは遂々勇氣を出して、それを言つた。初めは臆したやうに言つて居つたが、後は明白と、大きな聲で言つた。それは今日を限りに吾々が出立つのだから、娘たちをも私たちと一所に馬車に乗せて獵に連れて行つて下さい、といふのだ。大人の間で一寸相談があつたが、結局吾々の希望通りに許された。それよりもまだ嬉れしいことには、お母さんまでが私たちと一所に行かうと言ひ出した。

## 六 獵の準備

飯が濟際になつて、ヤコフを呼んで細かに獵の準備を命じ、誰れは何の馬に乗るといふことまで一々指圖した。ワロヂアの馬が負傷をして居たので今日は獵馬

に鞍を着けるやうに言付けた。此の「獵馬」といふ語が始終お母さんの耳に響いた。お母さんには何だか其れが野獸でもあつて、きつとワロヂアを乗せたまま逃げて仕舞つて、殺してもするのではないかと思はれたのである。でもワロヂアは非常な元氣で、其様な事は何でもない、劇しく疾走する方が面白いと、お父さんと共々慰めたけれど、お母さんは、それでは折角遊散に出て居ても始終そればかり苦勞になつて仕様がなからと言ひ續けた。

晝飯が濟んで大人は書齋に咖啡を飲みに行つた。其の間に私たちは庭園の小徑を散歩しやうといつて外に出た。其處は落葉で埋つて居る。ワロヂアが今日は獵馬に乗るといふこと、リュウボチカがカテンカよりは歩きやうが徐いのが可笑いのだ、グリスカの襪襦を見て居ると面白いのだ、そんなことを話したが、吾々と別離の事に就ては何にも言はなかつた。其處へ馬車が来て、會話は其のまゝになつた。馬車の後から獵夫が獵犬を連れて遣つて來た。また其の後から馭者がワロ



チアの乗る馬に乗つて、私の小馬を引いて来た。吾々はそれと見て生垣の處に駈けて行つた。其處から其様な物が皆見える。さうして喊きながらドタバタ二階に飛んで行き、なるたけ獵夫と見えるやうに手提こく扮装をし、早く犬や馬を見やう、獵夫と會話をしやうと、急いで外に飛出した。

其の日は暖かで、奇妙な形をした白い雲が遠く地平線の上を朝中揺曳ふて居つた。さうすると、軟な風が微々と其雲を一所に吹寄せて、折々太陽を隠し、屢々暗い陰を射したが、それでも雷雨を越して吾々が最後の遊興を妨げるやうな心配はなかつた。晩くなつて雲は消えて了つた。或るものは蒼白くなつて長く延び、地平線の彼方に飛んで行つた。或るものは眞上の處で白い透明つた鱗形に變つたが、唯一つ大きな黒い雲だけが東の方に彷徨いて居た。カール・イブニッチは、始終如何な雲が何方に行くといふことを知つて居つたが、此の雲を見て、マスロフカの方に行くだらうが、其處でも雨にはならない、さうして天氣が好くなるだらう

と言つた。

稍々しばらくして、婦人連が出て来て、誰れが何側に腰を掛けるなどいふやうなことを一寸言ひ合つて、漸と席に着き、(其様なことは私には詰らぬことと思つたが) 日傘を開いて、それから乗り出した。其の時お母さんは獵馬を指して、聲を慄はして馭者に『それがウラヂマイル・ペトロウイッチ(ワロチアの本名)の馬かえ』と問ねた。馭者が『左様でございます』と返事すると、お母さんは手を左側に振つて脇を向いた。私は最早待ち遠くなつて、自分の馬に飛乗り、馬の耳の間からズツと前方を見遣り、庭を種々に乗廻した。

『何卒犬を蹴らぬやうにお氣を着けて下さいまし』と獵夫が言つた。

『心配ない。何度もう乗つたことがあるから』と私は得意然と言つた。

ワロチアは不斷の元氣にも係らず、幾許か身を慄はしながら獵馬に乗つて、頸を輕打きながら、



『暴れやしないか』と反復して尋ねて居た。彼れが騎つた風采は、宛然大人のやうで頗る立派に見えた。私の手許から見えたのでは腿が羨ましいほどピッタリ鞍に落着いて居た。私の風姿はともさう立派にはない。

階段でお父さんの足音がすると、犬守が先づ散亂つた獵犬を呼集める。獵夫は獵夫で自分の引連れられた獵犬を近く呼んで馬に乗り始める。お父さんの後から珠數の頸輪をリソソと鳴らしてミルカが勇んで飛出した。其奴は飛んで出ると、何時もいきなり雄犬に會釋をする状をして、一遍何れかと戯ひ、他の奴を躡いで、グウと一寸唸つて、それから又他の奴の尻を待つてやる。お父さんが乗馬つた。さうして一同乗り出した。

七 獵

タアカと言つた獵夫の頭が、灰黒い羅馬鼻の馬に乗つて眞先に進んだ。兎毛の頭巾を冠つて、大きな角笛を肩に掛け、山刀を佩いて居る。其の鋭い陰鬱な風采を一見したところ獵に出て行くのではなくつて、戦闘に出征くのとしか思はれな

吾々が門を出離れるとお父さんは、私たちや獵夫共には道路を騎行くやうに命じて、自分は獨り麥畑の方に回つた。

作物が頻りに揺れて居つた。黄色に輝いた野は高い緑の森で一方を劃つて居るばかり、眼路の際涯まで遠くく廣がつて居る。其の森が其の時私には極めて遠い、神秘な處のやうに見えた。さうして其の彼方はもう世界が無くなつて、誰れも居ない地方があるやうに思はれた。野面は麥束と人にと蔽はれて居た。其處此處の高い麥の間の刈取た跡に刈手の屈んだ背が見られる。刈手が握つた時に穂の揺るの見える。一人の婦人が物蔭で搖籠の上に屈んで居つた。他の方では半



襦袢一枚になつた百姓が荷車の上に立つて、乾燥いだ、熱つた野から塵埃を揚げて麥束を積上げて居つた。長靴を穿いて、長い棒を持つた、袖なしの監督が遠くからお父さんを認めて、冠つて居た山羊の毛の頭巾を脱いだ。さうして手拭を以つて逆せて眞赤になつた顔から、髻の邊を拭きながら婦人連に聲を掛けた。

お父さんの栗毛が緩かな歩調で歩きながら時々頭を胸の方に垂れて、手綱を引張つた。さうして重い尾を以つて煩さく集つて来る馬蠅や蠅を拂く。獵犬が二匹尾を鎌の形に曲げて、脚を高く擧げて見事に馬の後方について、高い切株を飛躍えた。ミルカは時々頭を地に着け、臭をかぎく眞先に驅けた。人の話聲、馬や荷車の響、鶉の樂しさうに鳴く聲、静と空中に輪を描いて居る羽蟲の音、苦蓬の香、藁の香、馬の汗、黄色く輝いた株跡に一杯日光が照渡つて出来た千變萬化の陰影色彩、遠くに在る森林の緑、薄紫色した雲、空中を渡したり、または切株に引掛つた白い蜘蛛の網——是等の物を私は見たり、聞いたり、感じたりした。

吾々がカリノフオエの森まで来ると、最早馬車は其處に来て居た。加之思ひがけもなく荷車が来て居て、其の眞中に料理番がチンと坐つて居た。木陰に茶釜も見えれば、氷菓子の桶らしいものもある。その他皆私たちの目を引く籠や包が置き並べてあつた。きつと其處の野天で茶や氷菓子や氷菓子が出やうといふのだ。吾々荷車を見ふともう仰山に言つて喜んだ。従来誰れも足を踏入れたことのない樹の間の草原で茶を飲むといふは大邊な御馳走だ。

タアカが此の小さい草原で取り圍んだ、樹立の處に遣つて来て停立ち、何の道筋を取つて何う出て行つたら宜いか、お父さんが細かに指圖をするのを氣を着けて聞いた。(彼れは指圖を一々納得はしなかつたけれど、お父さんに對して調子を甘く合してゐたのだ。)放された犬が暇さうに後足を揃へて踏張つて居た。タアカは聞くだけ聞いて、また馬に飛乗つて榛樹の芽生の背後に消えて行つた。獵犬は放逐されると、先づ尾を揺つて喜び、獨りで吠え、勢揃へをして、それから一遍



驅廻つて、互に躑躅合ひ、も一遍尾を振つて、さうして種々な方向へ驅けて行つた。

『お前はハンカチーフを持つて居るか』お父さんが尋ねた。

私はポケットから出して見せた。

『ウム、お前の其のハンカチーフを灰犬に結付けなさい。』

『ヂイランに？』私は了解だ風で聞いた。

『さうだ。それから道を走つて行け、そして小さい草原の處に來たら、停つて其

の周圍に氣を着けて居れ、兎を捕るまでは歸つて來るな。』

私はハンカチーフをヂイランの朧毛な頸に巻いて、さうして自分に指定された場所で大急ぎで驅けて行つた。お父さんは笑つて私の後から呼び掛けた。

『疾くく、疾く行かないと間に合はぬぞ！』

ヂイランは耳を豎て、停立つては獵の物音を聞いた。犬の踏止つた時には、私の方では引張れぬから、口で『ハッ行け！ハッ行け！』と嗾かける。さうすると、

ヂイランはまた手綱を引手繰るやうにして飛び出す。それがまた私の力では、なかなか引留められない。私の場處に行くまでに、私は二三度も轉ばされた。大きな樫の樹の、根の平たくなつた小蔭を選んで、其處の草原に横臥り、ヂイランを側に置いて、待つて居た。

此様な場合には平常さういふやうな氣がするものだが、私は何だか、現實から遙かに遠ざかつたやうに想はれた。一番驅けの獵犬の鳴く聲が林中に起ると、私はもう三つ目の兎でも逐うて居るやうに思はれた。

タアカの疝高い聲が威勢よく林中に鳴渡つた。獵犬は初めクンクン鳴くやうに言つて居たが、其聲が段々頻繁に聞えるやうになつた。さうすると、他の低い聲が加はつて、聽て第三、第四と次第に多くなつた。是等の聲が暫時して止むと、また亂れて互に吼え合ふ。音響が段々高くなつて調子が揃つて來て、終にはそれが鳴るやうな、天地に瀾満るやうな唸聲になつて消えた。草原に取圍まれた叢林



が暫時全然反響に變つた。獵犬はますます喧しく吼え立てた。

私は其れを聞くと其處に棒立ちに突立ち、森林の端にじつと眼を据ゑ、間拔面まぬけづらで微笑となつた。汗が瀧のやうに流れて、熱い滴が頬邊を擦ぐるやうに落ちたが、それを拭かうともしなかつた。その時ぐらゐ氣分の緊張つたことはないやうに思はれた。が、其様な我慢して長く待たれるものではない。犬群が森林の端にとつと逸出た。さうしてまた引退へした。兎は居なかつた。私は其處等を見回した。

ヂイランも私と同じやうな状態をしてゐた。初め一寸綱を曳いてクンクン泣いて、それから私の傍に寝轉んで、鼻を私の膝の上に乗けて黙つた。

大きな樅樹の根が露出た居邊の灰色の焦土の上に、樅の枯葉だの、橡の實だの、黄緑色の苔の生え付いた樹枝だの、種々なものが其處等一面に散亂つた處に無數の蟻が蠢いて居た。彼等は兼て自分で設けて置いた險しい道を後からく急いで行く。荷を持つて居るのもあれば持たないものもある。私は橡の實を拾つて其

の通路を邪魔した。さうすると或者は妨害物を屁とも思はずドンク其れを攀登よちのぼつて行くものもある。又其の他の奴——就中重荷を持つたのは全く途方に暮れ、何うしたら好いか分らないで、其處から更に間道を探しに行くものもあり、後に引返すものもあり、又は橡の實を傳ふて私の手に這上つて、段々短衣の袖の下に隠れやうとするものもある。すると、何處からともなく黄色い翼の蝶が眼前に来て、さもしく面白さうに彷徨いた。私は直ぐまた其れに氣を奪られた。私が其方に向くと蝶はもう二歩ばかり向に飛んで、其處に在る大半洞れ氣味の野生の和蘭蓮華の突尖の周圍に輪を描いて居たが、遂々其れに留つた。蝶が日向暖をして居つたのか、または雜草から甘汁を吸ふて居つたのか、私には分らなかつたが、獨り樂しんで居つたには違ない。折々それが翅きをしては花に體を押付ける。さうして最後に全く静かになつた。私は兩手を頭に支つて面白さうに其れを眺めた。

と、突然ヂイランが吼え立て、もちつとこのことで私を轉ばすばかりに手綱を曳



いた。見回すと森林の端を一匹の兎が、片耳を垂れ片耳は立て、跳ねてゐる。私は全身の血潮が一時に頭に逆上つて、我れを忘れて何であつたかたゞ大きな聲を出して喚きながら犬を逐放して、自分も一所に駈出した。が、さうした後になつて、やあ、之れは失敗つたと思つた。兎は一寸俯伏したかと思つたら、静と一つ跳ねて、何處かへ行つて了つた。

森林の出端まで犬群が吼え付いて來た。其れに續いてタアカが叢林の影から出た。現はれた。其の時私の恥辱さといふものは何んなであつたらう！

彼れは私の失敗つたのを認めて、流目に私を見やり、唯一言「あゝ、若様！」と言つた。それが如何な言ひやうをしたらう！ 私は寧ろ兎のやうに彼れの鞍に吊下げて貰つた方が結局好いと思つた。

稍々暫時私は落膽して、其の儘其處に突立つて居た。私は犬を呼ばうともせず、股を亂打しながら、唯、

「ちえつ、何といふことをした！」とそればかり繰返した。彼方の方では獲物を逐ふ獵犬の聲がする。森林の向側で兎に噛み付く聲もする。タアカが彼の長い鞭を揮つて犬群を呼ぶ聲もする。けれども私は依然立つたきり動かなかつた。

### 八 遊 戯

獵は終つた。布が若楊の小蔭に廣げられて、一同其の周圍に坐つた。料理番のガフリオは周圍の露氣のある綠草を押し平して、皿を拭き、籠から何かの葉に包んだ梅、桃などを取出した。若楊の薄緑な小枝を洩れて太陽が卓掛の模様の上だの、私の足だの、それからガフリオの磨き立てた汗みづくの顔などに揺々と圓い光線を投げて居た。軟風が微々と木葉を渡つて私の頭髮や汗の流れる顔を吹いて、蘇生るやうだ。



氷菓子と水菓子とを分けて貰つたので、既う其處に用はなくなつた。焦げ付くやうな日光が斜にさしかゝるのも厭はず、吾々は起つて遊戯を始めた。

『さあ何をしましやう？……さうだ一同でロビンソンの眞似事をしませう！』とリュウボチカが日光に瞬きしながら、草原の上で小躍しながら言つた。

『否だ、怠儀だ！でもたつてしたければ、吾々で園亭を拵へやうぢやないか。』とワロチアが怠儀さうに芝生に寝轉んで、木の葉を噛みながら言つた。

ワロチアは明かに少し氣取つて居つた。今日獵馬に乗つたのを自慢に、大邊疲れた風をして居たに違ひない。加之彼れはロビンソンの如き遊戯を喜ぶにしては、恐らく餘に思想が健全過ぎて、代りに想像力が餘りに少かつた。その遊戯といふは吾々が近頃讀んでゐる、ロビンソン譚の中の一場を芝居に演やうといふのだ。

『さあ、ねえ……何故貴郎は一所に演て下さらないの？』と娘たちがせがんだ。

『貴郎がチャアルスカエルネストか、それでなきやお父さんにでも、貴郎がお好

きなものにお成なさるが好いわ。』とカテンカがワロチアの側に行つて、短衣の袖口を捉へて引起さうとした。

『僕は本當に演たかない。面白くないから。』ワロチアは身體を芝生に伸ばし、心地好さうに微笑ながら言つた。

『皆で一所に遊ばないくらゐなら、家に居る方が好いわ。』と、リュウボチカは既う涙を潤ませて言つた。

彼女は恐ろしい泣蟲であつた。

『さあ、もう其様に泣くのだけは止して下さい。僕の知つたことぢやない。』

ワロチアの疲れたやうな、怠儀なやうな容貌が、私達の遊戯の興を全然殺いで了つた。一同地に踞んで漁魚に行く眞似をして、力一杯櫓を漕ぐ手附をしてゐた。ワロチアは腕を折曲げて腹這つてゐたが、それでも私達と一所になつて、漁師の態度などはしやうともせぬ。私がそれを言ふと、彼れは『腕をいくら其様に振



り回はしたつて何も捕れもしなければ、何の役にも立たぬことだ。また櫓を漕ぐ眞似をしたつてちつとも動きはせぬ。」と言ひ返した。いかさまさうだ。と私も不同意思つた。それからまた私が肩に棒を擔いで、獵に行く態度で林樹のある方に行くと、ワロチアは頭を兩手に置いて、仰向に寝をべり、自分は斯うして居つても、そんな獵には行つたも同じことだと言つた。ワロチアが斯様ことを言つたり仕たりしたので、吾々は非常に遊戯の興が冷めて不愉快になつて仕舞つた。

私は棒切れを以つて鳥を殺したり、また發砲するとの出來ぬのは好く知つてゐる。また遊戯といふものが、何ういふやうにして出來るかといふとも知つて居た。何から何まで事物をそんな風に解釋したならば、椅子で馬に騎る眞似も出來ぬと私は思つた。然るにワロチア彼れ自身如何な事をしたか覺えて居らねばならぬ筈だ。長い冬の夜など、吾々は布を腕椅子に着せ掛けて幌馬車を拵へ、一人は馭者になつてそれに乗り、一人は馬丁になり、娘たちを眞中に坐らせ、普通の椅

子を三つ並べて、それを馬だと言つて、旅行する眞似事をしたではないか。さうして途中如何に度々危険が起つたらう！ 何様に楽しかつたらう！ さうして長い長い冬の晩が速く經つのも忘れた。それを今のやうに言つたならば、一つも遊戯といふものは出來はせぬ。世の中に遊戯といふものが一つもないとしたならば、後は空虚ではないか。

### 九 初戀に似たもの

リユウボチカが、ある樹から木實を摘むと言つて、知らないで大きな蛾の附着いた木葉を撿取つて、吃驚していきなりそれを地上に投棄て、蛾が何か噴出しはしなかつたらうかと、恐れたやうにハツと手を舉げて後へ飛び退いた。遊戯は終になつた。各自同じやうに草の上に寝轉び、一所に頭を鳩首めて、その不思議な蛾を眺めた。



私はカテンカの肩越しにそれを見てゐた。カテンカは這つて行く方に木葉を置いて、蛾を其の上に摘み上げやうとしてゐた。私は大抵の女児が、肩先を一寸と扭曲げる癖のあるに氣が着いてゐた。それは低い襟の上衣が、滑り落ちやうとするのをさうして直すのだ。此の身振をするのをミイミが始終嫌つて『全然でお茶屋の婢のする態度だ。』と言ひくしたのを憶えて居る。で、カテンカが今恰度蛾の上に屈んだ時に此の身振をした。するとそれと同時にサツと風が来て、頸巾を煽つて眞白い頸筋を見せた。其の時その女児の小さい肩と私の唇との間は、小供の指二本ほどもなかつた。私は最早蛾の方を看ないで、カテンカの肩を凝乎と見入り、力一杯其處を接吻つた。でもカテンカは彼方向いたまゝ静としてゐたが、耳の根元まで頬を眞紅にした。ワロヂアはそれに氣が着いたか俯向たまゝ

『何て、女見たいな！』と嘲つたやうに言つた。

私は不覺涙が流れた。

私はカテンカから眼を離さなかつた。私は彼の少女の鮮々とした、可愛い白い顔を長いこと見馴れてゐた。私はそれが氣に入つてゐた。併しながら今更に注意して見れば見るほど尙ほ好きになる。

暫くして吾々が大人の側に戻つて行くと、何よりも嬉しいことには、お父さんが、お母さんの要求に任せて出立を翌日に延ばしたと言つた。

吾々は婦人連の馬車と一所に歸つた。ワロヂアと私と馬術の競争を試みる積りで、馬車の前後を元氣に乗廻はした。で、尙得意になつて一つ馬車に乗つて居る連中を驚かして遣らうと思つて、私は一人わざと少し遅れて置いて、サツと一鞭入れてカテンカが乗つて居る傍を、疾風の如く澄し込んで驅抜けやうとした。さうして驅けながら腹の中で、黙つて驅るが可いか、それとも叫んで遣らうかと考へた。すると、馬の奴め馬車馬の側に來ると、突然にバタと停立つた。其の機に私は馬



の頸の上まで鞍から跳ね飛ばされ、もちつとこのことで馬背から轉落ちる處であつた。

### 十 書齋と客間

吾々が歸家つた時には既う暗くなつて居た。お母さんはピアノを始めた。私たち小供は紙や鉛筆や繪の具を取出して客間の圓卓の周圍に寄つて腰を掛けた。私は唯青い繪の具しか持たなかつた。でもそれを以て出獵の狀を描かうとした。青い馬に乗つた活潑さうな青い小供と青い犬を二三頭描いて見たが、青い兎を描くのは餘り變だと思つたから、書齋に居るお父さんの處に走つて行つて聞いて見た。お父さんは書籍を讀んで居つたが、其方に向いたま、「一體青い兎が居るかね……え坊や、居るかね」と言つた。私は圓卓に戻つて、青い兎を又一匹描いて見たが、其の兎を叢林に描き變へた方が都合が好いと思つた。が、叢林が又何うも氣に

入つたやうに描けぬ。此度は其の叢林を又樹のやうに變へて見、其れを又乾草の堆積に直し、堆積を雲に變へた。さうして青い繪の具を紙中に塗抹けて、遂々仕舞に疳癩を起して其れを破いて了つて。大きい腕椅子に凭れて微睡をし始めた。

お母さんはフィルドのセコンド・コンサートの曲を弾いて居た。私は昏々夢を見て居たが、軽い鮮かな透明るやうな懷想の情が想像に浮んで來た。お母さんはそれからビイトオベンの悲曲を弾いた。さうして居ると私のその記憶が段々痛ましい、薄暗い、遣る瀬のないやうになつた。お母さんは度々此の二曲を演奏いたから、私は是等の曲が私に何ういふ感情を起さしめたか、よく覺えて居つた。それは或る何かの記憶に似て居つた。が、果して何の記憶であつたかと言へば、從來嘗て経験したことのない或る者に似て居たといふより他には言ひやうが無い。

私の丁度眞向に書齋に行く戸があつたが、其處からヤコフと土耳其服を着た赤髯のある人間が二三人入つて行くのを認めた。さうして其の後戸が直ぐ閉つた。



『何か用が出来たな！』と私は微かに思った。私は其の書齋の中で取扱はれて居る用事が、世界中で一番大切な事のやうに思はれた。何故さう考へられたかと言へば、書齋の中へ入つて行く時に、一同爪足をして私語きながら行つたからさう思はれたのであつた。お父さんの高い聲が聞えて、葉巻の薫——何故かは分らなかつたが何となく其れが平常から甚く私の心を引着けて居た——がして來ると、不意に料理部屋の方で聞き馴れたギイ／＼といふ長靴の音がして、半分睡りかゝつた所を吃驚させられた。カール・イヴニッチが、鬱いだ何か決心したやうな面相をして、手には何か書狀のやうなものを持つて、爪足をして、書齋の戸口に行つて、コト／＼と軽く叩いた。差支へなかつたか、これも入つてまた後をピシヤリと閉めた。

私は其れを見て『これは何か或る悪い事が起つたのに違ひない、カール・イヴニッチがまた怒つて居る』きつと何うかする仕度をして居る』と思つたが、また

直ぐ微睡を始めた。

けれども何にも悪いことも無かつた。

殆ど一時間ばかり、てまた長靴の鳴る音で目を覺された。カール・イヴニッチが涙を拭きながら——手巾を頬にあて、居るのでさうと分つた——書齋から出て來て、何か獨語を言ひながら二階に上つて行つた。すると、お父さんがまた其の後から出て來て

『今決めて仕舞つた。』とお母さんの肩の上に手を置いて愉快な調子で言つた。

『何をでございますか。』

『小供と一所にカール・イヴニッチをも連れて行かうと思つて……小供も彼れに馴染んで居るし、彼れの方でもまた大層小供に愛着して居るらしいから。一ヶ年に七百留ぐらゐさう大した金でもない。それに彼の男は畢り腹は好い人間なんだ。』



私は平常お父さんが何故カール・イヴニッチを悪くいふのか譯が分らなかつた。

「おやさうでございませうか、小供の爲にも、彼の人の爲にも、それが好うございませう。彼の人も本當に人の好い老人のことでございませうから。」お母さんが言つた。「私が禮として五百留遣ると言つた時に、彼奴何様に嬉しうであつたか、見物だつたよ。だが一番面白かつたのは、自分で持つて來た此の勘定書きだ。見て御覽！面白いから。」お父さんは笑ひ／＼言つて、カール・イヴニッチの自筆の目録をお母さんに渡した。それには次のやうなる事が記してあつた。――

小供の釣針二本 七十コペク

黄金の色紙、その他 六留五十五コペク

小供に使物の書籍、弓 八留十六コペク

ニコライの股引 四留

千八百――年モスコウから買つて來るやうにピオトル・アレキサンドロフイ

チに頼まれた金時計 百四十留

給料以外にカールの受取る分 百五十九留七十九コペク

時々自分で贈物に費つた總額や、自分で勝手に定めた禮金の額まで仕拂せやうに定めて居つた。此の目録を見たものは、誰れでもカール・イヴニッチを唯慾の突張つた薄情な勝手者としか思はなかつたかも知れぬ――が、それは大變な誤解である。

初め彼れが手に此の書附を持つて、頭の中に言ふことを用意して書齋に入つた時には、お父さんの前に行つたら平常此の家で耐へ抜いて居つた事どもを一切打溢けて並べ立ててやうと思つて居つたが、さていよく平常私たちに教授をする時分に使ふやうな、人を感動せしむるやうな調子で話しかけたが、其の雄辯が他に對するよりも却つて自身に對して強く應へたものと見えて「小供と分れるの



は私に取つて何より痛い。』と言ふ所に來ると、彼れはもう取亂して仕舞つて、聲が震へて不覺ポケットから例の辨慶編の手巾を取ださせられた。

涙を流しながら『さうです、獨り法師にせられたら私は何うしたら好いか自分でも分らぬくらゐ小供たちに馴染んで居つたのです。(此處の文句は考へて居つた演説の中にはなかつたのだ)月給は貰はなくつても好うございますから、從來の通り貴下の處に御奉公さして頂いた方が、私には合せでございます。』と片手で涙を拭き、片手で其の書附を見せながら言つた。

カール・イヴニッチが其様な言ふのは、心からいふのであつたことは私が確かに保證する。彼れの親切な心は私も好く知つて居つた。併しながら初めそれまでに言ひ張つた彼れが、何うしてお父さんの言ふこと、和解したか、私には不思議である。

『君が小供と分れるのが苦痛いなら、私が君と分れるのは尙ほ更ら苦痛い。分つ

た私は思案を仕直した。』と言つて、お父さんはカール・イヴニッチの肩を打いた。

晩飯の少し前になつて、馬鹿のグリスカがまた入つて來た。彼れは今日此家に來た時から以來、引續けに太息を吐いたり、泣いたりして居つた。彼れの豫言を信じて居る者は、それは私の家に何か悪い事のある前兆だと言つた。さうして彼れは室を出て行く時に、明朝は又遠方の方に行くと言つた。私はワロヂアに瞬きして室外に出た。

『何だ?』

『何うだ、これから直ぐ二階の僕室に行つて、グリスカの襦袢を見やうぢやないか。グリスカは二番室に寝るんだから、天井に踞んで居ると、全然見えるよ。』

『それは面白い! 一寸待つて居れ、僕娘達を呼んで來るから。』  
娘達駆けて來た。吾々は二階に上つて行つた。暗い天井の中に誰れが眞先に入



つて行くか少時談合つて、さて一同静と踞んで待つて居た。

## 十一 お父さんの人となり

お父さんは前世紀の人であつた。さうして其の時代の青年に共通な、吾人には一寸解し難い武士氣質を有つて居た。で、現世紀の人を幾何か輕蔑むやうな風に見てゐた。其見解はお父さん自身の時代にあつて樂むことの出来た成功をば私たちがの時代に於ては樂むことも出来ねば、またその時代の權勢を今は振ふことも出来ぬといふ、苦痛の感を秘密に懷いてもゐたし、また内々自尊心も大きに手傳つたのである。お父さんの一生涯を通じて重なる欲望といへば、牌戲と婦人と此の二つであつた。一生の間には随分何百萬圓といふ金額を儲けもしたし、また何人といふ數限りもなく各階級な婦人と關係もした。

背のすらりとした、風采の立派な、そのくせ妙に刻み歩調の、肩を揺る習癖が

あつて、始終微笑んだやうな小さい眼付をしてゐる。大きな羅馬鼻の、無雜作に結んだ唇が少し歪んで、それが何處となく好かつた。發音が少し不完全なので、言葉は變に聞えた。頭髮は甚く禿げ込んで居た。如上がそもく、私の記憶に残る時分からのお父さんの風采であつた。此の風采の好いのを利用してお父さんは、幸福な人だといふ評判を取り、また實際それが爲めに幸福を得た。さうして凡ての階級凡ての境遇の人々に對して一様に快感を與へた。就中自分の方で悦ばしめやうと思ふ者に對しては特にさう仕向けた。

お父さんは凡て自分の行爲を如何いふやうにして行つたならば利益を得るか、それを了解でゐた。自分では嘗て最上級の社會の一員となつたことはなかつたが、常にその社會の人々または自分で平常尊敬を拂つてゐるやうな種々の人々と交際を結んでゐた。また他人の感情を悪くさせぬ程度に、相應に自信と威嚴とを保つて、世評を高める術も分つてゐた。何事に就けてももなかつたが、お父さんは創



見のある人であつた。さうして或る場合には此の創見を利器として、世才や金力の代りに用ゐた。此の世上にお父さんに取つて、これは不思議と思はれるものは一つもなかつた。華美な地位に居つたが、恰ど地位に生れついてゐた。また何人にも知れ渡つた一身上の暗黒面をば他人の羨むばかり巧みに彌縫して、自分から隔離し、それをほんの一寸した哀苦ぐらゐに見せる方法をも心得てゐた。

なか／＼鑑賞家で、便利と愉快とを供する物でさへあれば何物でも其等を利用する術をよく了解してゐた。その好尚がまた華美を手傳つた。お父さんの好尚の半分はお母さんとの關係から來、半分はお父さん自身の若い時代の伴侶との關係から來てゐた。其の連中に對しては、お父さんは内心餘り心地よく思つてはゐなかつたらしい。何故なれば自分獨は僅かに近衛大尉の豫備に留つてゐるのに、他の者は何れも皆上官に昇進してゐたからだ。一度軍隊に居つたものは誰れでもさうだが、お父さんも矢張りそれで、當世向きに身を飾ることは極く下手であつた。

でも服装は何時も新奇な綺麗なのを用ゐた。衣服は何時でも寛濶した輕いので、襦衣は最も綺麗な品を用ゐ、大きな袖口や襟圍を始終折返してゐた。さうしてそれがまたお父さんのすらりとした男らしい體格の、頭髮の禿げた、沈着いた、自信に富むらしい舉動にそつくり適つてゐた。感情の強い人で、少しの事で直に涙を流す。屢々聲を出して書籍など讀んで居る時、悲しい處になると、其の聲が慄へて涙が潤む。さうしてその方に氣を奪られて、書籍を落して了ふことがある。音樂も好きで、よくピアノを弾いて自分で種々な歌を唄つた。が、科學的の音樂は餘り好まなかつた。一般の世評に頓着なく、率直に、ビイトオベンの樂曲を聴くと眠くなつて欠伸が出る。其處になるとセメノフワ夫人の歌ふ『少女を覺すな』やタニウスカといふギブシイ人(もと印度より出で十四五世紀頃歐洲に入り、現時土耳其種)が歌ふ『獨りにあらぬ』ほど面白い歌を聴いたことがないと言つて居た。お父さんは、屢々善行をするので公衆から手放しがたく思はれるやうな風の人ではな



かつた。その癖自分でも、公衆からさう思はれるやうなのを何よりも善事と考へてゐた。お父さんが如何なる道徳上の自信を持つてゐたか私には分らぬ。一生涯それはく種々な欲望に充満てゐて、それが果して何れだけあるか、靜かに勘算へて見る暇もないくらゐであつた。さうして其の欲望を充すに少しも不足を感じなかつた。それくらゐ、まあ幸福な人であつた。

段々歳を取るにつれて、一般の事物に對する主義も見解も自から腹の中に定つて來た。がそれも單に實際的の立場からであつた。日常の行爲も生活の方法も、凡て幸福と快樂とを得られさへすれば、それで善い事と考へてゐた。で、誰れもまた其の通りにするものと思つて居た。談話の仕方が人を推服せしむるやうな話振りであつた。此性質がお父さんの、平常、主義に曲節の多いのを多少調子を高めたやうに私には見えた。お父さんは、同じ行動を或は愛嬌のある失錯のやうにも見せ、また下等人物のする鄙陋な事のやうにも見せかける手腕があつた。

十二 グリスカ

吾々は暗黒に包まれた。一同互に固着いて黙つて居た。グリスカは靜かな歩調で私たちの直ぐ後から遣つて來た。片手に棒を持ち、片手に銅の燭臺に脂蠟燭を挿して持つてゐる。一同呼吸を殺してゐた。

『南無ジイザス・クリストさま！ 南無聖母マリアさま！ 天父、天子、聖靈！』と始終是等の言葉を繰返してゐる人間に限つた種々な調節を附けて、肺の底まで空氣を吸込む拍子に言葉の端を消すやうに省略しながら、何度となくそれを反復して唱へた。

それから棒を隅の方に置いて、矢張りお題目を唱へながら寢床を探して、さて衣服を脱ぎ始めた。先づ古ぼけた黒い帯を解き、襦袢になつた南京織の上の襦衣を脱ぎ、それを丁寧に畳んで椅子の背後に置いた。その時彼れの容貌はもう平常



の如く躁急した馬鹿なやうな面ではなくなつて、反對に落着いた沈鬱な寧ろ威嚴のある容貌になつた。その舉動が思慮に富んで考へ深いやうであつた。

それから下衣一つになつて、寢床の上に静と坐り、四方に向つて十字の記號をし、顔を澁めて丹念に襯衣の下に着た鎖帷子を直した。暫時さうして其處に坐つて居たが、襯衣の諸處裂たのを氣にして探つて見て、さて起上つて、部屋の隅に種々の偶像を納めて安置してある御神龕と水平に燭臺を差上げ、絶えずお題目を唱へながら、其の御神龕の前で十字を切り、さうして蠟燭を側に倒した。それがポツ／＼と白い煙を噴いて消えた。

殆ど満月に近い月光が窓から爽かに射込んだ。其窓から遠方の森林が透いて見える。馬鹿にひよる長い白い容姿が、片側、蒼白い銀色の月光に照され、反對の片側は濃い蔭影を印してゐる。それが床だの壁だのに映つて、窓枠から來る影と一つになつて天井にまで届いてゐる。夜番が庭の方で銅板を叩く音が聞える。

グリスカは胸の上に大きな兩腕を十文字に組んで、頭を屈め、間斷なしに重い太息をしい／＼その偶像の前に黙つて突立つてゐたが、稍あつて此度は窮屈さうに膝づき、また祈禱を始めた。

最初は單に二三の言葉尻に抑揚を附けて、徐かに聞馴れたお題目を唱へてゐたが、やがて大きな聲で躍起になつて遣り出した。段々自分の文句を挿入れて、精一杯聲を張上げて何か言ふ。その言葉は滅茶苦茶だが、それが妙に人の心を感動せしむる。ありとある自分の施主（彼れは自分を欵待してくれるものを凡てさう呼んでゐた）の名を一々誦讀で祈禱をした。其の中にお母さんや私たちの名もあつた。また自分のことをも祈り、自分の重い罪を赦すやうに神さまに哀求め、『南無御神さま、私の敵をも赦して下さいませ！』と言つた。さうして唸聲と共に起上つて、同じやうな言葉を何度となく反復しながら、鎖帷子の重量をも厭はず床上に踞んだり起つたりしてゐた。それにつれて鎖が床を打つたばに、粗々しい



刺立つやうな音響を發する。

ワロヂアが私の足を厭といふほど抓つた。が、私は見向もしなかつた。片手で其處を唯擦りながら、小供心に不思議なやうな、哀れなやうな、さうして何となく尊いやうな氣がしながら、其の言つたり仕たりする事を一々注意して凝視めてゐた。

初め天井裏に入り込んだ時の歡樂と笑とに引更へて、私は慄へて滅入るやうな心地になつて來た。

グリスカは稍長時此の宗教的昂調の状態になつて、即席の祈禱の文句を唱へてゐた。さうして『南無大慈大悲』といふことを續けさまに數多たび反復した。その句を繰返す毎に語氣を取直し表情を更新めた。それから『何卒お赦し下さりませ、如何いたすかお教へ下さりませ、如何いたすかお教へ下さりませ！』と自分の言葉に對してさながら直ちに神の感應のあるを期待するやうな面持で言つて、

様々な悲げな唸聲を出して、それから膝をついて半分起ち、胸に兩腕を組んで靜つた。

私は頭を靜と戸口に窺けて呼吸を詰めてゐた。グリスカは靜としてゐた。重い太息がその胸から搾出る。涙が彼の盲目た眼の朦朧とした瞳孔に潤んで月光に輝かされた。

『御意のまに〜！』と何とも言ふにいな表情をして突然に叫んで前額を床板に叩き付けて、宛然赤ん坊のやうに、聲を揚げて咽泣いた。

その時から最早随分長く経つた。過去の様々の記憶は、大抵自分に取つて意味を失ひ、唯混雜した幻想のやうなものになつて了つた。巡禮のグリスカも最早ズツと以前にあの世へ旅立つた。が、彼れが私に與へたその印象、彼れによつて覺醒せしめられたその感情は依然として今日までも私の記憶から消え失せぬ。

あゝ偉大なる基督教徒グリスカよ、汝は神明の接近を感じるばかり、汝の信



仰は強かつた。汝の言葉は自然汝の唇より注ぎ出るばかり、汝の愛は旺盛であつた。汝は自己の判断を以てその言葉を虚飾しなかつた。如何に高大なる讃辭を汝は神に捧げたか、言ふべき言葉を有たぬ時に、汝は涙ながらに身を地上に投げ伏した！

それでも 그리스カに傾聴してゐた私の感興は、長くは續かなかつた。第一に私の好奇心が満足された。第二に長いこと一處に坐つて居たので足が棒のやうになつた。私は天井裏の暗黒の中で、私の直ぐ背後にヒソ／＼聞えてゐる普通の私語や、動靜に氣を奪られた。すると、誰れか暗中で私の手を捉つて『此の手は何方の？』と言つた。眞の暗黒であつた。が、私は手觸りと私の耳の眞上の所でした聲とによつて、直にそれがカテンカだと分つた。

彼女の手を捉むことの出来たのは、全く私に思も掛けぬことであつた。袖口が丁度また臂の所までたくし上げてあつた。私は其れをすぐ唇に持つて行つた。

カテンカは明かに流石に、これに驚いたと見えて静と手を退いた。其の機會に、間悪く、暗中に立て、あつた破れ椅子に持つて行つて手を打ちあてた。 그리스カは祈禱を繰返へしながら、頭を擡げて靜かに回視して、隅々に向つて一々十字を切つた。吾々は密々私語きながら、喧騒い音をさせて天井裏から走り出た。

十三

ナタリヤ・サビスチナ

前世紀の殆ど半頃のこと。むつちり肥つて赤い頬をした、裸足のまんまであるが可愛いナタスチカ（ナタスチカといへば、我邦にてお花と呼び棄て又花ちゃんと呼び）といふ女兒が襤褸の衣物を着てカバロフカの領村で、庭を走り回つて居た。其の娘の父親のサフワといふ者が矢張り以前奉公してゐた關係もあり、旁々其男の請求を聽いて私の母方のお祖父さんが、始めて引上げてお祖母さんの侍女にして使つた。ナタスチカは侍女である時分、その氣立が温順うて勤め振りの實鄭なので評判で



あつた。お母さんが生れた時に嫁母が入用ので、其の役をナタスチカに仰付けた。其役もまた能く働いて、丁寧で、お姫さまを大切にするので、賞辭を頂だいた上に賞與までも貰つた。

處がその頃恰ど若い血氣盛りの料理番のフオカが、職務向きの都合でナタリヤとは屢く顔を合すところがあるので、自然フオカの粉塗れの頭や氣取つた長襪や扣子などが、ついナタリヤの武骨な、でも優しい情を動した。で、ナタリヤ自分からお祖父さんの前に出て、フオカと夫婦になるやうに許を請ふた。お祖父さんは亡恩だと言つて、ナタリヤに暇を遣り罰に處して、可哀さうに人里離れた片田舎の家畜場に放逐つて了つた。が、半年も経つ内に誰れも其代りを務める者がないので、また赦されて以前の役に戻つた。追放から赦されて歸つた時、お祖父さんの面前に出て足下に身を投伏して、是迄の不心得は誓つて心を更めるから、其の事は忘れて、以前の如く何處までも恩顧で戴くやうに哀願つた。さうして其の言葉を

彼女は守つた。

其の日からナタスチカを改めてナタリヤ・サビスチナとし、一人前の婦人になり、帽子を冠ることを許された。で、一生涯満身の愛情をばお姫さまに捧げて了つた。

その後女執事に取立てられて、ナタリヤは貯庫の鍵を預ることになつて、凡て衣類から其の他の物品に至るまで一切家事を委された。ナタリヤは此の新たな職掌に對しても、また同じやうに忠實に親切に勤めた。彼女は始終領地に住んでゐたが、地所の荒廢したり、疲弊したり、盜賊のあつたりする原因を種々に研究して、女の力に出来るだけの方法を盡して、其等の弊害を除かうと努めた。

お母さんが結婚した時に、何とかしてナタリヤ・サビスチナが、廿年間の功勞やら愛情やらに對し感謝の意を表はしたいと思つて、お母さんはナタリヤを傍に呼び寄せ、ありたけの愛情と恩義とに籠つた、それはく優しい言葉を添へて捺印



した一枚の證書を渡した。それにはナタリヤ・サビスチナが自由民になつたことを宣言してあつた。さうして婆が今後も従來の通りに自家に續けて勤めてゐてもなくても、永久に三百留の年金を給することを言つて聞かした。ナタリヤは黙つて始終を聞いて居つたが、やがて其の證書を自分の手に受取つて、氣に入らなうに其れを見て、唇の中で何かブツ／＼言つて、背後の戸をガタピシ言はせながら其室を飛出した。何故其様な舉動をするのか原因が解らないので、お母さんは暫時経つてからナタリヤの部屋に行つて見ると、ナタリヤは自分の箆筒の前に坐つて、手巾を指に捲付けて涙を一杯溜めて、寸断／＼にして其處等中散かした、其の放釋證書の紙片を怨めしうに凝乎と見詰めて居た。

『おや何うおしだえ、まあ婆は？』とお母さんはナタリヤの手を静と捉つて問いた。

『あら姫さま、何もしや致しませんわ……私は此の家を放逐されましたのが、寧ろた。』

を怨めしうございます。宜でございます、私は……私は参ります。』とさも懐かしさうに言つた。

さうしてお母さんの手を振り離して、漸う／＼に涙を抑へつ、部屋を出て行かうとした。お母さんはそれを引留めて、抱き締め、さうして二人共泣きに泣いた。

私に物情付く時分からナタリヤ・サビスチナの事も、また其の寵愛の深かつた事も、よく記憶には留つてゐたが、其様な事の價値は今になつて、始めて浸々と味ふとが出来るやうに思はれる。――併しながら其の頃は其の老婦が、如何ほど變つた不思議な人間であつたか、其様な事は少しも考へて見る氣にならなかつた。彼女は唯無口であつたのみならず、また決して吾が身の上の事を考へることもしなかつた。彼女の一生涯は愛と犠牲とであつた。私は吾々に對する彼女の優しい無我の愛に慣れて、さうでない場合を苟且にも想像しなかつた。吾等は彼女に對して少しも感謝をしなかつた。さうして彼女は幸福であるか、また彼女はそれで満足



して居るのか、と考へて見もしなかつた。

時々私は止むを得ぬ用事に託けて、課業中に婆の部屋に駈出して行つて、婆の居る前をも構はず大きな甕で眠む。婆は始終何か多忙さうにして居つた。縫物をして居るか、編物をして居るか、さもなければ部屋に充満になつた箆笥に向つて居る。或はリボンの尺を取つて居る。さうしながらも一々私が言ふ戯談の對手になつて『僕今に大將になつたら、吃驚するやうな綺麗な美婦をお嫁に貰つて、さうして自分で栗毛の馬を買ふんだ、硝子の家を建てるんだ、それからカール・イヴニイツチの親類を皆なサキソニイ(獨逸)から引取つてやるんだ。』此様なことを言ふと婆は『え、さうく。』と言ふ。

私が起きて出て行かうとすると、婆は大抵毎時一つの青い函を開けて——今でも私は憶えて居る。其の蓋の内側には騎兵の繪だの、香油の箱に貼いてゐた繪だの、ワロチアの描いた繪などが張つてあつた——其の中から線香を一本取出し

て、火を點し、其れを揮廻しながら、

『此れは、若様、線香でございます。お亡くなりなされた貴下のお祖父さまが南無阿彌陀佛——土耳其戦争にお出でなされた時、お持歸りになつたのでございませう。此れはそのお遺品でございます。』と太息を吐いて言つた。

其室に充満に並べてある箆笥の中には、何でも大概の物品が藏つて有つた。何が入用する時でも常に『ナタリヤに聞いて見やう。』と斯う言つた。實際婆は何時でも少し探してゐるが、直ぐ何でも此方の言ふ物品を見出してくれ『私が藏つて置いて宜うございました。』と言つた。其等の箆笥や函の中には幾千といふ種々な品物が入れてあつた。が、家中の者が婆の他には誰れも何が入れてあるのか知りもせねば、また知らうともしなかつた。

一度私は婆と喧嘩をしたことがあつた。それは斯ういふ譯である。晝飯の時私が麥酒を自分で注がうとして、つい酒壇を取落して卓掛に瀉した。



するとお母さんが『ナタリヤをお呼び、婆が丹念してゐるのだから』と言つた。やがて婆が入つて来て、私が溢した水溜を見て頭振を振つた。するとお母さんが婆の耳に何か私語いた。さうして婆は指で私を打つ眞似をして出て行つた。晝飯が済んで私は好い氣嫌になつて、何の氣なく座敷の方にとん／＼跳廻りながら行くと、出抜にナタリヤが戸の背後から飛んで出て、卓掛を手に持つたまゝ私を捉へた。私は一生懸命に放さうと蹴いたが、婆は容赦なく『卓掛を汚しては不可ません、卓掛を汚してはいけません！』と怒鳴りながら其の濡れた處で私の顔をサツと塗つた。私もひどく逆上として大きな聲で怒鳴り返した。

『何だ！ ナタリヤ・サビスチナが。ナタリヤの土百姓め、予を捉へてお前だなんて、予を小僧兒かなんぞのやうに。濡れた卓掛を以つて予の顔を打つとは！ 怪しからん！』と室の中を彼方此方しながら、涙を呑込んで獨語言つた。

ナタリヤは私が憤怒つて太息を吐いて居るのを見て、直ちに駈けて行つた。其

の後で自分は、甚い無禮な事をするあのナタリヤの奴に、何うして仇を取てくれやうかと考へながら歩き廻つて居つた。

すると間もなくナタリヤが戻つて来て、恐る／＼私の傍に寄り、此度は私を賺しかけた。

『もう其れで澤山、もう泣いちゃ好けません。何卒勘忍して下さいまし、婆が大きに悪うございました。私が馬鹿でございました。貴下は私を勘忍して下さいませう、ねえ。それ、此處に貴下に此様な品がございます。』と、手巾の下から赤い紙で出来た角笛を出した。其の中に燒糖のお菓子や二つと葡萄が一房入つてゐた。それを慄ふ手付で私にくれた。私は此の好いお婆さんを面と向つて見る元氣がなかつた。私は側方を向いて其れをそつと自分の手に取つた。涙が尙ほと出た。

## 十四 離 別



今まで言つて来たことのあつた翌日の十二時に馬車が二臺表口に据ゑられた。  
 ニコライはもう整然と旅装をして居た。股引を長靴の口まで縫揚げて、右の上  
 衣を帯で固く引締めて居た。彼は馬車の傍に立つて、外套だの椅子蒲團だのを席  
 の下に積込んで居た。すると其の積重が餘り高過ぎたと見えて、椅子蒲團の上に  
 乗つて、どしどし踏付けて平にした。『ニコライさん、御厄介だが、此の檀那の大  
 きい匣が何處か入らないだらうか』とミカイ・イワニツチといふお父さんの侍  
 僕が喘々いひながら、も一つの馬車から覗いて、  
 『此方は狭いから。』と問ふた。  
 『そんならそれと前にさう言へば好かつた。』とニコライは怒るやうに言つて、さ  
 つ／＼と馬車の床上に力任せに荷物を投込みながら、『あゝ、眼が眩むやうだ。此處  
 へ其の匣を持つて來な！』と言つて、頭巾を脱つて湯氣の立つ額から大きな滴に  
 なつて流れる發汗を拂いた。

上衣だの、土耳其服だの、襯衣のまゝだの裸頭だの、種々な身装をした下男や、  
 縞の下袴を着けたり縞の上衣を着たりした小供を抱いた婦女だの、裸足のまゝの  
 小供だの、多勢玄關前の踏段の周圍に立つて珍らしさうに馬車を視て何か一同で  
 頻に話してゐる。冬帽を冠つて袖無しを着た、もう腰の屈つた老人の驛夫が一  
 人、幌馬車の舵棒を持つて、それを前後に動かして氣を着けて調子を見てゐる。  
 も一人赤い綿の肩接ぎを挿れた女の白襯衣一枚のまんまの、性質の好さうな若  
 い男が、耳の上に引被けてゐた黒い羊毛の頭巾を一寸脱いで、茶褐色の捲毛を搔  
 いて、此度はそれを他かの耳の上にまた持つて行た。さうして袖無しを馭者臺の  
 上に置いて、手綱も其處に投げ、バチ／＼組紐の管を鳴らしながら、自分の長靴  
 を視回はしたり、他の馬車に油を差してゐる馭者を呆然立つて眺めてゐる。馭者  
 の一人は自分の爲ることだけ済まして、背伸をしながらノソ／＼歩いてゐる。も  
 一人の方は車輪の上に屈み掛つて注意して心棒や輪罩に油を差してゐる。油が衣



服に滴れないやうに、下から圓を描く手付をして塗つても見る。喪失した斑色の驛馬が幾頭も垣の處に立つて、尾をふつて蠅を拂つて居る。其の中には、虜毛の足を踏張つて眼を瞑つて假睡をしてゐるものもある。また退屈まぎれに鼻尖で搔合してゐるものもある。また玄關脇に青黒く繁生つて齒朶の莖や葉を噛んで居るものもある。獵犬が二三匹日向に偃臥つて氣息さうに太息をして居る。他の犬は馬車の下の日蔭に行つて、心棒の周圍の脂を舐て居る。全體の空氣が塵埃の混つた霞煙のやうなもので充たされて、地平線の邊が灰色が、つた薄紫になつて居る。が、蒼空には一點の雲翳もない。強い西風が街道や野原に塵埃柱を卷揚げて、庭園の高い菩提樹や白楊の樹の頂上を吹き曲げて黄葉んだ落葉をハラ／＼と吹き散らかした。私は窓に寄つて腰を掛け、待遠しさうに準備の出来るのを待つて居た。

いよいよ最後の訣別をする爲に、一同客間の大卓の周圍に寄集うた時に、私は

目前に悲しい時刻が差迫つて居るとは思はれなかつた。それよりも寧ろ詰まらぬ細かい考が私の腦裡に往來した。私は自分で自分に問ふて見た。何方の驛夫が何方の馬車を馭すであらうか、また誰がお父さんと一所に乗るだらうか、誰れがカール・イヴニイチと乗るであらうか、さうして何故また斯う袷卷や長い綿入れの外套で、透間もなく私の全身を包まねばならぬのだらうか？

『私は一體其様な可弱いのか、自分はまさか凍えやしまし。なるだけさつ、つと一同が訣別を済して了や好いになあ！ さうして少しも早く馬車に乗つて驅出したら。』

『何方に若様がたの衣服の目録を渡して置きましょう？』とナタリヤ・サビスチナが涙を一杯溜めて、書附を持つて入つて来てお母さんに問ねた。

『ニコライに渡してお置き。そして小供達にお別れをしても一度戻つてお出で。』老婆は何か言ひかけたが、不意と止めて手布を以つて顔を隠した。さうして何



かいふ意で、片掌を振つて室を出て行つた。

其の舉動を見て私は胸が壓迫けるやうに痛かつた。が、其感情も少しも早く出立たい一心に紛らされて了つた。さうして何氣なくお父さんとお母さんとの會話を聞いて居た。それは雙方にも餘り氣の乗らなさうな、何を買つて置かねばならぬとか、何々夫人に何う言つて置かうかとか、此度の旅行が何うだとか、といふやうなことであつた。

するとフオカが入つて来て、國の所に突立つて例の『晝飯が出来ました』といふのと相も變らぬ調子を以て『馬車の準備が出来ました。』と知らせた。報知を聞いてお母さんの顔が、さも思ひ掛けない事でも聞いたやうに、蒼くなつて慄へたのが私の眼に入つた。

フオカに命じて室の戸を皆閉めた。私は一同が凡て他人に腹の中を隠さうとするのに、ひどく興を惹かされた。

一同腰を掛けた。フオカもまた其處にあつた椅子の端に掛けた。するとフオカが坐ると殆ど同時に、一方の戸がぎいと鳴つた。一同見回した。ナタリヤ・サビスチナが急いで入つて来て、俯向いたまゝ、フオカと一つ椅子に忍ぶやうにして腰を下した。私は今でも、フオカの禿頭や、皺の寄つた、薄ぼんやりした顔や、頭巾の下から灰色の頭髮の見えた、親切らしい、もう腰の曲つた體など見るやうに思はれる。で、二人は一つ椅子に並んで掛けて、兩方で互に手持不沙汰にしてゐた。

私は其様な事には無頓着で、唯待遠しいのでムツクして居た。戸を閉め切つて室内に十秒ほどさうして居た間が、私には一時間も費つたやうに思はれた。遂に一同起立して銘々に十字を切つて立分れた。お父さんはお母さんを抱いて幾度となく接吻をした。

『大丈夫、これが一生の離別と云ふではなしさ。』とお父さんはお母さんを慰める



やうに言つた。  
 『それでも離別といへば好うございませぬもの。』とお母さんは涙に慄へる聲で言つた。

私は其の聲を聞き、震へて居る唇や涙に充た眼を見た時、もう何も斯も忘れて了つて、凡ての物が悲しげな哀れな、恐しいやうに思はれて、肝心のお母さんには訣別も何にも言ふのを俟たず、寧ろ早く其處を逃げ出してしまひたいやうな氣がした。

お母さんはもう何遍もワロヂアに接吻したり、十字を切つたりしたから、此度は私の番だらうと思つて、其方に寄つて行つた。が、お母さんは何時までもワロヂアの祝福を禱つて、自身の胸に彼れを抱めて居た。で、私は最後に漸くお母さんに縋付いて、悲しい一心に泣いた。

いよく私たちが馬車に乗らうとして出て行くと、怠屈さうに待つて居た數多

の奴僕が、訣別を述べやうとして前座敷に寄つて來た。彼等の『何卒そのお手を一寸。』と言つたり、私達の肩の周圍を仰山らしく接吻したり、又彼等の頭の脂臭い臭をさせてゐるのなどが、怒り易い人によくある、苦々しいといふやうな感情を起さしめた。一圖に其様な感情に左右せられて、老婆が涙に濡れて私に訣別を陳べてくれた時にも、私は甚だ冷やかに、唯其の頭巾に接吻したゞけであつた。

不思議に、私は今でも其の時の其等の奴僕の顔を、細微い點まで一々想浮べる事が出来る。が、お母さんの容貌風采は今全く記憶を逸して了つた。それは多分其の時私にお母さんを、正面に觀る勇氣が出なかつたからであらう。若し其の時私がお母さんの顔を構はず正面に見たならば、二人の悲しさが募つて、如何な思ひをしなければならぬか、それがまた心配であつたのだ。

私は眞先きに馬車に乗つて、投げるやうに背褥に身を凭せた。背後が高かつたから、隠れて何も見えなかつたけれど、ある本能で以つてお母さんがまだ其處に



居ることが分つた。

『もう一遍お母さんを見やうか、見まいか？ うむ最後の見收めに、さうだ！』と獨言を言つて、玄關の方に向いて馬車から仰出た。其の時お母さんも同じ思ひで、馬車の向側に廻つて来て私の名を呼んだ。私は背後でお母さんの聲がするのので其の方に振返つた。が、餘り狼狽して、振返つたので其の機に厭といふほどお母さんの頭と鉢合せを仕た。お母さんは愁はしさうに微笑として、最後に、長いこと認か私を接吻した。

五六間乗出してから、私は思ひ切つてお母さんの方を見た。微風がその頭に飾り付けた青い布片を吹いてゐる。お母さんは頭を屈め兩手で顔を蔽ひながら、フオカに扶けられて徐々玄關に入つて行く所であつた。

お父さんは私の傍に腰を掛けて黙つて居た。私は何かで咽喉を壓迫られるやうに涙に堰けて、息が止りはせぬかと思ふほどであつた。街道へ出離れた時、誰か

露臺で白い手巾を振つて居るのが見えた。私も振つた。それが私の心を多少か静めた。私は泣き續けた。が、涙は私の多感なことを證するのだといふ考へが私に愉快と慰藉とを與へた。

一露里ばかりも行てから一層氣も落着いて、何にかぎらず眼に入る手近な物を眺めた。私の近くに居る馬の後部を見た。此の斑馬が尾を何ういふ具合に振るか、何ういふやうに足と足を踏み交はすか、何ういふやうに馱者の鞭が馬の尻に當るか、さうすると如何なに馬が足を一所にして跳ね出すか、此様なことを氣を着けて見てゐた。また馬具が何ういふやうに馬の背で躍るか、馬鈴が其の拍子に何様なに鳴るか。見てゐる中に馬具の尻尾の邊が一面泡で蔽はれた。振返つて周圍を観廻すと、熟した黒麥の野がウネ／＼と波を立て、居る。暗黒い荒寥たる原野の其處此處には鋤だの百姓だの小馬を連れた牧馬だのが見える。涙の痕はまだ乾いてゐなかつたけれど、恐らくそのまゝ生別れとなつたお母さんのことは其の時



最早忘れてゐた。が、何を懐うにつけても直ぐお母さんの事が偲ばれる。私はふと其の前日榛樹の小徑で見出した木の莖のことを思ひ出し、それからリユウボチカとカテンカと、何方が其れを探るかと言つて争つたことに想及した。それからまた二人が私達と別れるので、如何に泣いたかといふことを憶ふた。私は一同の事を想ふて悲しかった。ナタリヤサビスチナのこと悲しかった。榛の樹の小徑や、フオカのこと悲しかった。私はあの意地の悪いミイミのことさへ悲しかった。凡ての物が——凡ての物が悲しかった！が、哀れなお母さんのことは何なにあつたらう？ 涙がまた眼に一杯になつた。けれども、また直ぐ止んだ。

十五 幼 年 時

もう二度と歸らぬ楽しいく幼な時！ 如何して愛せず想ひ出さずに居られや

う。其の頃の事を想へば精神が霽々と浮き立つて、無上の歡樂の泉となる。走り遊びも飽いた。高椅子にかゝつて茶卓に向つて、砂糖の入つた牛乳を飲んだのも最早先刻、睡氣がして臉が閉ぢ合ふ。が、其處に坐つたまゝ、静と聽いて居る。如何して聞かずに居られやう？ お母さんが誰かと話して居る。それはく好い嫺雅しい音聲だ。其の音聲だけでも如何に私の胸に應へやう。寢ぼけて朦朧した眼で、お母さんの顔を眺めて居ると、顔が忽ち小さく小さくなつて、卸ぐらゐにしか見えない。が、矢張り歴然と見えて居る。お母さんが此方を見て微笑して居るのが見える。私はお母さんが其様な小さくなつて居る所を見るのが好きだ。尙ほ眼を細くすると、お母さんが、よく瞳に映つて見える小坊主ぐらゐになる。が、つい私が身體を動かしたので、幻影は消えて了つた。眼を瞑つて身を擦つて、も一度見やうとしても、何うしても駄目だ。起ち上つて、脚を曲げ込んで、安樂椅子に心地よく乗直す。



すると、お母さんが、

『ニコリンカ、おまへまた眠つて了ふよ、二階に行つてお休み。』と言ふ。

『でもまだ寝たかないんですもの。』と言ひく、心持の好い朦朧した妄想がふらふら頭に湧いて、小供の癖として直ぐに眠氣がさして、間もなく何もかも覺えなくなつて、他の者が起すまでは眠つて居る。夢の中にも誰かの柔い手が自分に觸る心地がする。手ざはりですぐそれと知つて、睡りながら思はず其の手を執つて、ひたと唇に當てる。

最早誰れも彼も行つて了つて、座敷には唯た蠟燭が一本燈つてゐる。お母さんは私を起さうと言つて、私が眠つて居る椅子に自分もかけて、それはく柔い手で私の頭髪を撫でる。耳の處で懐かしい聞馴れた聲がする。

『坊や、お起きよ、最早休むんだよ。』

お母さんは傍で人が冷淡に見て居たつて構はぬ。少しも遠慮せず私に満身の

愛情を注ぐ。私は静として、その手をますます熱心に接吻する。

『お起きよ、坊や。』

お母さんは片手で私の頸筋を捉へ、繊細な指で私を揺つたり、擦つたりする。其の手ざはり、聲、香水の薫、眠りながらもそれと知つて、自分はいきなり跳ね起きて、両手でお母さんの頸玉にかかりついて、自分の頭をお母さんの胸元に押し付け溜息を吐いて、

『お、大事なくお母さん、私は如何にお母さんが好きでせう！』

するとお母さんは悲しさうな、人を蕩けさすやうな微笑ひやうをして、両手で私の頭を轟と抱いて、額に接吻をして膝に載せ、

『坊は其様なにお母さんが愛しいの？』

暫く黙つて、また『坊は始終其様なに私を可愛がつてお呉れ、お忘れでないよ。若しお母さんが亡なつても、忘れはしまいね。え、忘れないだらうね、ニコリン



カや。』と言つて尙ほ優しく私を接吻した。

『いや、お母さん其様なことを言つては、いや。』と叫んで、またお母さんの膝を接吻する。涙が湧くやうに流れる。――愛と歡喜との涙が。

それから二階に上つて、綿の入つた寝衣を着て、聖像の前に立つて『お、神さま、何卒お父さんお母さんをお救け下さい。』と祈る時、如何な神秘的な感が起る？戀しいお母さんに伴いて、覺束なくも私が仕習つた祈禱をして居ると、お母さんに對する愛と、神さまに對する愛とが、不思議な形狀になつて一つの感情に融け會ふ。祈禱が濟むと、快い、晴やかな、浮き立つ氣持になつて蒲團に纏まる。夢から夢を見る。が、何様な夢か、口では言へぬが、皆な愛と希望と幸福に充ちたものばかり。ひよつとすると其様な時カール・イヴニッチの不幸――眞實に不幸といつたら此の人ばかり――を想ひ起し、悲しく、哀れに思つて、涙がほろ／＼溢れて『神さま、どうぞあの人をお救け下さい、どうぞあの人を救け、あの人の悲を

慰める力を私にお與へ下さい。私はあの人の爲になら如何なる事をも犠牲にすることを厭ひませぬ。』と思ふ。それから氣に入りの磁器の玩具――犬や兎やの――を鳥の羽の枕の下にさし込んで、此處に入れて置いたら其等が如何な暖かきや、からうと思ふと嬉しい。それからまた、神さまが一同に幸福を與へて下さることや、皆が満足であることや、また明日も遊歩する爲に天氣が好いやうになど、心の中を祈る。そして一つ寢返りをして、其のあとは夢と思想とが絡合つて、顔は涙に濡れたまんま、何時の間にかすやくと靜かに寢入つて了ふ。

あゝ、幼い頃の彼の清らかさ、氣輕さ、愛の切なさ、信仰の強さ、是等はもう二度とは復らぬものであらうか。此の世に要求と言つたら、無邪氣な愉快と、愛に對する無限の渴仰と、此の二つより外になかつた、あの幼な時ぐらゐ楽しい時があらうか。

其等の燃えるやうな切なる祈禱は今何處へ行つた？ 無上の恩恵たる是等の純



潔なる感情の涙は何處に行つた？ 其頃は安樂の天使が微笑を湛へて飛んで来て、其等の涙を拭ひ去り、清淨無垢なる無邪氣の空想に、甘美なる幻影を滴らしたものであつた。

生涯の艱難が吾が胸に沈痛なる痕跡を残したが爲に、其等の清い涙も歡びも永へに私を去つて了つたのであるか。唯その記憶ばかり徒に何時までもくゞ残るのであらうか。

## 十六 コルナコフ公爵夫人

私達がモスコウに移轉つてから一ヶ月ばかりして、お祖母さんの名附日の祝祭があつた。その日は皆が銘々に工夫を凝らした物をお祖母さんに贈るので、カー・ル・イヴニツイチは手製の美しい箱、ワロヂアは此の頃繪畫の教師に教はつて始めて描いた鉛筆畫、私はまた生意氣にも内々非常に苦心をして作つた、お祖母さん

を壽ぐ詩を贈つた。私達はカールに連れられてお祖母さんの客座敷に行き、三人順々に恭しくそれをお祖母さんの前に差出した。お父さんやお祖母さんの祈禱をするために来て居た、祭司も其處で見居た。私が覺束なく生れて始めて作つた詩を、一同の前で讀まれた時如何に恥かしかつたらう！ 私は青くなつたり赤くなつたり、熱い汗と冷い汗とが一所に出た。お祖母さんは大變な上氣嫌で、それを他の贈物と一つに傍の卓の上に整然と並べて微笑して見てゐた。すると、

『コルナコフ公爵夫人でございませう。』と侍者が取次いだ。

お祖母さんは凝乎と其等の品に見入つて返事をしない。

『お通し申しませうか。』と侍者が聞直した。

『お通し申せ。』とお祖母さんは後の腕椅子に凭れながら言つた。

公爵夫人といふは四十五六の、灰色が、つた青い厭な眼をした、身體の小作りな、苦い涸渴びたやうな弱々しい婦人で、その顔容と、珍らしく美しい引締つた



口元との不釣合が、際立つて眼に着いた。駄鳥の羽毛を飾つた天鵞絨の帽子の下から、艶かな紅い頭髮が見えて居た。その眉毛や睫毛が、不健康らしい顔色との配合で、一層薄く紅いやうに見えた。此様な容貌であるにも係らず、舉動の飽くまで悠然とした、手の可愛い、愛嬌には乏しいが、凡ての風采が何方かといへば、高等な氣性の勝つた人のやうであつた。

夫人は好く話をした。その明瞭した發音の具合が、平生一人も何とも言はないのに、宛も誰かと議論でもするやうな口調で、話をする種類の人と思はれた。で、聲を高くしたり、低くしたりするかと思へば、忽ち激昂した調子で話し出す。さうして會話の對手になつても居らぬ傍の者を、さながら自分の意見に賛成を求めやうとするやうに、ジロ／＼見詰める。

夫人はお祖母さんの手を接吻したり、佛蘭西語(露西亞の此の時代の上流社會は特で絶えず伯母さん／＼と、馴々しげに言つて居たにも係らず、お祖母さんは夫人にさ

うされるのを、餘り嬉しく思つては居らなさうに私には見えた。

それから夫人は夫のミカイロ公爵が、自身で是非慶賀に上りたいと言つてゐながら、來るとの出来なかつた理由を話してゐる間も、お祖母さんは額に八の字を寄せて、變な態で聽いてゐたが、夫人が佛蘭西語で話すのに、此方はわざと露西亞語で懶さうに「なにもう、貴女にさうして氣に掛けて戴くのさへ仕合せでございませう、貴女。公爵がわざ／＼お出で下さらなくなつて、それはもう入らぬこと。平常御用の多いお身體だから。それに此様な老婦の處にお出でなすつたつて、何で面白いことがあるものですか、貴女。」と言つて、夫人がそれにつけて何か言ふ間も待たず、直ぐ話頭を轉じて、

『お小さいのは如何でございますか？ 相變らずですか。』

『難有うございませう、伯母さん。何れも無事で大きくなつてゐます。勉強をいたしましたり、惡戯もいたしたり。取分けてエチイネが、貴女。彼れが一番大き



いのでございますが、段々悪戯が募りまして、私達の手になぞ最早始末になりはいたしません。でも貴女、なか／＼賢い奴でございませぬ——希望のある子でございませぬ。まあ貴郎、お聞き下さいませ。」と、夫人は此度は専らお父さんの方に向いて話しかけた。お祖母さんは、他の子供のとなどに興味を有たないので、それよりも自分の孫の自慢をしたくつて、さも／＼大切さうに函の中から、私の詩を書いた紙を取上げて披かうとした。「まあお聞き下さいませ、貴郎、先日も斯うでございませぬよ。」と夫人はお父さんの方に屈み掛つて、例の激昂した調子で何か話した。私は氣に止めて聞きもしなかつたが、夫人は物語を語り止めて、さてハ、と笑ひ、何か穿鑿するやうにお父さんの顔を見詰めた。「本當にまあ、ませた兒ぢやあございませぬか、貴郎。打つてやつても好いのですが、餘り悪戯が器用で面白いものですから、つい腹も立てられないで、其の儘にいたしましたやうな次第で。」と言つて、夫人は眼をお祖母さんに据ゑて、微笑んだまゝ黙つてゐた。

「貴女はまあ、お子達をお打なさるの？」と、打つといふ言葉に強味を持つて、お祖母さんは意味有り氣に顔を上げながら尋ねた。「え、伯母さん。」と、夫人は暫とお父さんを見ながら、人の好さうな調子で答へた。「私は其の點に就いて、貴女の御意見も承知して居ますわ。でも場合に依つては伯母さんとは一致しないことがあつても、それは許して戴かなくつては。幾許自分でも思慮があつたり、書で讀んで知つて居たり、また此の問題に就いて幾許も他人様の意見を承つたこともありますけれど、私が實地の經驗では、小供を脅嚇して教育るといふとも、全く止むを得ないと覺りました。恐がらすといふとは、小供を立派に仕立てる爲には全く必要なことでございます。さうぢやございませぬか、貴郎。貴郎は何う思召す？ 小供に鞭より恐いものがございませぬか。」斯う言つて、夫人は探ぐるやうに私達の方を眺めた。私は白狀する、其の時何だが居心が悪かつた。



『伯母さんが何と仰有つても、まだ貴女、小供が十二や三では——假令十四にしたつて、ほんのまだ子供ですもの——でも女の兒はまた全く別ですが。』  
 『自分は何たる幸福なことであらう。此の私が公爵夫人の子供でなくつて。』と獨りでおもつた。

『え、く左様でござんすとも、それが結構でございますよ。』とお祖母さんは一旦披げた私の詩をまた疊んで、此様なものはとても夫人には分るまいとでも考へたらしく、それを元の函の中に藏ひながら言つた。『それが結構でございます。でも何でございますか、そんなことをなさつて、貴女、お子達の感情が、それぢや益々荒くおんななさりや致しませんかな。』

で、此れには夫人も流石に返答を仕兼ると思つたか、お祖母さんはその會話を止めにしやうとして、

『尤も、それはもう皆様の御随意になさる権利があるから。』と言ひ足した。

夫人は何とも言はなかつたが、自身では道理は道理として、尊敬すべき地位に

在る個人には、其様な妙な偏見ぐらゐる少々大目に見ても好い、といふ意見であることを解らすやうに謙遜らしう微笑んだ。

『どれまあお孫兒さんと、お近付さして頂きませう。』と私達を見て、謹ましやかに微笑みながら言つた。

吾々は起つて夫人の顔を見詰めたまんま、さて近付になつた證據に何うしたら好いか分らなかつた。

『夫人の手を接吻しなさい。』お父さんが教へた。

『何卒以後此の伯母さんを可愛がつて下さいましな。』と夫人は、ワロヂアの頭髮を接吻しながら『私はほんの遠縁の伯母に當るのですが、血縁よりか寧そお朋友の關係を主にいたしてねえ。』と辭は重に、お祖母さんの方に向けながら言つたが、お祖母さんはまだ十分夫人に打融けなかつた。で、



『あれまあ！ 貴女としたことが、今更其様なことを繰返へして。』  
お父さんはワロヂアを指して、

『此方は私の世間的の後継者になるのです。』と言ひ、『そして此の方は詩人です。』  
と附加した。其の時恰度私は、夫人の乾涸びた小さい手を接吻しながら眼に見る  
やうに、顯然とその手が鞭を持つてゐて、其の鞭の下には腰掛があつて、とそれ  
からそれへ想像して居つた。

『何方が？』と夫人は、手で私を引留めるやうにして尋ねた。

『此の頭に總の着いた小坊頭が』とお父さんは、快よく微笑みながら私を指した。

『私の總が何にも關係した事ではないに。話す事は幾許もあるではないか』と獨  
り想つて、隅の方に退いた。

私は元來『美』と云ふことに就いて、不思議に變つた觀念を持つて居た。

私はカール・イヴニッチを世界中で、一番佳い男子だと考へたことさへあつた。

が、自分では私が醜男子だといふことを能く知つて居た。此點は少しも間違ひは  
なかつた。それゆゑ私は自分の男振を、比喩に用ゐられるのが甚く氣に障つた。

一度次のやうなことがあつたのを能く記憶して居る。——それは、私が六歳の時  
であつたと思ふ——晝飯の時一同で私の顔の棚卸しをして居つた。するとお母さ  
んは、私の顔に何處か美しい點を見出さうとして居たが、私の眼が聰明さうで、笑  
ふ所に愛嬌があると言つた。が、畢竟厭味のないといふのがお父さんの意見で、  
また實際眼に見えた所がさうであつたから、お母さんも遂に其れに服した。それ  
から御飯が済んで、お母さんにお辭儀をして起たうとすると、お母さんは私の頬を  
些つと突いて、

『お聞き、ニコリンカや、誰も顔では、お前を可愛がつては呉れるものはないか  
ら、お前はね、精出して良い賢い兒になるやうにしなければ可けませんよ。』と言  
つた。是等の言葉は常に私が綺麗でないといふとを、自信せしめたばかりではな



い。また屹度その良い賢い兒にならうと決心せしめた。

此の覺悟があつたにも係らず、そのために屢々失望を感じたことがあつた。私は斯ういふことを思つた。私のやうなこんな鼻の平板な、唇の厚い、小さい灰色の眼をした人間には、現世の幸福といふものはありはしないであらう。で、神様が奇蹟を行つて、私を美男子にしてくれるやうに、さうすれば今現に有つてゐるの、も又將來有ち得る凡ての物を、美しい顔の代に差出しても可いと内々願つた。

### 十七 イワン・イワニッチ公爵

公爵夫人が私の詩を聴いて、作者を非常に賞めそやすと、お祖母さんは始めて氣嫌を好くして、佛蘭西語で口を利くやうになり、妙に改つた切口上を使ふのを止めた。そして晩方には小供達をも皆な引連れて来るやうに案内した。夫人もそれに同意して、尙ほ暫時居て、やがて辭し去つた。其の日は午前中玄關前の庭

が、馬車の爲に身動きのならぬほど、祝賀の客が引きも切らずあつた。「やあ、お早やうと客の一人が入つて來ながら言つて、お祖母さんの手を接吻した。

それは最早七十格好の、背の高い、大きな肩章の着いた軍服を着た、其の襟の下から、大きな白色の十字架が微見えて居て、沈着な率直な容貌の人であつた。その迫らない、飾らない舉動を見て私は驚いた。薄い白髪がチョンボリ頸背の處に半圓形に残つて、齒のない爲に上唇が妙に曲込んでゐたが、それでも顔はまだ眼に立つて綺麗であつた。

イワン・イワニッチ公爵は、前世紀の末、まだ若い時分から、その高尚な性格と、立派な風采と、著るしき膽勇と、權勢ある門地と及び就中幸運との爲に、頗る華やかな得意な閱歴を経て來たのであつた。彼は長く官職に居た。さうしてその方面に向つての希望は、最早遺憾とする所のないまでに、悉く且つ頗る速



かに充たされた。

まだ幼ない時分から、結局其の眩きばかりの地位に運が持つて行くやうに、自分でもさながら其の準備をして居るもの、如く、身の行爲を仕向けた。夫れ故に其の華やかな、動ともすれば虚榮な生涯中、凡ての人の上に免かれぬ種々の失望と苦味と、而して解脱とに遭遇したが、彼は嘗て一度もその平生の沈着なる性格と、豪邁なる思慮と、十分根柢ある宗教上、道德上の主義とを動かさるゝ事なく、世人の尊敬を博した。それは彼の華やかなる地位に依つて得たと云ふよりは、寧ろ彼の確實と信用とが齎らしたのである。彼は小心翼翼々としてゐた。併しながら幸福なる境涯にゐたが爲に、凡て世俗の紛々を超脱して思想を高尙にするのが出来た。親切で感情にも富でゐた。が、他人との交際には冷かで、動もすれば尊大にさへ思はれた。それは多くの人々に要望せらるべき地位に置れた、その境遇から自然に來たので、彼はその冷かな態度に依つて、只管彼の勢力を利用しやうとする者

の、斷えざる歎願と哀求とを避けやうと力めた。併しながら其の冷靜な處は、公爵が最上級の人に似ず慇懃な點に依つて和らげられた。

彼には修養があつて、能く書籍を讀んで居た。が、其の修養は彼が青年時代に於て得た以上には出でなかつた。即ち言はゞ前世紀の末のものであつた。彼は十八世紀の哲學及び演説等に關する、佛蘭西の有名なる著書は殆ど悉く讀破した。彼は佛蘭西文學の傑作には凡て通じて居つた。夫れ故自在にラシイヌ、コルネイユ、ボアロウ、モリエール、モンテーヌ、フエメロンなどから、引證する事が出來た。またさうするのが得意であつた。彼はまた神話に關する豊富なる知識を有つてゐた。また佛蘭西譯によつて古代の叙事詩を研究して得る所があつた。セガアに依つて大に歴史上の知識を得た。數學に關しては普通の算術以上には知識を有たなかつた。物理學又は現代文學に就いても殆ど識らなかつた。ゲーテ、シルレル、バイロン等に關する會話の時は、謙遜に口を噤んでゐるか、或は唯普通の



ことを少許言ふに止つた。其の實是等の書は讀んでゐなかつたのである。さういふやうに佛蘭西文學や古典學などの修養のある——そんな種類の人で尙ほ生存してゐるものは極めて少ない——にも係らず、談話は頗る簡單であつた。併しそれが爲に種々の事に關して其の無識を隠し、他人に對して大様で、調子好く見せた。凡て創新といふことが甚く嫌ひで、創新は唯下品な人の怠屈覺ましに過ぎぬと貶してゐた。何處に住んでゐても、彼には社會と云ふものが必要であつた。モスコウにゐても外國にゐても常に大様に住做して日を、期して全市の名流を招待した。彼のモスコウ市に於ける地位は、彼の招待状を持つて居れば、凡ての家の客座敷に通れる、恰も旅行券の用をなしたほどであつた。さうして多くの若い美しい貴婦人達が進んで其の紅の頬を彼に差向けた。それを彼は恰度親のやうな感情で接吻した。

お祖母さんの如く、公爵と同じ時代の、同じ社會の社員であり、また同じ教育

を受け、同じ見識を持つた人は、今は僅かしか生存して居なかつた。夫れ故に公爵は、お祖母さんとの昔馴染を格別に床しがつて、平常お祖母さんには非常な敬意を拂つてゐた。

私は公爵を十分見得なかつたが、一同が尊敬を表する有様、その大きな肩章、お祖母さんが公爵を見て格別に悦んだと、また公爵のみはビクともせず、打解けてお祖母さんと應對したこと、また佛蘭西語で憚らず「私の従姉」とお祖母さんに話しかける勇氣さへあるので、私はお祖母さんに對すると同じやうな尊敬の念を鼓吹された。お祖母さんが私の詩を公爵に見せたら、公爵は私を傍に呼寄せて、次のやうなことを言つた。

『分らない、或は第二のデルツァワン（十八世紀末の有名なる露西亞の抒情詩人）になるかも知れない。』  
さう言つて私の頬を痛いほど振んだ。愛嬌だと思つて耐忍したものゝ、私は聲



を揚げて泣きたいくらいであつた。

客は追々退散した。お父さんとワロチアとは出て行つた。後には公爵とお祖母さんと私きり客座敷に残つた。

『何故ナタリア・ニコラエフナさんは、來なさらなかつたかね？』  
少時黙つた後で突然公爵は尋ねた。

『さればさ！』お祖母さんは頭を傾げて、親しうに公爵の制服の袖口に自分の手を掛けながら答へた。『嫁も貴郎、自分の思ふやうに自由が叶ひさへすれば、屹度來てもくれましたらうが、手紙でさう申して越しました。他の者も嫁が來る様に勧めたけれど、嫁は「いや〜、今歳は少しも収入が無かつたから。」と言つて聞かなかつたさうでございます。さうしてまた「加之、今歳はまだ私までが家内中と一所にモスコウに引移らねばならぬといふ理由もございませぬ、またリュウボチカもまだ幼いし、男兒も貴母と一所に居れば自分の傍に置くより、彼等の爲にも結局

安心して居ります。』と申してまゐつて居ります。誠に結構なことだ！』とお祖母さんは、其の實歴々と少しもそれを結構とは思つては居ないらしい調子で、尙ほ言葉を續けた。『男の兒は學問もしたり、また世間にも慣れさせたりする爲に、前から此處に越さねばならぬ筈で、田舎に居て、何が貴郎、男兒に教育を施すことが出來ませうぞ。最早貴郎、大きいのは軀で十三になるのでございませぬよ、小さい方が十一ですもの。御覽じます通り、ほんのまだ田舎育ちのまんまで、何うしてお座敷に通つて好いやら、行儀も作法もあつたものではございませぬ、貴郎。』  
『それは併しながら不思議ぢやございませぬか、儉約にして居て日々のとにそんな不自由をするとは？ 立派な所領を持つてお出でぢやないか。さうして嫁御のカパロフカ（お母さんの料地）だつても、大したものではありませぬか。彼處の劇場でそら一度、貴女と一所に踊をやつたことがあつたがね、最早彼れ此れ五十年の餘になりませう。素晴らしい所有地ぢや、大變な収入が入る筈ぢやがな。』



「お互の間柄ですから、貴郎にお話し申すのでございますが。」とお祖母さんは悲しそうな表情をして「私には何とか斯とか辯疏をいふのが、皆な唯倅が一人で此市に居て、それ俱樂部だの、やれ宴會だのと勝手に彷徨き廻つて、仕たい三昧好きな事をしやう志望としか見えません。それでも嫁は少許も疑やいたしません。まあ何といふお人好しでござんすやら。何でも倅の云ふことは眞誠と思つて居るので、倅が、小供はモスコウに連れて來ねばならぬ、嫁だけは一人愚鈍の女執事と田舎に残つて居るやうにと申して聞すと、嫁はまた其の通りになつてゐるのでございませよ。若し貴郎、倅がコルナコフ公爵夫人がなさるやうに、お前も子供を鞭たねばならぬと申したなら、屹度又倅がいふがまゝに致すかも知れやしません。」と、お祖母さんは、さも苦々しいことだと言つたやうな表情をして、自分の周囲を見廻しながら言つて、暫時黙つた後、出掛つた涙を拭うとして手巾を取出しながら言葉續けて「ですから貴郎、私は度々さう考へるんでござんすよ、倅奴には

到底も嫁の心は解らぬ、嫁の價値が知れない。また嫁の方ぢや何處までも倅に對し従順に親切に仕向けて、自分の痛いことは力めて隠すやうにして居ながら——私はそれをよく知つてゐます——が、何うも倅が好く行きませんで、まあお聞き下さいませ、若し倅が何いたしませんと……」  
 お祖母さんは後を言ひかけて、手巾を以つて顔を隠した。  
 『まゝ、御隠居』と公爵は答めるやうに『貴女も次第に賢うはお成んなさらんと思見える。貴女は始終取越苦勞をして泣いたり、悲しんだりしてお出でぢや。さゝもう、詰まらぬことぢや。私も昔から賢息とは能う知つて居る、何うして良い人物さ。あれで分別も十分あるし、立派な良夫ぢや。人間はその正直といふことが何よりも肝心さ。』  
 不覺私が聞かなくつても好い、此様な話を立聞きしたので、私はハラ／＼して爪足でそつと其處から抜出た。



## 十八 イワン兄弟

「兄さん！兄さん！イワンが！」と、私は窓から、海狸の襟のついた青い外套を着た小供が三人、若い氣取つた家庭教師に連れられて私の家の方に、向側の小道を横切つて来る所を見て呼んだ。

イワンは私達と親類の間であつた。さうして年齢も同じ位であつた。モスコウに来て間もなく知合になつて、直ぐ親友になつた。

二番目のイワン・セロツアといふは、顔の淺黒い縮毛の、筋のよく通つた小さな鼻で、生々とした紅い唇の下から、始終眞白い奇麗に揃つた上齒を見せて、美しい青黒い眼元をした。一見著しく變つた顔容の小供であつた。彼れは決して微笑ともしなかつた、何時も眞面目に澄してゐたが、偶に笑ふ時には、分明した人を引着けるやうな調子で、腹の底から鳴る様に笑つた。其の生れたまゝの美が最初

から私を打つた。私は何となく彼が氣に入つた。彼を見るのが何よりも私の幸福であつた。時とするとなつたと彼を見たい一心に、私の靈魂の全力を打ち込むことさへあつた。三日四日も見ないやうなことがあると、私は何をすることも怠儀で、果ては悲しくなつて、自然に涙さへ催されることがある。寝ても覺めてもまた夢にも、絶えず彼れのこと私の胸にあつた。寝やうとして横になる時には、彼の夢を見るやうにと望んだ。又凝乎眼を瞑つて居ると、顯然と眼の前にその姿が顯はれる。これを非常な幸福として、私は常にその幻影を想ひ浮べてゐた。それほどまでに思つて居つたが、私は誰にも此の感情を十分打明かすことが出来なかつた。彼では明かに私とよりはワロヂアと遊び、ワロヂアと話をするのを喜んでゐた。それは屹度、私のジロくした眼で絶えず彼を諦視めて居るのを、何となく窮屈なやうに感じたからであつたらしい。それともまた單に、私に對して少しも同情の念が起らなかつたのかも知れぬ。が、其れにも係らず私は満足であつた。私は欲望も要



求め無かつた。唯彼の爲めになら何物をも犠牲にしたいといふ氣がした。彼は私をして熱烈なる愛着の情に燃えさしめたのみならず、傍に居ると、またそれとは別な感情が盛んに起つた——といふのは、自分は何うかして、彼を苦しめては居ないであらうか、氣に逆らつては居ないであらうか、怒らしては居ないであらうかといふ心配があつた。私は彼に對して愛情と共にまた恐怖を感じた。それは恐らく彼の容貌に何處となく冒し難い、氣高い處があつたからでもあらうし、また私自身の容貌を卑む所から、他人の美貌を餘り高く買つた點もあつたらうが、要するに最も重なる原因は、明かに私が彼に愛着して居たからで、従つて恐怖も感じた。初めてセロツアに口を利かれた時に、私は餘りに不意の嬉しさに、顔が蒼くなつたり赤くなつたりして、碌々返辭が出来なかつたくらゐ、面喰つて仕舞つた。何か考へ事をして居る時に、彼は何處か一と所に眼を据ゑて絶えず瞬きしながら、鼻や眉毛を頻りに動かす癖があつた。誰でも彼の此の癖が邪魔になると言

つたが、私はまた其癖が何とも言へず好くつて、自身にもつい知らず識らず其の癖にかぶれて了つた。近親になつてからまだ幾日も経たぬに、お祖母さんが、お前は鼻のやうに瞬きばかりしてゐる、眼を何うかしたのかと尋ねたことがあつた。愛といふやうなことに對しては、吾々の間に嘗て一語も口に出したことはなかつたが、彼自身でも私に對して勢力を有つてゐることを感じて、二人の子供らしい交遊の上に、無意識にはあるが專制的にその權力を振うた。で、餘程思ひ切つて私の心の中を、一切彼に打明かして了ふとして見たけれど、何だか恐いやうで、率直に言ひ切る勇氣も出なかつた。私は成るだけ平氣を装ひ、黙つて彼に服従してゐた。時によると彼の權力が餘りに壓制的で、耐忍出来ないやうに思はれたこともあつたが、さりとてそれを解脫することは、到底私の力には及ばなかつた。其の無我な、束縛のない愛の、清新な美しい感情は、二度復歸する機もなく、永へに消え失せて仕舞つた。それを思ふと私は唯悲しくなつて来る。



不思議にまだ小供であつた時分には、何うかして大人らしく思はれるやうに力めたが、もう小供でなくなつてからは、屢々も一度小供のやうになりたいと望んだ。

此の小供らしく見られまいといふ希望から、セロツアとの交際に、何度も溢れて出かゝつてゐる感情を無理に抑付けて、私を先方と同化しないやうにしないやうにして了つた。また時々あゝ接吻したいなと思ひながら、その接吻をすることも、また彼の手を捉つて握り占めることも、君を見るのが嬉しいと言つて明すことも、何うすることも仕得なかつた。加之セロツアと正面に名を呼ぶことすら出来ないで、漸々にセルギエイ(セロツアは何々さん。セ)といふことが出来た。さういふやうにして二人の間に何となく隔てが置かれた。其様な此様な感想の中にも、小供らしい處の出るのは争はれなかつた。彼自身もまた之に近い考へをもつて居つた。といふのが矢張りお互にまだ本當に小供であつたのだ。二人共ま

だ成年者をして、相互の關係に用心をせしめたり、冷かならしめたりするやうな、其様な苦々しい艱難に逢つたことはない癖に、唯無上に大人の眞似がしたいといふ奇妙な觀念から、吾々は優しい小供らしい純潔な愛情の樂みを無いものにして仕舞つた。

私は前座敷でイワンを出迎へて一寸挨拶を交はして、直ぐお祖母さんの所に躁急しく飛んで行き、イワン等が來たことを告げた。報知を聞いてお祖母さんが喜ぶのを見て私も嬉しかつた。私はセロツアから眼を離さぬやうにして、其の一舉一動に氣を着けながら、客座敷に隨いて行つた。

お祖母さんが、大層大きくなつたと言ひながら、其の鋭い眼でセロツアを見て居る間、私は恰も畫家が平生自分で尊敬する批評家から、畫の善惡を宣告される時に感ずるやうな恐怖と希望とを抱いて居た。

お祖母さんの許諾を得て家庭教師ヘル・フロストは、一同を連れて前庭に出て行



つた。彼は緑色の腰掛に腰を掛け、兩足を綺麗に十文字に交はし、其の真中に青銅の頭の着いた杖を置き、頗る得意然と澄し込んで、さて徐に巻葉を吹してゐる。ヘル・プロストも獨逸人であつた。が、同じ獨逸人でも我がカール・イヴニッチとは全然違つた型の獨逸人であつた。第一に彼は正しく露語を話すことが出来、佛語も調子はよくなかつたが話した。さうして世間で——特に貴婦人の仲間から非常に學問のある人として持囃されることを喜んだ。第二に彼は紅い髻を生し、大きな紅玉石を飾つた黒縷子の高襟を着けて、其の端を長く下袴吊りの下に端折り、弾機鈕釦や、革紐の着いたケバくしい青色の下袴を穿いて居た。第三に彼は若くつて、綺麗で、得意さうな姿態をして、眼に立つほど立派な逞しい脚をして居つた。さうして就中明かに此の最後の長所に彼自からも價値を置いてゐたに相違ない。彼は婦人間にそれが有力な効果のあるものと考へて居た。で、最も眼に立ち易いやうに兩脚を構へて、起居にも氣にして始終臍の邊を動してゐた

のはそれで、あつた。彼は力めて洒落者にならう、色男にならうにはかし愛身を窶す若い露西亞的獨逸人の好標本であつた。

庭園では愉快であつた。あんな面白い追剝の假戯をしたことはない。處がもちつとのことでその興が破れかゝつた。セロツアが追剝の役で、全速力を以つて旅客を追驅けて行くその機會に何かに躓いて、其處にあつた立樹に持つて行つて樹が折れたかと思ふほど向脛を打付けた。私が憲兵で彼を捕へる役であつたが、餘り打ちやうが甚かつたから、傍に寄つて氣の毒さうに負傷をしやすいかと尋ねた。するとセロツアは怒つて拳固をして地踏鞴を踏み、それはく氣嫌の悪い聲を出して私に叫んだ。

『やい、何だい？ 遊戯は最早廢止だ！ そら、何故君は僕を捕へないんだ？ 何して僕を捕へないんだ？』

何度も斯う繰返へしながら、旅客になつて向の方に飛んで行くワロチアと兄の



イワンとを横眼に眺めてゐたが、彼は忽ち一聲叫んで、ハ、と高く笑ひながら彼等の後を一散に追驅けた。

此の勇敢なる行動が如何に言ひ難き印象を私に與へたか、私はその勇氣に心を奪はれて了つた。甚く痛かつたには相違ないが、彼は泣かぬばかりか、打たといふ氣振も見せなかつた。さうして少時も遊戯の方の事を忘れなかつた。

それから間もなくイリンカ・グランプがまた仲間に入つて來た。吾々は晝飯を待つ間二階に上つて行つた。セロツアは尙ほ其の他に驚くべき勇氣と、毅然たる性格とを以て私を驚嘆せしめ、彼に對する崇拜心を更に汪ならしめた。

イリンカ・グランプといふは、或る憐れな外國人の子であつた。其の外國人は嘗て私のお祖父さんの家に客食してお祖父さんには恩を受けて居た。それゆゑ今日でも時々其の子をして私の家を訪問せしむるのを大切な義務と考へて居た。併しなから若し彼が吾々と親しくするのが其の子に名譽と満足を與へるものと思つて居

たとすれば全く間違ひであつた。何となれば、吾々はイリンカを頭から朋友扱ひにせぬばかりか、吾々が何らかして彼を賸物にでもする時でなければ、彼を眼中に置かなかつた。イリンカ・グランプは歳は十三で、瘦せ削けた背のヒヨロ高い、蒼白い、鳥のやうな顔をした、氣の好さ、うな厭に畏縮けた兒であつた。貧相らしい衣服を着て居つたが、頭髮だけは何時もダラ／＼するほど香油を塗つて、日の照る時など、私達が屢くグランプの頭髮から香油が流れて、上衣に滴が垂れて居ると言つて笑つたくらゐであつた。今彼を考へ出して見るに、何でも好んで吾の言ふ用事をよく聞く、靜淑しい順直な兒であつたやうに思ふ。併しながら其時分は唯卑しい奴とばかりで、可哀さうとも何とも思はなかつた。

追剝の眞似事を止めて二階に行つてから、一同で種々な機械體操の仕競して戯れて居た。イリンカは隅の方で臆病さうに薄笑ひしながら、感心して吾々がするのを見て居つたが、其の通りに遣つて見るといふと、私にはとても其様な力があ



りませんからと言つて後退りした。就中セロツアは非常に面白さうで、後には上衣を脱いで了つて、頬や眼を赫々熱らして絶えず笑つて居た。さうして様々な新しい藝當を自分で工夫しては、或は椅子を三脚列べて置いて、其の上を飛び越したり、室の中を輪にグル／＼走り廻つたり、さうかと思へば此度はタチスチエフの大辭典を室の中央に持出して、その上に鱗立ちをして、二本の足を以て何とも言へない可笑しな藝をして見せたりする、輕業を止めると、此度はまた一分別ありさうに眼を歪めて、妙に眞面目くさい顔をしてイリンカの傍に行き、

『一つ今のを遣つて試ろ、些も六ヶ敷かない。』と迫る。

グラツプは衆目が自分の方を視て居るので、顔を眞赤にして漸々に聞取れるやうな聲で、そんなやうな事は何にも出来ませんと言つて詫る。

『何故貴様はやつて見ないんだ？ 女見たいな奴だ！ 頭で突立つて見ろ。』と、言つてセロツアはグラツプの手を捉つた。

『立て、立つて見ろ！』と、一同でイリンカを取巻いて迫立てた。イリンカは洵洵して眞蒼になつた。吾々は其手を捉んで辭典の處に曳擦つて行つた。

『其處を放して下さい、私が自分で立ちますから！ そら衣服が裂けて仕舞ひます！』不幸なる犠牲は懸命に叫んだ。が、吾々はそれに倍々興が乗つて笑ひ散々めいた。青い上衣の縫目が遂々ボリ／＼と綻びた。

ワロヂアと大きいイワンとで、頭をヘシ曲げて、辭典の上を持つて行つて載せた。セロツアと私とは瘦せた兩脚を捉んで、八方に跳ね廻す奴を膝坊主から下、下袴を引剥いで、ギヤ／＼笑ひながら、兩脚を眞直におつ立てた。さうして一番小さいイワンが、倒れないやうに傍から釣合を保つてゐた。

一時騒々しく笑つてゐたが、一同一度にふつと笑を呑込んだ。室の中は靜になつて、不幸なるグラツプの呼吸をする音だけが獨り聞える。けれども其時私は、唯可笑しい面白いとばかりは思へなかつた。



『そら、えらい〜！』と、セロツアは平手でびつしやり、イリンカを打きながら言つた。イリンカは無言のまま、身を自由に仕やうとして、焦つて脚を自暴に跳ね廻して居たが、其の拍子に踵を以つてセロツアの眼を厭と云ふほど蹴つた。蹴られたセロツアは、先方の脚を捉へて居た手元を緩めて、いきなり自分の眼を抑へた。眼からは留度もなく涙がハラ〜溢れた。それと共に力任せにイリンカを突飛した。此時は既う誰も手を放して居る所であつたから耐らない、イリンカは石塊か何ぞのやうに、どしんと大きな音をさして床板の上に墜落つた。さうされて彼れはシク〜泣きながら、

『何うして……さう……私を虐めばかします……のです？』と漸々に言つた。涙に濡れた顔、亂れた頭髮、引捲つた下袴の下から見えてゐる汚れた長靴、其の可哀なイリンカの貧相らしい姿が眼について、私達は無言のまま、クス〜無理笑ひをしてゐた。

が、セロツアは眞先に氣を取直して、

『女見たいな奴、泣蟲。』と足の尖で些と突きながら、『此奴とは徒戯も出来な。い。さあ、もう澤山だ、起きろ。』

イリンカは『何だ、悪戯小僧め。』と怒つて言つて、それから彼方向いて聲を揚げて泣いた。

『何だ！ 自分で人を蹴つて置いて、まだそんな悪口吐きやがる！』とセロツアは怒鳴りつけて、いきなり大辭典を引捉かんで、容赦もなくイリンカの頭の上に揮上げた。それでも彼は手向ふともせず、頸を畏縮めて両手で頭を抱へた。

『さあ！ さあ！ 嬉戯にすることが分らないなら最早廢さう、廢して階下に行かう。』と、セロツアは無理に笑つて言つた。

私は、其處に轉んだまゝ、起上らうともせず、大辭典の陰に顔を隠し、痙攣に全身を震はし、死ぬかと思ふばかりに泣き入つて居る奴を凝乎と見て、可哀さうな氣



がした。で、私は『これ、セルギイエイ、何故其様な甚いことをしたの？』と言つて見た。するとセロツアは『なに構ふもんか！ 僕などは今日も、い、い、で、膝の血骨を打割るほどの目に遭つたが、泣かなかつたぢやないか。』  
『それは其の通りだ。イリシカは全く泣くより他に能はない。が、セロツアは何うだ、彼は非常に勇敢だ。何たる男らしい奴であらう！』と心の中で思つた。  
私は其の時その憐れなる子供は、身體が痛くつて泣いてゐるのではない、彼方では恐らく一回を好きこそすれ嫌つてはゐなかつた、その五人の子供が一所になつて、理由もないのに自分を嫌つて虐めるのが悔しいので、泣いて居るのだといふ判断を持たなかつた。

何故そんな惨い事をしたか、私は自分でも分らなかつた。何故その時私は彼の味方になつて、彼を保護し慰めて遣らなかつたらうか。以前は巢から投出された雛鳥を見ても、庭園の外に放出された小狗を見ても、料理人が肉汁を作るために

連れて行く鶏を見ても、直に私をして甚く號泣ばしめた、あの慈みの感情は何うなつた？

其の美しい感情も、セロツアに對する私の愛情と、彼の眼の前では私も彼の如く、勇敢に見られやうとする欲望との爲に毀たれて了つたのか？ 其の愛情と、勇敢に見られやうとする其の欲望とは、決して望ましい性質のものではなかつた。其等は單に私の幼時の記憶の數頁に汚點を印するものに過ぎぬ。

十九 來 客

料理部屋の平常になく忙しさうなのを見ても、不斷見馴れて居る客座敷や大廣間に備へてある物が、今日は清かな華やかな色に輝いてゐるのを見ても、そゞろに晩方の多勢の來客が待たる、心地がする。

私は馬車の響のする度に窓の處に行つては、頭に掌を置いて硝子を窺いて、抑



へ切れない好奇心から、珍らしさうに街路を眺めた。

最初は暗黒に包まれて何にも見えなかつたが、段々暗黒を透して窓から種々な物象が眼に付いて来た。道路の向側には燈の點つた見馴の商店がある。階下の方に二つ火光のさした窓のある大きな家が斜形に建つてゐる。

街路の中央に唯二人きりの旅客を乗せた田舎車馬(冬期のみ都會に働きに來る見すばらしいガタ馬車)が行く。

人道を空の幌馬車が戻つて来る。すると此度は自家の玄關に乗入つた馬車があるので、屹度早く來ると約束してゐたイワンに相違ないと思つて、私は直ちに前座敷に駈下りた。するとイワンではなくして、制服を着た手が戸を開くの待つて、二人の貴女が顯はれて出た。一人は大人で黒貂の襟の着た青い外套を被て居た。また一人は子供で、緑色の肩掛で全身を包んで、其の裾から毛皮の長靴を穿いた小さい足の尖のみが窺いてゐた。私は二人が出て來た時に、お辭儀をしなければならぬと思つたが、前座敷に私の居るのに氣を着けやうともせず、小さい方は大

きな方の傍に寄つて其前面に立つた。大きい方は小さい方の頭を包んだお高祖頭巾を解いて遣り、外套を外した。すると制服の馬丁が其等を受取つて、それから小さい毛皮の長靴を脱がすと、種々な毛衣で一面に纏んだ中から、其處へ低い襟の眞白なモスリンの寛衣を着て、同じ白の潤袴を着け、可愛い黒の上靴を穿いた、驚くばかりの十二三歳の少女が出現れた。其の小さい眞白な頸の周圍に、黒い天鵞絨のリボンを飾つて、頭は其の愛くるしい顔と好く配合るやうに、艶やかな黒い栗色の頭髪を圓く捲いて、其の端が眞白な背後の肩に美しく流れた。

中にも際立つて眼に着くのは、半分眼り心地にした、珍らしく大きい其の秀でた眼元で、それが小さい可愛い口元と奇妙に佳く對照つた。口を硬く引締めて、眼に稍々險を持つた點が、全體の表情に少しも微笑といふものを見せぬ。其の代り偶に微笑むと、何とも言ひやうのないほど、一層引立つて見える。

私は認められぬやうにしやうと思つて、密と廊下の戸内に忍んだ。さうしてお客



が来た事に氣も着かず、何か考へ込んだ風をして前後に歩き廻つてゐやうと考へた。で、彼等が前座敷を半程まで来た時分を測つて、自分ははつと我に返つた態度を装うて不意にお辭儀をして、それからお祖母さんが客座敷に居ることを告げた。ワキイナ夫人は優雅に私に會釋した。其顔を見て私は非常に嬉しかった。特に令嬢ソニチカの顔に酷く似てゐるので、尙ほ嬉しかった。

お祖母さんはソニチカを見て大層嬉しさうであつた。傍に呼寄せて額に下つた頭髪を直して遣りながら、其顔を凝乎と見守り「何んてまあ可愛い少女だらう」と言つた。ソニチカはそれを言はれて恥かしさうに笑味んで顔を紅くした。其の顔を見て私も紅くなつた。

お祖母さんは少女の脛に指をかけて、小さい顔をそつと遠げながら、「これ、さう耻羞ないでも好い……何卒面白くしてねえ、今夜は能く踊つて下さいよ……此處に貴婦人が一人、それから貴公子が二人居ります。」とお祖母さんは、此度はワ

キイナ夫人の方に向きながら言つて、手を私に觸つた。

斯うして、少女と一所にせられたのが嬉しくつて、私は復た紅くなつた。

次第に恥かしさが増して來るのに自分ながら氣が着き、恰度他の馬車がまた入つて來る音を聞付け、其處を退いた方が好いと思つたから急いで出て行つた。

前座敷でコルナコフ公爵夫人が、一人の男の兒と數へ切れぬほど多勢の娘の兒を連れて來のに出會つた。娘は皆な酷く似た顔をしてゐた——夫人に似て何れも不器量であつた。それゆゑ誰も私の眼に留まらなかつた。彼等は外套を脱いで長裾を振り出し、皆で低聲にペラ／＼私語り、不意に何事か厚皮しく笑つた——恐らく其處に自分達のやうに美しいのが居なかつたからであらう。

エチイネといふのは年齢は十五とかで、背の高い、ブク／＼肥つた血氣のない、周圍に青黒い輪のある落窪んだ眼をして居る。手と足が年齢に合せて圖外れて大きい。さうして何となく無作法だ。噎枯れた嫌な聲をしてゐる。それでも自分で



は頗る得意の風が見えてゐる。見た所成程で打たれさうな小供だ。

吾々は黙つたまんま、互に検査するやうな注意深い眼付をして、暫時向合つて突立つてゐたが、雙方接吻をでもしやうとするらしく少しづつ、近寄つた。が、互に眼と眼を見交すと、何か理由があつたと見えて、不意と氣持が變つた。すると、傍を娘達が衣服の摩れる音をさして通るので、私は何か會話の端緒を見付やうと思つて、一同馬車に乗つて來たのですかと尋ねて見た。

すると、『僕は知らない。』と素氣もなく言つて、『僕は決して馬車には乗らないから。馬車に乗ると直ぐ心持が悪くなるから。お母さんはそれを能く知つて居る。晩に何處にでも行く時には、だから何時も僕等は馬車に乗るんだ、其方が面白いよ、種々な物象が能く見えて、フィリップ（馭者）が僕に手綱を執らすよ、さうして時々鞭をも持つて見るんだ、時によると傍を通つてゐる人間を打つて遣る、面白いよ。』と、變な身振をして高慢らしく言つた。

『若様。』と、馬丁が前座敷に入つて來て『フィリップが、貴郎が鞭を何處にお置きになりましたか尋ねて居りますか？』と聞いた。

『何うしたのだ？ 予は彼奴に渡したぢやないか。』

『でも、戴かないと申しませうが。』

『それぢや、提燈の所に懸けたかも知れん。』

『提燈の所にも無いと申します。何卒本當を仰有つて下さいまし、貴郎が持つて居らして、お失くなすつたんぢやございませんか、貴郎の惡戯のお蔭で僅少の給料の内から、フィリップは又買はなけりやなりませんから。』と、馬丁は次第に顔色を變へて怒つた。

物堅さうではあるが、氣六ヶしさうな馬丁は、フィリップの味方をして、何處までも埒を着けやうといふ意氣込みを見せた。私は何となく傍で見てゐるのが變であつたから、氣の着かめ風でそつと脇に外れた。が、其處等に居た從僕どもは



何うなる事かと思つて、傍に集つて来て好く言つて遣つたといふ風に馬丁の方を見詰めた。

『うむ可しく手が失したんだく。』と、後を言はせぬやうにして、『手が笞の代を拂つて遣るよ。面白いよ！』と言つて、私の方に寄つて来て、客座敷の方に行かうと誘ふた。

『不可ません、若様貴郎が何うして拂ふもんですか！、此の八月の間といふもの、マリア・ウシリエフナにも、唯二十コペクしか拂つて居ないぢやありませんか、私にだつてその通だ、ペトルシュツカが何してからもう二年にもなるが：：』

『黙れ！』と年若き貴公子は怒鳴つて、顔色を眞蒼に變へながら『ぢや悉皆言つて聞かせうか。』

『悉皆言つて聞かす？ 悉皆言つて聞かす！』馬丁も敗けては居らぬ『甚い、貴郎は。』と、吾々が客座敷に入つて行く後方から劇い表情をして、そう言ひく

外套を抱へて仕度部屋の方に行つた。

『甘い！ 甘い！』と、前座敷では一同が一所に囁す聲がした。

お祖母さんは、或る場合に對する二人稱の代名詞に、或る特別の語調を附けて、其人に對する自分の好惡の意見を、巧みに言外に言ひ表はす特別の天分を有つて居つた。普通に吾々が用ゐるのは正反對に thou と you とを使つて居つたが、彼女の口の中では正面の意味の裏面に全く違つた味を含んでゐたのだ。

で、其の若き貴公子がお祖母さんの傍に進んで行つた時に、お祖母さんは最初から貴下と呼んで、さも卑んだやうな表情をして對手を見守りながら、口數少く話し掛けた。其の場合若し私であつたならば、屹度愧入つて了つたに相違ない。併しながらエチイネは確かに其様な子供ではなかつた。彼はお祖母さんの應對振などには注意せぬばかりか、お祖母さんの爲人にすらも無頓着だ。さうして無作法ではあるが、少しも臆する色なく並居る者に挨拶した。私は唯ソニチカの方ばかり



り見詰めて居た。

それから今でも記憶して居る。ワロチアとエチイネと私と三人で、室の一所に一團になつて話をして居つたが、其所からソニチカが見える。さうして彼方からも此方が見えて、話をして居るのが互に聞える。それを知つて私は話をして居るが、何だか張合があるやうで愉快であつた。で、會話の中に、面白さうな元氣らしい事柄だと思ふやうなことを言ふ時には、格別大きな聲を出して、娘の方を見廻した。が、何うかして其處を脇に行くと、それが見えも聞えもしなくなつたので、私は談話をする樂みもなくなつて、獨り黙つてゐた。

客座敷や大廣間には、次第に客が充満になつて來た。小供の伴侶には小供の伴侶で、何時も多勢の中には二人や三人は、稍々年長な子供がゐるものだが、其等は充分氣を着けてゐて、樂みにして踊る機會を外さぬやうにする。尤もそれはほんの會の女主人公を嬉ばすに過ぎぬのであるが。

やがてイワンも來た。平常はセロツアに會ふのが嬉しいのであるが、其の時は彼もソニチカを見て彼女の方に自身を見せつけやせぬだらうかと思つて、私は何といふことはなく、妙な心配があつた。

二十 舞 踊

『やあ、君は屹度踊るのだらう。』と、セロツアが、ポケットから新らしい山羊の皮の手套を引き出しながら客座敷から出て來て、『僕は手套を穿めてゐなければならぬ。』

『何の爲めであらうか？、私達は手套なんぞ有たないが……二階に行つて搜して見ねばならぬ。』と思つた。

抽斗といふ抽斗を搜して見たけれども、漸と見付つたのは私達の旅行用の指無が片手と、それから他の抽斗に山羊の皮は氣が利いて居るが、私にはとても役に



立ちさうもないのがあつた——第一最早古くつて、汚れて居る。第二に私には大き過ぎる、加之に中指が缺けてゐる。すつと前にカール・イヴニッチが屹度何かで切取つたのらしい。でも構はず、私は其の片跛の手套を穿めるには穿めたが、恰度始終墨汁で汚れて居る中指が出るのがひどく眼に着く。

『ナタリヤ・サビスチナが若し此處に居りさへすれば、屹度好い手套を見出してくれるだらうに、此様な様子をして階下に行くことが出来るだらうか、若し一同が何故お前は踊らないのかと聞いたら何と言つて好いか。と言つて、斯して此の儘で此處に残つて居ることも出来ない、確かに捉まるに違ひない、何としたら好からう?』と、其の手を捻廻しながら獨語言つてゐた。

『何を此處でして居るの?』とワロヂアが駈けて來ながら聞いた。『早く約束(踊る女の貴)して置かないと最早直ぐ始まるよ。』

『兄さん』と私は汚い手套から二本指の突出た手を差出して、『これ、君は何う

したの?』と、さもく思案に暮れたといふ状態を聲に表はして言つた。

『何を?』とワロヂアは急性に言つて、私の手元に氣が着いたが平然として、

『あ!、手套か。否、僕は少しも考へなかつた。君はお祖母さんにを言つて聞いて見ると可い。何といふか。』とさう言つて、少しも考へやうともせず、直ぐまた駈降りた。

私がそれほどに思つてゐることをも、そんなに平氣で居るのを見て、此方も覺えず氣を取直し、左手に穿めた仰山な手套のことは忘れて了つて、私も續いて客座敷に急いで行つた。

で、氣を着けくお祖母さんの腕椅子の傍に寄り、その外套にをつと手を觸つて、低聲で、

『お祖母さん、何うしたら好いでせう? 私達手套を有たないんです!』

『何うお仕だ?』



『私達手套を有たないんです。』段々近く寄つて、椅子の腕の上に両手を置きながら繰返して言つた。

『おや、さうして此れは何に？』と言つてお祖母さんは忽ち私の左の手を認めて、ワラキイナ夫人の方に向きながら『まあ、之れを御覽じませ：。此の若者が貴女のお嬢さんと踊らうと思つて、これ自分でこんなにお化粧をして。』

お祖母さんは確乎と私の手を捉つて、眞面目な顔をして何か訊ねるやうに衆客の顔を見廻して、一同が好奇心から手套を見て、どツと笑ふまで放してくれなかつた。

此の時若しセロツアが其處に居て、私が恥かしさうに顔を擧めて、捉つた手を無理に放さう／＼として居る所を見て居たなら、私は如何に困つたか知れないが、ソニチカの見て居る前では、少しも、痛いとは思はなかつた。ソニチカは私が其様なにして居るのを見て、眼に涙を一杯溜めて、頭髪がハラ／＼と淡紅色の小さい頬

のまはりに揺れかゝるやうになるまで笑つた。假笑にしては笑ひやうが餘り聲が高い、本當に笑つたに相違ないと私は思つた。

さうして此度は二人一所に笑つて、眼と眼を見交して互に近く寄つたやうに思はれた。此の手套の愛嬌は間が悪いには悪かつたとしても、周囲の人々と私とを馴染にしてくれた。——何時も此の客座敷に来る人が私に一番恐く見えた。が、最早これで家の中では少許も心が臆めなくなつた。

人を羞恥む時の困しみは、人が此方を何と思つて居るであらうか、其の意見が分らないから起るので、意見さへ明白に知れてしまへば——何ういふやうな機會でそれが知られやうとも——此の困みは止んで了ふ。

ソニチカ・ワラキイナが私の正面で、あの不器用な若い公子と佛蘭西舞踏を踊つた時に如何に面白かつたか！ 其の小さい手と私の手を繋合つて、微笑と笑味んだ時が如何に佳かつたらう！ 其の金色の捲髪を微かに波打して、小さい足



を悪毒氣なく一所に持つて来る所が如何に可愛かつたらう！ 五節に私の同伴が私を放れて他の側に行つた。私は暫時の間待つて獨唱を演ずる用意して居つた時に、ソニチカは口元を眞面目に締めて脇を向いて居た。が、彼女は私を恐れる心配はなかつた。私は大膽に前後に滑つた。で、私は彼女の傍に寄つて行つた時に例の二本指の食み出た汚い手套を、戯けてソニチカの顔の前に差出した。すると、それを見てひどく笑つた。其の機會に平常よりは餘分に蠟を布いてあつた床板上に其の小さい足を取られてツル／＼と滑つた。私は今でもよく憶えて居る。吾々が輪を作つて皆の手と手を結び合はしてゐた時に、彼女は可愛い頭を少し屈めて、私の手と繋ぎ合つたまゝ、手套した手で其の小さい鼻を一寸撫でた。私は今でも尙ほ眼の前に直ぐ此の時の光景のまゝを浮べることが出来る。さうして「ダニユーブの少女」の樂の音をまだ聞いてゐるやうな氣がする。

第二四班舞踊が始まつた。私はソニチカとそれを踊つた。それから休んでゐる

間もソニチカと同じ席に腰を掛けて居て、私はひどく間が抜けたやうに思はれた。が、さて何と言つて話し掛けて好いやら少しも考へがつかぬ。餘り長く黙つて居ると、私を馬鹿とでも思ひはしないであらうかと、それがまた心配になつて、早く何とかして私故に彼女に其様な間違をさせないやうにしようと思つて、佛蘭西語で、

『貴女はモスコウの住人ですか。』と問ふて見た。左様ですといふ返事をして貰つたので幾何か元氣が附いて『私はまだ此市には度々來たことはないんです。』と、度々といふ語が何と聞えるであらうかと、それを氣にしながら言つた。會話の端緒は誠に好かつたと、自分でも思ひながら、それで私の佛蘭西語の知識の底が全然分つたであらうと思はれて、私は其の調子で其の上話を續けることが出来なかつた。私達の舞踏の順番はまだなかく廻つて來さうもない。が、また元の通りに黙つて了つた。私の言つたことが向ふに何ういふ印象を生じたであらうか、そ



れが知りたさに、今に何とか言つてくれるであらうと、窮屈さうにして少女を見て居た。すると『貴郎は、何處で其様な可笑しい手套を取つて來ました？』と出抜に問ねた。

斯う問はれたのが、私は何とも言へないほど嬉しくつて、氣が軽くなつた。私はそれが、カール・イヴニッチといふ家庭教師の手套であることを話し、又其の家庭教師の人物に就いて可笑しい事柄——彼が赤い頭巾を脱いで禿頭の出た所が如何にも滑稽だとか、又大切な青い外套を着て居る時に、一度馬から水溜の真中に落ちたとか、其様なやうな事を話した。

舞踏が知らぬ間に濟んだ。何も斯も面白いことばつかり。が、それにしても私はカール・イヴニッチのことを、何故嘲けるやうにソニチカに話したのであらう？若し私が日頃カール・イヴニッチに對して感じて居るやうに、愛と尊敬との念を以つて話したならば、それがソニチカの好意を傷ねたらうか、それで私は嗤つた

のであらうか。

舞踏が濟んだ時にソニチカは『有難う』と、さも私がお禮を言はれる理由があるもの、如く、何とも言へない笑顔で言つた。私は唯恍惚となつた。嬉しいので有頂天になつた。で、何處から私は此様な勇氣や自信やむしろ大膽までも得來つたか、自分で自分が分らなかつた。『何だつて最早怯かあない。』と、泰然として大廣間を散歩きつ、獨り思つた。『もう何があつても構はない。』

セロツアが私に伴侶になつてくれと申込んで來た。『宜しい。僕は陪伴がないが、誰か探さう。』と言つて、室の内中をきつと見廻はしたが、貴女はもう皆な對手と手を携へて居る。が、唯一人稍々年長な少女が談話室の戸口に立つて居るのを認めた。すると一人の背の高い若い紳士が、踊に誘ふ目的らしく其の方に近づいた。私は大廣間の此方の端に居るのに、もう先は少女に二歩といふ處になつて居つたが、瞬きする間に、私は磨き立てた床板を器用に滑つて其距離を飛んで行



き、足擦して斷乎とした口調で舞踊に誘ふた。年長の少女は、私を庇ふやうに笑んで、其の手を私に貸した。さうして若い紳士は一人取り残された。

私は自分の勢力を意識して居るから、若い紳士の迷惑など氣にも留めなかつた。が、今自分の眞前に飛込んで来て、陪伴を奪つて行つた悪戯な子供は、あれは一體誰だと言つて人に問ねたといふことを、私は後になつて聞いた。

再び舞踏が始まつた。私が陪伴を奪つたその若い紳士も踊つた。イワン兄弟も、若い公子エチイネも、その姉妹達も、ワロヂアも皆な踊つた。が、私にはソニチカの踊るのを見てゐるくらゐ楽しいことはなかつた。私も耳馴れた樂の音や足拍子に聽神經を咬られるやうな氣がして、或る貴女と手を執つて仲間に入つた。入りは入つたが、其の内その貴女が急いで私の周圍で身體をかはす機會に、私の足取りの可笑いのに氣が着いたか、驚いて呆れたやうな顔をして凝乎下を見た。私はふと顔を見て、それと知ると共に足が硬くなつて、心が狂つたやうになつて、

何とも言へない足取で、一所を唯無暗に足を上下して地踏鞴を踏んで、終にはパツタリ棒立になつて了つた。一同私を諦視めた。中には吃驚してゐるもの、不思議さうにしてゐるもの、面白がつてゐるもの、氣の毒さうにしてゐるもの、種々な顔があつた。が、お祖母さんは一人平氣で見てゐた。お祖母さんは餘程疲れて來たらしく、話するさへ怠儀さうに見えた。

すると、突然に私の耳の所にお父さんの怒つた聲で『お前踊れなければ止しなさい。』と言つて、些と私を脇へ押退けて、私の陪伴の手を取つてお父さん自分で右風に一番踊つて見せた。観客は非常に喜んだ。さうしてお父さんは貴女の席に手を引いて連れて行つた。

私は何うして此様なに酷い目に逢されるのであらう？

各人で私を輕蔑してゐる。さうして始終私を嘗つてゐる。百事——愛、友誼、名譽——を得る道は私には絶たれた。何も斯も失なはれた。ワロヂアは何故早く



皆が見て居ると、私に合圖でも知らして呉れなかつたのであらう？ 私に少しも助けを與へて呉れなかつたのであらう？ 何故あの嫌な貴女はまた私の足元などに氣を着けて見たのであらう？ 何故ソニチカ——彼女は可愛い。が、何故彼女もその時皆と一所になつて笑つたのであらう？ 何故お父さんは顔を赤めて私の手を捉つた？ 私の事を恥かしいとでも思つたのか。何といふ酷い事をする。若しお母さんが彼處にゐたならば、大事なニコリンカに對して顔を赤めるなどいふことは、お母さんはしなかつたであらう。

そんな事を考へてゐると、空想が不覺私を快い遠く夢幻に運んで行く。私は田舎の家の前の草原や庭園の高い菩提樹のことなどを想起した。澄んだ池の上を燕が水とすれ／＼に翔んでゐる。青い大空は透通つたやうな眞白い雲が逍遙うてゐる。新しく刈つて積み重ねた草塚の香が匂ふ。その他様々の樂い、心を和がすやうな記憶が搔亂された想像の中に湧いて起つた。

やがて晚餐になつて、例の若い紳士は、吾々子供仲間の食卓の處に来て坐つて、私に對しては格別に注意を拂つてゐた。私は只今の失敗で、氣が煩悶してゐた處であつたけれど、さうされるのが少なからず私の虚榮心を満足せしめた。若紳士は何とか言つて私を嬉しがらしようと思つたらしい。彼は私に戯れて「好男子」と言つた。さうして大人で吾々を構ひつけやうとするものは一人もないのに、彼は種々な酒を注いで私に飲ました。晚餐のもう濟み際になつて給侍が来て、拭巾に包んだ瓶から私に三鞭酒を酒盃の唯四分の一ばかり注ぐと、若紳士は給侍に一杯注げと言つて、私にそれを一呑に飲ましめた。私は全身に快い温味が行亘つて、此の面白い保護者に對して懐しさを感じた。私は譯もなく唯「ハ、ハ」と高笑をした。

すると、忽ちまた舞踏の音が、大廣間から響いて来て、群客は食卓を起上つた。私はそれつきり若紳士と分れて了つた。彼は直ぐ大人の方に行つた。私は其方に



は随いて行かうとしないで、恰度ワラキイナ夫人が娘に何か言つて居る處であつたから、不覺好奇心に驅られて、それが聞取れる方に近寄つて行つた。と、

『もう唯三十分ばかりの』と、ソニチカが切願るやうに言つてゐる。

『不可ません、あなた。』

『ねえ、萬望、よう。』と、甜つたれて言つた。

『若しそれが爲にお母さんが明日病氣になつても、あなたはそれで好いんですか。』と言つて、ワラキイナ夫人は不覺微笑を洩らした。

『ね、好いでせう！ も少し好いでせう？』ソニチカは小躍して叫んだ。

『そんなに居てあなた何うするんです？……ちや、少し行つて踊つておいでなさい。おや恰度此處に好いお同伴がある。』と言つて夫人は私を指した。

ソニチカは私に手を與へた。吾々は大廣間に駈けて行つた。

酒を飲んだのと、ソニチカと手を執つてゐるのとで、心が浮いて、私は前の極の

悪い思も全然忘れて了つて、面白い足取をして踊り散した。馬の眞似をして、高慢さうに足を舉げて速歩を出す風をしたり、牡羊が犬を見て怒つた時のやうに、一所ばかり踏付けてゐたり、さうかと思へば傍で何と思つて見てゐやうが、其様な事には頓着せず、ハア／＼と言つて笑ふ。ソニチカもまた絶えず笑つてばかりゐた。私と一所に手に手を執つて輪を描いては笑ひ、或る老人の紳士が其處に落ちてゐた手巾の上を、わざと漸々に越すやうな足付をして跨いだのを見ては笑ひ、それから私が圖に乗つて、自分の敏捷のを示さうとして、天井にまでも届くやうに跳ね上つて見せると、ソニチカはもう絶入るばかりに笑ひ倒れた。

それから二人はお祖母さんの書齋を通りかゝつて、おと私は自分の姿が鏡に映るのが眼についた。顔は一面汗に洗はれたやうになつて、頭髮は搔亂れ、例の頭の頂天の總が平常よりは尙ほ悪く逆立つてゐる。が、一體の相格が、其晩は自分ながら嬉しいと思つたくらゐ愉快さうで、親切さうで、さうして壯健さうに引



立つて見えた。

『始終私が此様なであつたなら、私は嬉しいけれど。』と、私は獨り思つた。

が、自分ながらも見て嬉しいと思つた其の愉快な、壯健さうな、心配のなげな私の容貌の他に、も一つ鏡の中に一所に映つた陪伴の其の美しい小可愛い顔のあのに氣が着いて見ると、佳いと思つた私の顔が、また自分ながら見てゐて極が悪いほど、それはく上品で眼の覺めるばかり美しい。私に此様な素晴らしい者の心を引寄せやうなどと、何といふ私は蟲の好いことであらうと思つた。私は互ひの心が通じ合ふ様になど、は望みもし得なかつた。全くそんな事を考へもしなかつた。それとは何の關係もなく私の精神は唯幸福を以つて充された。私は此の歡喜の情に充滿た愛に報ひらるゝには、また他からの同じ此の愛を得るのを無上の幸福と心得た。で、此の雙思の情を何時までもく續けてゐたいといふのが何よりの希望であつた。何も斯も好い事ばかり。胸が鳩の翔きするやうに小躍りした。血潮

が洶々するほど湧いて来る。私は聲を揚げて叫びたくなつた。

それから二人で廊下を通つて行くと、恰度階段の下の暗い物置部屋の前に来かかつた。私は部屋を見て考へた。あゝ若し此の暗い物置部屋の中にソニチカと二人きりで、何時までもく一所に斯うしてゐることが出来て、さうして私達が其處にゐることを誰れも知るものが無かつたなら、如何なに幸福であらう！

『斯様なにしてゐると非常に愉快ですわねえ、え？』と、私は落着いた少し慄ぶ聲で言つて、私の歩調を少し速めた。で、自分で言つた事にはそれほど驚かなかつたが、それを言ふ氣になつたのに自分ながら驚いた。

『さうですわ、眞個に。』と、ソニチカは小さい頭を靜と此方に向けた。其の罪の無げな優しい表情を見て、私は氣怯れがしてゐたのが、しなくなつた。

『晚餐の時から尙ほさうです。でも何様なに悲しいか、私は痛いと言ひたかつたが、さう言ひ得なかつた。』貴嬢は直き歸つてお了ひなさつて、これ限りもう會ふ



ことはないと思ふと！」

「何故これ限り會ひませんの？」と、そつと下を向いて上靴の爪尖を凝乎と見詰めて、傍に立て、あつた格子造りの屏風を小さい指の尖で撫て「私お母さまと、毎時も火曜日と金曜日にはトウエルスキイ(上野廣小路とか日比谷公園)に行きますの。貴郎は御散歩に被行しやらなくつて？」

「僕、火曜日には屹度間違ひなく行くやうに願いて見ませう。さうして若し行かせないやうであつたら、僕獨り逃けて行きませう、帽子も何にも冠らずに。僕道を知つてゐます。」

ソニチカは突然に、「私ねえ、あの平常でも私の自家に被居やる小さいお朋友の方を何方でもあなた(英語の you を使はずして I think を使ふ場合、打解けた意味)と言ひますの。これから兩方でさう言ひませう。あなたお厭？」と、言つて可愛い頭を些し後に投げたやうにして、私の眼を正面に見た。

そんな會話をしながら私達は、また大廣間に戻つて來た。舞踊は今眞最中である。で、私が矢張り隔意のある言葉つきで一寸と何か言はうとして、それが賑やかな樂の音や舞踊の響に消されて了ふと、

「あなたと被仰いてば。」と、言つて微笑としながら、私の言葉を直した。

舞踊は果てた。私は何か其のあなたといふ言葉が何度も使はれるやうな、言ふ文句はないかと思つて考へてゐたが、さて何うもそれに都合の好い辭柄がない。私は打解けた口を利くほどの勇氣が出なかつた。が「あなたお厭？」といふ語が私の耳に何の事はない、人を酔はすやうな調子に響いた。私はソニチカの他は何物もまた何人も眼に入らなかつた。皆してその乙女の捲髪を掻き揚げて、耳の後に束ねた。すると今まで見なかつた額や顚顚の邊が見えて來た。それからまた多勢で青い肩掛を以つてその小さい鼻の尖だけがチヨッピリと見えるばかりに全身を纏んだ。私は、あれでは呼吸が詰りはせぬだらうかと思つて、氣遣はしさうに見



てゐると、少女は紅の小さい指の尖で口のまはりに小さい隙を明けた。それから母親と共に階段を降りやうとして、急に私達の方に向直つて如何な風に可愛い頭を低頭いて、戸外に消えて行つたか。

ワロヂアやイワンや若い公子も一同私と同じやうにソニチカを愛好いてゐた。吾々は階段の處に立つてゐて、皆で乙女の背後を見送つた。で、誰れに對して特にあの可愛い頭を下げたか私は知らなかつたが、唯其時何とはなしに私に向つてしたに違ひないやうに思はれた。

それからイワンと別れる時にも、私はセロツアと平常の通り口を利いて、平氣で「むしろ冷かに——握手をした。若し其時彼が私の愛を失ひ、従つて私に對する勢力をも失つたと知つたならば、平氣を装うて表面にこそ出さね、定めし彼もそれを悲しく感じたであらう。

それは兎も角、生れて始めて私は戀といふものを覺えたやうな氣がした。始め

てその感情の甜味を身に浸めた。たゞ懐かしいといふ心地ばかりで、疲れ切つたやうな感情を棄て、その代りに神秘に充ちた、心元ないやうな若々しい戀の感情を得た。

二十一 寢 床

『自分は今まで何うしてあんなに熱烈に、セロツアを愛することが出来たのであらう?』と私は寢床に横になつて考へた。『いや、彼には決して解らなかつたのだ。彼は私の愛をそれだけに思つてくれることが出来なかつたのだ。さうしてまた彼には到底それだけの價値がない。で、ソニチカは何うか、何といふ可愛い!』あな

たお厭?』て、今度はあなたを愛する番だ。』  
私は明瞭と乙女の小さい顔を心に描きながら、掛蒲團をすつぽり冠つて周圍をよく包んだ。何處にももう隙いた處がないやうにして、凝乎と暖い愉快な感情に



なつて、快い夢想や、追憶に耽つた。凝乎と綿の入つて出来た蒲團の輪廓の上に眼を据ゑて、一時間前に見た通りに鮮かに彼女の姿を描いた。さうして心の裡で彼女と話をした。其の會話の譯はちつとも分らなかつたが、會話の間に始終打解けたあなたといふ言葉を使ふのが、いふに言へない愉快な心持がした。是等の幻影が歴々と眼に浮ぶので、好い氣持になつて眼が冴えて眠らうと思つてもなかく寝着かれない。誰かに此の幸福の剩餘を分けて遣りたくなつた。

『兄さん！』と、不意に寢返へりをしながら稍大きな聲で『兄さん！ 君覺きて居るの？』

『否』と、睡い聲で『何だ？』

『僕は、兄さん、戀してる、僕は屹度ソニチカと戀して居る。』

『それが何うしたんだ？』と、彼れは身體を伸ばしながら言つた。

『さう、兄さん！ 兄さんには私の心の中が如何なだかとても分るまい、此處に恰度今僕が蒲團の中に纏卷つて居ると、それはく眼に見るやうにソニチカが現はれて、僕はそれと話したんだもの、それは非常に綺麗だつたよ！ 兄さんはお知なさるまいが、僕は斯う凝乎と其の事を考へて居ると、何だか悲しくなつて、頻りに泣きたくなつて来る、何うしたんでせう？』

ワロチアは身を動かした。

『僕は最早何にも他には希望はない……始終ソニチカと一所に居て、何時も見えてゐたい、そればかり。兄さん君も戀して居るの？ え、本當を言つて御覽なさい。』奇妙に自分は、誰もがソニチカと戀して居れば好い、さうして其れを皆な自分に明かしてくれ、ば好いと思つた。

『何だい、つまらない。』とワロチアは私の方に向き返りながら、『屹度……』

『兄さんも睡かないんだね。何か考へて居たんでせう？』と、自分はワロチアの少しも睡むさうにして居ない輝いた眼元を認めて叫んだ。さうして掛蒲團を脇に



跳ねた。「二人で話しやう。ソニチカは美しい、美かなくつて？ 僕は美しい、若しソニチカが僕に「ニコラスチヤさん、窓から飛び下りて御覽なさい。」とか、また火の中へ飛込んで御覽なさい。」と言つたら、僕は屹度直ぐにそれをして見せる……喜んで爲る。何であゝ可愛いだらう！」と彼女を想像に描きながら言つた。さうして何處までもく此様なやうな調子で獨り樂まうと思つて、無雜作にまた向側に轉び直つて、羽毛枕の下に頭を衝込んで「あゝ、僕は本當に泣きたくなつた、兄さん！」

「何だい馬鹿！」ワロチアは微笑して言つて、少時黙つて居つたが「僕はお前なんぞとは違ふんだ。僕はこう思ふ、若しさうだつたら、最初から彼女の傍に行つて話するね。」

「あ！そちら兄さんも矢張り想してるのでせう？」と、挾言んだ。

「さうして。」とワロチアは興味くしながら「それから僕は、彼女の小さい指だ

の眼だの唇だの鼻だの可愛い足まで接吻して遣る——僕は悉皆接吻してやる。」

「やあい！ やあい！」と僕は羽毛枕の下から叫んだ。

「お前は何にもまだ知らないんだ。」とワロチアはエラさうに言つた。

「さうだ、僕は知らないんです。併し兄さんだつて知つてやしない。兄さんは下らないことばかり言つてる。」と自分はそつと涙を溢しく言つた。

「うむ、さうだく。さう仰山にいふことはない、ソニチカは淑い娘だよ。」

二十一手紙

それから殆ど半歳ばかり経つて、翌年の四月の十六日、お父さんが私達の授業中二階に上つて来て、今夜お父さんと一所に田舎の方に立たねばならぬことを告げた。報知を聞いて、私は胸を壓されたやうであつた。私は直ぐお母さんのことに思ひ及んだ。



次の手紙が不意の出立の理由であつた。

四月三日附の御懇なる御文只今——今夕十時——拜見いたし申候。平生の通り、直ちに筆とり御返書認めまゐらせ候。御手紙は昨夜フエドルが町より持歸り候ひしも、夜いとう更けたれば、ミイミに渡し候に、ミイミは私が氣分優れぬ折からとて、わざと遠慮して全一日の間それをば私には渡し申さず候ひし。有様を申し候へば、私は少許熱の氣味にて、此四日前よりどつと床に就きしまゝ、いまだに枕を得離れかね居り申候。何卒く御心配御無用に御座候。最早快く存じ候へばイワン・ワシリツチ(醫師)さへ許し候へば明日にも起きられ可申と存じ居り候。病氣の原因は、前週の日曜日に珍らしき好き天氣に候ひしまゝ、小供を連れて外出いたし候に、恰度街道へ差掛りの、あの私が毎時も氣味悪がり候小橋の邊にて、俄に馬が暴れ始め、馬車をば泥濘の中に挽き込み申せし故、私

どもそれより徒歩にて有合ふ禮拜堂まで参り、其處にて馬車を引揚げるまで暫時休息いたし居り候内、次第に心苦しく相成り寒戦と發熱とを覺え候が初めに、書餉濟みてより、リュポチカを對手に樂を戯れ候に、頭が混亂いたし、不思議な耳鳴のみいたして、如何試み候ても符を取ること意に任せず、度々數を算へ違ひ申候。遂にミイミに助けられて歸宅いたし、そのまゝ床に就き申候。

次の日は甚だしき熱と相成り、早速老醫イワン・ワシリツチを呼び迎へ申候。同老人は尙ほ逗留いたし居り、再び速かに私を是非とも元の身體にならせ可申と申居り候。イワンこそ不思議なる老人に候へ！私が熱に浮かされて全く夢中に相成り候時も微睡ともいたさず、徹夜して私の枕許に附切り看病いたしくれ候。唯今私此の通り貴方さまへの御文認め居ることも承知にて、娘どもを對手に次の婦人室にて彼等に獨逸のお伽噺をして聞かせ、娘ども笑



ひ倒け居り候が、此室からよく聞き取れ申候。母  
 ラ・ベル・フ・ラマンド女二週間ばかり前より私宅に滞留いたし居り申候。母  
 御は所用ありとて何處へか立ち行かれ申候。娘はそれはく私を親切にい  
 たしくれ、如何なる秘事にも私には一切打明けて話し聞かせ申候。若し  
 良き人の手にて育て候ひなば、器量はよろしく、心立ては優しく、年は稚し、  
 行くくは立派なる處女に可相成申と存じ申候。なれども住む社會の如何  
 によりては、一生を傷ひ可申様の掛念無之とも測られず、若し私に澤山の小  
 供なければ、引取りて世話をして進せたらばなど存じ居り申候。  
 さてとや此冬は御計晝思ふやうにまゐらせられず候とかにて、カバロフカの  
 收入を流用せでは不相叶由、それにつけて私の同意を得たしとの御心遣誠  
 に痛み入り申候。何の御遠慮の候べきや。私の身に附たるものは、等しく  
 貴方さまの御身に付き候ものに候はずや。貴方さまは私に心配をさするを御

懼りなされて凡て實狀を御包み被遊候御事私に取りてはなかくに御怨  
 めしう存じ上げまゐらせ候。されどもつらく御推もじいたし候に、貴方さ  
 まはまたくよしなき御弄花の爲に巨額の御損失をなされしにあらずやとそ  
 れのみ掛念いたしまゐらせ候。乍併御損失については私腹立ちなど少しも  
 いたさず候間、此の儀さらく御配慮御無用に奉存候。唯々事件さ  
 へ滞りなく片付き候が何よりの御願ひに御座候。それについて餘りに御無用  
 の御心痛被遊間敷やう祈りまゐらせ候。幼き者の上を思ひやり候ひなば、貴  
 方さまよしなき勝負事などにお勝ちなされ候事餘りに望ましき事とも存じ候  
 はず。また貴方さまの御身の爲など思ひまゐらせ候ても、決して喜ぶべきこと  
 にも候はず。貴方さまの御利益は貴方さまの御損失が私に取りて少しの苦痛  
 にもならぬごとく、また少しの愉快にもなり不申候。唯返へすくも私の  
 胸を痛め候は、貴方さまのいつまでも賭博にのみ耽らせらる、一事に御



座候。日頃の御優しき御愛情にも係らず、そのみ御怨めしう存じ上げまゐらせ候。何卒々々此の事ばかりは少しも早う御思ひ止まりなされ候やう神かけてお祈り申上候。神様が貴方さまを御救ひなされ候やう念じ上げ申候。神様の御救ひを求め候は、貧を御救ひなされよとには御座なく、貧が何程の苦勞に候ぞ。さりながら幼き者の利害と私どもの利害と互に衝突いたし候やうの事情に立到り候を恐れ申候。幼き者の利害は御互に保護し遣すべき義務有之候。此上は私どもの財産に傷かざる内速かによしなき御慰み事御思ひ止まりなされ度やう奉祈候。私どもの財産は最早私どものものにては無之、幼き者の財産に御座候。その事思ひやり候は、未恐ろしく存じまゐらせ候。此の恐るべき不幸の念斷えず淺敢果なる女心を脅かし申候。貴方さま御不在中は私始め皆の者共それはく寂しうのみ暮らし居申候。田舎の春の景色また一入に眺め申候。露臺の戸も最早取外し申候。橙畑に通

ふ小徑四日ばかり此の方全く乾き申候。桃の花は今恰度満開に御座候。雪は處々に斑點に消え残り居り候。唯今リュボチカが今歳の花を始めて私の枕許に持つて来てくれ申候。醫師は最早三日も経てば全癒いたし、春の日向にて新鮮なる空気を呼吸し、病める身を暖め得べしと慰め居り申候。されば私の病氣の事もまた御損失の事も何卒く御心配は御無用に御座候。出来るだけ速かに御用御濟し被遊、今夏は子供を連れて當地へ御歸宅被遊候やう奉待候。其の用意のつもりにて、私に面白き計劃有之、それを實現するには是非とも貴方さま不被居候ては相叶ひ不申候。それから別に佛文で別な半端の紙に非常に慄えた筆蹟で次のやうなことが書いてあつた。

別紙にて私が病氣輕きやう申上げ候は全くの嘘に御座候。誰とて此の病氣の危篤なるを疑ふものとして無之、最早再び元の身體に本復いたし候。事到底望



みがたき事と存候。何卒一刻も御猶豫なく小供召連れ御歸宅被成下度、屹  
度今一度だけは此の病みたる手にて彼等を抱くこと相叶ふべしと被存候。  
それが今生にて何よりもくの願に御座候。

私斯様に申上げ候ひなば、定めし熱に浮かされたる謔言と覺召され候やも測  
られず候へども、決して左様に候はず、私の心のみは、かゝる折からなかな  
かに日頃にもまして確かに御座候。只管に私の心弱きがための杞憂とのみ思  
召され、よしなき空頼みより大事の際に夢々御油斷あるべからず候。私は神  
さまの御啓示によりて、此の世を去ること最早遠かるまじと信じ、思ひ諦め  
居り申候。私事空しく相成り候ても貴方さまに對し、幼き者どもに對し、  
私の愛は此の生を限に終り候ものとは夢々信じ不申候。私は今生の際に臨  
み、此の愛の感情なくしては、生存といふことの意味を認め候事思ひも寄ら  
ずと浸々相感じ申候。此の愛の感情の嘗て相盡き申候期有之べきや。私の

魂魄もまた貴方さまに對する愛なくしては得存生すべからず候。此の魂魄こ  
そは遂に滅する期あるべしとも存せず候。唯此の信仰あればこそこれ限り貴  
方さまの御傍を離れ候ても私は胸の内の安らかなるを覺え申候。私は何の  
恐怖もなく、心靜かに死期の近づくを待ち居り申候。

神様も常に私が死をば一層幸福なる生涯に入るの通路と認め居り候事を知  
召し玉はんと存じ候。それほどまでに潔よう思ひ諦め居り候に、如何なれば  
か、吾れにもなく涙に崩折れ候にや。何故に神様は幼き者と其を愛せる母親  
との間を裂き玉ふにや。貴方さまの愛情の陰に無限に幸福なるべき身を何故  
に今中途に死なで叶はず候か。

何事も神様の御意のまゝにて候。  
涙のために最早筆執ること叶はず候。多分生命ある内には御目もじ得叶ふま  
じと存じ候。海山にも譬へがたきこれまでの御恩愛御禮の申様も無御座候。



此の上は貴方さまに好き御報い有之やう唯そればかりを彼の世にて神さまに  
祈り可申候。さらば、假令私亡き後とも私の愛は決してく貴方さまを  
ば見棄て申さざるべく候。その事何卒御忘れなされ間敷候。さらばぞよ可愛  
きワロチア。さらばぞよ可愛きニコリンカ。  
彼等もまた何時か私を得忘れはて候べきや。

此の手紙の中にまたミイミからの佛文の短い手紙が包んであつた。それは、  
此の度奥様の頻りに仰せられ候、悲しき御覺悟。不幸にも醫師の申候處  
によりて餘りによく確證いたされ候に一同痛心いたしまゐらせ候。昨夜奥様  
には、此の御文直にも郵便局まで届け候やう御仰せ候ひしも、若しや御夢中  
にてかく仰せられ候事もやと、私一人の計らひにて今朝ほどまで其のまゝ留  
置き申候處、今朝になりて奥様はあの手紙如何にいたしたるやとの御尋  
ねに、また其まゝにてあるならば、直に焼き棄てよとて、さぞかし貴方さま

の御驚愕なされ候事のみ繰返へし仰せ事有之候。片時も御猶豫なく、早  
早御歸宅被遊御存命中今一度御對顔あらせられ候やう奉待候。亂筆御許し下  
され度候。

ナタリヤ・サビスチナも十一日の夜は御母さんの病室で一夜睡らずに明かした  
さうで、後に私に話して聞かしたのでは、お母さんは此の手紙の前の方を書きさ  
しにしたまゝ、脇にある小さい卓の上にそれを置いて、寢入つた。

で、ナタリヤは斯う言つて話した。『私も、正直に申しますれば、其時私も腕  
椅子に凭れたまゝ、つい微睡してゐますと、編かけてゐました靴袋を手から滑落  
しましたくらいで、でも一時頃と思ふ時分に夢現に私はお母さまが何方かと何  
かお話しでもなさるやう言つてゐらつしやいますのが耳に入りましたので、私は  
眼を明けてよく見ますと、お母さまはお床の上にお坐りなさいまして、斯う可愛  
いお手をお合しになりまして、さうして涙をハラ／＼流してゐらつしやいました。



「萬事もこれでお仕舞になるのか。」と仰有つて御手でお顔をお隠しなさいました。で、私は跳ね起きて、「何うかなさいましたか？」とお尋ね申しますと、  
 「お、婆や、私は今妙なことを夢に見たよ。」と仰有います。  
 『で、私が種々にお尋ね申しましたけれど、遂々何にも仰有いませんでした。唯小さい卓を傍に寄すやうにと仰有つて、また手紙のあとをお書きになり、御自分の眼の前でそれを封じて直ぐ投函すやうに私に仰せなさいました。それから後段々悪くおんなさいました。』

### 二十三 田舎に何があつたか

四月の二十五日に、私達はペトロフスコエの家の玄關に馬車から降りた。お父さんはモスコウを立つた時に、ひどく沈込んで居つた。ワロヂアが「お母さんは悪いのですか。」と尋ねたら、お父さんは悲しうに其の方に向いて黙つて頷いた。旅

行中は幾何かそれでも元氣がついたやうであつたが、家へ近くなつた時分に一層痛はしさうな顔容になつた。馬車から飛び降りながら、息せき出て來たフォカに『ナタリアは何處に居る？』と尋ねた時、その聲が震えて眼が潤んで居つた。人の好いフォカ老爺は、私達をテラリと見たまゝ、下を向いて、前座敷の戸を明けながら脇を向いて返事をした。『奥さまは、もう六日といふもの室から外へお出ましになりませぬ。』

ミルカ——後で聞いたのだが、お母さんが悪くなつた其の日からミルカは哭いてばかり居つたさうだ——が、いきなり嬉しさうにお父さんに飛付いて凭れ掛りながら啜泣をして兩手に接吻した。お父さんはそれを脇へ押し退けて客間の方に行つた。其處から婦人室を通つて開戸一つ隔て、直ぐ寢室へ行かれるやうになつて居る。其處へ近づくに従つて、お父さんの不安の念が強くなつたのが、動作に顯はれて居る。婦人室に入つて爪先で歩いた。息もせぬ。吾れと十字を切つて、



閉め切つた開戸の把手を握らうとすると、ミイミが頭髪を亂したまゝ、涙に濡れて廊下から走つて来て『あ、御前さま。』と落膽した顔をして私語いた。さうしてお父さんが把手を回して居るのを見て、微かに『此處からは参れませんが、發條が狂つて居りますから。』と言つた。

此様なことまでが、如何なに私の小供心を悲しく感せしめたであらう。それが恰度ある恐ろしい前兆のやうに思はれた。

私達は女中部屋の方に廻つた。廊下でアキムに會つた。薄馬鹿で平日はその澁面が愛嬌になるのだが、其の時は可笑く見えなかつたばかりではない、その無心な冷淡した顔容が一層私の胸に響いた。女中部屋では二人の女中が仕事をし居つたが、私はハツと思つたほど、悲なしげな顔容をして、起つて此方に挨拶をした。ミイミの室を通つてお父さんは寢室の戸を明けた。私達は入つた。戸口の右手に二つ窓があつて、布が掛つて居る。その一つの方でナタリアが鼻の上に

眼鏡をかけて靴袋を編んで居る。毎時のやうに接吻はしないで、唯起ち上つて眼鏡越しに此方を眺めた。その顔に涙が流れた。私は今まで靜かにして居つた者が、私達を見て急に聲を揚げて泣くやうな人間を好かぬ。

左手に屏風が立つて居て、其の後に寢臺がある。小さい卓や薬を取散らかした小箆笥や大きな安樂椅子がその脇に置いてある。安樂椅子では醫者が微睡をして居る。寢臺の傍に白い衣服を着た美しい可愛い娘が立つて、筒袖を巻き上げて、お母さんの頭に氷を當て、居る。頭はその時見えなかつた。此の娘がお母さんの手紙に書いてあつたラ・ベル・フランンドであつた。此娘が後に私の一家の上に重大な役を演じた。

私達が入ると、少女はお母さんの頭から片手を離して、胸の皺を氣にしながら小聲で『夢中でゐらつしやいます。』と言つた。

私は其の時ひどく疲勞れて居つたが、無意識にそんなつまらぬことにまで氣が



着いた。薄暗い室の中は、薄荷やコロメ水やホフマン滴薬の香が立單めて蒸熱る臭がする。その香が頭に浸込んで、その後其様な香を嗅いだり、又は思ひ出したりしても、直ちに空想が私をその薄暗い息の詰るやうな室に呼び戻して、その恐ろしい時の細々した事柄や、ほんの一寸したことまで想ひ起さしむる。

お母さんの眼は開いたまゝ、何にも見て居なかつた。あゝあの恐ろしい相格、忘れやうとて忘れぬ！ それは／＼苦痛のさまを表はして居つた。

私達は彼方に連れて行かれた。

私が後刻にナタリヤにお母さんの最後の容態を尋ねた時に、こういつた。

『貴下さまを彼方にお連れ申した後で、お母さまはしばらく何かに壓付けられでもするやうに、頻りに身悶えて居らつしやいましたが、それから枕にお頭を壓付けて、天使のやうにすや／＼とお休みなさいました。私はお薬を持つて參る筈のを誰れも持つて參りませんから、何故かと一寸見に出まして、間もなく歸つて

參りますると、お母さまは身體を躁きながら手眞似でお父さまを招いで居らつしやる。お父さまは傍へ顔をお寄せになつたが、思つて居らつしやることを言ふお元氣がないのでございませぬ。お母さまはやつと唇をお明になつて、『神さま／＼！ 子供／＼！』と唸るやうにお仰ひました。私は急いで貴下さまをお連れ申さうといたしましたら、醫者が私を止めて『さうしては尙ほ興奮なさるから可くない』と申しますので、そのまゝにいたして居りますと、やがてお母さまは黙つて兩手をお舉げになりました。それは何ういふ覺召か、神さまの他には誰れも知らう筈はございませぬが、きつとお母さまは貴下さまがたの居らつしやらない所で、お祈禱をして下さつたのでございませう。さうして神さまは御最期にお兒さまがたを御覽になることをお許しにならなかつたのでございませう。それから今度は御自分で手をついてお起きになつて、それは／＼お痛はしい聲で『どうぞ彼等をお見棄てなさらぬやうに。』とお仰ひました。そのうち漸々心臓に痲痺が來て、眼色



にもその苦痛が見えました。すると仰げに枕の上に倒れて蒲團に噛みついたまゝ、  
ハラ／＼と涙をお流しなさいました。』  
『ウムそれから？』私は後を尋ねた。  
けれどもナタリヤはその後を言はなかつた。彼方に向いて泣き伏した。  
お母さんはひどく苦んで死んだ。

二十四 悲 哀

翌日の夜遅く、私は最う一度お母さんが見たくなつた。恐ろしさも忘れてそつ  
と戸を明けて、爪足して廣間に入つて行つた。

室の真中の卓の上に柩が置いてある。その周圍には高い銀の燭臺に蠟燭が燃え  
て居る。隅の方に僧侶が坐つて低い單調子な聲でお經を讀んで居る。

私は戸口に立ち止つて眺めた。眼は泣き腫らして、神経は疲れて居る、何も見

分けがつかぬ。燈火、花緞緞、天鷲絨、大燭臺、笹縁を取つた薔薇色の枕、リボ  
ンのついた帽子、花冠、透徹るやうな蠟燭の光など、其處にあるものが妙な風に  
一所になつて回轉つてゐるやうだ。お母さんの顔を見やうとして椅子に攀ち上つ  
た。すると蒼白い黄味を帯びた透明つたやうな物が、ヌツと眼の前に顯はれた。  
私にはそれがお母さんの顔とは何うしても思はれなかつた。じつと見入つて居る  
と、段々それが懐しい顔容に見へて来る。いよく自分でお母さんに相違ないと  
思つた時に私は慄然とした。それにしても何うしてまあ彼様なに閉た眼が窪んだ  
らう。何うして頬にあんな恐ろしい蒼白い紫が、つた斑點が出来たらう。何うし  
て一體の相格があんな硬い冷さうな顔になつたらう。何うして唇があんなに蒼白  
く、輪廓が際立つて、嚴めしい、凄いほど靜かな表情になつたかと思ふと、頭髮  
の尖から脊筋へかけて冷然とした。私は眺め入つた。何だか知らぬ強い力のある  
ものが、その生命のない顔へ私の眼を引着て居やうに思はれた。眼を据ゑて見て



居ると、華かな生活や、幸福の狀態が繪になつて顯れて来る。私は眼前に横つて居る死骸を——自分とは何の關係もないものゝやうに——うつとりと見入つた。その死骸がお母さんだといふことを忘れた。お母さんが今こうして居るかと思へば、直ぐあゝして居るやうに思はれ、生きて居て楽しさうにしたり、笑つたりして居る。すると私の眼を据ゑて居るその蒼白い顔の中のある顔容がハツと私の胸を撃つた。私は恐ろしい現實を想ひ起して戰慄をしたが、矢張り見詰めて居た。するとまた幻影が現實を掻き消す、さうするとまた現實の意識が幻影を掻き散らかす。仕舞には想像が段々弱くなつて、迷ひが覺めて来る。現實の意識もまた消えて、私は感覺を失つた。何程そんな狀態で居つたか、何うしてさうなつたか、自分では少しも覺えて居らぬ。唯暫らくの間、身に覺えがなくなつて、高く持ち上げられるやうな、いふに言へぬ心地の好い、悲哀げな愉快を覺えたゞけを知つて居る。

定めしお母さんの美しい靈魂が、もつと好い世界に飛んで行かうとして、私達を残して置いた世界を、悲しさうに振返つて眺めたのであらう。さうして私の悲んで居るのを見て、憐れに思つて慰めるために愛の翼を翹いて、慈悲深い笑顔を——此の地上に降つて來たのであらう。

戸がギーと鳴つた。他の坊さまが交代つて、前のを休ますために入つて來た。その音で私は氣がついた。その時先づかう思つた。自分は泣いても居なかつたし尋常に椅子の上に立つて居ればかしたから、何の感もない小供が、唯好奇しさに可哀さうだぐらゐに思つて、椅子の上に這上つて居るのだ」と、坊さまは見て取つたらうと。

私は十字を切つて禮拜をして、それから泣いた。

今其の時の感銘を想ひ起して見るに、その忘我の瞬間こそ、唯一の純粹の悲みであつたとが分る。埋葬の前後も始終泣いて居つた。悲かつたが、其悲を想ひ起



すと、自分ながら恥かしい。悲みと共に自愛の感情が混つて居つたからだ。一時は誰れよりも最も自分が悲んで居ることを見せやうと思つたり、また他時は唯目的もなく其處に居る者の顔容や、ミイミの頭巾を觀て居つたり、持つて居つた感情は専ら悲みばかりでなかつた。さうしてその悲み以外のものを隠さうとして、私は自から欺いた。此の理由からいへば、私の悲みは不誠實な不自然なものであつた。加之不幸といふことを自分が知つてゐるのが、愉快なやうな、ある心地がした。私は力めて「不幸」といふ自分の意識を起さうと試みた。この主我的の感情が何よりも私の純粹の悲みを妨げた。

ひどく悲しんだ後は何時もあることだが、其の夜はぐつすり寢入つた。翌朝目を覺すと、涙も乾いて神經も静まつて居た。十時に一同祈禱に参列した、葬式を出す前にお供養をするのだ。室は奥様にお分れをせうとて、涙ながらに寄集うた奴婢や百姓などで一杯になつた。お勤行の間は私も儀式の通り唱名して、十字を

切つて頭を下げた。併しながら精神では祈禱をしなかつた。随分薄情であつた。着せてくれた新しい上衣の脇の下が窮屈で氣になつたり、股引の膝を汚さぬやうにと、その方に氣を取られたり、來て居る者をジロく見て居つたりした。お父さんは柩の頭の處に立つて居た。手にした手巾のやうな蒼白い顔をして、涙を押しかねて居た。黒い上衣を着た春の高い蒼白い物思はしげな顔容、例の如く上品な、整然とした態度で十字を切つて、手を下に着けて叩頭をして、坊さまの手から蠟燭を取つて柩の傍に寄つた。さうするのが非常に確乎して居つた。

お父さんは此様な場合に、能く彼様なに確乎して居ることが出来たものだ、私は何故か餘り面白からず思つた。ミイミは背後の壁に凭れ掛つて、漸々に立つて居るらしく見えた。衣服はグチャグチャに、帽子は横の方に滑り、頭を震はして、魂切るやうな聲を出して泣き止めぬ。眼が赤く腫れ上つて居る。さうして又しても手と手巾とを以つて顔を隠す。彼女はさうして皆の手前を假泣きした後では、



一寸く面を掩ふて暫く休むのだと私に思はれた。それを見て、私はその前日彼女がお父さんに向つて、お母さんが亡くなつた爲に落膽して最早生きて居る希望はなくなつた。もう慾も得もなくなくなつた。天使——彼女はお母さんを天使と言つた——は死ぬる折にも彼女のことを忘れないで、何時までも彼女とカテンカが行末を守護つてくれると言つたといつて、何様な話して居つたか、想ひ起した。彼女はその話をしてひどく涙を溢した。恐らくその悲みは嘘ではなかつたらう。併しながら純粹な涙ばかりでもなかつたらう。

リュウボチカは黒い喪服を着飾り、涙に濡れて偶に柩を眺めては、小さい頭を俯けて居つた。さうして唯小供らしい恐れした表情をして居つた。カテンカは自分の母親の傍に寄添ふて、長い顔だが毎時の通り紅い好い色をして居つた。ワロヂアの天真な性質は悲しい時でも變らない。彼れは時とすると考へ深い確乎した眼付で何物か見詰めて立つて居る。さうかと思ふと、おと口元をピョグ／＼と動かす。

手提ぐ十字を切つて、恭しく頭を下げた。

## 二十五 悲しき最後の追憶

お母さんは亡くなつた。併しながら吾々の生活は別にこれまでと變らぬ。同じ時刻に同じ室に起臥する。朝晩のお茶、お晝餐、夕飯、少しも變つたことはない。卓も椅子も元のまゝに在る。家の中も、吾々が生活の状態も、何一つ變つたことはない。唯お母さんが居らぬ。私にはこう思はれた。斯かる不幸のあつた後は一切變へねばならぬ。從來の生活の方法ではお母さんに對する追憶の情を汚す譯だ。お母さんの居ないのが、歴々と胸に浮ぶ。

葬式のある前の晩、御飯後に私は眠くなつたので、一つナタリヤの室に行つてあの柔かい羽毛の寢床で、綿の填つた温い掛蒲團を被つて、こつそり寢やうと思つて入つて行くと、ナタリヤが寢臺に横になつて居つた。大方睡つて居たのであ



らう。私の足音を聞いて起き上つて、蠅除けに被つて居た毛織を掻き遣り、頭巾を着直しながら寢臺の端に腰を掛けた。

『おや、何うなさいました？ 此處へ来てお睡れと申しましたか、さあお横なさいませ。』

私は婆の手を執つて『何うだねお前は？ 私は何うもしやしないが、唯一寸來て見たのだ。婆こそ疲れてゐる。横になつて居たらいいだらう。』

『いゝえ若様、私は澤山に休みました、それに今は寢てゐたのでもございませぬ。』と、太息を吐いて言つた——が、私は婆が愁歎の餘り此の三日といふもの微睡ともせぬのを知つて居る。

私はナタリヤと共に吾々の不幸を語らうと思つた。私は婆が忠實で慈愛心に富んで居ることを知つて居た。それゆゑ婆と共に泣くのが私には責めてもの慰めであつた。

暫く無言の後、寢臺の上に腰を掛けながら私は『婆も此様なことにならうとは思はなかつたらう？』と言つた。すると、老婆はびつくりして不審さうに私を眺めた。大方、私が何故そんなことを今更言ふのかと思つたのであらう。『誰も此様なことにならうとは思はなかつたねえ。』と私は繰返した。

婆は優しい同情の籠つた眼で、チリと私を見て『さやうでございませぬと、誰が貴下、此様なことにお爲りなさらうと思ふのですか、婆は今でもまだ本當とは思はれませぬ。私のやうな老婆こそ、早くお墓の中に入つて仕舞つた方が宜うございませぬ。大旦那様——貴下さまのお祖父様（いつまでも忘れませぬやうに！）は、二人の御兄弟に一人のお妹御さまをお持ち遊ばしましたが、私はそのお三方をもお葬送しました。皆私よりはお若うございませぬ。さうして此度は又罰で、お母さまに先立たれますやうな仕合でございませぬ。神様の覺召が成されます！ お母さまはそれだけお功德がお有なさるから、神様がお連れになつた



のでございませぬ。』

此の簡単な考が浸みくくと私の心を慰めた。私はナタリヤの側へ寄添ふた。婆は胸に両手を重ねて上の方を静と眺めた。その落窪んだ涙の眼に、静かな、大なる苦痛が表はれた。

彼女が幾歳月の間、全力の愛を注いだ人の側へ、少しも早く連れて行つて下さるやうに神様に願つたのであらう。

『さうく、私が彼の方のお守をしたり、衣服をお着せ申したりして居つたのは、つい此の間のやうにしか思はれませぬ。さうして私をナスチャくとお呼びになりました。私の方に走つて来て、肥した可愛いお手で私を捉へて接吻をしながら、「ナスチャく」とお仰いますから、私が戯談つて、「お姫様、嘘々、私が可愛いものですか、今に成長くなつてお嫁さまに行つて御覽遊ばせ、ナスチャのことは忘れてお仕舞ひなさるに。」とさう申しますると、「暫く考へて居らつしやいました

が、「いや、私と一所にナスチャを連れて行かないくらゐなら、私、お嫁に行かない方が好い、私はきつとナスチャを棄てやしない。」とお仰ひました。さうして今此の通りに私をお棄てなさいました。私を待つては下さりませぬ。それはく私を可愛がつてくださいました。眞に誰にだつてお優しい方でございました。お母さまのことは、貴下さまにも忘れやうたつて忘れやしません。お母さまは人間ではございませぬ、天使でございませぬ。お母さまの靈魂が天國にお出でなされたら、無貴下さまをお慈みなさいませぬよ。』

『何故？ お前は天國に行つたらといふけれど、お母さんは、もう天國に行つて居るぢやないか。』と私は尋ねた。

ナタリヤは、私の方に近く寄添ひながら、聲を低うして、それはく感情に充ちた、自信を表はして、

『いえ、お母さまの靈魂はまだ此家にゐらつしやいます。』と上の方を指し『正し



い者の靈魂は、極樂に行く前に四十遍も變りますし、又四十日の間は自分の家に停つて居ることが出来ると申します。』  
と私語くやうに言つた。私もつい引入れられて、覺えず眼を上げて何か探すやうに天井の隅の方を見回した。

ナタリヤは此様な調子で長い間話した。それが恰度平常自分で見たり聞いたりして居る、珍しくもないことを話してもするやうに、平易に忠實やかに話すので、聞いて居ても少しも疑ひを挟む餘地がない。私は息を殺して耳を傾けた。婆が言つたことは私にはよく解らなかつたが、全くそのいふ通りに信じた。

『え、お母さまは今此處に居らつしやいます、私達をちやあんと見ていらつしやいます。きつと此處に居らつしやいます、聞いて居らつしやいます。』  
と言つて、婆は頭を垂れて黙つた。涙の流れるのを拭く爲に、手巾を取らうとして起ち上つて、私の顔を眺めながら聲を震はして、『これが爲に神様は私をすつと

御自分のお傍に近く連れて行つて下さいました。最早樂も何もなくなりました。もう生きて居る空はございません。此の先き誰を大切にいたしましたませうぞ。』

私は涙を抑へかねつ、恨めしさうに『婆は私達を可愛つてはくれないのか？』と言つた。

『飛んでもない、貴下さまをお可愛がり申さいでかな、ではございますが、私はお母さまほどお可愛がり申した方はございません。あのやうにしやうたつて、最早出来はいたしません。』

婆は最早言へなくなつて、彼方に向ひて聲を揚げて泣いた。私は最早睡くなくなつた。二人向合つて無言のまゝ泣いた。

フオカが入つて來た。私達の状態を見て、大方邪魔をせぬやうにと思つたのであらう。静と此方を見て、黙つて戸口に立止つた。

『老爺さん何か御用かね？』と、ナタリヤは眼を拭きながら尋ねた。



『お供物にする乾葡萄を一斤半、砂糖を四斤、それから米を三斤。』  
 ナタリヤは一寸艷煙草を掴みながら『直ぐ参ります、直ぐ。』と言つて、急いで戸棚の方に行つた。會話から想ひ起した悲哀の名残が、婆が用事をして居る間消え失せた。婆はその用事をさもなく重大なことに心得て居るのだ。

ナタリヤは砂糖を取出して、秤量に衡けながら『何でまた四斤も入るの？ 三斤半もあれば澤山だらう。』と呷々言つて、秤量から塊を三つ四つ取つた。『始終ぢやないかね、昨日もお米を八斤出して上げたのに、又入るつて！ 他の品は上げるがお米はもういけないよ、ワニカ奴が不幸事を好い事にして、誰も見て居ないと思つて……お主の品物を好にしきやうとしたつて、私の此の眼の明いて居る内はさうはさせませぬ。が、まあ好いよ。そら持つてお出で！ 入用ほどワニカに呉れて遣るが好いよ。』

あれほど哀愁に沈んだ話をしながら、直ぐ又此様なに呷々言つたり、細かい勘定

をしたりする、その變轉の急なのを見て、私は腹の中で俄かに驚いた。後に其の事を考へて、心の中では假し如何なと思つて居やうとも、自分の用事をする場合には、婆は少しも本心を亂さない、習慣の力で仕慣れた事が出来るのだと思つた。

入るといふだけ呉れて遣つて、坊さまに出すために拵へて置かねばならぬ饅頭のことまで氣を付けて、フオカを室外に出して置いて、また私の傍に来て腰を掛けた。

會話は再び前に戻つた。私達はまた泣いては拭き、泣いては拭きました。

ナタリヤと此様な會話を毎日く繰返した。婆の静かな涙と、信實の籠つた沈んだ言葉とが私を慰めた。

併しながら吾々は間もなく分袂された。葬式が濟んで三日目に一家モスコウに移つた。それつきり私は婆に會はなかつた。



お祖母さんは、吾々が歸つてから始めてお母さんの亡くなつたことを知つて、ひどく悲んだ。それから一週間人事不省に陥つて、私どもは傍に行くことを許されなかつた。薬は飲まない、口も利けない、睡ることも出来ぬ、滋養物は少しも取らぬといふ有様で、一時醫者は生命にも別條ありさうに言つた。自分の室で、獨りつくねんと安樂椅子にもたれて居るかと思ふと、不意にゲラ／＼と笑つたり、歐々泣いたりする。が、涙は少しも溢さぬ。さうかと思ふと、急に痙攣を起して狂人のやうな聲を出して、辻褄の合はぬことを口走る。自分の不幸を誰かに詰らうと思つたのであらう。非常に力を入れて、何か見えぬ者に對つて恐ろしい言を去つて口を利く。椅子から飛び上つて大股に室中を歩き回る。さうして後は無中になつて仕舞ふ。

何かして私が室に入つて行つたら、毎時もの通りに安樂椅子に恚れ掛つて居つたが、一寸見た所落着いて居るのに、その眼付を見て私はハツとなつた。それはそれは大きな眼を見開いて、何處となく狐疑として居る。正面に私の方を眺めたが、私が見えなかつた。唇を嫣然とさせて滅入るやうな静かな聲で、

『此處にお出で、さあ此處にお出で。』と言ふ。私に言つて居るのだと思つて、側に寄つたが、此方を見やうとはせぬ。『お、お前はお知んなさるまい！ 何様なに私はまあ苦しい思ひをしたか、お前はまあ好う来ておくれたねえ！』それを聞いてお母さんを眼に見たやうに想つてゐるのだと分つたから、私は其處に立ち止つた。お祖母さんは顔を澁めて『皆私に、お前はお亡くなんなさつたと言つた。嘘ばつかし！ お前が私より前に死んでなるものかね。』と言つて、物凄しい神經的の笑ひやうをした。愛情の強い者に限つて哀情もまた人一倍深い。併しながら此の愛情があるがために、また勢ひその悲哀をも打消して、苦痛をも癒して呉れる。人間の道徳性といふものは、肉體よりは一層力の強いものである。哀情の爲に決して生命を傷ふやうなことはない。



一週間も経つ内にお祖母さんは、本當に泣けるやうになつて具合も直つた。正氣に返つてから、先づ最初に考へたのは私どものことであつた。私達が一層可愛くなつて来た。お祖母さんの安樂椅子の傍にばかりついて居つた。お祖母さんは静かに泣いては、お母さんのことを話した。さうして撫でるやうにして吾々を可愛がつた。

お祖母さんの哀情を知つて居るものは、誰もそれが眞から出て居るのを疑ふものはない、その顔容がいふに言はれん悲しさうであつた。が、私は何故かお祖母さんよりも、ナタリヤに對して一層多く同情を寄せた。今日までもまだあの質朴な情愛深い婆ほど、純粹に誠實にお母さんを愛したり、また悲んだりしたものは無いと信じて居る。

お母さんの亡くなつたのと共に、幸福な幼年時代は終つた。さうして新たな時代が始つた。それは少年時代である。併しながら私の幼年時代の經歷や、感情の

發達に、強い慈悲深い感化を與へたナタリヤ・サビスチナの追憶の爲に、彼女が死んだ折のことをも少し言つて置かう——それつきり私は會はなかつたのだ。

後日に聞いたのでは、吾々が出立した後の悲哀と、生活の勝手が變つて来たのと、責任がなくなつたのとで、めきくと老衰がひどくなつて、お母さんの亡くなつてから恰度一年振りに、水腫が出来て、どつと床に就いた。

ペトロフスコエの大きなガランとした家で、親族も知己もなく、孤獨で暮すのはナタリヤに取つて定めし痛かつたらう。孤獨で死ぬるのはそれよりまだ痛かつたらう。家内の者は皆ナタリヤに優しくつて、叮嚀であつたが、自分から進んでは誰ともさう親しい交際をしなかつた。さうしてそれを自慢にして居つた。その譯は、自分のやうに主人の信用を得て、種々な品物の鍵を預つて居る執事の身では、他人と親しくして居るが爲に、つい偏頗な鄙しい量見になり易いから、めてそれを避けるやうにして居つたのだ。



一生懸命に祈禱をして、神様に一心を委ねるのを唯一つの慰にして居つた。それでも時としては、何か生物の涙と同情とに依つて慰を得るより他には、誰しも自分の力では何うともすることの出来ぬやうな、淋しい思ひのすることがあるものだ。そんな場合にナタリヤは寢臺に小犬を置いて、それに話をしいく撫で、遣りながら静かに泣く。犬は其の手を舐めて黄色な眼で凝乎と婆を見て居る。尨犬が哀れに吠え出すと、それをば静と宥めて『これく、お前がそんなに言はなかつて、私は自分でも速で死ぬるのを知つて居るよ。』と言ふ。

死ぬる一と月前に、自分の箆笥から白い更紗や唐縮緬や、淡紅色のリボンだのを取り出して、奴婢を相手に、自分で白衣や頭巾を拵へて、葬式に入用な品を何から何まで残らず整へた。また主人の箆笥の中の品物をそれく擇り分けて、嚴重に一々書き付けて、管理人に渡した。後には自分の所有物としては、絹の衣服が二枚、お祖母さんに何時か貰つた古い肩掛、それからこれも貰つたお祖父さんの

軍服と、これだけ残つた。婆は大切に始末をして置いたから、軍服の刺繡でも金縷でも新のまゝで、羅紗に蠶魚一つ出来て居なかつた。

その絹の衣服は寢衣か短衣にするやうにとて淡紅色の方をワロヂアに、茶の辨慶編の方を私にくれ、又肩掛はリュウボチカに、それから軍服は吾々兄弟の中で早く役人になつた者に呉れるやうに遺言をした。其の他自分の持つて居る金銭や品物は、お葬式と供養との入費に當て、四十留別にして置いた外、一切婆の弟に殘した。弟はずつと以前に自由(解放された)の身になつてから、遠方の役所に勤めて、道樂に身を持ち崩して居つた。それゆゑに婆は生きて居る内は弟とは交通をしなかつた。

後で弟が自分で遺産を受取に遣つて來た時に、それが多寡く書附面で二十五留にしかならぬのを見て、何うしても本當とは思はぬ。大家に六十年も勤めて一切自分で取り仕切つて、甘い利益を取りながら、その癖吝嗇な生計をして居つ



た老婆が唯これんばかり、何にも残さぬといふ筈はないと言つた。が、實際その通りであつたのだ。

二月の間煩うて居つたが、それはく基督敎徒らしい忍耐をして、苦痛に耐へた。少しも口小言や愚痴らしいことを言はず、例の通り断えず一心に祈禱ばかりして居つた。さうして喜んで懺悔をした。

他の奴婢どもに對しては好くないことを仕向けても居ればと、その容赦を乞ふた。また吾々一家の者に對しては誠にお禮の申述べやうもないと、長老ワシリに傳言を頼んだ。「が、私はお主の所有を絲屑一つだつて何うもしたことはない。」と、之れを自分で唯一つの特長にして居つた。

自分で支度して置いた纏衣と頭巾とを着て、枕に據掛り、死際まで僧侶と會話を止めなかつた。誰に對しても後に懸念のないことを僧侶に繰返へした。さうして十留を渡してお布施にするやうに頼んだ。自分で十字を切つて、後に倒れな

から嬉しうに神様の名を唱へて呼吸を引取つた。

彼女は愁歎なしに死んだ。死を恐れず、寧ろ幸福として歡んでそれを迎へた。

よく言ふことだが、眞にさうなるのは極めて稀だ！ 彼女は死を恐るゝことが出来なかつた。何故なれば確かに福音を信じて死んだからだ。死んで福音の掟を成就したのだ。彼女の全生涯は純潔であつた。無我の愛であつた。犠牲の塊であつた。

彼女の信條が假し今少し高かつたらば、それが何うか？ 彼女の生涯が假し今

少し高尚なる目的の爲に捧げられたらば、それが何うか？ 信條と事業とが高

尚でないが爲に此の純潔なる靈魂が愛と賞讃の價を減ずるであらうか？ 彼女は生涯に於て、最も善良なる最も偉大なる行爲を成就げた——彼女は悲哀と恐怖なしに死んだ。

遺言に従つてお母さんの禮拜堂の傍に埋葬つた。荆棘の叢生した丘の上に、黒



い鐵柵の中に圍まれながら、靜かに睡つて居る。私は禮拜堂に參詣る毎に、その柵の處に行つて頭を地に着けて拜むことを忘れぬ。

時々私は禮拜堂と黒い垣の真中に黙つて立つことがある。其の時痛ましい追憶が不意に私の胸を突刺す。さうして斯ういふことを思ふ。嗚呼神様は、いつまでもく私をして二人を悲ましめるやうに、是等の二つの物と私とを結び付けて居るのであらうか。

## 第二編 少年時代

## 一 早速の旅立

再び二つの供廻がペトロフスコエの家の玄關前に廻された。一つの方にはミイミ、カテカン、リュボチカと、女中と家扶のヤコフとが乗り、もう一つの方にはワロチアと私と、それから従僕のワシリが乗つた。

お父さんは二三日後れて立つ筈で、帽子も被らないで玄關に立つてゐたが、馬車の窓に窺いて十字の符號をした。

『では御無事で！ さあ驅した！』ヤコフも馭者も帽子を脱いで十字を切つた。

車體が凹凸道を動搖き始めた。大きな並木路に沿ふて立列んだ榛木が一つづつ、飛んで行く。私は少しも悲しいとは思はなかつた。後に残して行くものよりも之



れから以後のことには、み氣を留めた。今の先まで私の胸に充ちて居つた痛しい記憶に關聯れた種々な物象は遠くなるにつれて段々薄れて、急に力のある新鮮な、希望に充ちた生命と親むやうな感味に變つて來た。

滅多にあんな數日を送つたことはない——私は敢て愉快とは言はない。何故なれば、全く愉快い一心になつて了ふとするには、まだ何となく良心の苦痛を感じた——でも旅行をして居る四日間といふものは、何とも言へぬ愉快で面白かつた。何時も戰慄をせずには、その前を通れなかつた閉め切つたお母さんの室の戸や、誰も恐ろしいやうな氣がして傍へ寄らうとせぬ、蓋をしたまゝのピアノや、黒い喪服や（私達は皆な輕便な旅装を着て居るのだ）尙ほまた何でも物さへ見れば、直ぐ何としても言ひ消すことの出來ない亡失といふ念を顯然と想ひ浮べしめるので、何につけ斯につけ不覺お母さんの記憶の邪魔をせられぬやうにとの恐れから、私をして可成生命の面影あるものを避けて見ぬやうにせしめた。その様々の物象

も皆な最早私の眼の前には消えて無くなつて了つた。さうしてその反對に今は新しい、繪のやうな景色や物象が私の注意をそつちの方へ惹いて、春の装を凝らした自然が現在の歡ばしい満足の感や、將來の彩華な希望を私の心に確然と刻み付けた。

誰でも變つた境遇になるとさうだが、不斷から急性なワシリが、朝は早くから用捨もなく掛蒲團を引剥いで、もう出立つ時刻が來た、ちやんと支度が出来たと言つて迫り立てる。朝好い心地に微睡して居るのを目を覺されて、せめてもう二十分もさうして居らうとして蒲團にくるまつて、身動きしてゐると、ワシリが頑張つてゐて、何時までも根よく蒲團を引卷らうといふ顔をして居るのを見て仕方なく飛び起きて顔を洗ひに庭に走つて行く。

前座敷ではもう茶瓶を煮かしてゐて、馬丁のミチカが恰度野生の林檎のやうな赤い顔をして其の下を吹き付けてゐる。戸外はまだ濕つて薄暗い、香のする厩肥



から水蒸気が上騰つて居る。朝陽が炫輝とした愉快な光を東の方の空に射してゐる。旅宿の庭の周圍を取圍んだ小家の葦屋根が露でキラ／＼して居る。その下に私達の馬が秣を食へ廻はして居るのが見えて、靜かにそれを嚼む音が聞える。乾いた肥を積み上げた上に偃臥つてゐた黒い老犬が、朝陽がそつと射して來たので、尾を振りながらノソリ／＼と日の當る方へ體を持つて行く。旅宿の女房は急なさうにギイ／＼と門の戸を明けて、考へ込んだやうにしてゐる鶏を街道の方へ追ひやる、其處にはもう牛や羊の啼く聲が聞える。女房はまだ睡さうな隣家の者と一言何か言ひ交す。縞の縹絆を着たフイリツプが深い車井から清冽い水をボタン／＼溢しながら釣瓶を引上げて、それを櫛で拵へた水槽に空ける。其の周圍には夙から目を覺した家鴨が、もう水溜でピチャ／＼やつて居る。私は愉快さうに、多髯なフイリツプの立派な顔と腕の太い筋肉とを見てゐた。力を入れる度に筋肉が裸の毛腕に明々と浮き出る。

屏風越しに行動する音が聞える。其處にミイミが少女連と寝て、昨夕は屏風越しに私達と話をしたのだ。

マスチアが私達がジロ／＼見るので隠すやうにして、衣服だの種々な物だの持運んで、何度も私達の眼の前を往復する。さうして終に戸を明けてお茶の案内をする。

ワシリは無暗に氣忙しなう始終室を出たり入つたりして、今彼を持つて行つたかと思へば、此度は此れを持つて行くといふやうに、一つづつ品物を運ぶ。私達を手招きして催促する。出來るだけ急いで出立するやうに種々にミイミをたしなめる。馬にはもう馬具が着いて、時々待遠しさうにチャラン／＼と鈴を鳴らす。鞆や小匣や衣装の入つた箱などゴタ／＼した荷物がまた積れる。その後で私達も乗る。が、其の度に馬車の中は荷物の中が出來て、私達は腰を掛ける處もない。何うして昨日は斯様な澤山な荷物を積むことが出來たのであらう？ さて何



ういふやうに腰を掛けたら好いか譯が分らん。遂々私達が預つて居る胡桃や茶箱などの包を下に降ろして場所を空ける。

東の空を掩うた濃い白い雲の眞上から恰度太陽が昇つた。周囲の原野が静かな愉快な光輝で照り映えて來た。其の邊にあるものが何でも凡ていふに言へぬ美しく見える。私は何となく氣が落着いて軽くなつたやうに思はれる。露で光つて居る枯た切株や牧草の中を、道路が宛然廣い際限のないリボンのやうに遠く向ふの方に展びて居る。路傍の其處此處に陰氣な柳や小さい粘々した嫩葉の出た若い榛木が、往還の固りかけた車の轍や、短い青草の上に長い静かな影を射して居る。車や鈴の單調な響が聞える。それを破つて道路の直ぐ上で雲雀が頻りに歌つて居る。馬車に特有の蠓魚の食つた織物の、臭と塵埃と混つたやうな厭な臭氣が朝の強い香蒸に拂ひ消される。私は魂魄まで愉快なやうでゾクゾクする。さうして何でも好いから、早く何うかして見たいやうな感情になつた。それが本當の樂の證據

だ。私は旅宿ではお祈禱をしやうともしなかつたが、楽しいにつけ、此のお勤行を粗末にして置くと、今日の中に何うかして、或る不幸が身に降りかゝつて來はせぬかと、何度もそんな様な氣がするので、私はその過失を改めようとして帽子を脱いで馬車の隅の方に向いて、或る祈禱の言葉を吟誦んで、そつと誰も見えぬやうに上衣の下で十字を切る。併し種々な珍らしい物象が眼につくので、其の方に氣を奪られて、有頂天になつて何度も同じ言葉を繰返へす。

街道に沿ふた向ふの田圃徑に徐々と動く姿が見える。彼等は順禮だ。頭に織しい布巾を巻きつけて、赤楊の皮で造つた囊を背負ひ、汚れて襤褸した脚絆を着け、重さうな菩提樹の皮の草鞋を穿いて居る。一所に揃へて杖を揮りながら此方の方を見やうともせず、一人づゝ並んで、悠然とした考へ込んだやうな足付で練つて行く。彼等は何處へ行くのだらう、何故あゝいふやうにして行くのだらう、まだこれから遠く處へ行くのであらうか。今に彼處に行つたら彼等の影法師と、



柳の影とが一所になるであらうなど、そんな何でもない事をば獨り考へてゐた。すると向から四頭の驛馬に引かせた幌馬車が急いで遣つて來た。五六間前から謹ましやかな好奇心の眼を以つて私達を見て居た顔が、二秒と經たぬ間にもう向の方へ飛んで行つた。さうして其等の顔が、私とは何の關係もないのが妙に思はれる。で、屹度もう此の後も私は二度と彼等を見ることはあるまい。

此度は朧毛な、汗みづくになつた馬が二頭、絆綱に引張られながら道路の片側を驅けて來た。チリン／＼といふ、小さい鈴の音が時々聞えるか聞えぬくらゐに鳴る。馬車には驛遞の若い者が、片方の耳の上に縁を立てた羊の毛の帽子を被つて、怠屈さうに長く後を引張つて小歌を謡ひながら乗つてゐる。その顔容から姿態にさも／＼怠るさうなのが現はれて居る。郵便の小僧になつて、歸途は馬に乗つて物悲しさうな田舎唄の一つも唱ふのが此の上もない幸福でももあるやうに、氣樂な怠儀さうな態度をして居る。

峡谷を越えて遙か彼方に、晴れ渡つた蒼穹を劃つて山寺の緑な屋根が見える、彼方にも小村があるのだ。大家の赤い屋根と緑な花園が見える。誰が其處に住んで居るのだらう。子供も居るだらうか、お父さんやお母さんや家庭教師も居るだらうか。私達も行つて、其の家の主人と知己になつて見たいなと思ふ。と、此度はよく肥えた太い足をして、馬車に挽かした大きな荷車が長く續いて行く。それを私達は追ひ越した。「何を積んで行くんだ？」と、ワシリが眞先の馭者に問ねた。聞かれた男は腰を掛けて板場から大きな脚をブラ下げて、鞭を揮り廻しながら長いこと呆然した眼付でジロ／＼此方を見て、まさか聞かすにも居られぬので、仕様事なしに、ほんの義理の返事らしいことを何か言ふ。「何を持つて行くんだ？」と、ワシリが一度此度は他の男に尋ねて見た。すると、其の男の傍に新しくはあるが粗い毛氈を頭から被つて偃臥つてゐたも一つ他の男が、それを聞きつけて一寸毛氈の下から、赤銅色した頭とそれに好く釣合つた赤い顔と赤い髻とを差覗



けて、吾々の方に平氣な嘲けたやうな視線を投げて、また隠れた。で、私は是等の馭者の方でも、屹度私達に誰で、さうして何處に行くんだとは知らぬであらうといふやうなことを考へて見る。

もの、一時間半ばかりも、此様なやうな種々な空想に心を奪はれて、里程標に記された曲つた數字には不覺氣も附かなかつた。さうして居る内に太陽が漸々頭や背を温めて、街道に次第に塵埃が立つて來た。私は預かつてゐた茶の入物を段々持扱かつて來て何度となく自分の場所を換へた。熱苦しくなつて倦いて來て、それからはもう里程標と其れに記された數字ばかり氣を附けた。さうして驛場に着くまでには、もう何のくらゐ時間がかゝるだらうかと、色々に勘定をして見た。

『十二露里は三十六の三分の一だ。それでライベツツまでは四十一露里だから、まだ唯三分の一しか來ぬ。何て遠いことだ。』と此様なことを考へる。

ワシリが箱の上でコクリ／＼とやり始めたのを見て、私は『ワシリ、其處に行

かしてくれ。』と云ふと、ワシリは首肯く。で、私達は居場所を代はる。と、彼は直ぐさままた軒を立て、他の者の居る席がないやうに其處等中轉げ廻る。私が占領した高い所から、眼の前にそれは／＼面白い繪のやうな景色が現はれる。ネルチンスカヤ、チーコン、ライエワヤ、アボセカリイの四頭の馬については、私はそれ／＼違つた性癖だの氣分だの、細かいことまで皆よく知つて居る。

『フィリップ何うしてチーコンは、今日は左にしないで右に着けたの？』よく知らぬながら問いて見た。

『チーコンですか。』

『さうしてネルチンスカヤは、些とも挽いては居ないではないか。』

『チーコンは左に着けることは出來ません。彼奴は左に着けられるやうな馬ぢやないんです。一口にいへば左につけるやうな馬がまあ馬なんだ。彼奴は其様な馬ぢやありません。』フィリップは私の後から言つたことには、何とも答へないでさ



う言つた。

さういひながら彼は右の方に屈んで、力任せに手綱を引張りながら、尾と足との用捨もなく、妙な手付で哀れなデーコンを滅茶苦茶に鞭つ。すると、馬は有りたけの力を出して挽き出すにも係らず、自分の腕の怠れてホツとするまでは打ちやめぬ。さうして何うした譯か整然と頭の上によく載つて居るのに、一寸帽子を横丁に傾けて見る。私は機を透さずフィリップに、私に遣らしてお見せといふ。すると、フィリップは一つづゝ私に手綱を渡して遂々六本皆渡して仕舞ふ。鞭も私の手に握つた。嬉しくつて堪らない。私は種々にしてフィリップのするやうにして見やうとして、斯うか彼かと聞いても、何うしても満足するまで教へてくれぬ。唯見て居て、此馬は引過ぎて居るとか、彼馬は少しも引いてゐないとか言ふばかり。終々私の胸前に臂を突出して手綱を取り上げる。段々熱くなつて来る。小さい白い雲の片——私ともがよく羊雲だといふ——が、石礫玉のやうに高く

く吹上つて、一所に固つて薄墨色になる。娘達の乗つた馬車の窓から、徳利と小さい包とを持つた手が窺いた。馬車が動いてゐるのに、ワシリが頓狂な愉快な顔付をして臺の上から飛んで降り、乳餅とクワス(酒)を少許持つて来てくれる。急な下坂に來ると、皆馬車から降りて、私達は彼方の橋の處まで競走をして行く、ワシリとヤコフとは制動機をかけて、轉げ落ちないやうに手で以つて兩方から馬車を支へて行く。それからミイミにさう言つて、私とワロヂアと彼方の馬車に乗り、リュボチカとカテンカとが此方へ乗變つた。それを娘達は非常に喜ぶ。全く私達の乗つてゐる方が、何でもよく見えて面白いのだ。また時としては熱い時分、樹蔭を通るやうなことがあると、娘達の馬車に遅れて遅々しながら、青葉の枝を裂き折つて、馬車の上に涼しい園亭を建てる。と、間もなく歩いて行く、園亭が此度は娘達の馬車をまた追ひ越す。それを見てリュボチカが、突刺すやうな聲で嬉々といふ。何か非常に面白いことがあると、リュボチカはきつとさう



いふやうな聲を出す。

私達が辨當を使つて休む村がある。もう煙だの煤だの羊皮だの、混つた村らしい臭がする。話聲や足音や車の響きが聞える。鈴の音が原野で鳴る音と違つて来た。道路の兩側に草葎屋根や、彫刻をした古風な木製の入口が見え初めた。赤いのや青いのやの扉戸の附いた小さい窓も見える。其處から妙な婦人の顔が窺く。薄い小ぼけな襦袢一枚の小さい百姓の兒女が、不思議さうに大きな眼をして、兩手を差上げて凝乎と立つて居る。さうかと思ふと馬車の後から、塵埃の中を小さい裸足で疾走つて来て、フィリップが嚇かす眞似をするのも構はず、靴に取付いて攀ち上らうとするのもある。赤銅色をした土民が方々から急いで出て来て、言葉や手振で手々に自分の方へ旅客を誘ふとする。やがてギイと門の戸が明いて一同庭に入る。安息と氣儘との此の四時間！

二 雷 雨

太陽が西に傾いて、熱い光線が斜に頸や頬を焼きつける。馬車の横側が焦げつくやうで手を觸ることが出来ぬ。道路に甚い塵埃が起つて、空一面に充ちた。それを吹拂う微との軟風もない。眞前には始終同じ距離を置いて高い塵埃だらけな車輛(娘達の)が變化もなく轉つてゐる。折々馭者が答を揮廻はすのが後から見える。馭者の帽子、ヤコフの頭巾も眼に入る。私は自分で自分を持扱かつて、何うして好いか分らなくなつた。私の直ぐ横ではワロヂアが塵埃で眞黒けな顔をしてコクリく微睡をしてゐる。フィリップの背が動いてゐる。私達の乗つた馬車の長い影が、斜に射した光線を受けて地に這ふてゐる。そんなものを見ても少しも興を惹かぬ。私の凡ての注意は向の方に見える里程碑と、それから一群の雲とのみ集まつた。初め空に散亂つてゐた雲が、今は一つの大きな黒い塊になつた。時々



雷が遠く鳴るのが聞える。これが何よりも少しも早く驛場に着けば好いが、私の心を焦らした。雷雨といふことが言ふにいけない悲しさと恐しさとで壓付ける感を引き出した。

直ぐ次の驛場までまだ十露里はある。それに大きな、黒ずんで紫がかつた雲が一群になつて、微との軟風もないのに何處からともなく、私達の眞上を急に動いてゐる。太陽が黒い形體の雲の間から雲黒に鮮かに照映えて、其處から灰色の條文が向の方の地平線にまで廣がつてゐる。時々電光が遠くで閃めく。微な鈍い唸りが聞える。それが段々に大きくなり、近くなつて、終には大きな雷霆となつて満天に轟き渡る。ワシリは馭者臺に突立つて馬車の幌を擴げる。も一つの馬車でも雨の用意をする。雷の鳴る度に馭者等は帽子を脱つて十字を切る。馬が耳を押立て、此方へくと押寄せる夕立雲から起して来る、新鮮な空気を嗅ぐやうに鼻の孔で呼吸をする。馬車は塵埃だらけの道に沿ひてすすく急いで驅ける。私は

壓迫けられたやうで、全身の脈を通して血の循環が急になつたやうに思はれる。太陽は既先陣の雲に隠れかけて、今最後に顔を覗けて地平線の凄いほど黒くなつた邊に些と光線を照らして、さうして消えた。眼に入る光景が俄然として變化を來たして、陰氣な色を帯びた。秦皮の林が揺れて、木の葉が鈍い白つちやけた色になつて紫色した雲を背景として浮き出たやうに見える。それがサラくと音を立て、頻りに鼓翼りする。大きな榛の頂上が動き出す。枯草が道路を横さまに飛ぶ。白い胸毛の燕が、恰度吾々を停めやうとでもするやうに、馬車の周圍に輪を描いて、それから馬の足許を飛ぶ。急がしく翼きをして鴉が風に逆つて斜に翔つて行く。整然とボタンをした皮の膝掛(馬車中にて)の端が風に吹上げられて、濕氣を含んだ一陣の風が、よつと寄せて来るたびに車體にばたくと打ちつける。電光が馬車の中に閃めき渡つて視覚を眩ます。瞬くほどの間灰色の織物だの衣服の縁だの、隅に畏縮つてゐるワロヂアの形像だのをピカリと光らす。同時に吾々の



頭の眞上で般々たる響が轟き渡る。其の音が大きな螺旋形に何處までも高くく上り、何處までも廣くく廣がつて、段々に力を増して最後に耳を聳するばかり轟然たる霹靂となる。皆が覺えず身慄をして呼吸を止める。神の憤怒！俗人の此の觀念の中に如何に多くの詩趣があることよ！

車輛は倍々速に回轉る。ワシリやフィリップが、頻りに手綱を揮り廻はすのを背から見ても、彼等が恐れてゐるのが分る。馬車は今、とある丘を馳下つて板橋を轟き渡る。私は身動きするのも恐れて暫時世界の破裂するのを待つ様な氣である。仕損つた！尻帯が破れた。雷は小休もなく耳を聳するばかりに鳴り動めく中に、橋の上に立ち往生させられた。

私は馬車の内側にそつと頭を凭せて、沈んで行くやうな思で呼吸を詰めながら、喪失したやうになつて、凝乎とフィリップの肥つた黒い指の動くのに眼を据ゑた。彼は徐ろに紐を結んで尻帯を締直し、掌を以つて横端の馬を打いた。

不安な悲みと恐との感が、暴風の勢と共に身内に潮し増さる。と、常に雷鳴に先つてある静寂の大運動が来る。其の時の心持は、若し此の有様で物の十五分間も續いたなら、私は屹度激動されて死んだかも知れぬくらゐだ。するとそれと同じ時にその橋の下から、汚れた襦袢になつた襯衣一枚のまゝで、腫上つた呆然した面で、頭髪をクルクル坊主に剃つた、道化たさまの人間がヒョコリ出現はれた。引曲つたヨイ／＼の脚をしてゐる。其奴が手の代に光つた赤い盤根を以つて、それを馬車の方にすつと差出した。

「若い旦那さまあ！お願ひだ。何卒腰拔を助けて下つせい！」と、乞食は微な聲でお經を讀むやうに、祈禱を繰返へしく言葉の句切り毎に十字を切つて、帶の上まで頭を付けてお辭儀をする。

私はそれを見ると、何とも言ひやうのない膽が冷りとするやうな感情がして、頭髪がブル／＼と慄え上つた。吃驚して夢中のやうになつて、私は眼が自然に其



の乞食の上に据つた。

旅行の間捨施をする役のワシリは、如何いふやうにして尻帯を強くするが好いと言つて、フィリップに指命してゐたが、もうすつかり準備つてフィリップが、手綱を集めながら馭者臺に攀ち上つてから、ワシリは脇腹のポケットから何許か捉み出さうとした。が、乞食に驚かされたと思ふが早いか、眼を眩ます一道の電光潑刺と迸しつて、瞬時一面の峽谷に輝き瀰る。馬は一時にとつとばかり停立つた。すると些しの間も置かず、天空も崩れて落掛るかとはかりに思はれる、轟然たる雷鳴が續いて起る。風が次第に強くなつて、馬の鬣や尾やワシリの外套や、膝掛の端が疾風を食つて、一つ方向に氣立たましく吹拂はれる。大粒の雨が一滴皮の幌の上に重さうに落ちた。續いて二滴、三滴、四滴、忽ち太鼓の如く一時に打ちつけて来た。満目の全景が拍子を揃へて、雨滴の返響を返へしてゐる。ワシリの臂の動く状態で、財布の口を開けてゐるのが分る。乞食は矢張り十字を切つ

てはお辭儀をしながら、轢殺されはせぬかと思ふほど車輛に密着いて走りながら『お願ひだ、やつて下つせい！』を繰返す。

遂々銅貨が私達の横を飛ぶ、哀れなる奴は吃驚して道の真中に停立つた。覗衣が身内までビッシヨリ濕つて、彼が瘦せ削けた四肢にピツタリと密着いてゐながら、疾風にハタ／＼煽られる。やがて彼も見えなくなつた。

強風に吹拂はれて、ますます横繁吹に降る雨は、宛然手桶を覆したやうに降かける。ワシリの背から雨滴が河のやうになつて、膝掛の窪みに溜つた泥水の中へ流れ落ちる。初めは雨滴に打れて球の形になつてゐた塵埃が、段々泥濘の液體に變つて来た。その中を輪が跳ねて走る。車の動揺が少なくなつて、泥水の小河が車轍に流れる。電光が次第に廣く青白くなつた。一面雨の音になつてから最早雷鳴にはそれほど驚かなくなつた。

やがて雨も少しは激しくなくなつた。雷雲も追々薄らぎかけた。太陽のある邊



が明るく見え出した。鮮かな蒼穹が一所薄い灰色の雲の端から透けて見える。少時すると道の水溜だの、節を洩れて落ちるかと思はれる、鉛直に降り濃く細い雨だの、新に雨を浴びて艶々した路傍の草葉の緑だのに、臆病らしい太陽の光線が輝く。

黒い雷雲が此方に寄つた時と同様に、脅かすやうに反対の方の天を掩ふて廣がつた。が、私はもう驚かない。何とも言ひやうのない、希望に充ちたやうな愉快な感情を覚えて、速かに壓迫するやうな恐怖の感を拂ひ去る。大自然と等しく私の精神まで、蘇生つたやうな生延びたやうで自然に微笑れる。

ワシリは外套の襟をまた折返し、膝掛を脱して振ふ。私は馬車から覗き出て、認か新鮮な香の高い空気を吸ひ込む。娘達の馬車も清潔に洗れて、輝きながら前を馳せて行く。馬の背も尻帯も手綱も車輪の輪鐵も皆濕つて、漆を掛けたやうに太陽に映えて閃めく。道の片側には處々浅い溝渠によつて仕切られた、小麦の野が

際涯もなく續いて、それが露を帯びた土地や緑の色と一つになつて輝き、地平線の果てまで宛然模様のある絨氈を敷いたやうに展つた。また其の反対の側は胡桃や野生の櫻の下生のある秦皮の林が、天恵に露はふて静と立つた。その清瀟に洗はれた小枝から透き徹つた雨滴が、ボタリ／＼と去年の枯葉の上に落ちてゐる。鳥冠のある告天子が、喜はし／＼に歌ひながら周囲を翔廻つて、さうして落ちるやうに地に降りた。濕つた叢林の中に小鳥の落着ぬらしい動靜がする。郭公の歌調が樹立の奥から冴かに浮漂うて来る。森林の強い香氣が、春の雷雨の後は一層人の心を恍惚さす。榛だの、葦だの、枯葉だの、葦だの、野生の櫻だの、薫を香いでゐると、私はもう馬車の中に静としてゐられなくなつて、踏臺から飛んで降り、叢林に駈けて行つて、雨滴の濃さかゝるにも係らず、揺々とする櫻の小枝を掻取つて、それを以つて自分の顔を静と打きながら、珍奇かな香を認か吸込む。

大きな蹴揚の泥の塊が長靴に粘着いて、靴袋がグシヨ／＼に濕つて居るのも厭



はず、私は泥濘の中を跳ねて娘達の馬車の窓の處に行き、

『リュウボチカ！ カテンカ！ これ、何て綺麗だらう！』と、叫びながら櫻の小枝を四五本握つて揮り翳す。

娘達は首を覗けて『まあ！』と叫ぶ。ミイミが彼方へおらつしやい、轢き殺されますと喊く。

『香いで御覽、如何に好い匂ひがするか！』と私はまた叫ぶ。

### 三 新見解

カテンカは私の傍に坐つて、可愛い頭を屈めて、考へ深さうに輪の下を飛んで行く塵埃の起つ道路を凝乎と見詰めて居つた。私は黙つて彼女を見守りながら、何時にない其の薄紅の小さい顔に、悲しい小供らしくない表情の見えるに氣が着いて、不思議に思つた。

『最早直ぐモスコウに着く。貴女は何ういふやうに思はれて？』と私は尋ねた。

『私分りませんわ。』と氣の無さうに返辭した。

『だけど、まあ何う思はれて？ セルプコフよりか大きか何うか。』

『何に？』

『あゝ、何でもない。』と私は紛らした。

が、カテンカは本能の力——本能といふものは能く他人の心を讀み分け、會話の手蔓になるものである——に依つて、自分が冷淡にして居るので、私が困つて居ることを覺つて、顔を上げて私の方に向いて、

『貴下のお父さまが、私達もお祖母さまと一所に居るやうに貴下に仰有つて？』

『えゝ、お祖母さんは僕達と一所に居ると言ふんです。』

『そして私達一同其處に居ますの？』

『さうですとも、僕達は家の半分の方に居るし、貴女がたは片方の半分に住る



んです。さうしてお父さんは傍の離室に居るんでせう。ですけど御飯の時は一同階下でお祖母さんと一所に食べるんです。』

『私のお母さんは、そう言ひますよ、貴下のお祖母さんは、それはく氣高い方ですつて——そして氣六ヶ敷い。』

『いゝえ！ 唯最初に一寸さう見えるばかりです。お祖母さんは氣高いことは氣高けれど、少しも氣六ヶ敷ありません。其の反對にお祖母さんはそれは親切な面白い人です。貴女が若しあれを見たら——お祖母さんの名付け日に如何な舞踊會があつたか！』

『でも私、何だかお祖母さまが恐いのよ、そしてまたよく分りませんが、若し私達が那の何にしましたら……』

カテンカは不意に言ひ詰つて、復た考へ込んだ。

『何です？』と私は氣掛りで尋ねた。

『何でもありません。』

『えゝ、ですけれど、貴女は言つたでせう「よく分りませんが……」つて。』

『そして貴下も言つたでせう「お祖母様の何に如何な舞踊會があつたか！」つて。』

『えゝ、貴女が其處に居なかつたのは、本當に惜しかつた。それは大勢お客が來てたのです。——四十人も、音樂だの、軍人だの——そして僕も踊つたのです。カテンカさん！』私は言つて、途中で話を止めて『貴女は聞いて居ないんだねえ。』と言つた。

『えゝ、聞いて居ますよ、貴下もお踊なすつたと仰有つたでせう。』

『何故其様なに悲しいんです？ 貴女は。』

『人間は何時だつて面白くばかしはありませんわ。』

『否、貴女は僕等がモスコウから歸つた時から大變に變りました。本當に聞かして下さい。』私は彼女の方向に直つて、決然した風で『何故貴女は其様なに妙に



なつたのです？」

「私が妙にですと？」カテンカは私が言つたことに、興を惹かれたやうに急に冴えて答へた『私少しも妙ぢやなくつてよ。』

「貴女は以前の貴女のやうぢやない。あの頃は、私達はそれはもう何にでも同じでした、貴女は僕達を親類のやうに思つてくれました。さうして恰度僕達が貴女を愛するやうに愛してくれたぢやありませんか。それに今は貴女は其様な真面目になつて、僕達から離れるやうにするぢやありませんか……」

「少しも其様なことはありませんわ！」

「否、僕に言はして下さい。私は耐忍し切れないで遮つた。其の時既う、何時も涙の潤む前にある、鼻の上が些し探つたいやうな氣持を覺えた。私は長い間抑へつけてゐた優しい感想を口に出して言つた『貴女は私達を避けるやうにする。さも貴女は私達には用のないもの、やうに自分のお母さんだけと話しする。』」

「え、其れは始終同じで居ることは到底も出来ませんわ。人間は或時かは變らなけりやなりませんわ。』と、何う言つて好いか分らない時分には、何事も運命といふやうなもので、説明して仕舞ふ習慣のあるカテンカは、さう答へた。

私は一度斯ういふ事があつたのを憶えて居る。それは、カテンカがリュウボチカと暗嘩をして、リュウボチカが「馬鹿少女」と言ふと、カテンカは「誰でも伶俐にやなれない、或人は馬鹿でなければならぬ。』と言つた。が、此の「時としては變ることが必要である」といふ返答は私を満足させなかつた。さうして私な尙ほ質問を續けた。

「何故それが必要なの？」

「何故でも。私達、何時までも御一所に居れないんですもの。』カテンカは心持顔を紅くしながら、フィリップの背を凝乎と見詰めて言つた。『私のお母さんは、お亡くなりなすつた貴下のお母さまとは、御一所に居れたんです。それは那の方は



お母さんのお朋友であつたからです。だけれども、伯爵夫人とは始終折合ふか何うですか、大層氣六ヶ敷いお方ださうですから、分らないんですもの。加之、私達は何れ何日かは分れねばなりません。貴下はお富貴、貴下はペトロフスコエをお持ちなさいますけど、私達は貧乏ですもの、お母さんは何にも持つてないんですもの。』

貴下は富貴、私達は貧乏！ 是等の言葉、及びそれと關聯した觀念が、私に頗る奇妙に思はれた。其の時分の私の意見に依れば、乞食と百姓との他には貧乏人はない。而して此の貧乏といふ觀念と、可愛い美しいカテンカとを結合して、想像することは何うしても出来なかつた。ミイミとカチャとが吾々と同居するやうになつて以來、彼等は永久同居するのだ、凡ての物を等しく分配するのであらうと私には思はれた。左様と他は考へられなかつた。併しながら今になつて始めて彼等の地位に關して、幾多の新しい譯の分らぬ思想が、茫然と私の頭に浮んで來た。さうし

て自分は、覺えず面が赤くなつた。カテンカの顔を、面と向つて見得なかつた。らる、私達が富貴であることを恥かしいやうに思つた。

『吾々が富貴であつて、さうして彼等が貧乏であるといふとは、一體何を意味するのであらう？ 如何にして其の世襲財産といふものが、吾等に離別の必要を來たすか、何故吾々は吾々が有する物を等しく分つことが出来ない？』と獨り考へた。が、此様な事に就いて私がカテンカに向つて話するのは、不可といふことに氣が着き、さうして是等の演繹的の論理に反して、早くも或る實際的の本能に依つて、カテンカのいふのが正當である、さうして今は彼女に向つて此の觀念を説明すべき場合でないかと私に分つた。

『貴女は本當に他へ行く積りですか。何うして私達は離れて暮すのでせう？』  
『何うなりませんか、私にもまた其れが思はれますわ、ですが、若し左様いふことになつたら、私は私で思慮がありますわ。』



『貴女は女俳優になるといふのでせう！ 何て下らない！』私は、女俳優になるといふのが、不斷からカテンカの抱いて居た空想の一つであつたことを知つて居たので、さう言つた。

『否、それは私がまだ稚い時には其様なこともいひましたけど。』

『ぢや何を貴女はします？』

『私は寺院に行きますわ、そして黒い上衣だの、天鵝絨の頭巾だの着て居たいと思ひますわ。』

と、カテンカは泣聲を揚げて言つた。

讀者は、汝の生涯の或る時期に當つて、汝が従來見馴れた凡ての物象が、俄然として恰も汝に其の反對の側を向けた如くに、凡ての物に就いて汝の見解の忽然として一變したことを認める場合が起つたか。此の道德的變化に類するものが、吾等の旅行中に於て始めて私に起つた。其の時から私の少年時代は始まるのである。

始めて、吾々の家族だけが唯り此の世界に住むのであるのではない。凡ての利害は唯り吾等に關してのみ決せらるゝものではない。世上には吾々と何等の共通の點を有たぬ、吾等に對して何等の注意を拂はぬ、吾等の存在に就いてすらも、何等の觀念を有たぬ人間に向つて、他の生活が存立するものであるといふ、明瞭な觀念が私の脳裡に入つて來た。疑ひもなく、私はその前凡て之れを知つて居つた。が、私は今私がそれを知つた如くには知らなかつた。私はそれを認めもしなかつた、また感じもしなかつたのだ。

或る思想は屢く従來全く豫期せざる、ある何でもない經路に依つて自信となるものである。さうして其の經路は、他の精神が經由して結論に達する經路とは離れたものでありながら、遂に同じ結論に到達する。

カテンカとの談話はひどく私の感情を動かした、私をして彼の女の將來の地位境遇に思ひ及ぼさしめた。其の談話はまた私に向つて今言ふ經路を成した。私は



今吾等が過ぎ行く村落や都邑を眺めたり、また吾が一家の如く其處には少くともある一つの家族の住んで居る家々を眺め、また一寸とした好奇心で吾等の馬車が行く後を見遣つて居るが、忽ちまた永久に見失つて了ふ、婦人小兒等を眺め、商人、百姓、其れはベトロフスコエの百姓共が爲るのを見馴れて居たやうに、吾等に向つて挨拶をしなかつたばかりではない、一瞥と見向いて呉れもしなかつた。その商人や百姓を眺めなどしてゐると、始めて疑問が心に浮んだ、若し彼等が吾等に向つて何等の注意を拂つて居ないとしたならば、何を彼等は思つたり仕たりして居るであらう？ さうして此の疑問から他の疑問が續いて起つた。如何して、又何をして彼等は生きて居るであらう？ 如何して彼等は其の子供を育てるであらう？ 彼等は子供を教へるだらうか、それとも遊ばすであらうか、如何して彼等は子供を罰するであらう？ 其様なことが次から次へ考へられる。

四 モスコウでは

モスコウに着いてから、私の、事物に就き、人につき、また其等と私自身との關係について、見解の變遷は一層著しく感ぜられて來た。歸つてお祖母さんと初めて會つた時、其の瘦せて顔に皺が寄つて眼が朦朧して居るのを見て、私が從來お祖母さんに對して表して居つた恐怖と敬畏との感情が同情の念に變つた。私達に會つては悲み／＼する態を見せられるのが、私には何となく氣味悪く思はれた。私は、吾々自身はお祖母さんの眼中には何物でもない、吾々は唯紀念としてお祖母さんに大切なまゝあるといふことを認めた。お祖母さんが『彼女は亡くなつた。彼女は死んで了つた。私はもう／＼決して彼女を見ることはない。』と言つては、絶えず私の頬を接吻する毎に其の思想が中に籠つて、それが表面に表はれて居るやうに感じた。

モスコウに居て私達と一所には何もすることのないお父さんは、何時も心配さ



うな顔をして、御飯時ばかりに黒い上衣か煌々する襟の着いた襲着をして、私達の所に出て来る。が、そんなものも今は大方眼に浮ばぬやうになつた。

カール・イワニツチの事を、お祖母さんは百姓と言つて居たが、そのカール・イワニツチが何故か俄かに、今までの其の尊敬すべき馴染の禿頭に赤い假髪を冠るやうになつた。

また明さまに眼には見えぬが、或る離隔が少女と私達の間に出來た。兩方が銘の秘密を有つて來た。彼等は吾等の眼の前で段々長くなる下袴に容姿をするやうに見えた。さうして吾々もまた帯金の付いた股引を袴いて居た。さうしてミイミが初めての日曜日の晝飯に、綺麗な上衣を着、頭にリボンを飾つて顯はれたのを見て、直ちに、さうだ私達はもう田舎に居るのぢやない、今は凡てが變らねばならぬのだといふことが眼に映つた。

五 兄

私はワロヂアとは唯一年と何ヶ月しか違はなかつた。私達は常に一所に成長くなり、一所に學問し、一所に遊んだ。兄と弟といふ區別が二人の間隔をなさなかつた。が、恰度私が今此處に話して居る時分から、ワロヂアは年歳からも性向からも資質からも、遂に私の伴侶ではなかつたといふことか私に解つて來た。ワロヂアは彼自らの優勝を認め、それを誇つてゐるのが私の眼に着くやうにすらなつた。恐らく誤解であつたかも知れぬが、此の自信が私に自愛心をさしめた。それがために私は彼と何を一所にするにでも心苦しかつた。彼は凡ての事——遊戯、學問、喧嘩、如何に自分を所置すべきか知識など——に於て私よりも遙かに高く止つて居た。さうして全く之れが爲に彼から私を遠く離れしめて、自分にも理解することの出來ない道德的苦痛を経験せしめた。若しワロヂアが先に鬚のあるリ



ネンの襦衣を着るやうなことがあると、私も其の通りののが欲しい、私もあんなの  
 を持つてゐたなら如何に好いであらうと口に出して言つた。さうしてワロヂアが  
 襟を直し／＼するのが、唯私の感情を悪くしやうが爲にさうするやうに思はれた。  
 何よりも一番多く私を苦めたことは、時々私にさう見えた所に依ると、ワロヂ  
 アが私の心を読んで居ながら、それを隠さうとした事であつた。  
 始終一所に住んでゐる者の間、例へば兄弟とか朋友とか夫婦とか主従とか、分  
 ても是等人と人との間が、何斯につけて互に打明けぬやうな場合に、殆ど眼にも  
 見えぬやうな微笑や舉動や眼配ひの内に顯はれる無言の秘密な關係がある。それ  
 に氣の着かぬ人は恐らくあるまい！ 口にも言はぬ慾望と思想と恐怖（解られは  
 せぬかといふ）が如何に度々互の眼と眼に臆病さうにそれとなく出會ふか。些つ  
 とした偶然の眼配ひにも表はされる！  
 併しながら恐らく私は、私の多感と事物を解剖して考へる性癖との爲に、此の

於て自ら欺かれて居つた。多分ワロヂアは私が感じた如には少しも感じはしな  
 かつた。彼は急性で、公明で、自己の衝動に依つて絶えず變つて居つた。彼は最も  
 相異つた事物に依つて動かされてゐた。さうして自己の全精神を傾けて其れに打  
 込んだ。  
 或時は繪畫に熱中し、繪ばかし描いて、自分の有りたけの金錢をそれに費し、  
 畫の教師やお父さんやお祖母さんに繪の事について強請る。さうかと思ふと此度  
 は卓上を裝飾する諸種な小道具に熱中し、家中から其れを蒐集めて來る。さうす  
 ると、其の次はまた小説に熱中し、竊と何處からか取つて來て、晝夜の差別なく  
 読み通す、私も覺えず知らず彼の嗜好にかぶれる。併しながら私には自負がある  
 ので、全く彼の足跡を追ふほどにはならぬ。又まだ稚くもあるので、新しい徑  
 跡を選ぶほどの自助心にも乏しかつた。が、ワロヂアの屈托のない、公明な、氣  
 高い品性が私には何よりも羨ましかつた。吾々が喧嘩をする場合に殊に明白に其



れが露はれた。私はそれを見て、彼は好く舉動ふたとは感じたが、さて自分には何うしても彼に倣ふことが出来なかつた。

一度彼が裝飾品に熱中して居る眞最中であつた。私は彼の卓に行つて、何の氣なしに彩色を施した空の小さい香水の瓶を破したことがあつた。

するとワロチアが入つて来て、整然と綺麗に飾つてあつた卓に私が狼藉を働いて居るのを認めて

「誰がお前に僕の物品に觸れと頼んだ？……何處に其の小さい香水瓶は行つた？ お前が何うかしたに違ひない……」

「僕がつい落したんです。破れたんです。構はんでせう？」

「後生だ、決して僕の物品に無用に手を觸らないやうにしてくれ。」と言つて彼は情なさうに破れた瓶の破片を元のやうに合はして見てゐる。

「何卒入ぬ命令を言はぬやうにして下さい……僕が破はしたのだ、破はしたら破

はしたで済む。其の上、其れに就いて言ふ何の必要がある？」と私は言ひ返へした。

さうして私は少しも笑ふ氣は無かつたけれど強いて笑つて見せた。

「さうだ、お前には其れが何でもないかも知れんが、僕には何でも無くはない。」とワロチアはお父さんから譲つた癖の、例の肩を揺つて、「他人の物品を破して置いて笑つてゐる、此の惡戯小僧奴！」

「僕は小僧だ。が、お前は大きな馬鹿だ。」

「僕は貴様なんぞと喧嘩したかあない……彼方行け！」と言つて私を一寸撞いた。

「さう僕を撞かなくつても好い！」

「さう彼方行け！」

「撞くなと言つて居るぢやないか！」

ワロチアは私の手を取つて、卓から私を曳きずつて行かうとした。が、私は甚く



激して『そら！』と言ひさま足をかけて卓を顛覆した。其の拍子に磁器や硝子の裝飾品がガラ／＼と床の上に粉微塵に毀れた。

『うぬ甚い小僧奴！』と、ワロヂアは落ちるのを手で支へやうとしながら怒鳴つた。『可、最早これ二人の仲は何にも斯もお仕舞だ……此の儘喧嘩分れだ！』とサツ／＼と室を出て行きながら思つた。

さうして吾々は晩まで互に口を利かなかつた。私は獨りで自分が悪かつたと思つて、何だか彼を見るのが恐しく感じた。さうして其の一日何事も手に着かなかつたが、ワロヂアは其の反對に、平常の通り能く勉強して、晝飯後になつてからも少女達と喋つたり笑つたりしてゐた。

教師が日課を卒はるや否や私は教室を飛び出した。兄と唯二人切り其處に居るのが何だか恐ろしいやうな定りが悪いやうな、良心を咎めるやうな氣がした。歴史の夜學が果て、から、私は手帳を持つて戸口の方に行つた。さうしてワロヂアと

點に摩合ふた時に、私は心の中で彼の傍に行つて、仲直りをしたいとは思ひながらも、口を尖らして怒つた顔をして見せた。恰度其の時ワロヂアの方では頭を擡げて赤裸々と認め得らるゝ、人の良さゝうな嘲さむが如き笑味を湛へて大膽に私を見た。吾々の眼が出合ふた。さうして私は彼が私の心を感じたと思つた。また彼が私を感じたことを私は覺つたと思つた。が、何とも仕様のない感情に制せられて、つい彼方向いた。

『ニコリンカ！』とワロヂアは例の簡單な少しも憂のない聲で、『お前は随分長く憤てたね、若し僕が氣に障つたなら耐へてくれ。』と言つて手を私の方に差出した。さうすると、忽ち私の胸の中に何物か段々高く逆上げて厭迫して呼吸を止めるやうになつて、涙が眼に浮んだ。それで胸が幾分か透きいた。

『耐へて下さい……兄さん！』と切れ／＼に言つて其の手をキュウと握り締めぬ。が、ワロヂアは何うして私の眼が涙に潤んで居るのか少しも解らぬものゝやう



に私の顔を見た。

六 マ ス チ ヤ

凡ての事物に對する私の見解の變化した其の一例として、私自分ながらも驚いたのは、從來唯普通の女性の従僕として見てゐた奴婢の一人をば、「婦人」として見るに至つたことである。その婦人に或度まで私の平和と幸福とが關係してゐた。私が事物を憶え初めてから自分の家にマスチヤといふ女中の居つたことを想ひ起す。が、其の女に對して私の見解が全然變つた時まで、私は少しも其の女に注意を拂はなかつた。その見方の變つた理由を今此處で話す。

マスチヤは二十五私は十四であつた。彼女はなかく綺麗な女であつた。が、私は此處に其れを明細に記すことを恐れる。何故なればさうしやうとすれば勢ひ私が彼女に對して熱情を傾注して居つた其の頃竊かに描いて居つた美しい夢幻の派な大人であつた。さうして自分はまた十四になつたばかりであつた。

其の頃の事であつた。一度自分は何かの教課書を手にしたまゝ、部室の中を彼方此方に床板にコツ／＼と音をさせながら逍遙いたり、また何であつたか或る聯絡のない歌のやうなことを獨り口ずさんだり、或は墨汁を以つて卓の縁に惡戯を書いたり、さうかと思へば忽ちまた何の思想もなく、文句に氣を留めやうともせず、聲を出して復誦つて見たり——一言にいへば何を爲る氣にもなれず、何か面白い事はないかといふやうな氣のする時であつた。私はブラリと教室から外に出た。さうして何の目的でもなく唯お勝手に下りて行つた。

すると、誰か上靴を穿いて階段の廻り角を上つて來る者がある。勿論私は誰であるか知りたいと思つた。が、其の足音が不意と止つた。とマスチヤの聲がし



「あれ、何で其様な御悪戯爲さるの貴郎は？ マリア・イワノフナ（ミイミ）さんが来ると可くないぢやありませんか。」

「彼女は来やしない。ワロチアの私語く聲がして、恰度ワロチアが女を引留めやうとでもして居るやうな氣配がする。」

「あれ、何を貴郎は手で爲さるんですよッ？ 本當に甚い人！」と言ひなり、マスチャは頸巾を片方にずらして、肥した眞白い頸脚を其の下から露しながら私を跳越して駈けた。

思ひ掛けないことを見付け出して私は驚いて了つた。が、驚異の感は速にワロチアの嬉戯に對する同感の念に變つた。私を驚かしたのは彼の行爲ではなくて、如何して何時の間に彼は其様なことを爲るのが、愉快だといふ觀念を得たかといふことであつた。さうして無意識に、自分も彼の爲る通りにして見たいといふ氣

になつた。

私は時々階上から何か氣配がしはせぬかと、凝乎と呼吸を殺して長い間其の廻り角の處に立ち盡くして、呆然聽き澄まして居つたことがあつた。併しながら私は強いて自分から進んでワロチアを眞似て見ることは決して出来なかつた。其の癖私は腹の中では何よりも一番其れがして見たかつたのである。又時としては私は戸の陰に潜んで女中部屋で騒ぐ音を妬ましさうに嫉氣味で聞惚れて居つた。さうして斯う考へて見た。若し自分が二階に上つて行つて、ワロチアのするやうにマスチャを接吻しやうとしたならば、何うであらう。私は何う言はうか。此の平板な鼻に厭に總々生びた頭髪をして、彼女が何の御用です、と尋ねた時に何と言はう？ 時々マスチャがワロチアに言つて居るのを聞いた。

「そらッ甚うございますよ！……何うしてさう貴郎は私に纏着ればつかしむなざるの？ 彼方いぬらつしやいつてば、人の悪い！ 御覽なさいな、ニコライ、



ペトロフイツチさまは此様な處に来て、貴郎見たいな馬鹿な事は爲さらないぢやありませんか。』マスチヤは此のニコライ、ペトロフイツチが其の時階段に突立つて、その人の悪いワロヂアのやうにさせれば、世界中の物を悉皆でも呉れて了ふにと思つて居ることを知らなかつたのだ。

私は天性、穩和かつた。が、私の穩和いのは自分で醜くいといふ自信があつたから一層さうなつたのだ。さうして自分は斯ういふことを確めた。何が何として男振ほど人の行状の上に著るしい感化力を與へるものはない。他人の心を惹くにも惹かぬにも、容貌風采といふものは個人の信用にも劣らぬほどの力を有つて居るものである。

私はなかく、自負心に富んで居つたから、自分の地位に押れるといふやうなことは容易になかつた。イソツプの狐の如く、葡萄はまだ青いと自分で假定して自から慰めた。言ひ換へれば、私は容貌風采の上から剝脱された凡ての快樂を蔑視し

やうと力めた。それをワロヂアは、楽しんで居るやうに私の眼には映る。さうして其の實自分は全精根を傾けてそれを妬んだ。妬みながらも自分は高慢な孤獨の間に慰藉を見出さうとして、心を碎き想像に耽りあらゆる神経を惱ました。

七 發 放

『まあ、焰硝を！』とミイミは洶々、太息を吐きながら叫んだ。『何をして居るんですッ貴下方は？ 貴下は家も何にも焼いて仕舞つて、一同を困らしたら好いんですか？』

ミイミは何とも言ひやうのない不氣嫌しい顔をして、皆なを追ひ出し、ドシ／＼大股に弾丸の散つた處に行つて、爆發しさうな危険をも顧みず、足を以つて其を踏み潰した。で、最早心配ないと思つた頃ミカイを呼んで、悉皆其れを成るだけ遠くの方か、それよりも尙も好いことは水の中へ投込んで仕舞ふやうに命令けた。



さうして偉さうに頭巾を直しながら客座敷の方に引揚げて「フン、能く監督が行届いてゐる。何と言はれたつて仕方があるまい。」と唸つた。

お父さんが離室から出て来た。私達はお父さんと一所にお祖母さんの處に行つた。ミイミは最早お祖母さんの部室の窓の處に据つて、一種の奇妙なお役人風の表情で戸の方を嚇かすやうに見詰めて居た。手に紙で包んだ物を持つて居た。其れは彈丸で、私はお祖母さんは既に何にも斯も承知して居るなと判断した。

其室にはミイミの他に女中のガスチャが赤い憤つた顔をして居る。小男で痘痕のあるブルソントルといふ醫師が眼と頭で不思議な宥めるやうな合圖をして、無駄にガスチャを静めやうとして居る。

お祖母さんは少し他方向いて何時も非常に氣嫌の悪い時にする態度をしてゐた。

『お母さん今日は心地は如何です？ 能く睡れましたか。』とお父さんは丁寧にお祖母さんの手を接吻しながら尋ねた。

『好うございますよ、お前平常も私が好いのを御承知の筈ぢやありませんか。』お祖母さんはさもなくお父さんの尋ねたことが間違つた無禮なことでもあるのを表示めすかのやうな調子で言つた。さうして、

『おや、お前は私に清潔な手巾を取つて来てくれるのでしたつけかねえ？』とガスチャの方に向き直つて言つた。

『私、貴女に差上げましたか？』ガスチャは椅子の腕の上に置いてある雪のやうに眞白なカムブレ製の手巾を指しながら返辭した。

『其様な汚いのは彼方へ持つて、清潔なのを持つて来て下さいまし。』

ガスチャは小箆筒に行つて抽斗を引出し、室中の硝子がガタ／＼鳴るほど力を入れてそれをまたピタと閉めた。お祖母さんは嚇すやうな眼付で一同の顔をジロジロ見廻はし、キツとなつて女中の舉動に氣を着けて見て居た。女中が私には同じ手巾のやうに思はれたのを持つて来て渡すと、お祖母さんは、



「お前は何時私の煙草をお磨きなすつたえ？」

「何時と申して御用の時分に。」

「何とお言ひだえ？」

「私、今日それを致します。」

「お前さん若し私に勤めるのがお厭なら、お前さう言つたが好いよ。私は疾にお暇にしてあげるんだから。」

「貴女にお暇を頂いたつて私は泣きも笑ひもしやしません。」女中は低聲で呟いた。

其の時醫師が彼女に瞬きしたけれども、女中は矢張り憤つた決心の面持で彼を見返へした。醫師はそれを見て、直ぐ眼を落して照れ隠くしに急しさうに時計の鍵を廻して居た。

「御覽なさい、お前」と、お祖母さんは、ガスチヤがまだ何か呟きながら部屋を出て行つた後で、此度はまたお父さんに向いて「彼等がまあ何様な言葉使ひで現在此の

私の自家で私に對して物を言ふか。」

「若し私でもよければ、お母さん私が其の艱煙草を磨きませうか。」お父さんは確かに此の思ひ掛けもない姿態によく當惑したものと見えて、さう言つた。

「いゝえ。難有う、彼女が一體厚皮しいのです。何故なれば彼女の他には誰も私が氣に入るやうに煙草の磨きかたが解らないことを自分が知つて居るものですか。……さうですよお前」と、暫く呼吸を吐いて「今日お前の子供達をもつとの事で火事を出す處であつた？」

お父さんは、それはまた何うした事だといふ顔で、お祖母さんを見守つた。「これが、彼等が玩具にしたものです。倅にお見せなさい。」と、ミイミに向つて言つた。

お父さんは彈丸を手に取つたが、見て微笑すには居られなかつた。

「お母さん何故、此れは彈丸です、……これは少しも危かないぢやありませんか。」



『私はお前に種なお禮を申さなければなりません。言つて聞かして下さるから。私はもう、唯歳を取り過ぎて居ますから。』

『神經です、神經です。』と醫師が私語いた。

お父さんは直ぐ私達の方に向いて、

『何處でお前達は其れを取つて來た？ さうして何うして此様な物を以つて惡戯なんぞをしたのだ？』

『彼等にも何にも尋ねでない、彼等のお百姓様にお前聞くが好い。』お祖母さんはお百姓様といふ言葉を特更に嘲弄の語氣で言ひながら『何を彼の人間は監督して居るのだらう。』

『ウォルデマルさんがさう申しました。カール・イワニッチさんが此の煙硝を差し上げたんですつて。』とミイミが言葉を挾んだ。

『それ御覽なさい、お前。碌なことは教へはしない。』とお祖母さんは透さず言つ

た、『さうして何處に居る。其のお百姓は、何とかいふ名であつた？ あの男を此處に連れて來いで。』

『私が許可して一寸外へ行つて居るのです。』お父さんが言つた。

『其れはまた何うした理由です。一體あの男は始終此家に付いて居るべきぢやありませんか。子供は私のぢやありません、お前の子供ですから、私はお前に口を出す權利は何もないのです、お前はもうそれは私とは違つて何にも御承知だから……』

併し彼等に一人教師を雇ふても好い時分ぢやあるまいかと私には思いますがの。奉公人でないのを、獨逸の百姓——左様さ馬鹿な百姓に悪い行儀とチロリス歌（パワリアと以太利との間に挾まれたる地方）とより他には何にも教へることは出来はせん。

えッ、お前は何うお思ひか、子供がチロリスの謠を唱ふ術を知るのが其様なに大事ですかい？ それでも今では誰も此様な事に就いて考へやうとはせぬ。さうしてお前はお前の好きなやうにふしなされるがらう。』



『今』といふ言葉は子供等は母が無いことを意味する。さうしてそれがお祖母さんの心に悲しい記憶を呼び起した。お祖母さんは亡き母の繪像のついた燐煙草の函の上に眼を外らして、考へ込んだ。

『私は長く其の事を考へて居つたのです。』とお父さんは早口に言つた。『さうしてお母さん貴女と御相談したいと思つたのですが、如何でせう、あのセン・ゼロームを聘ふては、彼れは今日を定めて教へて居るんですが。』

『お前はそれはもうよく氣を付けてお出だらうが。』とお祖母さんは最早前のやうに不満なやうな調子でなく普通に言つた。『セン・ゼロームなら兎も角良い家の子供を如何いふやうに教訓へたら好いかぐらゐは心得のある教師です。下等な奉公人ぢやありません。彼等を散步に引張廻はすより他に何にも取柄のないやうな。』

『私、明日、彼の人間と話して見ませう。』お父さんが言つた。

さうして實際此の相談があつてから二日目にカール・イワニッチは其の若い佛

蘭西生れの氣取屋に其の位地を奪れた。

## 八 カール・イワニッチが身の上(上)

カール・イワニッチが、翌日はいよく、私の家を出て行くといふ前の晩遅く、彼は例の綿入れの寛袍に赤い頭巾で、寢臺の脇で、靴の中へ所有品をそれごと詰込んで居た。

カールと吾々との交誼は、近頃格別疎々しくなつてゐた。彼は力めて吾々との關係を避けやうとするやうに見えた。で、今私が部屋に入つて行くと、私を一瞥と流眄に視たまゝ、また荷造りをしてゐる、私は自分の寢臺の上に横になつたが、以前は嚴重に其様な不行儀を制めて居つたカールが、最早私に向つて何にも言はなかつた。それで彼は最早決して吾々に口喧しく言つたり、制めたりしては呉れぬ、彼は今吾々とは何の關係もないものとなつて了つたといふ思想が明歴と刻



刻離別の近寄ることを想はしめた。私は彼がもう吾々を愛して呉れなくなつたのが悲しくなつて、其の感情を彼に話したいと思つて、傍に行つて、

『手傳ませうか、カールさん。』と言つて見た。

カールは私を一瞥と見て、また他面を向いた。けれども其の流眊の中に冷淡らしい様子は見えなくて、むしろ一圖に清純の悲が讀めた。

『神様が何も斯も見えてゐる、何も斯も承知ぢや、何うとも成るやうに成るがいろ。』と言つて、高く背伸をして重苦しさうに太息をした。『さうです。坊ちゃん。』彼は私の素振に偽なき同情の表はれて居るのを認めて、言葉を續けた。

『生れ落ちてから棺の中に入るまで不仕合の續くのが私の運だらう。自分は始終人に對して仕向けた善に報いられるに惡を以つてせられた。私の報いられるのは此世ぢやない、彼世ぢや。』と、天の方を指して言つて『坊ちゃんが若し私の來歴や私が此の一生に遭つた話しを聞かうもんなら！ 靴直ほしにもなつたり、兵卒に

もなつたり、脱走兵にもなつたり、職人にもなつたり、教師をも遣つて見た。が、今ぢや最早何者でもない。さうした結末が、神さまの子のやうに最後の枕の置場處もない有様だ。』と、語り了つて、靜と眼を閉つて椅子に身を投げた。

私は、カールが身につまされて聽者に氣を留めやうともせず、自分を満足せしむる爲に彼の腹の奥底を口に出すやうになつたのを認て其の親切さうな顔から眼を放さないで、黙つて私は寢臺に坐つた。

『貴郎はもう子供ぢやない、了解りませうから。私の經歷と、此の一生苦んで來た種々なことを貴郎に話させよう。何日か貴郎は、貴郎を非常に愛して居つた老人の朋友のことを想ひ起すことがありませう。ね。』

さう言つてカール・ニツイチは傍に立つた卓に肘を寄せかけて、艱煙草をひと摘み取つて天井の方に眼を遣りながら、平常私達に教授する時のやうな、その特な、節度のある、咽喉から出る聲で物語を始めた。



『私は生れぬ前から既に不幸でありました。』と感に堪へぬもの、如く言つた。  
 カールは其の經歷を、其の後も私にまた一度ならず全く同じ言葉で、毎時同じ調子で話して聞かしたが、私は今此處にそれを、言葉の誤謬は勿論除いて、殆ど句元のまゝに話して見たいと想望ふ。それに就いて讀者は何れも、冒頭から隨意の判断をしてかゝつて差支はない。それが實際彼の經歷であつたか、或は吾々の家で彼の淋しい生活をしてゐる間に出來た全く架空の事柄であつたか、それとも唯彼の一生の實際の出來事を奇怪な事柄を以つて脚色したのであつたか、私には今日までもそれを判断しかねる。

『私の血管にはソムマアブラット伯爵家の貴い血潮が漲つて居る。私は両親が結婚して僅か六週間で生れた。私の母親の亭主——私は彼れをお父さんと言つてました——といふのはソムマアブラット伯爵の百姓でした。父親は何うしても私の母の恥辱を忘れて了ふことが出來んで、私を可愛がつては呉れませんでした。ヨハ

ンといふ弟と、二人の妹とありましたが、私は自分の家族の中に居ながら宛然他人でした。ヨハンが何か悪戯を爲るとお父さんは毎時『俺は此のカールといふ小僧のために少時も氣の安まることはない!』といふのが習慣で、さうしては私は怒鳴られたり罰せられたりしてゐました。また妹等が互に喧嘩でもすると、お父さんは、きつと『カールといふ奴は、何たら不従順ぬ小僧だらう!』と言つては私を怒鳴りつけたり、罰したりしました。

『私のお母さん切り、一人私を可愛がつたり甘やかしたりしてゐまして、屢く私にカールや、さ、私の部屋にお出で!』と言つて、私の機敏のを賞めて接吻して呉れました。『可哀い!カールだね! 誰もお前を可愛がつては呉れないが、私は誰よりもお前を一等可愛がつてあげよ、坊やのお母さんは坊やに一つお願がある……能く學問をしてさうしてえらい人になるやうに心掛けてお呉れ。さうしたらお天道さまがお前を見棄てはなさらんから!』と言つて聞かしました。私はいふ



通りにしました。十四の時に私はもう教會に行つた。さうするとお母さんはお父さんに「カールは今大きくなつた。彼れの事を何うしやうか、ね、お前さん。」と相談しますと、お父さんは「俺は知らない。」と申しますから、お母さんは「ぢや、寧ろ町のシュルツさんの處へ遣らうぢやありませんか、さうして靴屋にでもした、ら何うでせう。」お父さんも「好からう／＼」といふことで六年と七月私は靴屋の親方の家で町に暮しました。親方は私を可愛がつてくれて「カールは好い職人だ、彼奴今に俺の仲間になつて呉れる。」と言つておました。が、人間が望むやうには神様が許して呉れません。あれは千七百九十六年でした。徴兵の命令が出て十八から二十一までのもので、役に立つ者は、誰も彼も町に集合らねばならぬ。お父さんも弟のヨハンを連れて町に出まして、吾々は一所に、何方が兵卒になるかならぬか定めるために、籤を抽きに行きました。とヨハンが、貧乏籤を抽きあつて、兵卒にならねばならぬ、私は好い番に當つて、兵卒を免れました。するとお

父さんが言ふことには「俺は一人きや男兒を有たぬ、それに別れねばならぬ。」  
 「から、私は父の手を執つて、何故其様なことを言ふのお父さん？まあお出で、私がお前に話すことがあるから」と言つて、お父さんを誘ふた。お父さんは出て来て、吾々は小さい卓に對つて座りました。「ビールを二本くれ」と、誂へて、それが來ると吾々は酒杯を重ねた。弟のヨハンもまた飲みました。  
 「私はお父さん、お前、一人きや男兒を有たん。さうして其れに別れねばならぬ。なんか言はないでお呉れ。私の心は、それを聞かされる度に搔掻りたくなつてくる。ヨハンに服役めなくつても可い、私が兵卒になるよ。カールは不用ぬ人間だから、私が兵卒になるよ。」と言ひました。  
 「お父さんはそれを聞いて「カール、イワニイツチや、お前は孝行者だ」と言つて私に接吻した。  
 『それで私は兵卒になつた譯ぢや。』



九 カール・イワニッチが身の上(中)

「其の頃は坊ちやん、恐ろしい時であつた。」カールは談話を續けた。「其の時ナポレオンがまだ生きて居つて、彼は獨逸を征服しやうとした。吾々は其れに對して血が一滴になるまでも、自分の母國の爲に防戦ひました！」

「私はウルムの時にも居つた、アウステルリッツの時にも居つた、ワグラムの時にも居つた。」

「先生も戦をしたのですか？」私は驚いて彼を諦視めながら問ねた。「先生も人間を殺したのですか？」

カール・イワニッチは其の點に就いて、直ちに私の氣を安めた。

「一度佛蘭西の榴弾兵が伴伍に後れて踰隔いて居つたが、遂々路傍に倒れた。私は銃を持つて飛んで行つて今にも彼れを突き刺さうとした。そんなにしても佛蘭

西人は武器を投げ出して只哀憐を乞ふた。で、私は見遁して遣つた。

「ワグラムでは、ナポレオンの爲に島の中に追込まれて、何處にも安全な處がないまでに包圍せられた。三日間吾々は少しの糧食をも得なかつた。さうして一同膝まで水中に浸つたまま、突立つてゐました。」

「ナポレオンの奴め、吾々を捕へもせねば、遁しもせぬ。」

「漸く四日めになつて、仕合と吾々は捕虜に取られて、城砦に引かれて行きました。其の時私は青い股引に、錢にすれば十五タレルスもする好い布地の制服を着てお父さんから貰つた銀時計を持つてゐましたが、佛蘭西兵が悉皆奪取けて了ひました。それでも幸に私はまだお母さんが胴衣に縮込んで置いて呉れた三ツカツツの金貨を持つてゐました。誰もそれには氣が着かなかつた。」

「私は永く城砦に拘留されなくなつて、遁出さうと決心した。一日盛な祝祭の日、私は吾々を監視してゐる軍曹に對つて、「軍曹殿今日は目出度いお祝祭です。」



私も祝盃を擧げやうと存じます。何卒赤葡萄酒を二瓶取つて戴けませんか、さうして吾々一同それを飲まうちやありませんか」軍曹は「可からう」と言つて自分で葡萄酒を持つて來ましたから、吾々は一つの酒杯を回しく飲んだ。其の時私は彼の手を執つて、「軍曹殿、貴下はお父さんやお母さんをお持ちですか？」と問いた。「さうだ。」父親も母親も最早八年といふもの私を見ないので、此の私はまだ生存へてゐるやらそれとも骨になつてもう冷濕つた地の中に埋つてゐるやらそれすら知らないんです。ね、軍曹殿！ 私は胴衣の中に藏つて置いた金貨を二ツカツ持つてゐます。それを上げます、私を遁して下さい。ね、私の恩人です。さうしたら私の母親が一生貴下の爲に神様に祈禱ります。」

「軍曹は赤葡萄酒を一杯飲んで、「うむ君、俺は非常に君を愛する、哀れむ、が、君は捕虜だ、俺は兵卒だ。」といふ。私は彼の手を握締めて、「軍曹殿！」と言つた。さうすると、軍曹は、「君は氣の毒な人だ。俺は其の錢は貰はなくつても可いが、

俺は君を助けるよ。俺が寝てから、君は兵卒にブランデーをバケツに一杯買つてやれ、さうすると彼等が寢入るだらう。俺は知らぬ顔でゐるから。」

「彼は好い人間でした。私はその通り、ブランデーをバケツに一杯買つて來た。さうして兵卒が飲み潰れてゐる間に私は長靴を穿いたり、古い外套を取出して着たりして戸外に出ました。それから跳起す志望で城壁の處に行つたが、其處には水があつた。唯一枚の衣服を汚したくないので、私は其れから門の方に回つた。」

「哨兵が銃を持つて彼方此方してゐたが私を認めて、「誰れだ？」と言つた。私が黙つてゐると、二たび「誰だ？」と言つた。それでも黙つてゐると、三たび「誰だ？」と言つた。それから私は一目散に駆け出して、水の中へ飛込んだが甘く彼岸に攀ち越えて、遂々抜け出しました。」

「徹夜私は道路に沿いて走つた。が、夜が明初める頃になつて、誰かに認められるのを恐れて、小高い黒麥の中に隠れて、そして、膝を突いて兩手を合せて、救



けて下さつたことを天の父に謝しました。それから氣を落着けて熟睡つた。

『夕方になつて眼を覺まし、それからまた歩いた。其の時二匹の黒い馬に挽かした大きな獨逸風の荷車が追ひ付いて來た。箱の中に綺麗な衣服を着た一人の男が坐つてゐて、煙草を吸ひながら私の方を眺めた。私は荷車を通過さうと思つてわざと徐々歩いた。すると私が徐々歩けば荷車では尙ほ徐々歩く。さうして其の男は私をジロ／＼諦視る。私は路傍に躊躇んで了つた。男も馬を駐めて私を見直して若衆や、お前さん一體此様に晚く何處へ行くんだね?』と尋ねます。『私やフランクフオトまで行くんです。』「ぢや私の荷車に乗んな、這入る席がある。私が其處まで連れてつて上げやう。が、まあお前さん、何にも持物はないのかえ、そして其様な鬚髻をも剃らないで? 衣服も泥塗けにして?」私が其男の傍に坐るとさう言つて問ねた。『私や不幸な者です、何處かへ働人に雇はれたいのです。衣服は道路へ轉んで此様な泥塗れにしてしまいました。』「お前さん、それは嘘言を言

つてるんだらう。道路はこんなに乾いてゐるぢやないか。』

『私は黙つてゐた。』

『男は親切に「悉皆本當を話さない。お前は何うした人だえ。何處から來たのだ、お前さんは? お前の面相が私の氣に入つた。若しお前さんさへ正直な人間なら私が助けて上よう。』

『それで私は一仕始終を其の男に打明けました。すると彼が言ふには「さういふ理由か可々。私は索繩製造を遣つてゐるから、其の工場に來なさい。私が仕事を供給つて上げようし、衣服も金銭も上げる。さうしてお前私の處に居やうぢやないか。』

『私も「さうして戴けば結構です。』と申しまして、一所に其の索繩工場に行きました。親切な主人は女房に「此處に國の爲に戰爭して捕虜になつて遁走て來た若い衆を一人連れて來たが、家も衣服も食物も無いのださうな。爾後自家に居て貰うことにした。何か清潔した衣服を上げて、それからまあ食物を先きに食べさし



て上げな。」

『それから一年半、私は其の工場に居りました。主人は次第に私が氣に入つて、もう何處へも私を遣らぬとまで言つてゐました。私も其の頃は立派な男であつた。若くはあるし、身丈もすらりとして、青々した眼に、羅馬鼻であつた。處が、エル夫人——其の名は申し兼ねるが——主人の女房もまだ若い佳い婦人であつたが、遂々私と思合ふた。

『その女房が一度私を見て、「カールさんや、お前さんのお母さんは何と言つてお前をお呼びだえ？」「カールちゃんて言ひます。」

「カールちゃん、此處へ、私の傍にまあお坐り！」

『私は言ふ通りに女房の傍に行つて坐りました。すると女房は「カールちゃん、私を接吻してお呉れ！」と申します。

『私は女房を接吻しました。さうすると此度は「カールちゃん、私は最早く何う

したら好いかと思ふほどお前さんが戀しいのよ。」と言つて身慄いをしました。』  
 此處でカール・イワニッチは稍々しばらく談話を止めた。さうして其の親切さうな青い眼を上の方に遣りながら、人間が愉快い事を回想した時に屢くする如に頭を揺つて、微笑した。

『左様』彼は腕椅子に腰を掛け、上衣の裾をはねながら復た談話を始めた。『一生を回顧つて見れば、私も随分善いことも悪いこともして通つた。が、彼れが私の證人だ。』と言つて彼は、自分の寢臺の上に懸つてゐる畫布に描いた救世主の像を指して『誰だつてカール・イワニッチは不義な人間であつたといふことは言ひ得まい！ 私はエル氏が盡して呉れた親切に對しても、恩義に背く仕向は出来ぬ。さうして私は其處からまた遁走さうと決心した。夜一同が寢靜つた時分に、私は主人に宛て、手紙を一本書いて私の部室の卓の上にそれを置いて、衣類と金錢を三タレル持つて、私り街路に抜け出た。誰も私を發見するものはなかつた。さうし



てまた私は道路を歩いた。

十 カール・イワニッチが身の上(下)

「私は九年の間お母さんを見ませんでした。まだ生存て居るのか、それとも最早骨になつて冷濕い地の下に埋つてゐるやら、私は知らなかつた。さうして自分の生れた故郷に歸つて來ました。私は其の町に着いて先づ、サムマアブラット伯爵家の百姓であつたグスタフ・モオウエルといふ者は今何處に生活してゐるであらうかと尋ねました。すると一同「サムマアブラット伯爵はもう死になつたが、グスタフ・モオウエルはまだ壯健で本町で今居酒屋を營つてゐる」と言つて聞かしました。私は新しい胴衣に、工場の主人が賜れた綺麗な外套を着て、好く頭髪を梳いて、それからお父さんの居酒屋へやつて行きました。恰度妹のマリチャンが店前に坐つてゐる所で、「何が入りますか」と問きました。私は「濁酒を一杯貰ひま

せうか」といふと、妹は「お父さん、若い衆さんが濁酒を一杯お呉んなさいつて。」と呼びました。と、お父さんが「ぢや注いでお上げな」私は食卓に就いて濁酒を飲み、煙草を吸ひながらお父さんやマリチャンやそれから恰度また店に入つて來た弟のヨハンを見回しました。そして世間話の間にお父さんは私に「ねえ、若い衆さん、お前さんは屹度知つておいでなさるだらうが、今何處の邊に我軍は居ませうか？」と問きます。「私は現に其の軍隊から遣つて來たのだが、ヴェエンナの近邊だねえ。」「私どもの件も兵卒に行つてゐましたが、手紙を寄越してから最早九年振りになりますか、生きてゐるやら死んでゐるやら皆目手が、りもありません。愚妻はもう始終彼奴のことを泣き暮して居るのです。」私は煙草の烟を彼方に吹きまぎらして、「お前さんの其の子息さんの名は何と言つた。さうして何處へ服役て居たの？」屹度私が知つてゐるかも知れん「カール・モオウエルといふので、オオストリヤの軍隊に服役めてゐました。」と、お父さんの言ふ後から恰度貴郎見たいに



身丈の高い好い男でしたわ。」とマリチャンも口を添へました。  
 『それから「ちや私や其のカールさんといふのを知つてゐる」と言ひますと、お父さんは突然に「あ、マリア！ 此方へ來な、此處にカールの事を知つてゐる青年がある」と叫びました。』

『すると私の懐かしいお母さんが背後の戸を明けて出て來た。私は直ぐ彼女を見た。』貴郎は私どものカールを知つてお出でなさるつて？』と言つて、私の方を見て、それはく蒼い顔をして身を慄はせました。「え、私は會ひました。」と言ひは言つたが、私は眼を擧げてお母さんを見得ませんでした。私の情は飛び着きたい思ひです。「まあ、カールが生存してゐると！ 難有い！ そして何處にゐます、あのカールは？ も一度彼れを見ることが出來さへすれば、私は最早安心して死なれませぬ。可愛い子息を！ だけれどもそれが神様の覺召に叶ぬから。」と言つて、オイ／＼泣き出しました。私も耐らなくなつて「お母さん、私がお前の子のカールです。」

と言ひ切ると、お母さんは其のまま、私の兩腕に倒れかかりました。』

カール・イニツチは、さう言つて眼を閉つて、唇を慄はせた。

『お母さん、私がお前の兒だ。私がお前のカールだ。』と言ますとお母さんは私の兩腕に倒れかかりました。』と彼は繰返して言つて、稍々氣を静めながら、兩頬に傳ふて滴下る大粒の涙を拂いた。

『が、私が生れた故郷で一生暮らすといふことは、神様の御意には叶はなかつた。』

私は悪い運星に生れ付いて居つたのです。不幸は私の到る處に追いて來ました。私は唯三月しか故郷に居りませんでした。或る日曜日のこと、私は、とある咖啡店で麥酒を飲みながら煙草を吹かして、知つた連日と政治談をして、フランツ皇帝だのナポレオンだの、就いては戦争の事だの各人で勝手な意見を喋つて居りました。すると其の時私共の直ぐ傍に灰色の外套を着た一人の見知ぬ紳士が坐つて同じやうに咖啡を飲んだり煙草を吸つたりしてゐましたが、黙つて口は開き



ません。其の内夜番の十時を呼ぶ聲を聞いたので、私は帽子を取つて勘定を済まし、自家に歸りました。すると、眞夜中時分になつて誰か戸を叩く者がありま  
す。私は眼を覺まして、「誰だ？」と言ふと、「明ける！」と言ふ。「名を言へ、  
誰だお前は？」さうしたら明けるから」「御掟だ、明ろ！」戸外から返事をする。私  
は戸を明けた。と、銃を持つた二人の兵卒が戸口に突立つて、晩に咖啡店で吾々の  
傍に座つてゐた其の灰色の外套の知らぬ男が、つと家内に這入つて來た。彼奴探  
偵であつた。「一所に來い」と其奴が言ふ。私は「宜しい」と言つて長靴や股引を穿  
き、股引吊りを締直して部屋を歩き廻つた。情は激して來て、腹の中で「奴、奇  
生」と言ひながら、劍の懸けてある壁の方に寄つて來ると、私は突然其劍を捉む  
で「此の探偵奴、サア來い！」と言ふより早く、其奴の右手に一刀、左手に一刀、そ  
れから頭部に一刀切り付けた。そのまゝ探偵は斃れた！ 私は自分の小靴と金錢  
とを捉つて窓から飛出した。其の足でエムス（ブロシヤの）に行つた。其處でサジ

ン大將と知合になつた。大將は私の氣象を面白がつて、公使から旅行券を買つ  
て下さつて、子供を教へさす積りで自分と一所に私を露西亞に連れて來た。サジ  
ン大將が死くなつてから貴下のお母さんが私を自分の處に呼び寄せて呉れました。  
で、お母さんがいはれる「カール・イワニッチさん、私は子供を貴下の監督に一切  
お任せしますから、何卒彼等を可愛がつて遣つて下さいまし。さうして私は決し  
て貴下を免職するやうなことはしませぬ。私は引受けて貴下の老後をも氣樂にし  
て上げます。」が、今は最早其のお母さんは亡くなつて何にも忘れられて了つた。  
二十年の御奉公の結果が、今からまたコックとした麪包の皮殻を漁す爲に、此の  
老年をして世路に出て行かねばなりません。神様が見て知つてござる。彼神が好  
いやうにして下さる。が、唯私は若子達と離別れるが悲い、坊ちゃん。』と、終に  
を言つて、手を執つて自分の方に私を引寄せながら頭に接吻をして呉れた。



十一 點

喪服の歳の末方になつて、お祖母さんも幾許か喪失つてゐた愁傷から回復して来て、折々は來客、格別子供客、私達の歳格向の男兒や女兒に接するやうになつた。十二月の十三日、リュウボチカの誕生日にコルナコフ公爵夫人に其の令嬢達を初めワラキナ夫人、娘のソニチカ、イリンカ、グランプ、イワンの末の兄弟が二人、正餐の前に出掛けて來た。

會話す聲や笑ふ聲や、走り回つたりする音が階下から私達の處へ聞える。階下では此の仲間が皆集てゐる。が、吾々は朝の課業が卒るまでは彼等と一所になることが出來ない。教室に懸けてある時間割に

「月曜日、二時より三時まで歴史、地理」と誌してある。

で、歴史の教師が來るのを今かくと待ちながらも、今日は來なければ好いがと

思つてゐた。二時を二十分も經つたが、教師はまだ來たらしい様子もない。毎時  
も横切つて來る街路にも姿は見えぬ。私は其の街路を見詰めながら、何卒見えね  
ば好いがと、そればかりを祈つてゐた。

『レベデフは今日は來ないやうだね。』とワロヂアは日課の準備をしてゐたスマラ  
グドフの本から一寸眼を離して言つた。

『何卒く來ないやうに！ でも何うだか分らぬ。だが彼處に來るやうだ。』と私  
は悲しげな聲で言つた。

ワロヂアは起つて窓に來た。

『違ふ。ぢやない。何處かの人だらう。二時半まで待つて見やう。』と、彼が仕事  
を休めた時に毎時する癖の背伸をしながら頭を掻いて

『若し二時半まで待つても來なかつたならセン・ゼロームさんに言つて休課に  
して下さ。』



『來なくつても好いに』と、私もまた背伸をして頭の上に兩手で持つてゐたカイダノフの本を振廻はしながら言つた。

それでも所在なさに私は其の日の日課の處を抜いて讀み始めた。其處は長くつて六ヶ敷かつた。何が何だか少しも分らぬ。とても其處に在ることを諳記することなどは出來さうにもない。何か或る問題に全心を集中しやうとしても、それが出來ぬやうに神経の亢奮した場合であつたから、尙ほそれが憶えられなかつた。

歴史の時は毎時此様な怠屈な馬鹿氣な課目はないと思はれたが、此の前の日課の濟んだ後でレベデフは私の事をセン・ゼロームに訴した。で、手帳に二點が記された。良くなかつたのだ。

セン・ゼロームは其の時、若し私が次の日課の時三點より少かつたならば、甚い罰を受けねばならぬと言つた。今此の次の日課が差迫つて來た。で、白狀すれば其の時私は自分ながら甚だ卑怯だと思つた。

それでも私は日課の熟讀に氣を取られて、客間に教師の本靴の音がするのを知らなかつたが、それと氣がついて吃驚した。私が其の方を見向かうとする間もなく、もう眼に見るやうに思つてゐた痘痕面の、知り過ぎたほど眼馴れた樸訥な教師の姿が、青い上衣を學者風の鈕釦で固く締めて、鬪の處にツト立現はれた。

彼は徐に窓の處に帽子を置き、卓に手帳を置いて、それからさもく大事さうに燕尾服の尾を脇にハネて、喘ぎぐ自分の席に腰を掛けた。

『さあ、諸君も』と彼は汗の流れる手で他の手を擦りながら『此の前の日課に何のお話をしましたか、先づそれを復習つて見ませう。それから中世紀の續きを言つて聞かします。』

ワロチアが、問題に就いて、能く知抜いてゐる人間の事を、格別に自在に自信を以つて答へてゐる時を見量つて、私は何といふ目的もなく階段に出て行つた。直ぐ階下に行くことは流石に私に出來兼ねたから、自分ながら全く其の氣なしに自然



に勝手の方に足が向いたのも尤もであつたが、私が恰度戸の背後の、私の毎時の窺き場所に身を隠さうとする所へ、平常私の出合の悪い原因ばかりになつたミイミが突然に私に飛んで来て『貴郎は此處へ何しに？』と、嚇すやうに私と女中部屋の戸とを交替に見ながら言つた。

私は自分が教室に居ないことゝ、居るべき用のない處に居たので、全く悪いことをしたと思つた。それで自分でも黙つて俯向いて悄然と、さもく後悔の素振をして見せた。『えッ、誰が其様な處を來て見ました！ 此處で何を貴郎はしてゐました？』ミイミは重ねて言つた。私は矢張黙つてゐた。『否、此のまゝに打棄つて置くことはなりません。私、此の事を一切伯爵夫人に申さねばなりません。』と階段の欄干に掌を急拍けて繰返へした。

私が教室に戻つて來た時は既に三時を五分過ぎてゐた。教師はさも私の在否に氣を着けなかつたかのやうに、ワロヂアに次の課目を説いてゐた。さうして説明が

終つて教師は筆記帳を仕舞ひ始めた。ワロヂアは勤惰表を取るために次の室に出て行つた。一切濟んでも私の事は忘れられてあるので、私は歡しい氣になつた。

が、忽ち教師は意地の悪さうな微笑をして私の方に向き直つた。

さうして手と手を磨擦りながら『私は貴君が自分の課業を御勉強なさることを望みます、ね。』と言つた。

『僕は學習へました、先生。』と答へた。

『ちや、セン・ルイの十字軍に就いて何か私に言つて御覽なさい。』教師は自身の脚元を氣を注いで諦視め椅子を向け替へながら言つた。『先づ佛蘭西の王が十字軍に投ずるに至つた原因を話して御覽なさい。』と、額を擧げて墨壺に指を觸り『それちや聞きますが、其の遠征の大體の特質を言つて御覽なさい。』と教師は拳固で何物か捉らうと爲るやうな舉動をしながら『で、畢竟、一般に此の十字軍が歐羅巴諸國に如何なる影響を與へました？』と、自分の筆記帳を以つて卓の左側を敲



きながら『就中佛蘭西王國に於ける影響は？』と、少し右方に頭を傾けて、此度はまた卓の右側を打つて言つた。

私は少時の間、唾を嚥下んでさて眩暈をして、横に頭を曲げて黙つてゐた。それから卓の上に轉んでゐた筆を執つて、それを小さくへし折た。矢張無言のまま、でゐた。

『其の筆を何卒私にお貸しなさい。』と言つて教師は手を伸ばして『それはまた役に立つことがあります。サアそれから！』

『ル……イ——王——セン・ルイはあの——あの——あの——善いそして賢い皇帝であります。』

『えッ 何です？』

『ある皇帝があつて、それがゼルサレムに行かうと考へて、其のお母さんに政府の政權を委しました。』

『お母さんの名は何と言ひました？』

『ブ——ブ——ランカ？』

『えッ 何ですと？ ブランカ？』

私は極が悪いので仕方なしに無理笑ひした。

『ウム、で、其他何か知つてますか。』教師は嘲るやうに言つた。

最早私は何とも言ひ抜けることが出来なくなつて、一つ眩暈をして、それから出放題の嘘を言つた。教師は黙つて、私から取上げた羽筆を以つて卓の塵埃を静と輕打きながら耳の上から私を諦視めて『宜しい、それで宜しい。』と重ねて言つた。

私は自分が何にも知らぬこと、また自分が思つてゐる通りに少しも自分を發表して居らぬことを意識してゐた。さうして教師がそれを知つて、私を止めもせねば、正だしもせぬのを見て、私は甚く當惑した。



『何故彼はゼルサレムに行かうといふ觀念を起したのです？』教師は私の言葉を繰返へした。

『それは——斯ういふ理由で——斯ういふ目的で以つて、それ故に——』私ははつたり行き詰つて後の句が續かなかつた。若し其の教師の奴めが一年中黙つてジロく私を諦視て居ても、私はもうグウの音も出せないやうに思はれた。教師は三分間ばかり私を凝視てゐたが、深い悲みの表情が顔に表はれた。さうして恰度部室に入つて来たワロチアに對つて情ない調子で、

『その記録帳を私にお出しなす。』

ワロチアは其れを教師に渡して、大切さうに勤惰表を其の傍に置いた。

教師は帳簿を披ひて、さて慎重に筆を濕してワロチアには諳記と行狀點の下に美事な手で五を附けた。それから此度は私の勤怠が誌されてある欄の處に筆を止めて私の方を見て、墨汁を拂つて、さて考込んだ。と忽ち其の手が殆ど見えるか

見えぬかくらゐ動いたと思ふと、其處に綺麗な格向の一の字と句點が出来た。も一度動くと、此度は行狀欄に他の一と點が付いた。

教師は慎重に記録帳を閉ぢて起上つて、失望と哀願と抗議の籠つた私の一瞥を、さも認ない風で戸口に行つて、

『ミカイル・イラリオノフィッチさん』と、私は教師の名を呼んだ。

『否』と教師は直ぐ私が言ひたいと思つてゐることを悟つて『其様なことをしては教へることが出来ません。私は徒だ給料は受けません。』

と言ひ放つて木靴を穿き、駱駝織の外套を被つて、大切さうに袷巻を輕打いて、私に如何な事が生じたかそんな事には誰が頓着するものかといふ風をして！ 彼に取つてはペンを些と動かすだけだが、私に取つては非常な不幸だ。

『課業は濟んだのですか？』セン・ゼロームが、部室に入つて來ながら問ねた。

『え、』



『先生は氣嫌が好かつたですか？』

『え、』ワロヂアが言つた。

『幾點君は取りましたか？』

『五點』

『それからニコラス君は？』

私は黙つてゐた。

『四點のやうでした。』ワロヂアが言つて呉れた。彼は、或は其の日だけのつもりかも知れぬが、私を救ける必要があると察してた。若し私が罰せられるにしても、家に來客のある今日だけでも罰を受けぬやうにして呉れた。

十二 小さい鍵

私達は漸とのことで階下に行つて、それから卓の處に呼寄せられた時に始めて

來客と挨拶を交した。お父さんは、その時恰度勝つてゐたが、非常な上機嫌で綺麗な銀製の茶道具をリュウボチアに贈つた。それから饗宴の後誕生期の娘に遣る糖菓が居室に置いてあると言つた。

『他人を使ふには及ばぬ、ココロ（親む）お前行つて取つて來る方が好い。鍵は大きい卓の上に在る、匣の中に、知つてゐるだらう。其の中の一箱大きい鍵で右の二つ目の抽斗を開けて見なさい。其の中に函と紙に包んだ糖菓とあるから、それを一切此處に持つてお出で。』と私に命令けた。

『それから煙草を取つて來ませうか。』私は正餐の後でお父さんが何時も誰かに取りに遣るのを知つてゐたので聞いて見た。

『あ、持つてお出で。が、室の中の物に何にも觸つては不可いよ。』とお父さんは後から呼び掛けた。

教へられた處に鍵はあつた。が、其の抽斗を開けやうとして私はふと同じ束に



なつてゐる小さい鍵で何が開けられるだらうか、知りたいと思ふ念で自から手が止つた。

卓の上に種々なものを並置べた間に、欄干の近くに海老錠の附いた刺繍した紙挟みが置いてあつた。私は其の小さい鍵が若し其の錠に合ふのではないかと試に當て、見た、すると、恰度甘く嵌つた。披くと、中には紙が堆く重ねてある。さうなると其等の紙が何であるか知りたいたいと好奇心の感に驅られて、私は良心の聲は耳にも入らなくなつた。で、紙挟みの中に何ががあるか探して見た。

凡ての年長者特に父に對しては何かなしに唯尊敬をする子供らしい感が強かつたから私は何を見ても、其に依て或る何か結論を附けやうとする考へを無意識の間に斥けた。私は、お父さんは吾々とは全く異つた、それはく美しい、行くことの出来ない、私には理解することの出来ない世界に住んでゐるもの、やうに思はれた。さうしてお父さんの生活の秘密に立入らうとするのが、何だか私に取つて

は神聖を瀆す行ひのやうに思はれた。それゆゑ殆ど無意識に、お父さんの紙挟みの中に發見した事も、私には悪い行爲をしたといふ朦朧な智識の外に、少しも明瞭な觀念を留めなかつた。私は唯恥かしいやうな不愉快なやうな心地がした。

此様なやうな感情がしたので、私は成るだけ急いで紙挟みを閉ぢやうと思つたが、私は其の記憶すべき日に於て明かにあらゆる種類の不幸を堪へ忍ばねばならぬ運命になつてゐた。海老錠の鍵眼に鍵を入れて私はそれを反對の方に廻はして、錠が下りたものと思つて、鍵を引抜いた。——おゝ恐しや！ 鍵の頭だけが取れて手に残つた。私は無駄に錠の中に残つた半分とそれとを繋合はせう、さうして何うかして魔術の力でいも、それを取らうとして見た。が、私は遂々、今日にもお父さんが自分の書齋に戻つて来たならば、直ぐ發見されねばならぬ一つの新しい罪を犯した。といふ恐ろしい觀念に自分で自身を平氣にさせられた。

ミイミの愁訴、一點、それから其の小さい鍵！ これほど悪いことのあつた例が



ない。お祖母さんはミイミが愁訴したので、セン・ゼロームは一點に就いて、お父さんは其の鍵に就いて、凡て是等が今に一時に私を壓倒して來るであらう。而も其の晩の内に。

『私、何うなるだらう？ あゝ、私は何をした？』と私は書齋の軟かな敷物の上を歩みながら聲高く言つた。それから糖菓と煙草とを取りながら自分で自分に『あッ、何となるやら、何となるやら』と獨言を言ひくく本宅の方に走つて行つた。私が幼年の頃、ニコライから聞いた、此の空想的な格言が、私の一生の間凡べての危機に臨んだ時に、一時の有益な慰藉を與へた。それから私は廣間に入つて行つた時には、稍々亢奮したやうな平常と違つたやうな、が、非常に歡しい心持がした。

十三 女謀叛人

饗宴の後遊戯が始まつた。私は一番活潑に戯れた。『猫と鼠事』を戯つてゐる時、私は無雜作に、私達と一所に戯れてゐたコルナコフ家の女執事の處に走つて行つて、不覺彼女の衣服の裾を踏んで破いた。すると、女執事は狼狽した容貌をして其れを繕ふ爲に女中部屋に退つた。それが此處にゐた娘達、就中ソニチカに非常に興を與へた。それと見て私にも一度そんな事で彼等を面白がらせうと思つた。

こんな愛嬌から、女執事が室に戻つて來るや否、私はまた彼女の周圍に跳ね廻つて好い機を見て、踵で裾を踏まへてまた引裂いた。ソニチカや娘達が、クス／＼笑つた。それを見て私の虚榮心は非常に満足された。するとセンゼ・ロームが、私の惡戯を見て居たと思はれて、私の傍に寄つて來て何ともいへない恐しい澁面をして、何うも私が尋常にして樂しんでゐない、若しも些と温和しくしないと、祝日だつて容赦はない、悔る目に遭すぞと言つた。



が、私は恰度懐に持つてゐるより以上に賭けて無くして了つて、勘定をして見るのが恐くつて、唯何も考へぬやうに、氣を外さうが爲に取戻す望も無いのに自暴になつて勝負を試る人間のやうに、興奮の状態になつてゐた。で、セン・ゼロームがさう言ふと、私は不謹慎な微笑を洩して其處を他に行つた。

『猫と鼠事』の後誰か、私達か『長鼻』と言つてゐた遊戯を始めた。其れは椅子を二列に對向して置いて、紳士と貴女が二組に分れて皆なが變るくく相手を選ぶのだ。

コルナコフア家の一番若い令嬢は、毎時も一番小さいイワンを選び、カテンカはワロヂアか、イリンカを選び、ソニチカは毎時もセロツツアを選んだ。さうしてソニチカは少しもそれを羞かしいとは思はなかつた。で、セロツツアが彼女の正面に行つて腰を掛けたのを見て、私は吃驚して了つた。彼女は其の可愛い鳴るやうな笑ひ方で笑つて、自分が悟解た事を知すために頭を以つて合圖のやうな

ことをして見せた。私は餘殘者だ。取り殘されたのだ。彼等は毎時も私の事を『誰かまだ残つてゐる？ あゝニコリンカ、さうだ彼の人を取らう。』と言はねばならぬ譯だと考へて、私は甚く自負心を傷けられたやうな氣がした。

それゆゑ私の順番が來た時に、私は大膽にわざと私の姉妹や不纏致な公爵家の令嬢の處に寄つて行つた。また不幸にしてそれが決して間違はなかつたのだ。さうしてソニチカは私といふものは、てんでないものゝやうにセロツツア・イワンに全く吸込まれてゐるやうに私には見えた。私は何ういふ理由か分らなかつたが腦の内では彼女を女謀叛人と呼んだ。何故なれば彼女は私を選ばう、セロツツアを選ぶまいとは決して約束しなかつた。それにも係らず私は彼女が非常に薄情なことをしたと自分で確信してゐた。

遊戯の後、女謀叛人——其者を私は賤みながらも些も眼を離し得なかつた——が、セロツツアとカテンカと隅の方に引込んで三人隠れたやうにして何か議論を



してゐるのを認めて、私は其の秘密を發見しやうと思つて、静とピアノの後部に這上た。すると、カテンカはカムブレー製の手巾の兩方の隅を持つて、ソニチカの頭とセロツツアの頭との間に隔を拵へてゐた。

『否、貴女が劣けた。貴女お拂ひなさい!』とセロツツアが言つた。ソニチカは彼を前に立つて腕を以つて、罪を犯すやうにカテンカを押除けて、顔を赤くして言つた、

『否、私は劣けはせぬ、私はカザリンを持ちませうか。』

『私は眞實を言はねば厭。貴女は賭に劣けたでせう。』と、カテンカが答へた。

カテンカが此様なことを云つてゐる暇に、セロツツアは屈みかゝつてソニチカを接吻した。セロツツアは女の紅の唇を認か接吻した。ソニチカはさうされるのが何でもないことで、それはく楽しいことのやうに平氣で笑つてゐた。怖しや!!! あゝ狡猾な女謀叛人!

十四日 蝕

私は俄かに一般に女性といふものに對して全く輕蔑を感じた。さうして殊にソニチカに對してさう思つた。私は昇等の遊戯が少とも可笑くも何ともなくなつて、此様な事は唯少女がするに好いことだと自分獨りで定めて、彼等を吃驚させるやうな何かも少し喧囂しく言つて、男らしい行爲を甚くして見たくなつた。間もなく其の機會が遣つて來た。

セン・ゼロームがミイミと何事か話しをして出て行つた。初め其の足音が階段に聞えて居つたが、それから頭の上になつて教室の方に行く音がする。ミイミが課業の時間に何處其處で私を見たことを彼に話した。さうして日記簿を檢査する爲に行つたのではないかといふ思想が胸に浮んだ。其の時分私はセン・ゼロームは、私を罰する欲望より他此の世に何等の目的を有たぬものと思つてゐた。私は



何處かで斯ういふことを讀た。子供が十二から十四くらゐの間詳しく言へば少年の過渡期に在る時代には格別に放火とか殺人とかいふやうなことがして見たくなるものである。私の少年時代を回想して見るに、特に氣嫌の優れない日には、非常に明かに、敢て害しやうといふ目的も意思もなく、唯好奇心から盲目的の活動慾に應せんが爲に最も恐るべき罪惡を爲て見たい心持がすることがある。將來といふものがそれはく陰鬱な色彩に見えて、其れを凝乎と心で視据ゑるのが恐ろしくつて、全く心理の活動に壓迫されて、未來もなければ過去もなかつたと自から信じやうとするやうな時期があるものである。斯様な時期に在つては凡て何事に係らず意思で決行する前に先づ分別を定めるといふことがないで、専ら肉欲的本能が單り生活の發動力として存するのみである。子供が特に未經驗の理由によつて、彼が深く愛する所の父母兄妹の眠むつてゐる其の家にすら、少しの恐怖も躊躇もなく、微笑しながら好奇心で火をも放ち兼ねないものであるといふて

とを私は理解し得る。此の一時の反省の陥缺の爲めに、心理が錯行の状態になつて來て、十七歳になるある百姓の子が、腰掛の傍に置いてあつた磨ぎ澄ましたまの斧を熟視した所から、その腰掛に年の寄つた自分の父爺が俯向いて眠つてゐるのを目かけて突然に斧を揮ひ、腰掛の上の斷切つた頸部から生血の滴れるのを珍らしさうに馬鹿な顔をして諦視めてゐた。又之れと同じ反省の陥缺と本能的好奇心心とよりして、人間は絶壁の崖頭に佇立つて、「自分が若し此處から飛込んだら何うであらう？」と思つて一種の愉快を経験する。或は額に彈丸の籠めてある短銃を當て、「若し自分が此のまゝ引金を引いたら何うであらう？」と考へたり、また社會が一般に特別の尊敬を拂つてゐるやうな人を諦視て、「若し自分が彼の傍に行つて、鼻端を捉へて「サア君、一所に行かう？」とでも言つたら何うであらうと考へたりする。

此の内部の興奮と反省の陥缺とに動されて、セン・ゼロームが、階下に降りて



来て、私が悪いことをしたり、勉強をよくしなかつたりした爲に其の晩其處にゐる権利がない。さうして直ちに二階に行かなければならぬと言つた時に、私は彼に對つて舌を突出して、自分は其の場處を動かぬと言つた。

寸時の間、流石のセン・ゼロームも驚きと憤りの餘り一言も出し得なかつた。

『宜しい……私は既う度々貴君を罰すと言つたが、貴君のお祖母さんが謝つて連れてつた。が、斯うなつては、答つより他に貴君には役に立たぬ、今日こそは貴君は十分にさうされる價値がある。』

彼は其處にゐる者一同に聞えるほど大きな聲でさう言つた。全身の血が非常な力を以つて心臓に逆戻りをした。其處が劇しく躍つた。満面に朱の濺いだ唇がブル／＼と全く覺えずに慄へた。其の時私が恐ろしく見えたに相違ない。セン・ゼロームは私の視線を避けながらツカ／＼と速かに私の傍に寄つて来て、私の手を引捉んだ。が、怒憤に無中になつて、彼の手が私に觸るや否やフツと振り

拂ひざま、少年にあらん限りの力を以つて彼方を衝いた。

『何うしたんだ？』懼れ且つ驚いて私の行爲を見てゐたワロチアは私の方に寄つて言つた。

『邪魔するな！』私は涙ながら彼に叫んだ。『誰一人も私を愛しない、何様なに私がつらいつつた。お前は誰も知つて呉れない。お前は皆な嫌だ、厭だ。』と私は氣が狂つたやうになつて、一同に向つて言つた。

が、此の時セン・ゼロームは蒼い決心した面相をして私に寄つて来た。さうして防せがうと用意する間に非常なる力を以つて、さながら萬力のやうに私の兩腕を捉んで、彼方に引摺つた。私は激昂して頭の中が渦のやうに廻轉りながら無中に力の續く限り頭と膝とを以つて自暴に争つたのを憶えてゐる。また私の鼻尖が度々誰かの唇に衝突つたり、誰かの外套が私の口の中に入つたり、私の周圍に誰かの足が見えたり塵埃や、セン・ゼロームの體に蒸らしてゐるバイオレットが



一所になつて臭つたのを憶えてゐる。  
それから五分間の後、私は天井裏に連れて行かれて、後の戸口を固く閉められた。  
『羊皮笞……笞を持つて来い』と彼奴は忌々しい、勝誇つた聲で叫んだ。

十五 空 想

其の時私は、斯うも種々の災難が降り罹つてもまだ生存へてゐて、後日落着いて今日の事を回想するやうな日が来るであらうと想像することは出来なかつた。これ切り死んで了ふであらうと思つた。  
私は凝乎と自分が仕た事を想ひ出して、これから何うなるであらうといふことを想像することが出来なかつた。唯私は回復の着ぬまでに零落れ果て、了つたといふことが朦朧に解つたのみであつた。

最初一時の間階上も階下も静まり返つた。それとも非常に頭の中が激昂して居つた爲に私にだけさう見えただけかも知れぬ。が、漸次に種々な音響を聞き分けることが出来るやうになつた。グシリイが階下に来て、箒か、何かのやうなものを窓の棚の所に投げ懸けて置いて欠伸を一つして函の床の中に横になつたらしい。またアウガスト・アントニッチの大きな聲が聞える。(彼は屹度私の事を話してゐた)すると此度は子供の聲がして、笑つたり走り廻つたりするやうでもある。とまた五六分も経つと、家中の者が、さもく一人として私が此の眞暗な天井裏に坐つてゐることを知りもせねば考へもせぬかのやうに、再び一同以前の動靜に返つたやうである。

私は號泣はしなかつたが、何だか石のやうに重い物が胸に乗つてゐる。思慮と幻想とが、混雑つた想像の前を非常な速力を以つて馳けて行く。が、災難に捕捉まつたといふ記憶が絶えず其等の不思議な鍵鎖の糸を破つた。かと思ふと復た恐



怖と失望の餘り、さりながら私を待つてゐる運命の中に入つて行くやうに、際涯もなき不安の迷宮を遍歴ぐる。

するとまた、斯う一同で私を嫌ふのみならず、憎んだりするについては、其處に何か原因がなくてはならぬといふ觀念が浮んだ。(其の時私は確に、一同——お祖母さん初め馬丁のフィリップに至るまで私を憎んでゐて、私が苦しむのを見て愉快に思つてゐるに相違ないと獨斷にして居つた。)

さうして私は獨で「私は屹度お父さんやお母さんの子でもなければ、ワロヂアの兄弟でもなくつて、唯不幸なる孤兒で棄兒で孤兒院から養取つたのに相違ない。」とさう思つた。で、此の無稽な觀念が、それを考へてゐるので一種の憂鬱なる安心を與へたのみならず、それがまた非常に眞實らしくさへ思はれた。さうして自分は世にも不幸な孤兒であるが、其の不幸といふは自分で自分を責めてゝなくして、斯うなるのは私が生れ落ちて此の方私の運命であつた。さうして私の不運は、あの

不幸なるカール・イワニッチと同じである。と考へて、それが私には何だか樂しかつた。

『併しながらそれにしても、此の通り私が自分でそれを突留めて知つてゐるのに此の上何故此の秘密を隠して置くのであらう?』と私は獨語を言つた『明日私はお父さんの所へ行つて、かう言はう「お父さん貴下は無益に私の素生の秘密を私にお隠しなさる。私はもう其れを知つてゐます。」するとお父さんは言ふだらう「何うしたと言ふんだい。え? 遅かれ早かれお前は其れを聞いて知るだらうとは思つてゐたが、お前は實は私の子ではないのだ。私はお前を養取つたのだ。で、若しお前が私の慈愛を難有いと言ふなら、私は決してお前を見棄てはせぬ。」すると私は「お父さん、貴下をお父さんと呼ぶ道理は私にはないけれど、私は今此れをお終に言ふのです。私は平常貴下を愛しました。之れからも相變らず愛します。さうして私は貴下が私の恩人だといふことを一生決して忘れはいたしませぬ。が、



私は最早貴下のお家に留ることは出来ませぬ。一人として此家で私を愛するものはございませぬ。さうしてセン・ゼロームは私を愛するものではございませぬ。否、否、セン・ゼロームは私を破滅せしめやうと誓ひました。夫れ故に此の上は彼か私かの中何方か貴下のお家を出て行かねばなりません。何故なれば、私は自分で獨り定めることは出来ませぬから。私は非常に彼を憎んでゐます、それが爲に或る決心を有つてゐます。私は口で斯く言ふ如く容易に彼を殺します。お父さん、私は彼を殺します。さう言ふとお父さんは私を宥めやうとするが、私は私の手を振つて言ふ「否、恩人、私共は一所に居ることは到底出来ませぬ。唯私を追放して下さい。さう言つて、私は父を抱いてそれから佛蘭西語で言ふだらう。お父さん、お父さん、私の恩人、何卒私に最後の祝福を與へて下さいませ。さうして神様に何も斯もお任せ申します。』さう言つて私は眞暗な物置部屋の函の中に坐つて、腹の中で泣いたり叫んだりしてゐる。が、忽ち私は恥づべき刑罰に待たるる身であ

ることを想ひ起し、現實が眞の姿で明々と顯はれる。さうして私の空想は瞬く間に掻消える。

さうすると、此度は既う私は、私の家を出て了つて自由になつてゐるやうに空想する。私は驃騎兵に入つて戦争に行く。敵は八方から私を攻撃する。私は剣を揮つて一人を殺し、二度揮つてまた殺し、三度四度、最後に負傷と疲労との爲に私は地上に斃れ「勝利！」を叫ぶ。大將が近寄つて、「何處に彼は居る、吾々の救世主は？」と問く。一同將軍に私を指す。彼は身を私の頸の上に投げて、さうして歡喜の涙を以つて叫ぶ、「勝利！私は蘇生し、黒布を以つて腕を縛つて、トウエルスキイの公路を運動する。私は大將だ！が、見てゐると皇帝が私の方に來る。さうして、「此の若い負傷者は誰か？」と問く、それが即ち名譽高き英雄ニコライであると分る。皇帝はそれと知つて私の傍に寄つて「朕は難有く思ふぞ、お前の望むものがあらば言へ、何事にも聽て取らずぞ。」と言ふ。私は忝しく敬禮を施



して、自分の劍に凭掛つて、「陛下、父祖の國の爲に私の血を濺ぐことを得ましたは誠に幸福の至りでございます。私は國の爲に死たいと思ひます。が、若し陛下がそれほどまでに御慈悲深くあらせらるゝならば希くば一つのお願ひを御聽き届け下さいませ。私の敵外國人セン・ゼロームを絶滅することをお許し下さいませ。私は吾が敵セン・ゼロームを絶滅せしめたいと存じます。」さうして自分はセン・ゼロームの前に突立ち上つて言ふ「貴様が予を不幸に陥入れたのだ。踞れ！」と言ふ。が、忽ち實際のセン・ゼロームが何時かは答を持つて入つて來ることを想ひ浮べて私は再び自分を振返つて見ると、自分は國家に身を捧げてゐる大將ではなくして、頗る憐れな泣いてゐる人物である。

此度はまた神様のことを想ひ浮べて、厚顔しくも私は神様に何故私を罰するかと怨ずる。『私は決して朝晩の祈禱を忘れたことはない。それに何して私は斯う苦痛な目を見るのか。』

私は確に、私が少年時代に悩んだ宗教上の懷疑の初まりは此の時からであつたと信ずる。それは不幸が私の不平や不信仰を刺激したのではない。二十四時間の間も幽閉されて、精神が千々に掻き亂された時に私の心に這入つて來た攝理の不正といふ思想が、恰も雨の後の軟かい土地の上に溢れた有害な種子の如く、急に發育して根を張つたのである。

其の時私は確に死ぬであらうと思つた。で、セン・ゼロームが天井裏に上つて來て私が死骸になつてゐるのを見出した時に吃驚する態を明歴と眼に浮べた。さうして、ナタリヤ・サピスチナが或時亡者の靈魂は四十日の間家を離れぬと言つたことを想ひ起して、胸の中で空にお祖母さんの家の室といふ室に入つて行つたり、リユウボチカの染々と泣くのや、お祖母さんの愁歎するのや、お父さんがアウガスト・アントニイッチやセン・ゼロームなどと談話するのを聞く、お父さんは涙を潤ませながら「彼兒は佳い兒でした。」と言ふ。と、セン・ゼロームは「えゝ、ですが甚い惡



戯ッ兒でした。」と言ふ。とまた、お父さんが「お前が彼兒を殺したのだ。お前が彼兒を嚇かしたのだ。彼兒はお前が將に與へんとした其の屈辱を忍ぶことが出来なかつたのだ。トットと出て行け、酷い奴が！」と言ふ。

で、セン・ゼロームはお父さんの前に膝づいて涙を流して容赦を乞ふ。四十日が濟むと私の靈魂は天に飛んで行く。其處には白い透明つた長い奇怪に美しい或る物象が見える。さうしてそれが私のお母さんであることが分る、此の白い物が私を取巻いて私を愛撫て呉れる。でも私は何だかまだお母さんに會つたのではないやうな、落着かぬやうな氣がして『若し實際それが貴母なら、私に抱けるやうにも、少し明瞭と貴母を私に見せて下さい。』と、さう言ふ。するとお母さんの聲がして『此處にゐるものは、私達一同斯うなの、私はもうこれより能くお前を抱いてあげることは出来ぬ、お前は斯うしてゐて好いとは思はないのかえ？』『え、それはもうこれで好いと思ふんです、が、貴母は私を探ることも出来ねば、私がお母

さんの手を接吻することが出来ませんから。』『其様なことはしなくつても好いの、此處はもう、それはく綺麗な處なのだから。』と言ふ。さうして私は實際非常に綺麗なやうに思はれて、私達は一所に何處までも高く高く翔つて行く。

すると、私は忽ち眼が覺めたやうに思はれて、自分は眞暗い天井裏の函の中に頬は涙に濡れて、何の考もなく、唯『さうして、私達は何處までも高く翔つて行く。』といふ言葉を繰返してゐるのにまた氣が着く。稍々暫時私は精一杯に自分の境涯を自分に説いて見やうと力めるが、其の瞬間は唯恐ろしい陰氣な條理の分らぬ遠景が私の心眼に現はれてくるばかりである。私はもう一度實在の意識を破つた其等の愉快な幸福な夢に戻らうとして見る。が、不思議と、以前の幻夢の跡に付いて入らうとすると、忽然それがバツと切斷れて了ふ。さうしてそれよりもまだ驚くべきは、それが最早私に面白くも何ともなくなつて來た。



十六 よく挽け食物は出来る

私は天井裏で夜を明かした。誰も私の近くに來なかつた。話すことのあるのは唯翌日であつた。日曜日になつて私は二階の教室に隣つた小さい部室に連れて行つてまた閉込まれた。私は刑罰が何卒禁錮だけで済めば可いと思つた。さうして鮮かな朝光が霜に凍てついた硝子窓の模様を弄つて、街路で常例の晝の響がし出し、爽かな快い心持に微眠くなつたので段々氣分が落着いて來た。それでもまだ寂寥に聶々壓されるやうで、私は唯運動したくなつて、誰かに自分の胸の内に沸え返つてゐるものをありたけ露出して言ひたいやうになつたが、近處には生命のあるものは一つもゐない。加之セン・セロームが彼の部室を歩き廻りながら澄し切つて種々な樂しさうな歌調の口笛を鳴すのが聞くまいとしても聞えて來るので、情狀が倍々面白くなつて瘡に障る。で、自分は、彼奴は何も口笛を鳴らしたりなんぞする必要は少しもないのだが、唯單に私を焦らさうが爲にさう

してゐるのだと、獨斷をした。

二時になつてセン・セロームとワロチアとは階下に行つた。が、ニコライが晝飯を持つて來て呉れた。さうして自分がした事やら之れから何様な目に逢はされるといふことやらを話すと、彼は、

『まあさう、お概きなさんな、根氣よく挽けば食物が出て來ますから。』と言つた。

此の諺は其の後も何度なく私の精神を堅固ならしむるに與かつて力あつたが、その時も何となくそれが爲に私は慰められた。が、唯麩と湯とを持つて來なかつたゞけで晝飯は全部、それに紅い小饅頭まで添へて來たといふことがまた深く私を沈込ました。若し其の紅饅頭を届けて呉れなかつたならば、私は禁錮だけで懲罰せられるのであつたといふことを意味したかも知れぬが、今は私は尙本當に罰せられてゐたのではなかつた。自分は唯有害の人物として他の者から遠ざけられたのであつた。眞個の刑罰はまだ以後であつたといふことが明かになつた。で、



私が此の疑問の解釋に苦んでゐる間に鍵が牢獄の錠に回されて、セン・ゼロームが  
 嚴しい典獄のやうな面をして入つて來た。

『さあお祖母さんの處においでなさい。』と私に見向きもせず言つた。

私は部室を出る前に、白墨で汚てゐるので一寸短表衣の袖口を拂はうとすると、  
 セン・ゼロームが、さも／＼今更其様な外見なんか氣にする効果もないばかりに既  
 う私は墮落し果てゝもした者のやうに、「其様なことをする必要はない」と言つた。

カアテンカヤリユウボチカヤワロデアが、セン・ゼロームが私の手を捉へて廊下  
 を通つて引張つて行く處を、恰度普通に吾々が毎週私達の窓の下を引いて行かれ  
 る囚人を諦視めると同じ表情をして眺めてゐた。

それから私はお祖母さんの手を接吻しやうと思つてお祖母さんの椅子の處に近  
 寄つたら、お祖母さんは、忽ち彼方を向いて、外套の下に手を隠して了つた。

可なり長い間お祖母さんは黙つたまゝ、私が手と眼との遣り場のないまで、妙

な眼付で頭の頂上から足の爪尖までジロ／＼私を見回はして『うむ、其許に……私  
 は言はねばならぬことがあるが、お前はあのお祖母さんのいふことを能く聞い  
 て私を喜ばして呉るれるであらうの。セン・ゼロームさんはお祖母さんの依頼で。』  
 と言葉毎に句切りながら『お前の教育に従事して下さつたのだが、もう、以後は私  
 の家に居らぬとお言ひなされる。何故か？ お前故に、これッ、私はお前が難有い  
 と思ふだらうと思つてゐました。』さう言つてお祖母さんは少時口を噤んで、それ  
 から前以つて説教を準備してあつたらしい口調で『心配して骨を折つて下さるに  
 對しても如何にしてお前がそれに報ねる位はよく分つてゐるだらうと思つてゐま  
 したに、お前は何たら愚鈍者だらう、此の小僧は？ 其の手で以つて此の方にお  
 前さんは反抗つたりなどして。好い事をせい！ 何て伶俐な人だらう！ お祖母  
 さんは、また其様な事をして、お前が餘り優しくして下さることを知らないで、  
 もつと甚い罰に遭ひはせぬかと思つて、それを心配します。此處で先生にお詫を



しなさい。えッ分つたか？」お祖母さんは嚴い命令をするやうな口調で、セン・ゼロームの方を指して言つた。

私はお祖母さんの手の指す方を見たが、セン・ゼロームの外套が眼に入ると、彼方を向いて、其處を微塵も動かなかつた。さうして再び心が滅入つて行くやうな氣になつた。

『何うしたえ！ 私が言ふことを聞かないのかえ、お前は？』

私は全身を慄はした。が動かなかつた。

『ゴ—ゴ—（ニコリンカを優し）』と、お祖母さんは私が腹の中で苦悶してゐるのを見て取つて「ゴ—ゴ—！」と今までの命令するやうな口調でなく、もつと優しく『何うかおしだか、お前は？』と問ねた。

『お祖母さん、私は此の人に赦免を乞ひません。何故でば——』と私は言つたが、其の上一語でも發言たならば、最早呼吸を詰めてゐる涙を塞止めることが出来ぬ

と思つたので、パタリと言ひ止めた。

『私が命令を聴きなさい。何卒聴いてお呉れ。さあ、何うしたと言ふのお前は？』

『私——私——はしません、——私は出来ません。』と言ふと、胸まで逆上げてゐた涙が不意に堤を切つたやうにパラ／＼と流れ落ちた。

『それが貴君、貴君の第二のお母さんに順従ふ術ですか、それがお祖母さんの御親切に報ゐる法ですか。お謝まんなさい！』セン・ゼロームは悲劇じみた聲で言つた。お祖母さんは彼方に向き直つて出て來た涙を拂きながら『まあ何て！、亡母が若し此れを見たなら！ 若し亡母が見たなら——亡母は此の悲みを辛抱することが出来なんだであらう。亡母は辛抱することが出来なんだであらう。』と言つた。

さうしてお祖母さんは段々甚く泣き出した。私も亦た泣いた。が、私は赦免を乞ふといふ思想は決して起らなかつた。



『まあ何卒伯爵夫人、お氣を静かになさいます。』セン・ゼロームが宥めた。併しながらお祖母さんは最早他の言ふことなどは耳に入らない。両手で顔を掩ひ歎息が急に吃逆泣になつて、ヒステリーを起して來た。ミイミとガスチャが吃驚した顔をして部屋に飛込んで來て、急いで或興奮劑を齎がし、急速しく部室中駈廻つたり、私語いたりする騒動が持上つた。

『貴君は好い事をしました。』セン・ゼロームは私を階上に連れて行きながら冷かした。

『まあ自分は何たる事を仕出來した？ 自分は何といふ恐しい犯罪人であらう！』と獨り想つた。

セン・ゼロームが、「私の部室に行け」と私に命令して置いて再び階下に降りて行くや否、私は何うしやうといふ思慮もなく、唯無中に街路に出口の大梯子段の方へ走つて行つた。

その時私は逃走す心算であつたか、それともまた淵河へ身を沈めでもする思想であつたか、よく憶えて居らぬ。が、私は唯斯ういふことを記憶してゐる。それは誰をも見得ぬやうに両手を以つて顔を隠しながら、ドン／＼其階段を下に飛んで行つた。

すると忽ち『何處へお前は行くんだ？』と聞馴れた聲で尋ねられた。『私はお前を探してゐたんだ。これ！』

私は走り抜けやうと試みた。が、お父さんは私の手を執捉へて厳しく言つた。

『私と一所に來なさい。さあ、何うしてお前は私の書齋の紙挟みに觸つたりなんかした？』と、其處にあつた小さい婦人室に私を連れ込んで質ねた。『えッ！ 何故貴様は黙つてゐる？ ハエ？』と此度は私の耳を摘で迫つた。

『勘忍して下さい。私は何ういふ氣でしたか知らないんです。』

『えッ、貴様は何ういふ氣でしたか知らない？ 貴様は知らぬ？ 貴様は知らぬ？』



貴様は知らぬ？ 貴様は知らぬ？」とお父さんは繰返へして言つて、つツ／＼と私の耳を引張つた。「貴様は之れから先も、用のない事に其の手を出すか出さぬか？ 出さぬか？ 出さぬか？」

私は耳が甚く痛かつたけれども、黙つて泣きもしなかつた。が、私はそれで愉快な道徳的感情を身に覺えた。お父さんが耳を手放すや否や、私は急遽其の手を捉んで滴々涙を其の上に溢しながら、それに接吻した。

「鞭を下さい！ 涙ながらに私は言つた」私を甚く鞭つて下さい、痛いほど。私が悪いんです。私は廢れ者です。私は不幸者です。」

「何うしたんだい、お前は全體？」一寸私を押退けながら問いた。

「否、私は何うしても最早彼方へ行かないんです。」と私はお父さんの外套に取付きながら「一同私を嫌ふんです。私はそれを知つてます。ですけれど私がいふことを聽いて下さい。私を保護して下さい。それでなげや私を追出して下さい。私は

彼奴と一所に居ることは出来ないんです。彼奴は種々な法で私を侮辱しやうとするのです。彼奴は自分の前に私に膝を突かせうとするんです。私を鞭たうと思つてゐるのです。私はそんなことをするものか、僕は子供ぢやない。僕はじつと耐えてゐる事は出来ない。私は死ぬんだ。僕は自殺する。彼奴がお祖母さんに「私が不可い奴だ」と言ひ付けたんです。さうしてお祖母さんも今具合が悪くなつたんです。お祖母さんも僕の事で死ぬかも知れない。私——後生です、僕を打つて下さい！ 何故早く私を苦まないやうにして呉れないのです？」

涙に呼吸が詰つた。私は甚く疲れて最早言ふ力も無くなり、其處の褥椅子に身を凭掛けお父さんの膝に頭を押し當て、自分にも今に死ぬかと思はれたくらゐ歎息をした。

「何でお前は其様な泣くんだ？ さあ好い見だ。」お父さんは私の上に屈みかゝつて勞はるやうに問ねた。



『彼奴は壓制者です。苛責者です。私は死んで了ふ。誰も私を可愛がらない！』  
 私はやうく口を利いた。さうして搗搦て來た。  
 お父さんは私を抱き上げて寢室に連れて行つた。私は其のまゝ、無中に寢入つた。  
 眼が覺めた時分は最早餘程深更つた。一本の蠟燭が枕側に燃えてゐて、侍醫だの  
 ミイミだのリユウボチカなどが部室に來て坐つてゐた。一同私の病氣を心配して  
 ゐるのが其の顔容に歴々と分つてゐた。が、十二時間もぐつすり眠つた後はずつ  
 と氣分が輕快なつた。若しさうでなくてさへ一同私の危篤を心配してゐる所を、  
 また騒がすのを何とも思はなかつたならば、私は或は寢臺から跳び起きたかも知  
 れぬ。それくらゐ良くなつた。

十七 嫌 惡

さうだ。それが眞個の嫌惡といふ心地であつた。が、稗史などに描いてある嘘

らしい唯嫌惡ではなかつた——屢く他人に對して惡事をして悦ぶやうな嫌惡では  
 なかつた。が、此方の尊敬を値する癖に、何としても抑へるに抑へきれないやう  
 な嫌厭な心地を起さしむるその嫌惡である——その頭髮、頸、歩き、振り、音聲  
 手足の格向からその舉動まで、何といふことなしに氣に食ぬ。さうして妙に又そ  
 れが或る不思議な力を以つて先方に自分を引着けて、その極めて些かな素振まで  
 も氣を着けさすやうにくと強る。此の感情を私はセン・ゼロームに對して抱い  
 てゐた。

セン・ゼロームは一年半の間私の自家にゐた。今公平に其の爲人を判斷して見  
 るに、彼は立派な佛蘭西人であつた。が、それは何處までもといふ意味に於て佛  
 蘭西人であつた。彼は馬鹿ではなかつた。相應に教育もあつたし、また私達に對  
 する義務をも忠實に盡した。が、彼は凡ての彼の國人に特有な明瞭な特質を有つ  
 てゐた。さうして特質は吾々露西亞人の性格とは頗る反對で——大風、虛榮心、



厚顔、不作法ともいふべき自信などで——あつた。凡て此れが非常に私を不快に思はしめた。

勿論お祖母さんは肉體上の刑罰に就いては自分の日頃の見解を彼に説明せてゐたから、彼は敢て私達を鞭たうとはしなかつた。が、それにも係らず答を以つて鞭つぞといふ掛聲と共に何ともいひやうのない癩に障る態度をして屢く吾々を嚇しつけた。特に私に對してさうであつた。その調子にもさ、私を鞭撻すれば非常に自分が満足するといふ風が顯はれてゐるやうに思はれた。

私はこれまで決して鞭たれた経験がなかつたから、少しも其の刑罰の苦痛を恐れなかつた。併しながらセン・ゼロームが私を鞭たうかといふ考が唯壓迫されたやうな憤怒と失望の状態に私を陥らしめた。

それは、カール・イワニッチでも氣に入らぬ時には、よく自分で定めた規則に據つて吾々を服従せしむるやうなことがあつた。が、今それを想ひ出しても少しも

腹の立つやうな氣はせぬ。其の時(十四歳の時)でも若しカール・イワニッチが私を鞭つのであつたならば私は平氣でその譴責を忍んだに違ひない。私はカール・イワニッチが好きであつた。私は自分に物情が着いた時から彼の事をも憶えてゐて、初から私の家族の一員として彼に親んだ。併しながらセン・ゼロームは尊大で自負心の強い人間であつた。其者に對して自分は少しの同感をも有たなかつた。が、凡て大人に對して起る無意識の尊敬の念ぐらゐはあつた。カール・イワニッチは道化した老人で、言はゞ私に腹から氣に入つた下男のやうな者であつた。が、それでも私は社會の階級に對する自分の稚い量見から日分を下に置いてゐた。セン・ゼロームは反對に、綺麗な教化た若い洒落者で、誰とでも同等に立たうと試めた。

カール・イワニッチは始終素氣なく吾々を罵りもし、罰しもした。が、彼は明かにそれを「必要であるが、また不愉快い義務だ」と思つた。セン・ゼロームは之



れに反して教育者の職分として刑罰を課することを好んだ。彼が吾々を罰する時には、明かにこれを吾々の利益とするよりも、むしろ自分自身の満足を充たさんためにさうしたのであつた。抑揚のある句切に力を入れて言葉を云ふ其の巧妙なる佛蘭西辯が言ふにいな私に障はつた。同じ事でもカール・イワニッチが怒つた時には、泥子人形とか悪戯者とか、酒の蠅とか言ふに過ぎなかつた。が、セン・ゼロームのはさうでなく、吾々を無用者だとか、下素下郎だとか私の自尊心を傷けるやうなことを口汚なく言つた。

カール・イワニッチは隅に顔を向けて膝を突かした。刑罰といふのは、さういふやうな状態をしてゐて偶然に體が苦しくなる、それをいふのであつた。セン・ゼロームは胸を突出してエラさうに手を振つて悲劇じみた聲を振上げ「踞れ！」と叫んで、自分の方に向いて躊躇して赦免を乞はめた。彼の刑罰は屈辱に在つた。

私は遂に罰せられはしなかつた。さうして夢中に起つたことを誰も詳しく私に

話さなかつた。が、私はその二日間を受けた失望と耻辱と恐怖と嫌悪とは何うしても忘れやうとて忘れることが出来ぬ。セン・ゼロームは其の時から全く私に對して希望を棄て、了つて、全然私に對して無頓着になつたが、其の癖私の方では彼に對して冷淡で居ることが出来なかつた。毎時でも吾々の眼と眼が偶然出合ふと、自分ながら私の眼付に怨恨が餘り明歴と出過ぎてゐるやうに思はれた。さうして私は急いで冷淡の表情を装はうとした。が、その時彼方でも私の其の矯飾をよく了解んでゐるやうに思はれて、私は顔を赧くしてぐるりと彼方に向いた。一言にいへば私は何によらず彼と關係を有つのが何ともいふにいな不愉快であつた。

十八 女中部屋

私は段々段々寂しくなつて、孤獨で瞑想するのと觀察するのとが何よりの樂に



なつた。私の瞑想の主題は次の章に述べるであらうが、私の観察の重なる舞臺は女中部室で、其處に最も私の心を引く芝居があつた。此の芝居の女主人公は言ふまでもなくマスチャであつた。マスチャはまだ私の家に勤めぬ前からワシリイと戀仲になつて、其の時分に二人の間で夫婦になる約束が出来てゐた。が、ある運命で五年ほど互に分れて居なければならなかつたのが、此度それがまたお祖母さんの家で一所になるやうな都合になつた。が、邪魔は何處にも着いて廻るもので、マスチャの叔父に當るニコライといふ者が双思つた戀の障礙になつて、叔父は姪がワシリイと一所になることを承知しないで、ワシリイをば不都合者放蕩者と言つて貶してゐた。

此の障礙の結果は從來冷淡で放埒であつたワシリイをして、急にマスチャに熱ならしめた。さうして其の戀は仕立屋の職人から家僕になつて、淡桃色の襯友を着て頭に香油を附けた者がしさうな戀の仕力であつた。

彼の戀れやうが餘程變つてゐて無茶であつたにも係らず（例へばマスチャに會ふ度に始終何うした事か彼は女を痛い目に遭せうとして抓るか打つか、さもなければ呼吸の止まるほど糞力で抱占めた）愛情が心底からである證據は叔父がいよくにマスチャの手を斷らした時からの事情で分明であつた。ワシリイはそれから自暴酒を飲み始めて居酒屋を彷徨いては亂暴をばかし働いて、何度となく破廉耻罪に問はれて警察署に拘留せられた。それほど甚く身を持崩した。が、マスチャの眼には其様な行狀をされたり、また其様な耻を見せられたりするのが一端の功蹟でもあるかのやうに思はれて、いと男に對する愛情が募つた。

ワシリイが拘留せられてゐる時などマスチャは幾日も眼を乾かす間もなく泣き續けて、朋輩のガスチャに自分の運の悪いことを愁訴す。（ガスチャは、よく思ふやうにならぬ戀仲があつたりする場合に身を入れて聞いて遣る方であつた）で、マスチャは、叔父が屢く自分を口汚く罵りつたり打つたりすると言つて散々



その悪口をいつては、密と忍んで警察署へ戀男の見舞に行く。

讀者よ、今私が語らんとする社會に對して怒つてはならぬ。汝の精神に愛と同情との琴線が尙息んでぬならば、琴線に觸れる響は女中部室に於て最もよく聴くことが出来る。

讀者が私に從いて來るを好むにも好まないにも兎も角私は階段の角に身を運ぶ。其處から女中部室の模様が全然見える。其室には腰掛があつて一同それに掛けてゐる。熨斗だの厚紙で出來た鼻の缺けた人形だの小さな洗濯槽だの小盤だのがあるかと思へば、また窓臺の上には黒い蠟燭の破片やら絹絲の束やら嚙みさした青い胡瓜やら糖菓の箱やらゴチャ／＼取散してある。また大きな赤い卓が置いてあつて、其の上に縫物の仕かけやら、何か更紗に包んだ物やらが載つてゐる。その背後にマスチャが私の氣に入つた淡紅色の麻布の衣服を着て、青い頸巻をして座つてゐる。その頸巻がまた格別に私の心を引く。マスチャは折々縫ふ手を止めて針を

以つて頭を掻いたり、蠟燭の心を切つたりする。私は凝手とそれを諦視ながら考へる。マスチャは彼様な澄んだ青々した眼元や、大きな金色の捲髪や肥然した胸元をしてゐながら何故貴女に生れて來かつたのであらう？ あれで、紅淡色のリボンを裝飾つて、帽子を冠て、さうしてミイミが有つてゐるやうなのでなく、ツウエルスキイの廣小路で見たやうな深紅の外衣(婦人の寛袍)を着けて客室に整然と座つてゐたなら如何によく似合ふであらう！ さうして自分の梓臺で刺繡する。さうすると私は彼女が鏡に映つた所も視てやる。さうして私は如何なものでも彼女が欲しいと思ふ物を拵らへてやる。私は自分の手づから外套だの頭被だの彼女に賜れて遣るに。

ワシリイが檻樓に下つた汚れた淡紅色の襯衣の上へ悪く緊密した外套を着て、泥酔つた、厭な形態つたらない。仰つたり屈んだり肉體を動かす度に、言はずと知れた懲役を食つた人間だといふ痕跡が私には明々と認められるやうに思はれた。



『何うしたの？ ワツシさん、また来て！』マスチヤは一寸座蒲團に針を刺しながら男が入つて来た方に見向ふともせずと言つた。

『来たが何うしたえ？ 見てやがれ、彼奴に碌なことはねえから。』ワシリイは言返した『若し俺が一つ思ひ切ればだが、今ぢや俺だつて少しは身の破滅も考へるから。が、それもだ、何も斯も彼奴の出やうによつてはだ。』

『ワツシさん、貴郎お茶を召りますか』ナデツダといふも一人の女中が聞いた。

『へい、何うも難有う。が、何だつて手前の叔父は此の俺を厭だと吐かすのだ？ 何だつて？ へん、此う申したつて俺だつて自分の衣服もあれば、また俺相當の自慢もある。不具でねえから歩くことも出来る。何が不足だ！ それ見ろ！』と言つてワシリイは大手を揮つた。

『でも、人といふものは少しは他の者のいふことも聴かねばなりませんわ。』とマスチヤは言つて絲を嚙切つて『さうしてお前さんは其様なに……』

『俺には財産はないさ、何處にもない！』  
その時戸の閉る音がお祖母さんの室から響て来て、ガスチヤの我鳴る聲が階段に近づいた。

『御自分で自分が何うしたら好いか分らないんだもの、行つて何とか言つて下さい。まあ何といふ因果などであらう！ 此方はするだけのことをしてゐるのに。』彼の女は腕を揮つて怨言いた。

『これはアガファイア・ミカイロフナ(ガスチヤ)の敬稱(ごうごう)さん。』ワシリイは挨拶しやうとして起つて言つた。

『おや、お前さん此處に来てゐて、私は何もお前さんにさう鄭重扱ひにせられやうとは思ひません。』ガスチヤは彼を諦視ながら苦々しさうに言つた。

『さうして、何しにお前さんは此處に来るの、女中部屋は男の来る所ぢやない！』  
『へい、私はその貴女のお鹽梅が何うかと思ひまして。』ワシリイは極めて下手に



答へた。

『私はもう今に死んで了ふよ。それが私の容態です。』ガスタヤは一層怒つてありたけの聲で我鳴つた。

ワシリイは笑つてゐた。

『何にも笑ふことはない。私がかんなことを言ふのが厭ならとつと自分から出て行きなさい！、さあお門違だ。此の娘はお嫁に行かねばなりません。下臈下郎が！、そら早くお出で。』

さう言つて、ガスタヤは自分の室に地踏鞆を踏んで行つて、窓の硝子が、ガタガタと鳴るやうに氣立ましく戸を閉めた。

それから稍しばらくの間、境壁の彼方で、何につけ、斯につけ、對手嫌はず當り散らして、自暴を言つて、自分の物を投げつけてゐた。終には可愛がつてゐる猫の耳をキュウ／＼引張つてゐたが、遂々何かして戸がガタリと開くと猫は其れ

から尾を振つて、死ぬやうにミイ／＼泣いて飛出した。

『全くだ。俺は他の時に茶を飲みに来ればよかつたに……左様なら、此の次好い機會があつたら。』とワシリイが小聲で言つた。

『氣にしないで下さいよ。』と、ナデツダが瞬をして『どれ私行つて茶釜を見て來ませう。』と言つた。

ナデツダが、さう言つて室を出て行くや否や、ワシリイはマスチイヤの傍にすり寄り『さうだ。兎に角俺が直ぐ其の方を形付けやう。』と談話を續けた。

『俺が、何の道一遍伯爵夫人の所に直に行つて斯様々々の次第でございますからと言つて見やう、若しさうでなければ——もう何も斯も放棄つて了つて、何處までもとつ走らう！』

『ぢや私は獨りで何うするのです？』

『己も唯お前が可哀さうだ。己と斯ういふことにならなければ、屹度もう以前に



自由(放釋)の身になつてゐたにねえ。』

マスチヤは暫時黙つてゐたが『何うしてお前さん 私の處に襯衣を洗濯しに持つて來ないの、ワツシさん。』と言つて襯衣の襟に手を觸つて見ながら、『これまあ、此様なに黒くなつて。』

その時お祖母さんの鈴の音が階下で聞えた。そしてガスチヤが自分の室を飛出した。

ワシリイが彼女を見て急に起上つたのを、ガスチヤは戸口の處に押して行つて、『お前さん此の娘に何をして貰つてゐるの？ 悪い人が。お前さんが、此の娘を此様なにして置つて置いて、それでまた斯う執着いて、何といふ人だらう。それは娘の泣くを見てゐるのはお前にしては面白ろからうさ。歸んなさい！ とつと行きなさい！』怒鳴つて、此度はマスチヤの方に向いて『お前さんにしてもまた、彼様な男の何處が好いの？ 今日もお前さん、彼の男の事でお叔父さんに打たれ

たではないかね？ いやさうだ。お前さん自分で好き放題な態をおしさない。私はワシリイ・グラスコフさんの他誰とも一所になりません。て、馬鹿な！』

『え、私は誰とも夫婦になりません。私は他の者は愛さないのです。若しそれが爲に死ぬまで打れたつて。』マスチヤはパラ／＼と涙を流しながら叫んだ。

私は箱の上に凭れかゝつて、手巾を以つて涙を拭いてゐるマスチヤを長い間見詰めた。さうしてワシリイに就いて私の意見を變へやうと種々に思つて見た。さうして何ういふ點で彼はそんなにマスチヤに好く思はれるのか、それを見出さうと力めた。が、彼の女の悲には眞から同情をするのにも係らず、私の眼に見た所、マスチヤの如に此様な人好きのする女が何うしてワシリイに慕れたのか、私には何しても理由が分らなかつた。

私は自分の室に上つて行ながら、獨語に斯ういふ理窟を考へて見た。それは、『今に私が大きくなつたら、ペトロフスコエが私の物になる。さうしてマスチヤ



とワシリイとが、私の百姓になる。私はパイプを吹かしながら書齋に坐つてゐる。するとマスチャが熨斗を以て臺所に行つてゐる。私は「マスチャを此處に呼べ。」といふ。で、マスチャが来る。さうして室の中には他に誰も居ない。と忽ちワシリイが入つて来る。で、彼はマスチャを見て斯ういふ「私の大切な小さい鳩が墮落した！」するとマスチャが聲を揚げて泣く。さうして私が言ふ「ワシリイや、私はお前が彼女を愛してゐることを知つてゐる。また彼女もお前を愛してゐる。此處にお前に上る一千留の錢がある。彼女と結婚をしなさい。神様がお前達に幸福を下さるから」さうして私は他の室に入つて行く。』

空に心や想像を通過して、遂には痕跡もなく消えて行く數知らぬ思想と空想との中に、それでも偶には特に思想それ自身を想起すといふではないが、人をして後に、何となく心の裡に愉快なものがあつたやうに憶はしむるやうな、さうして其の思想の痕跡を思つて、今一度それを再現して見やうとするやうな、深い感情に

充た皺の如きものを留める或る物がある。マスチャがワシリイと結婚して得らるゝ幸福の爲に、私自身の感情を犠牲にするといふ思想が、今言つたやうなそんな深い痕跡を私の精神の上に残した。

十九 少年時代

私の少年時代に絶えず好んで瞑想して居た問題が果して何であつたか、それは私にも殆んど信じ兼ねる。其等の問題は私の年齢と地位とに頗る矛盾するものであつた。私の意見に従へば、人の地位と其の道徳的活動との間の矛盾は、やがて眞個に誠實といふことの證據である。

年月の進むにつれて孤獨な道徳的生活に日を送つて居た間に、私は人間の行末や未來世や靈魂の不滅などに關する凡ての抽象的の疑問に獨り思ひを密めた。そんな考が自から胸に浮んで來た。凡て經驗のない熱心で、私の弱い子供らしい心



が是等の疑問を解釋しやうと力めた。斯ういふ疑問の起るのは、其處までは人の心が達き得るが、其の解釋は竟に人間には許るされぬといふ最高の階段を示せるものである。

人の心は誰しも銘々に發達の途中此の同じ徑路を通過するものだと思はされた。さうして此の個々の發達は、やがて種族全體の發展となるのである。また種々な哲學上の定理の基礎となる思想は他に譲與することの出來ぬ心の屬性を形作るものであると思はれた。さうして誰でも哲學上の定理を知る前に既に多少明瞭に其様な思想を認識するものであると思ふた。

是等の思想が自然に、私の心に明瞭に且つ顯著な光を帯びて顯はれた。私は斯かる偉大な必要な眞理を自分で始めて發見したものゝやうに思つて、其等を生括に適用しやうと試みたくらぬであつた。

一度、幸福といふものは外界の事情には依存せぬものである。唯吾々が其等の外

界の事情に對する關係に依るものである。人は一度は苦痛に耐える習慣さへ得れば決して不幸にならうとて、なれるものではないといふ考が湧いた。で、自分を勞働に習熟させようとして、私はタチスチエフの大辭典を五分間の間、非常な苦痛を忍んで兩手を差伸して持續して居たこともあつた。或はまた天井裏に行つて繩を以つて眞裸の背を覺えず涙が出るほど強く鞭打つたこともあつた。

また或る時は俄かに何時の何分に私は死ぬるのではないかと想はれて、從來世人が如何なる其の死期を覺り誤つたかといふこと、人間は現在を善用するに依つてのみ唯幸福を得られるものである、未來に就いては考へるものではないといふことを思つて、三日の間此んな思想に支配されて、私は課業をも忘れ、擬乎と寢床に横になつたきり何にもせず、密を塗つた蓋餅を嚙りながら小説を読み耽つてゐた。其の蓋餅をば私は財布の底を拂つて買つた。

また或る時は黑板の前に立つて、自墨を以つて種々な形像を徒ら描きしてゐる



間に忽ち次のやうな思想が胸を衝いて起つた。何故均齋といふことが眼に愉快な  
のであらう？ 何が均齋であるか。

それは天性の感情であると自から答へた。が、其の均齋は何處にあるか、生活  
の凡ての物にそれが認めらるゝか、いや反對に其の均齋に生活が存在する。さう  
思つて私は黒板に楕圓形を描いて見た。生活が終れば靈魂は永久に過ぎ行く。で、  
私は楕圓形の一面から黒板の端まで一線を引いた、何故も一つ同じ線を他の一面  
から引かぬ。然うだ。事實上何の永久にも唯一面のみしかないものはない。何と  
なれば、吾々は確かに此の生の前にも存在したのであるけれども、吾々は今其の  
記憶を失ふた。

此の理論は自分に取つて非常に嶄新で明徹であるやうに思はれて、ひどく嬉し  
かつた。其の理論の緒を今捕捉して見やうとすれば、なかく骨が折れる。  
私はそれを書き取らうと思つて一枚の紙を取つた。が、さうしてゐる間に俄に

一團の思想が胸に浮んだので、私は起つて室を歩き廻つた。窓の方に寄つて行く  
と、ふと水を運ぶ荷馬が眼についた。それに馭者が今馬具を附けてゐる。で、私  
の凡ての思想が此度は次のやうな疑問の解決に集中された。それは彼の馬の靈魂  
が肉體から遊離した時に如何な動物または人間の體内に移るであらうか。恰度其  
の時ワロヂアが室を通りかけて、私が何か考込んでゐるのを認めて、微笑した。  
その微笑が、私が今考へてゐたことは凡て驚くべき無意味なものであつた。とい  
ふことを自分ながらに十分覺らしめた。

私は今單に其の頃の私の反省の性質を讀者に理解せしめんが爲めに此處に其等  
の記憶すべき場合を話したに過ぎぬ。

凡ての哲學上の思索の中でも懷疑主義ほど深く私を打込ませしめたものはなかつ  
た。一時は殆ど私を狂氣に近い状態にまで趨かしめた。私は自分の他に全世界に何  
物もまた何人も存在せぬものゝやうに想像した。物體は物體ではなくして、私が



其等に對し自分の注意を向けた時にのみ眼に現るる偶像に過ぎぬ。さうして私  
が其等に就いて考へることを止めると共に其の物體は消えて無くなる。

一言にいへば、私は物體其物は存在せぬが、唯私の其等に對する關係のみが存  
在するのであるといふ自信を抱いた點に於てシエリングと一致した。また斯んな  
成心を懷いてゐた所から時々忽然として自分の居ない虚無を見出さうとして急に  
眞向を見詰めるやうな錯亂の状態に陥つた場合もあつた。

憫れむべき、價値のない、道德的活動の發生。之れが人間の心である！

私の弱い心は不可入性のものには貫徹することが出来なかつた。が、私の心  
の力を超えた此の心的勞動の結果、私は私自身の生涯の幸福の爲めからいへば決  
して觸ることを敢てせねばよかつた自信といふのを一つづつ失つて了つた。

凡て此の重い道德的苦痛に依つて齋らし得たものは、心の鋭敏といふこと、絶  
えず道德上の解剖を試みる習慣とに過ぎなかつた。其の心の鋭敏といふことが私

の意思の力を弱くした。絶えず道德上の解剖を試みる習慣の結果は感情の清新と  
判断の明確といふことを破壊して了つた。

抽象的思想は、其の人の能力に従つて、何時か自己の知覺を以つて彼の精神の状  
態を捉へ、それを彼の記憶に移すやうな形になつてくる。私の抽象的瞑想に耽ける  
傾向は、知覺力を發達せしめ、私がほんの些とした事を考へ出すと、屢く其から  
自分の思想を解剖して、遂に解すことの出来ない循環論に陥る不自然の状態にな

つた。と、初め胸に在つた疑問は考へないで、自分が考へたもの、事を想ふ。  
私は自問自答する。自分は何を考へてゐる？ 私は考へてゐるものを考へてゐる。  
で、今私は何を考へてゐるか、私は考へてゐるものを考へてゐることを考へる。  
斯ういふやうになつて行く。知恵も推論の前には道を讓る。

加之、今私がした哲學上の發見は非常に私の自負心を喜ばした。私は屢々自分  
は人類の利益の爲に新しい眞理を發見してゐる偉人でゞもあるやうに空想した。



さうして私は秘かに自分の價値に就いて高慢な意識を以つて他の人類を眺めた。然るに不思議なことには私が腹の中ではそれほどに思つてゐる是等の人類と面と差向ふとなると、私は誰の前に出ても自分ながら羞かしかつた。獨斷に私自身を高く標置すればするほど、他の人類に對して功績を樹つべき私自身の技倆の乏しいことをますます意識する。さうして自分の言つたり行つたりする些とした言葉や舉動にても自から恥かしいやうな感情がして、其の感情に對して平氣であることが出来なかつた。

二十 ワロヂア

さうだ。私の生涯の此の時代の事を記せば記すほど多くの苦痛と困難とが生じて来る。此の時代の様々な記憶の中にそれはく華かに、絶えず私の生涯の初期を輝かした感情の清い温味を覺えた時は唯々稀れにあつた様に思ふ。私は少しも速

く荒漠たる少年時代を過ぎ去つて、眞に優しい貴い交友の感操を以つて此の成長の時代の結末を輝かし、且つ興味と詩趣とに満ちた新しい時代——青春時代に基礎を置く其の幸福の時期に達したい無心の欲望を感じた。

私は一の洩れもなく私の記憶の跡をばたげぬまい。けれども今は其の時代から私の性格や行狀に明確な有益な感化を與へた一つの注意すべき人間と關係を結ぶに至つたまでの重なる事柄について走り書きをして見やう。

ワロヂアは近い内に大學に入るであらう。別々な教師が教へに來る。私は唯彼が白墨を以つて大膽に黒板にコツ／＼書いたり、機能や筋肉や座標(數學)や其の他種々なことを話してゐるのを妬しいやうなまた我れ知らず尊敬するやうな念で聴き惚れてゐた。そんな學術上の問題が私には手の達かぬ高い智識を表はしてゐるやうに見えた。

或る日曜日に晝餐の後二人の大學教授を始め凡ての教師がお祖母さんの室に集



つて、お父さんや五六人の來客の居る前で大學入學試験の準備の復習をしてゐた。其の間ワロヂアは著しい學力を表はして大にお祖母さんを喜ばした。私もまた色色な質問を向けられたが、私の學力は甚だ乏しい。教授は明かに、お祖母さんの前で私の淺學なのを隠さうと力めた。が、さうされるのが尙ほ更ら私を當惑させた。けれども私に對しては誰もさう注意を拂はうとはせぬ。私は唯十五だ。私の入學試験まではまだ一年も間がある。

ワロヂアは唯御飯の時階下に来るばかり、一日二階に閉籠つて勉強してゐる。夜も休まぬ。已むを得ず爲るのではない、自分から望んで爲るのだ。彼は非常に虚榮心が強い。單に普通な試験の成績ぐらいでは満足せぬ。優等にならうと思つてゐる。

今は其の試験の初日が來た。ワロヂアは赤銅の鈕釦の附いた青い外套を着、金時計を持ち、漆塗の長靴を穿いてゐる。お父さんの無蓋四輪車が戸口に廻された。

ニコライは膝掛を脇に投げる。ワロヂアとセン・ゼロームは大學へと馬車を驅つた。娘達、取り分けカテンカは窓からワロヂアが歡喜に満ちた顔をして馬車に腰を掛ける折の其の美しい姿を眺めた。さうしてお父さんは『何卒！何卒！』と言ふ。お祖母さんはまた窓の所に身をニジリ寄せて兩眼に涙を浮べて、馬車が小路の角を廻つて見えなくなるまでワロヂアの爲に十字の符號をして、何か口の中で言ふ。

やがてワロヂアが歸る。一同が待ち兼ねて『何うだ、好かつたか、何點？』と尋ねる。けれども既う其の輝やく顔の色で好かつたことが明かだ。ワロヂアは五點貰つた。次の日にまた同じやうな心配と希望とが伴ふた。さうして同じやうな待ち遠しさと歡喜びとに迎へられた。斯んなにして九日が過ぎた。十日目に最後の最も困難な試験が残つた——それは神律であつた。私達は一同窓に立つて焦れ待ちに待つてゐた。もう二時間も経つた。それでもワロヂアはまだ歸つて來ぬ。



『あれ！〜其處に戻つた！〜』と、リュウボチカが窓硝子に顔を押し付けて叫び  
んだ。

本當だ。ワロヂアはセン・ゼロームと並んで馬庫に腰を掛けてゐる。が、最早  
青い外套や灰色の頭巾は着て居らぬ。青い刺繍をした立襟の學生服に、三角形の帽  
子を着て、腰に鍍金の小刀を横へた。

『あゝ、唯母が活きゝゝおたならばなあ！』お祖母さんは制服を着たワロヂアを見  
て、泣聲を揚げてさう言つて、其のまゝ、正氣を失ふた。

ワロヂアは顔を光して玄關に走つて来て、私、リュウボチカ、ミイミ、カテンカを  
接吻した。カテンカは接吻せられて耳の根元まで赤くなつた。ワロヂアは喜びで  
有頂天である。其正服姿が何といふ美しさであらう！ 青い立襟が稍々芽を出し  
かけた黒い頬髭に如何に好く映つたか！ 何といふ華美な格向の好い腰をしてゐ  
る！ 何といふ品の好い歩調であらう！ 其記憶すべき日に一同お祖母さんの室

で御飯を食べた。皆の顔が歡喜で輝いてゐる。食後に給侍が優雅に澄した、が、でも  
歡ばしさうな顔をして布巾に包んだ三鞭酒の瓶を持つて來た。お祖母さんもお母  
さんが亡くなつてから以後初めて三鞭酒を飲んだ。お祖母さんはワロヂアを祝し  
てコップに一杯飲み乾し、さうしてワロヂアを眺めて嬉し泣きに泣く。ワロヂア  
は今自分の馬車で庭から乗り出す。自分の客座敷で客に引見する。煙草を吸ふ。  
舞踏に行く。或る時は自分の室で朋友と三鞭酒を二本も飲み乾したのさへ私は見  
たことがある。さうして毎盃或る神秘な人物の健康を祝し、瓶の底の方に在るや  
うな者の事を議論してゐる。それでも御飯は整然と自家で食べ、以前の通りに御  
飯の後は婦人室に行つて、長時カテンカと何か知らぬ神秘的議論に耽つてゐる。  
が、私に聞き取れたゞけでは——何となれば私は彼等の會話の仲間にならな  
つたから——二人は單に彼等が讀んだ小説の男主人公や女主人公や戀愛や嫉妬と  
いふやうなことを話してゐた。で、そんな議論をして彼等は如何な興味があるの



か、また何うしてそんなに嬌嫩く微笑だり、さもく親しげに話したりしてゐるのか、私には少しも解らなかつた。

私は兎に角カテンカとワロヂアとの間に子供仲間にありうちな打解けた交際といふ以外に或る妙な關係が出来たと見て取つた。それが爲めに吾々と彼等との間に自然に隔てが出来た。彼等二人は神秘的な方法で結び合ふた。

二十一 カテンカとリュウボチカ

カテンカは十六になる。彼娘も大きくなつた。姿の羸弱とした、過渡の年頃の娘には特有の無器用い臆したやうな舉動が、新らしく咲いた花のやうな清新と美容とを持つてゐる。が、前と少しも變らない。何時もの利發さうな青い眼、微笑んだ瞥見、前額から一直線を引いた平生の小さい眞直な鼻、輪廓の正しい鼻の孔、華かな微笑を湛へた小さい口元、紅い透明つた兩頬の蹙、相變らず可愛い眞白な

手など。これまでの通り、純潔な娘といふ言葉が格別によく彼女に適してゐる。唯變つたのは、重い黄金色の頭髮で、これを大人のやうに結つてゐる。それと彼の若い胸で、胸の新生が、明かに、彼女を悦ばしめるが、また耻かしがらしもする。

リュウボチカも大きくなつた。さうして始終カテンカと一所に勉強してゐたが、彼娘は凡ての點で全く違つた娘だ。

リュウボチカは身長が小さい。さうして佝僂病のために脚が今に曲つてゐる。容姿が誠に醜い。唯可愛い所は眼である。それが實に美しい——大きな黒い、見まゐと思つても見ずには居らせぬやうな、目的もなく人を引着けるやうな氣高い質樸な表情をしてゐる。

リュウボチカは何につけても自然で質樸である。カテンカは何事につけても誰とも變つて居らうと思ふ。リュウボチカは常に眞直に前方を諦視める。さうして時



々その大きな黒い眼を人に据ゑ付けて凝乎と何時までも諦視めてゐるので、無禮だと言つて叱られることがある。

カテンカの方はまた睫毛を下に落して、眼瞼を細め、自分で近視眼だといふ。けれども私はカテンカの眼が少しも悪くないのをよく知つてゐる。リュウボチカは他人の前で姿態を粧ることを嫌ふ。さうして客が接吻をしようとする時、唇を尖らしてそんな殉情なことは耐忍が出来ぬといふ。カテンカは反對に客の居る前では格別にミイミと愛情深くなる。同じ娘同志抱合つて室の中を歩き廻るのを好いてゐる。リュウボチカは恐ろしくよく笑ふ。時によると歡喜のあまり手を揮つては室の中を走り廻る。カテンカは笑ふ時には手か手巾を以つて口を蔽ふ。リュウボチカは平常大人と巧く話することが出来た時には非常に喜んで、自分は屹度驃騎兵と結婚しやうと思ふといふ。が、カテンカはまた男は皆嫌ひだ。決して結婚せぬと言ふ。さうして男に何か話しかけられると、全然平常とは異つた娘に

なつて、さもなく何かに恐ぢてゐるやうである。リュウボチカは、呼吸の出来ぬほど固く胸衣を締められるとか、否や、貴女が過食とかいつて何時もミイミと心が合はぬ。之に反してカテンカは屢く胸當ての間に指を差込んで如何なにか、さうして些としか食べぬといふことを私達に見せる。リュウボチカは頭を描くのが好きだが、カテンカは唯花や蝶のやうなものしか描かぬ。リュウボチカはフィールドの樂曲は悉皆、それからビートルヴェンの樂曲の或るものを奏する。カテンカはベリエーションとウォルツ（以上二つとも音樂の名）を戯れ、絶えず踏子を用ゐた。さうして何か戯らうとする前にはきつと三つアーペジオ調を打つ。が、カテンカは私の見た所によれば、其の頃リュウボチカよりは遙かに成熟てゐた。それゆゑ私を一層樂ました。

二十二 お父さん



お父さんはワロヂアが大學に入つてから一屬機嫌がよくなつた。平常よりは類繁にお祖母さんと一所に食事をしに出て来る。加之彼の機嫌の好い原因は、ニコライから聞く所に依れば、近頃非常にまた賭博に勝つたからであつた。時としては晩に俱樂部に行く前に私達の處に来て、ピアノの前に座つて自分の周圍に皆を集めて、子供達の軟かな靴を自分の足で踏んで一同と調子を揃へてギプシイの謠を歌ふ。その時お父さんの寵愛のリユウボチカ——彼れもまたお父さんを慕つてゐる——の歡ぶ態が見物だ。また時によるとお父さんは教室に来て私が課業を復習してゐる間、嚴しい容貌をして傾聴してゐる。が、折々私の間違ひを直さうとして口を入れる、其から判断して見るに、お父さんは私が學んでゐる事を能く知つては居なかつた。また時としてはお祖母さんが咄々言つて理由もなく誰にでも當り散らすと、お父さんは賢しい瞬をして見せて、暫くして『さあ、私達が取る番だ。』とか何とか言ひまざらす。

一體お父さんは、以前私の子供らしい想像で見上げて居つたやうな、近づくことの出来ない高い地位から稍々下つたやうに私の眼に見えて来た。私は從來と同じ淨い愛と尊敬との感情を以つて彼の大きな白い手に接吻する。が、私は既うお父さんの事を考へたり、其行為に判断を加へたりするのを何とも思はなくなつた。お父さんに關して吾が身ながら驚くやうな思想が私の胸に湧く。私にそんなやうな多くの思想を感せしめ、多くの道徳上の苦痛を起さしめた一つの或る事情があつた。それを私は忘れることが出来ぬ。

一度晩に遅くお父さんは黒い禮服に白い背心を着て、舞踏會にワロヂアを連れて行く爲に客間に入つて来た。ワロヂアは其の時自分の室で衣服を着けてゐた。お祖母さんは寢室に居て、ワロヂアが来てお祖母さんに身装を見せるのを待つてゐた。(お祖母さんは毎時でもワロヂアが舞踏會に行く時に自分の傍に呼寄せて熟視し祝福を與へて、種々な事を訓へる習慣があつた。)客間には唯蠟燭が一本燈つ



てゐて、ミイミとカテンカは彼方此方に歩いてゐるし、リュウボチカはピアノの席に着いてお母さんの氣に入りの曲の一つであつたフィルドの第二コンサートを思ひ出に奏てゐた。

私は姉さんとお母さんとぐらゐ酷く似た者をこれまで見たことがない。其の似たといふのは容姿が似たといふばかりではない、此處ぞと捉へて言ひやうのない——手の形とか歩く姿態とか聲癖とか其の他何や斯につけ其れが表はれる。リュウボチカが怒つた時によく「一代許さない」と言つた。此の「一生」といふのはお母さんがよく使つた言葉で、それをリュウボチカがまたよく口にした。で、それが恰度「一代」と長く引張つて言ふやうに聞えた。が、それよりもまた著く似た點はピアノを弾く處であつた。何をすることも其の似たのが眼に着く。衣服を直す振もそつくり其のまゝであつた。頁を返すに左の手で上から捲つた。困難しい箇處を遣つて見やうとして長く手間を取る時に苦しまぎれに拳固を以つて連りに樂鍵を

「ついで、『まあ何んて！』と言ふ。

で、何處と取り留めていふことの出来ぬ、お母さん其のまゝの優雅と精緻い演奏ぶりとを備へてゐた。フィルドの樂のやうな美しい演奏ぶり、其の面白さは近頃のピアノリストの妙手が、聽者をして忘るゝ能はざらしむ。

お父さんはちよこ歩きで室に入つて来て、リュウボチカの傍に行つた。リュボチカはお父さんを見てピアノを弾く手を休めた。

お父さんは『さあ、お弾き、お弾き』と言つてリュウボチカの席に脊を向ながら『お前がさうして弾いてゐるのを聞くのが私は如何に好きか、お前よく知つてゐるだらう。』

リュウボチカはまた弾き始めた。お父さんは長い間手で頭を支持つて、其の眞正面に坐つてゐた。それから不意に肩を揺かして立上り、室の中を歩き始めた。さうしてピアノの傍に来る度に足を止めてリュウボチカを熟々と眺めた。其の舉



動やら歩きぶりから、私はお父さんが情に燃されてゐると見て取つた。何度も室を往復した後リュウボチカの席の背後に佇立つて、その黒々とした頭髪に接吻してそれから彼方を向いてまた歩き出した。リュウボチカが一曲を奏し終つて、お父さんの傍に行つて『如何でございました？』と尋ねた時、お父さんは静と両手でリュウボチカの頭を抱へてその額や眼の處を今まで遂ぞ見たことのない情を籠めて接吻した。

『あら、まあ！ お父さまは泣いて被居る！』リュウボチカは突然に驚いた、大きな眼で父の顔を見詰めて言つた『お父さまお許し遊ばせ、私「お母さまの曲」であつたのを全然忘れておました。』

『いや、何度でも弾けるだけ弾いてお呉れ。』と、お父さんは感情に迫つた震え聲で『お前の……と泣くのが、私に取つては如何に慰藉になるか、それをお前が知つて呉れたなら……』

さう言つてお父さんは一度リュウボチカを接吻して、自分の感情を抑へようと力めながら肩を曲げて廊下からワロチアの室に續く戸口の方に行つた。その時女中のマスチャが傍を通りかゝつて、主人を見て眼を下げてお父さんを避けやうとした。と、お父さんはマスチャを止めて『お前は次第に美くなるね。』と言つてマスチャの方に屈みかゝつた。

マスチャは眞赤になつて、一層低く頭を垂れて『御免遊ばせ。』と低聲で言つた。その時お父さんは私が眼についてたので、急にマスチャを遣り過して、肩を一寸揺つて、さて咳嗽をして、『ワルデマアル、もう支度が出来たか。』と繰返へして言つた。

私はお父さんを愛する。が、人間の理智と情とは獨立して存在するものである。さうして屢々其の心の内に、或る人に關して合點の行かぬやうな峻嚴な感情と共に、また彼を侮辱するやうな思想をも混じてゐる。さうして其様な思想を私は追



ひ退けやうくとして矢張りそれが胸に浮んで来る。

二十三 お祖母さん

お祖母さんは一日くと弱つて来た。その呼鈴の音、ガスチャの眩く聲、戸の開閉する音がお祖母さんの室で一層繁く聞える。お祖母さんは最早、今までのやうに圖書室の凭れ椅子でなく、寢室の、笹縁の縁を取つた枕の附いた高い寢臺の上で私達に會ふやうになつた。

お祖母さんに挨拶をする時、手の蒼白い黄色が、つたピカ／＼光る水腫が眼に着く。さうして五年以前お母さんの室で心に留つたと同じ強烈な香を臭く。醫者は一日に三度来る。さうして種々な評議が始まる。それでもお祖母さんの性格や大風な處や、家内中の者就中お父さんとの間の禮儀など従來の通りに、少しも紊るなかつた。全く平常と同じやうに言葉も利け、額を擧げて「親しきもの」と言ふ。

それでも既う五六日私達はお祖母さんの處に行くことを止められてゐた。と、ある朝セン・ゼロームが私にリュウボチカやカテンカと一所に、課業時間にも係らず馬車に乗つて遊びに出やうに言つた。馬車に腰を掛ける時にお祖母さんの室の、街路に面した窓が藁を以つて編んであつたり。或はまた青い外套を着た人が五六人門のまはりに立つてゐたりするのを認めたが、何故私は此の平常と違つた時刻に遊びに出されたのか少しも理由が分らなかつた。其の日車行の間中リュウボチカと私は、或る理由で、如何な事でも如何な言葉でも如何な行動でも人を可笑がらす時がある。私達が恰度それと同じやうに格別に愉快な氣持がした。通りすがりの運搬車が、臂に身を凭せて疾々と道を横切る。私達はそれを見て笑ふ。襦袢を着た馱者が手綱の端を揮り廻しながら一足飛に私達の馬車を乗り越す。吾々は聲を揚げて笑ふ。フィリップの答が轎車の馬丁を打つた。フィリップは向直つて『あゝ！』といふ。私達は笑ひ入る。ミイミは不愉快な顔をして馬



鹿な人間に限つて原因もないのに笑ふと言つて注意する。リュウボチカは無理に笑ひを耐えて眞赤になつて、私の方に瞥と斜視を向ける。私達の眼と眼が出會ふ。さうして涙が出るほど笑ふ。私達は呼吸の詰るやうに歡樂しい心の浮き立つのを抑制しねばならぬやうな事情は何もない。私がリュウボチカに瞬すると共に二人は稍静かになつた。さうして一と頃私達の間に行き流れて低聲を出す。さうして其の低聲の後には毎時笑ひになる。で、また私達は、どつと笑つた。歸途に私はリュウボチカの方に些と優しい澁面を向けやうとして恰度私の口を開きかけた。と同時に入口の戸の半所まで寄せてある棺の黒い覆衣に吃驚させられた。それが眼に留まると、私の口は歪んだまゝでゐた。

『お祖母さんがお亡くなんなさいました。』と、セン・ゼロームが蒼白い顔をして私達を迎へて出て來て言つた。

お祖母さんの殘骸がまだ家に留置いてある間、私は死んだ者がまだ生きてゐ

るものゝやうで、死の恐怖といふ感情に胸が壓されるやうであつた。さうして自分もまた何時かは死なねばならぬといふことを不愉快に思ひ回らした。其感情には固より悲みの感も雜つてゐる。が、私はお祖母さんの爲に歎きはしなかつた。事實腹からお祖母さんの爲に歎くものは殆どなかつた。家には悔みの客が充満であつたが、唯一人の他は誰もお祖母さんの死んだのを悲む者はなかつた。其一人といふのは女中のガスチャである。ガスチャの狂氣じみた悲みが何とも言ふにいへない風に私に刻まれた。彼女は天井裏に行つたきり内から錠を下して泣きつゞけに泣いて、我と吾が身を咀ひ、頭髮を引掻く。誰が何んと言つて賺めても聽かぬ。さうして愛した女主人の亡くなつた後は唯自分も共に死ぬより他に慰む術はないと言ふ。

私は今一度斯ういふことを繰返して言ふ。それは、感情の上で矛盾のあるのは、即ち其の感情の清純なことの最も信憑すべき證據である。



お祖母さんは最早亡い。が、其の紀念と種々な書類とは尙ほ家の中に生きて残つてゐる。是等の書類は特別にお祖母さんが死くなる前に話した遺言に關するものだ。其の内容は遺産管理人のイワン・イツチ公爵の他は誰も知つてゐるものがない。私はお祖母さんの姻戚の者の間に、あるものが色めいてゐるのを見る。さうして私は屢く遺産が誰の物になるであらうかといふやうなことが話されてゐるのを聞いた。で、正直に白状するが、私達も其の遺産の分配に與かるのだと思つて、それとなく楽しく思つた。

が、六週間経つてから、私達の設立した日々新聞のニコライが、お祖母さんは遺産を悉皆リュウボチカに遣つて、結婚するまで遺産の管理を、お父さんでなく、イワン・イツチ公爵に委託したといふことを知らせた。

### 二十四 私

私の大學に入學するのともう二三ヶ月となつた。私は好く勉強をしてゐる。私は教師の來るのを恐れずに待つばかりではない、課業に一種の愉快を感じるやうになつた。

私は何となく愉快だ。さうして明瞭に精密に、學んだ日課を復習することが出来る。で、私は大學には數學科に入る準備をしてゐる。此の撰擇は單に、非常に私が語學切線、微分、積分などを好む所から全く自分でしたのだ。

私はワロチアよりはすつと身長が低く肩巾が廣く肥つて、平常の通り質樸であつた。が、それをまた相變らず氣にしてゐた。私は畸人と思はれるやうに力めた。で、唯一つ私を慰めたのは斯ういふ事であつた。それはお父さんが一度、私が伶俐さうな容貌をしてゐると言つた。それを自分でもさうだと十分に自信してゐる。

セン・ゼロームも此の頃は私に對しても満足してゐる。さうして私の方でも彼を嫌はぬのみならず、時々君ほどの才能と意思とを有ちながら彼もしたり斯うも



したりせぬのは耻であるなど、言はれると、私も不覺さうかと思つて彼を愛する氣になるのが自分にも分る。

私の女中部室を覗く癖も餘程前から止んだ。私は戸の陰に身を密めるのを耻ぢた。加之白状すれば、マスチャがワシリイを愛してゐるといふ私の確信が稍々私の心を冷ました。ワシリイの結婚は、彼の懇請で、私からお父さんに頼んで許可を得てやつたのであるが、遂に其の結婚といふことが、私の此の不幸なる愛情に對して最後の療治を加へることゝなつた。

若い夫婦が盆に糖菓を盛つてお父さんにお禮に來た時に、マスチャは青いリボンを着けた帽子を着て、家族の者の皆の肩を接吻をして、何だとか斯だとか皆に一々禮を言ふ。で、私は唯彼女の頭髮が薔薇香油の薫するのが意識に着いたばかりで、其の他少しも一時のやうな感情は起らなかつた。

つまり言へば、私も今は段々に子供じみた馬鹿なことから覺めかけて來た。が

唯一つ除外例がある。それは尙ほ將來私の生涯に多くの害を與へる運命に出來てゐる——即ち私の形而上學に耽ける傾向であつた。

### 二十五 ワロヂアの朋友

ワロヂアの知人の仲間では、私は自尊心を傷ける役廻りをしたが、それでも私は兄の處に客のある時分には其の室に行つて、黙つて其處の出來事を觀てゐるのが好きであつた。

多くの客の中で最も屢々訪ねて來るのは陸軍の副官をしてゐるダブコフと、一人は學生の公子ネクリユウドフであつた。ダブコフは小柄の元氣の好い黒い顔をした男で、最う可い加減な青年であつた。身長は何方かと言は低かつたが、決して醜男子ではなかつた。さうして始終快潤であつた。彼はよく世間にある量見の狭い人であつた。さういふ人は自分ながら自分の狹量なのが特に意に適ふ者で、



種々の見地から事物を見ることが出来ない。さうして絶えず何物かに心を奪はれ易い。斯んな人の判断に限つて偏見で誤謬がある。が、常も真正直で人の心を囚へる。狭い自我主義でも一應の道理に依つては許すとも出来て、何だか人を引着けるやうな處がある。此の他にダブコフは尙ほワロチアに取つても私に取つても二重の引力を有つてゐた——それは彼の軍装で、若い者が華かなものについて觀念を亂す習慣のある年頃には、何よりも此の華がひどく好く思はれるものである。加之ダブコフは實際其の華な人と呼ばれる人間であつた。唯一つ私を不快にしたことは、ワロチアが時々、ダブコフの居る前で私が極めて無邪氣な行爲をすること就中年の幼いことを耻ぢてゐるやうに思はれたことであつた。ネクリュウドフは男は立派ではなかつた。小さい灰色の眼の、平凡な武骨な額で、不恰好に長い手や足をした、何としても美しい容姿といふことは出来なかつた。唯一つ立派な點は圖抜けて背が高かつたのと、顔の皮膚が細かくつて艶の好いの

と、齒が小さくつて好く揃つたのであつた。でも其の細い光のある眼元と微笑ふ表情——その微笑ふので嚴いのが子供らしいほんやりした容貌に變つて、何とも思つても彼方を見向かすには居られぬ——此の二つの點で彼の相格が一癖ある元氣らしい性格を表した。さうして非常に内氣と思はれて、何でも些としたことに耳の根元まで赤くする。が、彼の羞むのは私の羞むのとは違つてゐる。彼は決心が表面に表はれれば表はれるほど一層赤くなつた。彼は自分の懦弱なことを獨りで憤つてゐるやうに思はれた。表面は假令ダブコフやワロチアと極めて親密に見えても彼等と交際を結ぶに至つたのは、唯ふとした事からであつたといふことが注意を價する。彼等の見解は全く違つてゐた。ワロチアとダブコフとは何事につけても生眞面目な議論とか感情とか言つたやうなことを避けてゐたらしい。ネクリュウドフはまた反對に極度の熱情家で、屢々哲學上の問題や感情といふことに就いてむしろ滑稽と



思はるゝまで議論をすることがあつた。ワロヂアとダブコフとは好んで二人の愛の相手のことを話した。(さうして彼等は全く不意に種々な相手と戀をした。さうしてその相手が二人とも同じであつた。)ネクリユウドフは反對に、始終彼等が戯談つて、彼の「小さい赤い頭髪をした娘」に對する愛のことを微めかすと、直き眞面目になつて怒つたものだ。

ワロヂアとダブコフとは屢々自分等の親族の者に就いても戯談をいふことを何とも思はなかつた。ネクリユウドフは反對に、彼が豫ねて有頂天になつて尊敬を表してゐる、自分の叔母に對して悪口の諷言を言はれた時など彼は全く夢中に爲て怒つた。ワロヂアとダブコフとは晩飯後ネクリユウドフをば伴はずに何處かへよく行つた。さうして彼等はネクリユウドフの事を「可愛い小少女娘」(Pretty little girl)と言つてゐた。

公子ネクリユウドフは最初から其の會話と風采とで私に印象を與へた。が、私

は彼の趣味の多くが私の趣味と共通してゐることは知つたが——或は恐らく其の理由からかも知れぬ——初めて彼を見た時に私が、ひどく敵對の感を起さしめられた。

私は彼のジロくぐと人を視るのと、確乎した聲と、高慢な風とを鮮からず不快に思つた。が、何よりも私に對して非常に冷淡な風を見せるのが最も私に不快を感せしめた。會話の間に屢々彼に反對して見たいといふ氣が私は盛に起つた。彼方では少しも私に對して注意を拂つてゐないにしても私は彼奴と喧嘩をしてやりたい、高慢な點を罰してやりたい、私が賢いといふことを彼奴に見せてやりたいと思つた。が、羞耻むといふ一念がそれを抑制した。

二十六 議 論

私は晩の日課を終つて、例の通りワロヂアの室に行くと、彼は褥椅子の上



横になつて、臂を枕に佛蘭西の小説を讀んでゐた。彼は些と頭を擡げて瞥と私を見たが、直ぐまた讀む方に氣を取られた。極めて無雑作な自然な舉動であつたが、私は何といふことなしに唯赤い顔をした。彼の瞥見が、さも何故に私が其處に入つて來たかといふ疑問を表してゐるやうに私には見えた。さうして彼の頭を急いで屈げたのが、前の瞥見の意味を私に押包まうとする欲望であつたらしい。此のほんの些とした舉動にも何かの意味を屬けやうとするのが、其の年頃の私の特質の一つであつた。私は卓の傍に歩んで行つて其處にあつた書籍を取上げた。が、私はそれを讀まうとして、ふと一日まだ顔を合さなかつたのに、互に少しも口を利かぬのが、如何にも滑稽だといふ感かした。

『兄さんは今晚家にゐるんですか？』

『分ない。何故？』

『何にツて。』と私は言ひかけてたが、自分ながら言ひ出すことが出來ないのを知

つて、私は照れ隠しに書籍を取つて讀み始めた。

ワロチアと私と面と向ひながら、何時間も黙つて居るといふことが何となく變で、面白い變つた議論をするには、假令無言でゐても好いから、第三者が一人唯居てさへ呉れ、ば好いと思つた。

私達は兩方で互の胸が餘りよく分り過ぎてゐるやうに感じた。餘り昵近に過ぎて、餘り互の細い事まで知り過ぎて居るので却つて近寄ることを妨げられた。すると、『ワロチア君は家に居るか。』と、ダブコフの聲が玄關に聞えた。

『あゝ』とワロチアは足を下しながら書籍を卓に置いて返事をした。

ダブコフとネクリユウドフが外套に帽子といふ身装で室へ入つて來た。

『君は何だ？ 演劇を見に行かうぢやないか。』

『否だ。僕は行きたくない。』ワロチアは顔を赤くして言つた。

『何だい、それは唯理想だ！ さあ、行かう。』



『僕は入場券を持たないんだもの。』

『入場券は幾許でも入口で買へるぢやないか。』

『一寸待つて呉れ玉へ、直ぐ来るから。』ワロヂアは遂々説服られて、さう言ひながら肩端を曲げて出て行つた。

私はワロヂアが、ダブコフに誘れるがまゝに演劇に行きたいのは腹一杯ではあるが、唯錢を持たぬので斷つたのだ。さうして次の小使渡しの日まで料理番に五留借りに行つたといふことまで知つてゐた。

『何うした外交官は？』ダブコフは手を私に差出して言つた。

ワロヂアの友人は私のことを外交官と言つてゐた。それは一度お祖母さんと正餐を一所にした後、私達の將來の事を話して、お祖母さんは一同の居る前でワロヂアは軍人になるし、私は外交官にして黒い禮服を着けて、頭髮に外交官のする飾をした所が見たいと言つた。お祖母さんの見解に依れば、そんな身粧を

するのが、外交官に欠くべからざる職掌の一つであつたのだ。

『何處へワロヂアは行つた？』ネクリウッドが尋ねた。

『僕は知らないんです。』と、ワロヂアが何故室を出て行つたか、彼等は屹度推量してゐるだらうと思つて獨りで顔を赤くして返事した。

『兄さんは少しも錢を持つてないの？ 本當！ え？ 外交官』と、彼は微笑を洩しながら、さう信じてゐるらしく言つた。『僕も少しも持たないんだ。ダブコフ君は持つてゐるか。』

『見やう』と、言つて、ダブコフは金貨入を引出して注意深く彼の短い指尖で少許の小錢を觸つて見ながら『此處に札が五コペクと貨で二十コペク、それからフツフツくく！』と手を以つてお可笑な身振をしながら了に妙なことを言つた。その時ワロヂアが室に戻つて來た。

『さあ行かうか？』



「否だ。」

「何て滑稽なことをする、君は！」ネクリユウドフが言った。「錢を持たなければ持たないと、何故さう言はない？ 僕のでよければ、入場券はあるぢやないか。」

「君は何うする？」

「此れは從兄の機敷に行くだらう。」ダブコフが言った。

「否僕は全く行かない。」

「何故？」

「何故つて、君知つてる通り僕は機敷に坐るのが嫌だから。」

「何故？」

「僕は嫌いだ。唯怠屈するばかりだ。」

「また同じ事が始まつた！ 僕は、一同が君の居るのを喜ぶやうな場所で何うしてそんなに怠屈するのか理由が解らない。そんな分らぬことがあるか。え？」

「若し僕が臆病だとしたなら、僕は何うしてたらい、だらう？ 君は今までに少しも赤面したやうなとはなかつたと僕は信じてゐるが、僕は極めて詰らぬことにも始終顔を赤くする。」と、ネクリユウドフは話しながら、もう紅になつた。

「君は君の其の臆病の原因を知つてゐるか、自愛心が強過ぎるからだ。え？」とダブコフは保護ややうな調子で言った。

「自愛心の過度、本當だ！」ネクリユウドフは直ぐそれに應へて言った。「いや、其の反對に僕は餘り自愛心が無過ぎるからだと思ふ。何物でも僕を不愉快にしたりは煩はせたりするやうに見える——何故なれば？」

「衣服を着更へ玉へ。」とダブコフはワロヂアの肩を抑へて、上衣を引脱しながら言った。「イグナット、若旦那に衣服を着更へさせておあげ！」

「何故なれば屢く私にはそんなことがあるから。」——ネクリユウドフは議論を續けた。



が、ダブコフは最早ネクリユウドフの言ふことを聞いてゐなかつた。『ッラ、ラ、タ、ラ、ラ、ラ、ラ』と口拍子を取つて空とぼけてゐた。

『君は逃げるね——ちや僕が羞しがるといふことは少しも自尊心から來るのではないといふことを證明しやう。』ネクリユウドフが言ふ。

『君が若し僕等と一所に來るなら證明しても好い。』

『僕は行かないと言つたぢやないか。』

『よし、ちや、止し玉へ。さうして外交官にそれを證明するが好い。さうすれば僕等が歸つて來てから、それを話して聞かしてくれるから。』

『僕は證明する。君等はなるたけ早く歸つて來玉へ。』と、ネクリユウドフは子供らしく頑固に言ひ返へした。

『君は何と考へる？ 僕の言ふのが無駄か？』とネクリユウドフは言ひつゝ私の傍に腰を掛けた。

私は其の點に關して一個の意見は持つてゐたが、餘り出し抜けの話やうに嚇やかされて、流石に私も俄には返答が出來なかつた。で、

『えい、僕もさう思ふんです。』と言つた。私は自分が賢いことを彼に示す時機が來たことを考へて聲が慄えて顔が赤くなつたやうに感じた。『僕は凡ての人が無駄だと思ふんです。さうして人間が爲ることは何でも虚榮からしてゐると思ふんです。』

『何が虚榮だ？ 君の意見では。』ネクリユウドフは、私の感じた所では、稍々嘲けるやうな微笑を洩して反問した。

『虚榮——自愛といふことは、つまり他の誰よりも自分の方が善くつて賢いといふ自信です。』

『併しなでら何うして凡ての人が其の自信を懐くといふことが言へるか。』

『僕はそれが正しいか正しくないかは知らないんです。が、僕自身の他に誰も白



状する者はないが、僕は自分で世界中に僕ほど賢い者はないと思つてゐます。さうして君も僕と同じことを自信してゐると僕は思つてゐます。』  
『否、僕は僕自身よりも賢いと思つた人間に出會つたことがあると斷言する。』とネクリユウドフが言つた。

『そんな事はない。』私は自信を以つて返へた。  
『君は實際にさう思つてゐるの？』ネクリユウドフは凝手と私を諦視ながら言つた。で、其の時恰度或る思想が起つたから私は直ぐそれを言つた。

『それを證明させよう。では何故吾々は人よりも吾々自身を愛するのです？ それは吾々自身が人よりも一層好い、愛する価値が多いと考へるからでせう。若し吾々が自己よりも他人の方が好いと考へたならば、吾々は自己よりも多く彼等を愛する筈です。が、決してそんな事はありません。若しそんな事がないとすれば、僕の言ふことが何處までも正當です。』私は覺えず自負の微笑を洩した。

ネクリユウドフは暫時黙つてゐた。

『僕は君がそんなに賢いとは今まで知らなかつた！』と彼は何とも言へぬ優しい人の好さうな笑顔で言つた。それを見て私は忽ち全く幸福になつたやうな氣がした。

### 二十七 親交の初り

その時から寧ろ奇妙な、が、また頗る愉快な關係が私とドミトリ・ネクリユウドフとの間に結ばれた。他人のゐる前では、彼は殆ど私を顧みもしなかつたが、吾々二人きりになる機があると、直ぐ言ひ合はしたやうに隅の方に行つて坐つて、何も斯も忘れて、時の經つのも知らずに議論に耽つた。

吾々は來世に就いて語つた。藝術に就いて語つた。政府の職務、結婚、小兒の教育に就いても語つた。さうして吾々が言つてゐることが凡て驚くべき無意味な



このみであるとは自分では決して思はなかつた。何故さう思はなかつたかといふに、吾々が言つてゐることは無意味とはいひながらも、賢い美しい無意味であつたからだ。幼少の頃は、凡ての精神力が、悉く未來に對して向けられる。さうして其の未來といふものが、過去の經驗によりて、なく、將來あり得べきこと、空想した幸福に對する希望の力に依りて變化ある生々した人を魅するやうな形に見えるさうして其の未來の祝福といふ單純な觀念や夢想が其の時代に於ける清い幸福であるのだ。吾々の談話の重なる問題の一つであつた其の形而上學の議論では、思想が段々、速かに繼續して出て來て、それにつれてますます、抽象的になつて、終には言はうとしても言ひやうのないやうな、自分では思つてゐることを言つてゐるつもりであるが、其の實全く異つたことを言つてゐるやうな深い霧の中にでも分け入る心地のする時を好んだ。また私は高く、思想の國土に翱翔つて、忽然として凡ての無限なるを知り、尙ほ遙かに前進することの不可能なることを

遂に告白するやうな時の心地を好んだ。

一度、ネクリユウドフが祝祭日の間は、種々な快樂に氣を奪られて、そのくせ一日に何度となく家に來ながら、只の一度だつて私に口を利かなかつたことがあつた。其れが甚く私の氣に逆らつて、復た私に對して彼は高慢な不快な男のやうに思はれた。が、私は唯、自分は少しも彼等の社會に價値を置かぬ、また彼に對して何等の特別な愛情をも懷いて居らぬといふことを示す機會があれかしと、そればかりを待つてゐた。

祝祭日が濟んでから始めて彼が私に何か話さうとした時のことであつた。私は日課の準備をせねばならぬと言つて二階に上つて行つた。すると、十五分ばかり経つて誰か教室の戸を開いた。ネクリユウドフが入つて來たのだ。

『お邪魔かね？』と、彼は言つた。

『否。』と、私は實際は忙がしいと言ふ必要があつたが、ついさう返事をしてしつ



た。

『じや何故君はワロヂアの室を出て了つたの？ 吾々は暫時話さなかつたぢやないか、僕は君と話して話さないと、何だか物を紛失したやうな氣がする。』  
私の憤激は忽ち消えて了つた。ドミトリは再び私の眼に以前の如く親切な面白い人のやうに見えて來た。

『君は多分何故僕が他に رفتたか知つてゐるでせう？』私は聞いて見た。

彼は私の傍に腰を掛けながら答へた『恐く、併しながら、それは……僕には何故か分らないが、君には言へるでせう。』

『僕言はうか。僕は君を憤つて脇に行つたのだ。憤つたのではない癪に障つたのだ。正直に言へば、僕は、僕がまだ子供だから君が輕蔑しやしないかと始終それを恐れてゐる。』

『君は何故僕が君と斯んなに親しくなつたか知つてゐるか？』彼は機嫌の好さ、

うな賢さうな微笑を湛へて、私の白狀に對して答へた。『何故僕は、君よりも熟知つても居り、また君よりも一層多く僕と共通の點を有つ人間よりも君の方を愛するか。僕は直ぐ自分でそれが分つた。君は不思議に稀れな性質——實直といふ點を有つてゐる。』

『うむ、僕は常に、自分でさうと認めるのを耻ぢるやうな事を正しく口に出して言ふ。』私は彼の言に確證を與へた『けれども、それは僕が信ずることの出来る人に向つてより他には言はぬ。』

『うむ、だけど或る人を信ずるには、またその人と全く親密にならねばならぬ。處が吾々はまだ親友ではない。君は何時か友誼といふことに就いて議論したことを覚えてゐるだらう。眞の朋友たるには互に信ずることが必要だ。』

『僕が今君に話すことを信じやうとすれば、君は誰にもそれを話さぬだらうが、最も重要な最も興味ある思想は吾々が互に尙ほ口にせぬやうなことが、それだ。』



何といふ嫌な思想であらう。若し吾々がそれを認めねばならぬやうに強ひられると知つたならば、吾々は決してそれについて敢て考へなかつたであらう。

『ニコラス君、君は如何な觀念が僕に起つたか、知つてゐるか。』彼は椅子から起上つて、兩手を擦りながら微笑して言つた『えッ、吾々二人に取つて何んなに有益か君知るだらう。互に何も斯も口に出して白状し合ふぢやないか。吾々は互に知らねばならぬ。さうすれば吾々は互に耻かしかることもないから。吾々が他人を恐れない爲めに、互に何方の事についても誰にも何も言はぬ誓ひをしやうぢやないか、さうしやう。』

で、吾々は實際にさうした。其の結果何うなつたか、私はこれから話さう。

カールが斯ういふことを言つた。凡て愛着には二面がある、即ち一人が愛すれば他の者は愛せらるゝやうに身を任す。一人が接吻すれば他の者が頬を差出す。これは全く其の通りだ。で、吾々の交誼の上で、私が接吻してドミトリは頬を差

出した。が、彼の方でもまた私を接吻しやうと欲した。吾々は平等に相愛した。それといふのは吾々が互に相解し、互に價値を認めたからだ。が、それにも係らず彼は私に對して感化を與へ、私をして悦服せしめた。

勿論ネフリユドフの感化の下に、私は無意識の間に彼の見解を採つた。で、其の要點は、美德の理想に對して熱情的に崇拜するといふことであつた。簡単に言へば、人は絶えず彼自身を完全にせんと欲してゐるものである。さうして始めて凡ての人類の改革、凡ての一般の悪徳、不幸の改革といふことが實行の上に行はれるのである。で、自己を改め、凡ての美德を得て、幸福になることは頗る簡単で容易いことであるやうに、私は思はれた。

が、年少の是等の高邁な向上心が畢竟滑稽に過ぎぬとは、神の他誰か知らうぞ。凡て其等の理想が満されなかつたとて、誰か敢て非難すべきか。



29240)

代 時 年 少

生ひ立ちの記(少年篇完)

明治四十一年九月七日印刷  
明治四十一年九月十日發行

定 價 金 九 拾 錢

不 許 復 製

譯 者 德 田 浩 司

發 行 者 河 野 正 義

東京市神田區駿河臺發町十六番地

印 刷 者 中 島 丑 之 助

東京市京橋區宗十郎町十五番地

發 行 所 東京神田駿河臺 東京國民書院

行 印 社 文 園



# 生ひ立ちの記

## 續篇

『生ひ立ちの記』は幼年、少年、青年の三篇に分る。三篇相待ちて始めて此大著の全き面目を見ることを得可し。譯者今暑を相州湯ヶ原に避けて「青年」の翻譯に勉めつゝあり、稿成り續篇として世に出づるは、仲秋十一月なる可し。本篇と共に江湖の清讀を待つ。

東京國民書院發行



